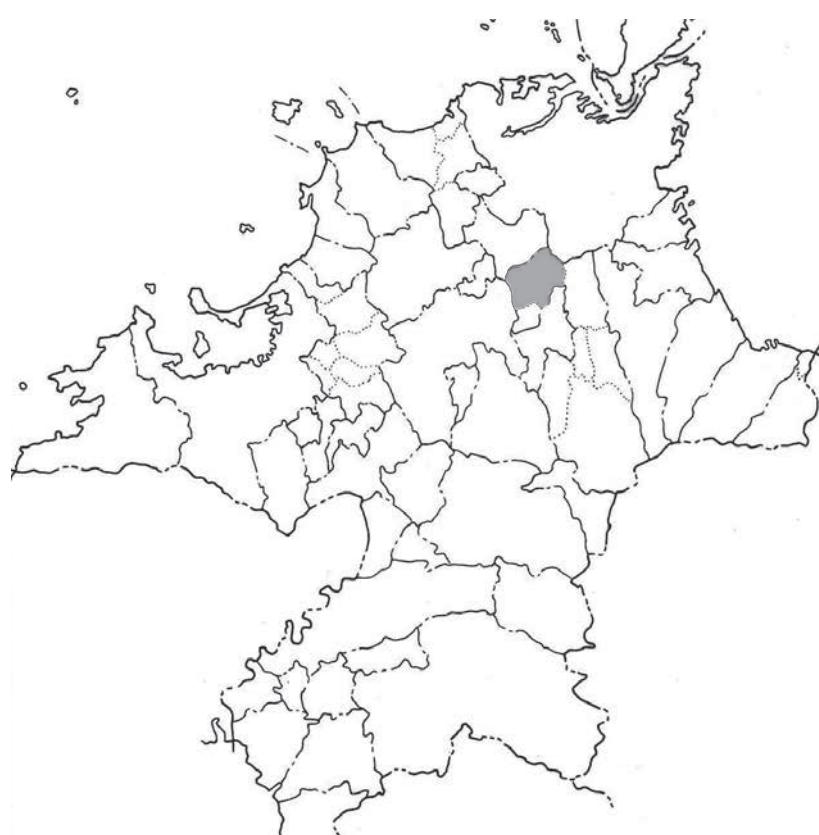


伊方萩ヶ原遺跡 伊方中原遺跡

伊方地区所在遺跡の調査

福智町文化財調査報告書

第7集



第1図 福智町の位置



遺跡周辺航空写真（赤枠は周知の埋蔵文化財包蔵地、網掛は調査対象地）

序

筑豊はその名が示すように、筑前と豊前が接する東西文化の交流地帯であり、筑豊の一角にある福智町は、福智山系を仰ぎ、彦山川と中元寺川が合流し貫流する自然あふれる地です。

また、400年以上の伝統を誇る上野焼に代表される陶芸の里、童謡作曲家として有名な河村光陽生誕の地であり文化的にも恵まれた地でもあります。

本書では、令和4年度から行っている経営体育成基盤整備事業伊方地区に伴う文化財調査報告書の1冊目になります。今回報告する伊方萩ヶ原遺跡は近世を中心とする集落遺跡、伊方中原遺跡は弥生時代中期を中心とする集落遺跡です。調査は来年度以降も継続予定であり、更なる発見があるかもしれません。私どもは、この遺跡の記録を末永く保存し次世代に継承しなければならないと考えています。そして「ふるさと」再発見、「まちおこし」の一助になればと思います。

いにしえ人の生活を思い、文化財保護、文化財愛護思想への意識向上、並びに地域の歴史を知る上で、ご活用いただければ、幸甚に存じます。

なお、今回の発掘調査、報告書の刊行に際し、ご指導、ご協力くださいました方々、および関係機関に対して、心から感謝いたします。

令和6年3月31日

福智町教育委員会
教育長 朝部 英晴

例　　言

1. 本書は、福岡県田川郡福智町伊方における、経営体育成基盤整備事業伊方地区に伴い実施した。記録保存のための発掘調査の報告書である。経営体育成基盤整備事業伊方地区に伴う文化財調査報告書1、福智町文化財調査報告書の第7集にあたる。
2. 発掘調査及び報告書作成は福智町教育委員会が福岡県飯塚農林事務所の委託事業および文化庁の国庫補助事業として実施した。
3. 本書に掲載した遺構図は、井上勇也、大久保杏子、奥紀美子、城戸富士子、小池史哲、高橋佑典、吉岡淳子が作成した。
4. 掲載した遺構写真及び遺物写真は井上、小池が撮影した。遺物実測図及び図面の浄書は大畠風雅、木村恵、城戸、小池、高橋、永岡北斗、吉岡が作成した。空中写真は九州航空株式会社による。
5. 出土遺物の整理、復元、実測、製図作業は福智町教育委員会が主体となり実施した。
6. 本書に使用した方位は全て座標北である。また、遺構配置図中のMは溝、SBは掘立柱建物、PはPitの略である。
7. 本書の執筆は井上、小池が行い、編集は小池の協力を得て井上が行った。

目　　次

I	調査にいたる経緯と経過	1
1.	調査の経緯と経過	1
2.	調査組織	1
II	位置と環境	3
1.	地理的環境	3
2.	歴史的環境	3
III	調査の内容	9
	伊方萩ヶ原遺跡	9
1.	遺跡の概要	9
2.	調査の方法と概要	9
3.	遺構と遺物	9
	伊方中原遺跡	39
1.	遺跡の概要	39
2.	調査の方法と概要	39
3.	遺構と遺物	39
IV	おわりに	138

挿図目次

第 1 図 福智町の位置	
第 2 図 周辺遺跡分布図 (1/25、 000)	6
第 3 図 伊方萩ヶ原遺跡周辺地形図	7
第 4 図 伊方萩ヶ原遺跡遺構配置図 (1/500)	8
第 5 図 住居 1 実測図 (1/60)	9
第 6 図 住居 2 実測図 (1/60)	10
第 7 図 住居 3 実測図 (1/60)	10
第 8 図 住居 4 実測図 (1/60)	10
第 9 図 住居 4 出土遺物実測図 (1/3)	11
第 10 図 土坑 1 実測図 (1/40)	12
第 11 図 土坑 2 実測図 (1/40)	12
第 12 図 土坑 2 出土遺物実測図 1(1/3)	13
第 13 図 土坑 2 出土遺物実測図 2(1/3)	14
第 14 図 土坑 2 出土遺物実測図 3(1/3)	15
第 15 図 土坑 2 出土遺物実測図 4(1/3、 4 のみ 1/4)	16
第 16 図 土坑 7 実測図 (1/20)	17
第 17 図 土坑 8 実測図 (1/40)	17
第 18 図 土坑 11 実測図 (1/40)	18
第 19 図 土坑 12 実測図 (1/40)	18
第 20 図 土坑 13 実測図 (1/40)	18
第 21 図 土坑 14 実測図 (1/40)	20
第 22 図 土坑 15 実測図 (1/40)	20
第 23 図 土坑 16 実測図 (1/40)	20
第 24 図 土坑 19 実測図 (1/40)	20
第 25 図 土坑 3 ~ 14 出土遺物実測図 (1/3)	21
第 26 図 土坑 13、 16 出土遺物実測図 (1/3)	22
第 27 図 土坑 13 出土鉄滓、 軽石、 試掘時出土鉄器実測図 (1/3)	23
第 28 図 溝 1、 2 土層実測図 (1/40)	24
第 29 図 溝 9 実測図 (1/80)	25
第 30 図 溝出土遺物実測図 1 陶磁器 (1/3)	26
第 31 図 土坑・溝出土遺物実測図 鉄滓 (1/3)	27
第 32 図 溝出土遺物実測図 2 石器 (1/3、 3 のみ 1/4)	28
第 33 図 炉 1 実測図 (1/20、 1/60)	28
第 34 図 炉 2 実測図 (1/20、 1/60)	29
第 35 図 炉 3 実測図 (1/20、 1/60)	29
第 36 図 SB1 実測図 (1/60)	30

第 37 図 SB2 実測図 (1/60)	31
第 38 図 SB3 実測図 (1/60)	32
第 39 図 SB4 実測図 (1/60)	33
第 40 図 SB5 実測図 (160)	34
第 41 図 SB6 実測図 (1/60)	35
第 42 図 Pit、遺構面など出土遺物実測図 (1/3)	36
第 43 図 土坑 7、N 区遺構面出土遺物実測図 (1/4)	37
第 44 図 遺構面等出土遺物実測図 鉄滓 (1/3)	38
第 45 図 伊方中原遺跡周辺地形図	40
第 46 図 調査区①遺構配置図 (1/200)	39
第 47 図 調査区①基本土層図 (1/60)	41
第 48 図 土坑 1 実測図 (1/40)	41
第 49 図 土坑 2 実測図 (1/40)	42
第 50 図 土坑 3 実測図 (1/40)	44
第 51 図 SB1 実測図 (1/60)	45
第 52 図 SB2 実測図 (1/60)	45
第 53 図 調査区①出土遺物実測図 1(1/4、32 ~ 34 は 1/3)	46
第 54 図 調査区①出土遺物実測図 2 石器・鉄滓 (1/3、6 のみ 1/2)	47
第 55 図 調査区④遺構配置図 (1/200)	47
第 56 図 基本土層 (1/40)	48
第 57 図 住居 1 実測図 (1/60)	49
第 58 図 土坑 4 実測図 (1/40)	50
第 59 図 土坑 4 出土遺物実測図 1(1/4)	52
第 60 図 土坑 4 出土遺物実測図 2(1/4)	53
第 61 図 土坑 7 実測図 (1/40)	54
第 62 図 SB4 実測図 (1/60)	55
第 63 図 調査区④出土遺物実測図 1 弥生土器、須恵器 (1/4、82 のみ 1/3)	56
第 64 図 調査区④出土遺物実測図 2 石器 (1/3、16 のみ 1/2)	57
第 65 図 調査区⑤遺構配置図 (1/200)	58
第 66 図 住居 6 実測図 (1/60)	59
第 67 図 調査区⑥遺構配置図 (1/200)	60
第 68 図 住居 3 実測図 (1/60)	61
第 69 図 住居 3 出土遺物実測図 (1/4)	63
第 70 図 土坑 16 実測図 (1/40)	65
第 71 図 調査区⑥、⑦出土遺物実測図 弥生土器 (1/4)	65
第 72 図 調査区⑥出土遺物実測図 石器 (1/3、26 のみ 1/2)	66
第 73 図 調査区⑦遺構配置図 (1/200)	67
第 74 図 住居 2 実測図 (1/60)	68

第 75 図 住居 5 実測図 (1/60)	69
第 76 図 土坑 10 実測図 (1/40)	70
第 77 図 SB3 実測図 (1/60)	71
第 78 図 SB5 実測図 (1/60)	71
第 79 図 SB6 実測図 (1/60)	72
第 80 図 調査区⑤、⑦出土遺物実測図 弥生土器 (1/4)	73
第 81 図 調査区⑦出土遺物実測図 石器 (1/3)	73
第 82 図 調査区⑧遺構配置図 (1/200)	75
第 83 図 調査区⑩遺構配置図 (1/250)	76
第 84 図 住居 4 実測図 (1/60)	77
第 85 図 住居 4 出土遺物実測図 (1/4)	77
第 86 図 土坑 20 実測図 (1/40)	77
第 87 図 土坑 20、23、28 出土遺物実測図 (1/4)	78
第 88 図 土坑 29 実測図 (1/40)	79
第 89 図 土坑 29、30 出土遺物実測図 (1/4)	80
第 90 図 土坑 30 実測図 (1/40)	82
第 91 図 土坑 31 実測図 (1/40)	82
第 92 図 土坑 31 出土遺物実測図 (1/4)	82
第 93 図 土坑 32、33、34 実測図 (1/40)	84
第 94 図 土坑 32 出土遺物実測図 (1/4)	85
第 95 図 土坑 33、35、36 出土遺物実測図 (1/4)	86
第 96 図 土坑 37 実測図 (1/40)	88
第 97 図 土坑 39 実測図 (1/40)	90
第 98 図 土坑 40 実測図 (1/40)	90
第 99 図 土坑 42 実測図 (1/40)	91
第 100 図 土坑 44 実測図 (1/40)	92
第 101 図 土坑 37、41、42 出土遺物実測図 弥生土器 (1/4)	93
第 102 図 土坑 45、46 実測図 (1/40)	94
第 103 図 土坑 49 実測図 (1/40)	97
第 104 図 土坑 43、45 ~ 49 出土遺物実測図 (1/4)	98
第 105 図 土坑 53、61 実測図 (1/40)	99
第 106 図 土坑 55 ~ 58 実測図 (1/40)	100
第 107 図 土坑 53、55 ~ 58 出土遺物実測図 (1/4)	101
第 108 図 土坑 63 実測図 (1/40)	103
第 109 図 調査区⑩出土遺物実測図 石器 (1/3、46・47・50・51 は 1/2)	104
第 110 図 土坑 64 実測図 (1/40)	105
第 111 図 土坑 61、62、64、66、67 出土遺物実測図 (1/4)	107
第 112 図 土坑 67 実測図 (1/40)	108

第 113 図 土坑 70 実測図 (1/40)	108
第 114 図 土坑 70 出土遺物実測図 弥生土器 (1/4)	109
第 115 図 土坑 72 出土遺物実測図 弥生土器 (1/4)	111
第 116 図 土坑 73、74、75 実測図 (1/40)	112
第 117 図 土坑 73 出土遺物実測図 弥生土器 (1/4)	113
第 118 図 土坑 76 実測図 (1/40)	116
第 119 図 土坑 75、76 出土遺物実測図 弥生土器 (1/4)	116
第 120 図 土坑 77 実測図 (1/40)	118
第 121 図 土坑 77、82 出土遺物実測図 弥生土器 (1/4)	119
第 122 図 土坑 79 ~ 82 実測図 (1/40)	120
第 123 図 土坑 85 実測図 (1/40)	121
第 124 図 土坑 86 実測図 (1/40)	121
第 125 図 土坑 86 出土遺物実測図 弥生土器 (1/4)	122
第 126 図 土坑 87 実測図 (1/40)	123
第 127 図 土坑 87、88 出土遺物実測図 弥生土器 (1/4)	124
第 128 図 土坑 88、88-2、89、90、93 実測図 (1/60)	126
第 129 図 土坑 89 出土遺物実測図 1 弥生土器 (1/4)	127
第 130 図 土坑 89 出土遺物実測図 2 弥生土器 (1/4)	128
第 131 図 土坑 92、95、96 実測図 (1/40)	131
第 132 図 土坑 92、94、96、98、Pit355 出土遺物実測図 弥生土器 (1/4)	132
第 133 図 土坑 92、Pit489 出土遺物実測図 玉類 (実大)	132
第 134 図 土坑 64 ~ 89、90 出土遺物実測図 石器 (1/3、67・68・76・80 は 1/2)	133
第 135 図 土坑 89 ~ 94 出土遺物実測図 石器・土製品 (1/3)	134
第 136 図 土坑 100 実測図 (1/40)	135
第 137 図 Pit393 実測図 (1/20)	135
第 138 図 Pit、遺構面出土遺物実測図 石器 (1/3)	136

図版目次

卷頭図版 遺跡周辺航空写真

伊方萩ヶ原遺跡

- 図版 1 1. 遺跡全景(東から)、2. 北側調査区(南から)、3. 南側調査区(南から)
- 図版 2 1. 調査区 A 全景(北から)、2. 調査区 A 通路状遺構(南から)、3. 調査区 D 全景(西から)
- 図版 3 1. 調査区 N 東壁堆積状況(西から)、2. 住居 1(東から)、3. 住居 2(南から)
- 図版 4 1. 住居 3(北から)、2. 住居 4(北から)、3. 土坑 1 石材検出状況(東から)
- 図版 5 1. 土坑 1 完掘(西から)、2. 土坑 2 遺物出土状況(南から)、3. 土坑 2 石材検出状況 1(南から)
- 図版 6 1. 土坑 2 石材検出状況 2(南から)、2. 土坑 7(西から)、3. 土坑 8 堆積状況(南から)
- 図版 7 1. 土坑 8(南から)、2. 土坑 10(西から)、3. 土坑 11(西から)
- 図版 8 1. 土坑 12 遺物出土状況(西から)、2. 土坑 12 完掘(西から)、3. 土坑 13 検出状況(南から)
- 図版 9 1. 土坑 13 堀削状況(南から)、2. 土坑 13 遺物出土状況(南から)、3. 土坑 13 完掘(南から)
- 図版 10 1. 土坑 14(東から)、2. 土坑 16 遺物出土状況(西から)、3. 土坑 16 完掘(西から)
- 図版 11 1. 土坑 15(東から)、2. 溝 9 石材検出状況(北から)、3. 溝 9 完掘(北から)
- 図版 12 1. 炉 1(東から)、2. 炉 1 周辺 Pit(西から)、3. 炉 2(西から)
- 図版 13 1. 炉 2 周辺 Pit(東から)、2. 炉 3(東から)、3. SB2・3(西から)
- #### 伊方中原遺跡
- 図版 14 1. 伊方中原遺跡全景、2. 調査区①(北から)、3. 調査区④・⑤(東から)

図版 15 1. 調査区⑥・⑦・⑧(東から)、2. 調査区⑩(東から)、3. 調査区①全景(西から)

図版 16 1. 調査区①南壁堆積状況(北から)、2. 土坑 1 堆積状況(南から)、3. 土坑 1 堆積状況(北から)

図版 17 1. 土坑 1 完掘(西から)、2. 土坑 2 堆積状況 1(西から)、3. 土坑 2 堆積状況 2(南から)

図版 18 1. 土坑 2 石材検出状況(北から)、2. 土坑 2 完掘(北から)、3. 土坑 3 堀削状況(北から)

図版 19 1. 土坑 3 堆積状況(西から)、2. 土坑 3 石材等検出状況(西から)、3. 土坑 3 完掘(西から)

図版 20 1. 調査区④西壁堆積状況(東から)、2. 住居 1(東から)、3. 住居 1 屋内土坑堆積状況(北から)

図版 21 1. 住居 1 屋内土坑(東から)、2. 土坑 7 堆積状況(北から)、3. 住居 3 検出状況(東から)

図版 22 1. 溝 1 堆積状況(西から E-E')、2. 住居 3 屋内土坑堆積状況 1(東から)、3. 住居 3 屋内土坑堆積状況 2(西から)

図版 23 1. 住居 3 屋内排水溝堆積状況 1(東から A-A')、2. 住居 3 屋内排水溝堆積状況 2(東から)

A-A')、3. 住居 3 屋内排水溝堆積状況 3(西から B-B')

- 図版 24 1. 住居 3 床面(東から)、2. 住居 3 完掘(東から)、3. 土坑 16(西から)
- 図版 25 1. 住居 2 床面(西から)、2. 住居 2 完掘(西から)、3. 住居 2 東壁(西から)
- 図版 26 1. 土坑 10(西から)、2. 住居 4(西から)、3. 住居 4 堆積状況(南から)
- 図版 27 1. 土坑 20(西から)、2. 土坑 29 堆積状況 1(北から)、3. 土坑 29 堆積状況 2(北から)
- 図版 28 1. 土坑 39 堆積状況(西から)、2. 土坑 40(奥左 西から)、3. 土坑 42(西から)
- 図版 29 1. 土坑 44(南から)、2. 土坑 44 堆積状況 1(東から)、3. 土坑 44 堆積状況 2(東から)
- 図版 30 1. 土坑 46(東から)、2. 土坑 46 堆積状況(南から)、3. 土坑 49(西から)
- 図版 31 1. 右 ,49 左上 , 土坑 61 左 , 土坑 53(南から)、2. 土坑 56 堆積状況(東から)、3. 土坑 58 堆積状況(東から)
- 図版 32 1. 土坑 55 堆積状況(東から)、2. 土坑 63(西から)、3. 土坑 64 堆積状況 1(西から)
- 図版 33 1. 土坑 64 堆積状況 2(東から)、2. 土坑 67 堆積状況(東から)、3. 土坑 70 堆積状況(西から)
- 図版 34 1. 土坑 73 堆積状況(東から)、2. 下から土坑 73・74・75(西から)
- 図版 35 1. 土坑 77 堆積状況(東から)、2. 土坑 77(南から)、3. 土坑 81 堆積状況(東から)
- 図版 36 1. 土坑 85 堆積状況(北から)、2. 土坑 86(北から)、3. 土坑 87 堆積状況(東から)、
- 図版 37 1. 上右 ,Pit451(東から) 上左 ,Pit441(北から) 下 , 土坑 100(北から)、2.Pit393(北から)
上右 , 砂質土充填状況 上左 , 遺物検出状況 下 , 完掘、3. 作業風景
- 図版 38 伊方萩ヶ原遺跡 出土遺物 1
- 図版 39 伊方萩ヶ原遺跡 出土遺物 2
- 図版 40 伊方萩ヶ原遺跡 出土遺物 3
- 図版 41 伊方萩ヶ原遺跡 出土遺物 4
- 図版 42 伊方萩ヶ原遺跡 出土遺物 5
- 図版 43 伊方萩ヶ原遺跡 出土遺物 6
- 図版 44 伊方中原遺跡 出土遺物 1
- 図版 45 伊方中原遺跡 出土遺物 2
- 図版 46 伊方中原遺跡 出土遺物 3
- 図版 47 伊方中原遺跡 出土遺物 4
- 図版 48 伊方中原遺跡 出土遺物 5
- 図版 49 伊方中原遺跡 出土遺物 6
- 図版 50 伊方中原遺跡 出土遺物 7
- 図版 51 伊方中原遺跡 出土遺物 8
- 図版 52 伊方中原遺跡 出土遺物 9
- 図版 53 伊方中原遺跡 出土遺物 10

I 調査にいたる経緯と経過

1. 調査の経緯と経過

平成 28 年 10 月第 4 回ほ場整備事業連絡会議に出席、福智町伊方の新門地区でほ場整備が計画されていることが判明した。すでに平成 28 年 7 月に伊方地区基盤整備推進協議会も設立され、教育委員会としても対応をせまられることとなった。その後平成 29 年 2 月の第 5 回ほ場整備事業連絡会議にて埋蔵文化財の試掘調査及び場合により本調査が必要であることを説明した。そのうえで、地権者の確定と同意書が必要であるため地元説明と同意書取得の協力を依頼した。

その後、平成 28 年度中に平成 29 年度の文化庁の国庫補助事業として試掘調査を計画した。平成 29 年 4 月、農政課より正式に試掘調査の依頼受け、教育委員会として事業地内の埋蔵文化財の有無確認のため試掘調査を行うこととした。事業地内の試掘調査は平成 29 年度、30 年度にかけて行い、結果延 1,500m² のトレーニングを掘削、トレーニングの掘削本数は 305 本、約 50,000m² の範囲を埋蔵文化財包蔵地として周知化した。

試掘調査の結果を基に福岡県飯塚農林事務所、福智町農政課、伊方土地改良区と協議を行い、工事計画の変更が困難であり削平が避けられない地点について本調査を行うこととした。ほ場整備に伴う工事は令和 3 年度より開始され、令和 3 年度は工事対象地内の周知の埋蔵文化財包蔵地において一部確認調査を行った。令和 4 年度伊方萩ヶ原遺跡及び伊方中原遺跡の発掘調査を行い、令和 5 年度に前年度調査遺跡の整理作業及び報告書の作成を行なった。

2. 調査組織

調査の組織は以下の通りである。

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	平成 31 年度	令和 2 年度 (令和元年度)	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度
福岡県飯塚農林事務所								
所長	井上 直幸	溝口 信二	花田 治	今泉 正彦	才田 英雄	才田 英雄	才田 英雄	佐伯 昭敏
農村整備第 1 課								
課長	三宅 幸介	三宅 幸介	石津 誠司	酒井 龍典	酒井 龍典	高倉 修二	高倉 修二	中山 雅夫
計画係								
係長	関 康弘	小崎 浩	野田 賢吾	野田 賢吾				
係	大塚 克己	大塚 克己	堀下 久	堀下 久				
			安部 瞳実	安部 瞳実				
管理係								
係長								
係								
農村整備第 2 課								
課長								
第 2 係								
係長								
係								
伊方地区農地基盤整備 推進協議会								
会長	倉石 秀美	倉石 秀美	倉石 秀美	倉石 秀美				
伊方土地改良区								
理事長								

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	平成 31 年度	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度
福智町農政課								
課長	久保田 利弘	久保田 利弘	久保田 利弘	久保田 利弘	久保田 利弘	久保田 利弘	久保田 利弘	白石 輝彦
課長補佐		仲村 芳久	仲村 芳久	山本 恵介	山尾 淳	白川 督信 --	竹宗 慶	竹宗 慶
係長	仲村 芳久	仲村 芳久	山本 恵介	山尾 淳	野上 亮	野上 亮	白川 督信	白川 督信
係	栗田 清澄	栗田 清澄	栗田 清澄	永末 卓哉	永末 卓哉	永末 成仁	野上 亮	野上 亮
福智町教育委員会								
教育長	辻村 哲弥	辻村 哲弥	辻村 哲弥	辻村 哲弥	辻村 哲弥	朝部 英晴	朝部 英晴	朝部 英晴
				朝部 英晴				
生涯学習課								
課長	谷川 信行	谷川 信行	谷川 信行	谷川 信行	谷川 信行	澤井 秀孝	澤井 秀孝	澤井 秀孝
課長補佐		松田 由紀				藤村 成美	仲村 松尾	和宏 敏和
社会教育係								
係長	前川 司	前川 司	野村 和貴	仲村 浩美	仲村 浩美	末永 康彦	末永 康彦	坂田 早苗
	奥 一幸							
係	井上 勇也	井上 勇也	井上 勇也	井上 勇也	豊田 祐香	豊田 祐香	豊田 祐香	豊田 祐香
	小池 史哲	小池 史哲	小池 史哲	小池 史哲	井上 勇也	井上 勇也	井上 勇也	井上 勇也
			長谷川 清之	小池 史哲	小池 史哲	小池 史哲	小池 史哲	金沢 史哲
				長谷川 清之	長谷川 清之	長谷川 清之	長谷川 清之	小池 史哲
								長谷川 清之

調査にあたり、現地調査においては地元住民ほか関係各位に多大なご理解とご協力を得た。福岡県教育庁総務部文化財保護課は現地視察、協議で、筑豊・北九州両教育事務所管内文化財担当者の皆様には調査、報告書の作成において有益なご助言、ご教示をいただいた、記して感謝いたします。

II 位置と環境

1. 地理的環境

今回の「経営体育成基盤整備事業 伊方地区」の対象地は福智町伊方の新門地区を中心とする。事業対象地内の遺跡は福岡県の中心部を流れる遠賀川の支流のひとつ、彦山川右岸の福智山系より派生する2本の丘陵上とその周縁部に分布する。今回報告を行うのは伊方萩ヶ原遺跡と伊方中原遺跡である。伊方萩ヶ原遺跡は2本の丘陵のうち北側の丘陵上、赤坂神社の南側に位置する。古くから赤坂神社が鎮座するため大きな地形の改変を受けていない。伊方中原遺跡は南側の丘陵頂部を中心と所在する遺跡である。古くから弥生時代の墓地や古墳の存在したことが伝えられる。

これら遺跡の所在する福智町は福岡県の中央部、田川郡の北端に位置し、平成18年3月6日赤池町、金田町、方城町の三町が合併し誕生した。北は福智山系を挟んで北九州市、南は田川市、糸田町、東は香春町、西は直方市、飯塚市に隣接する。町の北側は福智山を中心とする山岳地帯であり、起伏に富んだ地形である。南側には福岡県第二位の河川として知られる一級河川遠賀川の支流、中元寺川と彦山川が合流し、西へ流れ出る。現在の人口は約21,000人、観光、教育をはじめとする人の活力を生かした町作りを展開している。文化的には、400年の歴史を誇る上野焼に代表される陶芸の里、童謡作曲家の河村光陽生誕の地として全国的に有名である。

2. 歴史的環境

福智町の歴史的環境であるが、国の史跡1件、国の登録文化財1件、県指定文化財8件、町指定文化財が15件と指定、登録文化財だけでも25件を数え、他にも多くの文化財が所在し地域の歴史に触れる材料が豊富な土地である。

町内でもっとも著名な文化財は田川市郡初となる国史跡の城山横穴群、登録文化財の九州マクセル赤煉瓦記念館や、県指定文化財を3件所有する上野興国寺であろう。九州マクセル赤煉瓦記念館は旧三菱方城炭鉱時代の建物であり築100年を越え、内部は社員用の喫茶室、展示場として現在も活用されている。この赤煉瓦の建物は敷地内に残る他の赤煉瓦建物とともに、かつて炭坑で栄えた筑豊の近代化遺産を象徴する存在となっている。上野興国寺は足利尊氏が九州へ逃れた際に隠れたとも伝えられ、尊氏、直義兄弟発願の安国寺の一つである。古文書、仏殿（観音堂）、木造玄晦禅師坐像は県指定されている。また、町内には県下でも著名な天然記念物であるエドヒガンの虎尾桜、定禪寺境内の迎接の藤と呼ばれる藤がある。虎尾桜は福智山の中腹にあり、そこにいたる道は幾分険しいものの毎年盛りになると多くの見物客が訪れている。このエドヒガンは希少種の桜であるが、町内の福智山山麓には九州でも例がない密集地帯として有名である。

福智町では、古く縄文時代より人々が生活していた痕跡が残されている。明確な集落は未確認であるが、以前同じ伊方地区での基盤整備事業において調査した金山遺跡、長浦遺跡では縄文時代の遺物、遺構が確認されている。数点ではあるが、縄文時代早期から前期の縄文土器も出土し、古くからこの地で人々が暮らした痕跡が残されている。特に金山遺跡では縄文時代後期から晩期の石器製作跡と考えられる遺構が確認され、周辺に縄文時代集落が存在した可能性がある。

弥生時代は、遠賀川流域では立岩遺跡や立屋敷遺跡といった学史に残る遺跡も多く確認されてい

る。立岩遺跡では10面の前漢鏡が出土した集団墓が確認され、弥生時代のクニの存在が明らかとなっている。また、そこで生産された石包丁は北部九州に広く分布し、生産地としても立岩遺跡は全国的に有名である。彦山川流域では北部九州の弥生時代研究の資料として知られる下伊田式土器の由来となった下伊田遺跡群などが存在する。町内では彦山川、中元寺川の河岸段丘に生活の場が移り、伊方丘陵やその周辺、神崎などで生活の痕跡や墓地が確認されている。特に伊方丘陵やその周辺は弥生時代から古墳時代にかけて主要な生活の場であったと考えられ、町内でも有数の遺跡密集地帯である。今回調査した伊方萩ヶ原遺跡は伊方丘陵上にあり、伊方小学校周辺で調査された遺跡よりやや後出する。伊方中原遺跡周辺では、遺跡の北に弥生時代の遺物が出土する中原遺跡の存在が知られていた。弥生時代後期末から弥生時代終末と考えられる宝珠遺跡の石棺墓から内行花文鏡が出土し、ほぼ同時期と推定される三本松古墳群からも同じく内行花文鏡が出土している。このことは、有力者の存在を連想させ、後の伊方古墳と並び周辺地域の中でも中心地であったことがうかがわれる。青銅器は弥生時代においては有力者層の存在を想定できる資料である。彦山川流域では上流域の大任町で銅剣が、隣の糸田町では銅戈が、香春町では宮原遺跡で銅鏡が出土し、それぞれの地域において有力者層の存在が想定される。

古墳時代であるが、古墳時代前期から中期にかけては各地で前方後円墳が首長墓に採用される時期である。遠賀川流域においても上流の嘉麻市所在の沖出古墳や下流の遠賀町所在の島津丸山古墳群などの前期の前方後円墳が築造される。町内の古墳時代前期の古墳は追古墳が知られる。主体部は粘土櫛で覆われた木棺で、副葬品等は出土しないが、形態から前期古墳と位置づけられている。町内では以後目立った古墳の造営は行われていないようである。神崎遺跡では前期と考えられる石棺墓が確認されている。

古墳時代中期は前方後円墳が各地で築かれるとともに巨大化していく。また、横穴系の墓制が日本に導入された時期に当たる。流域の田川市ではセンドノ古墳、猫迫古墳という2つの古墳が営まれる。センドノ古墳は朝鮮半島との関連が窺える横穴式石室を持ち、猫迫古墳は古墳時代中期の資料が少ない遠賀川流域の中で九州最古級の馬形埴輪などが出土し全国的に有名である。また、5世紀後半には豊前北部で横穴墓の築造も開始される。行橋市の竹並遺跡群や中津市の上の原横穴墓群に5世紀代にさかのぼると考えられる横穴墓が確認されている。町内では古墳時代中期には目立った古墳の造営もなく、現在確認できる横穴墓は5世紀末から6世紀前半であり、不明な点が多い。

古墳時代後期になると各地で群集墳が築造される。福智町の位置する遠賀川流域は地質的な影響からか横穴墓が群集墳として数多く造営される。町内でも例外ではなく数多くの横穴墓が造営され、横穴の数に反比例して横穴式石室を内部主体にもつ古墳の数は少ない。町内で確認されている後期古墳はわずか数基である。遠賀川流域においても横穴式石室を内部主体とする古墳群は横穴群に比べ数は少ない。一部、宮若市のように横穴式石室墳が群集墳の主流となる地域もあるが、主流は横穴墓である。その中でも伊方古墳は墳丘径約32m、内部の横穴式石室は全長12mを超える福岡県下でも有数の規模を持つ巨石墳である。保存整備に先立つ発掘調査の結果、少ないながらも金銅装の馬具等が確認され、地域首長の古墳であると考えられる。また町内では、神崎1号墳出土の獅噛環柄頭という優れた副葬品が出土している。獅噛環柄頭は全国的に類例は少なく貴重な遺物である。神崎1号墳は周辺の状況から横穴墓の可能性もあり、そうであるなら首長墓に準ずる階層の横穴墓採用という横穴墓集中地域としての地域性の現れとして重要である。上流域の飯塚市では金銅装の

帶金具などの豪華な副葬品が出土している櫨山古墳が横穴墓と考えられている⁽¹⁾。遠賀川流域では、横穴墓という墓制が有力者層にも採用されていたことが想定できる。

古墳時代の集落であるが、現在のところ目立った集落の遺跡は発見されていない。町内だけでも古墳時代後期の群集墳は、横穴墓を中心に数百基存在すると考えられるが、現在までのところ、これら群集墳の造墓主体となる集落は確認されていない。古墳時代の土器が伊方丘陵の裾部や赤池の川底で発見されている。今後調査が進めば伊方の丘陵部や赤池の河岸段丘上などで集落が発見される可能性がある。

古代では伊方城園遺跡で掘立柱建物等が確認されている。また伊方の地名はその後伊方荘として文献にも散見され、伊方城園遺跡では鎌倉時代の建物も確認され、伊方石丸遺跡でも同時期の井戸が確認されている。伊方周辺は中世まで地域の中心地として人々が生活していたことが窺える。また上野興国寺は、室町時代に安国寺として創建され現代に続く古刹である。先に述べたように、足利尊氏の伝承も残り、近世豊前に入封された小笠原藩ゆかりの寺である。幕末には小笠原藩9代藩主の葬儀もここで行なわれた。

近世の周辺地域は細川氏、小笠原氏によって治められた豊前の地であった。彦山川流域でも手永（大庄屋）と呼ばれる家が周辺の年貢の管理などを行っていた。その中でも金田手永六角家は有名である。現在の母屋は後世のものであるが、六角家には藩主が通る専用の門である御成門のある白壁、土蔵などが残り往時の姿をとどめている。史跡となった城山横穴群はこの六角家の裏山であり、敷地の一角として手付かずのまま残されたといえる。横穴群の頂部には累代の近世墓も残っている。

近代は、周辺を含め筑豊地区全体が炭鉱とともに発展して行った。町内でも三菱方城炭鉱、明治赤池炭業所など大手資本による大規模炭鉱をはじめ、数多くの中小炭鉱が創業し活気にあふれていた。現在ではボタ山等にわずかにその面影を残すのみとなっている。三菱方城炭鉱の赤煉瓦建物群は現在マクセルの敷地内に数棟残り、国登録文化財の九州マクセル赤煉瓦記念館を始め今でも活用され、筑豊の近代化を物語る資料として筑豊の歴史を見守っている。

註

(1) 島田光一 1991 「福岡県櫨山古墳の再検討」『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念論集



第2図 周辺遺跡分布図 (1/25, 000)

1. 伊方萩ヶ原遺跡
2. 伊方中原遺跡
3. 伊方中原南遺跡
4. 伊方赤穴遺跡
5. 伊方今宮遺跡
6. 中原遺跡
7. 金山遺跡
8. 長谷横穴墓群
9. 野添遺跡群
10. 高崎山古墳
11. 伊方古墳
12. 伊方石丸遺跡
13. 伊方小学校遺跡
14. 伊方城園遺跡
15. 法華屋敷遺跡
16. 前村遺跡
17. 後谷遺跡
18. 九州マクセル赤煉瓦記念館
19. 三本松古墳群
20. 草場遺跡
21. 宝珠遺跡
22. 追遺跡
23. 追横穴群
24. 追古墳
25. 城山横穴群
26. 長浦遺跡
27. 広谷遺跡
28. 釜ノ口窯跡
29. 方城岩屋磨崖梵字曼荼羅
30. 岩屋高麗窯跡
31. 釜ノ口窯跡
32. 興國寺
33. 夏吉古墳群
34. 和田山横穴群



第3図 伊方萩ヶ原遺跡周辺地形図



第4図 伊方萩ヶ原遺跡遺構配置図(1/500)

III 調査の内容

伊方萩ヶ原遺跡

1. 遺跡の概要

伊方萩ヶ原遺跡は福智山系より南へ伸びる丘陵上、赤坂神社南側の標高 80 m前後に位置する。丘陵の鞍部から南東方向へ緩傾斜していく斜面にあたる。試掘調査の結果より、丘陵頂部はすでに削平を受けたと考えられ、良好な地山が残るもの遺構、遺物は確認していない。対象地は神社周辺という地理的な条件からも大きな地形改変は行われておらず表土直下で遺構、遺物を検出していた。今回の事業予定地内の試掘調査にて新たに確認した遺跡である。

2. 調査の方法と概要

伊方萩ヶ原遺跡では農道を挟み調査対象地は大きく南と北に分かれ、田の一面を一区画とし、A から P までのアルファベットを振り、南側の調査対象地 A より順次表土の除去を開始した。耕作の状況などにより、表土直下に近い高さで遺構面を検出する可能性と、排土を調査対象地内で処理する必要があったため遺構の分布を確認しながら表土の除去を進めた。A では通路状の遺構を確認、B、C、E、F、G で Pit、溝などの遺構を検出した。遺構の分布が確認されない A の西半、D 及び C、F、G の西端部分を表土と排土の置場として利用することとし調査区を設定した。北側の調査対象地では M より順次表土の除去を行い、H の東半、I、K、L 全面、J、M、P の東側、O の中央で Pit、溝、土坑などの遺構を検出した。南側と同様に遺構の分布が確認されない、H の北端と西側、L の西北隅、O の東側、西側及び J、M、P の西端を表土と排土の置場として利用することとし調査区を設定した。作業員の作業開始後、福岡県土地改良事業団体連合会の測量成果を基に調査区内へのレベル移動、基準杭を設定し 1/10、1/20 の縮尺にて個別遺構図及び遺構配置図を作成した。

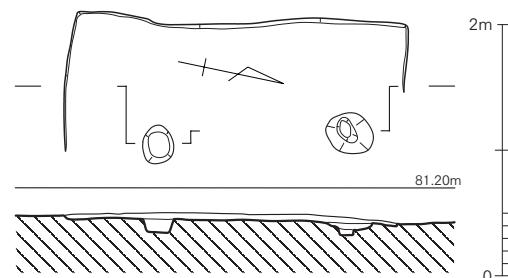
調査は、重機が 7 月 5 日より表土除去を開始し、作業員は 7 月 20 日より G から遺構検出を開始し掘削作業を始めた。9 月 30 日に航空写真的撮影を行い、10 月 18 日撤収作業を行い終了した。

3. 遺構と遺物

(1) 住居

住居 1(第 5 図、図版 3)

方形の住居、柱穴は 2 本残存、残存部は深さ 5cm 程度、全体の 1/3 程度が残存している。形状から住居とした。主軸方位は N-11.5°-W、長軸 2.66 m、短軸(もっとも掘方の残る部分)1.12 m を測り、柱穴は深さ 10cm 程度残存している。



第 5 図 住居 1 実測図 (1/60)

住居 2(第 6 図、図版 3)

住居内周溝と考えられる溝と柱穴の残存する状況か

ら住居とした。主軸方位 N-70.4°-E、残存部では長軸 3.56 m、短軸 1.3 m、深さ 6 cm を測る。南側は田の造作により削平されている。二本の柱穴は西側深さ 46 cm 程度、東側深さ 25 cm 程度残存している。

住居 3(第 7 図、図版 4)

方形、南端に焼土が残る。住居内周溝の一部が残存し住居とした。主軸方位 N-26°-W、残存部で長軸 2.62 m、短軸 0.42 m、深さ 5 ~ 6 cm を測る。住居内より鉄滓及び木炭片を検出した。鉄滓が出土する土坑 14 に隣接し、土坑 13 の南に位置する。

出土遺物

住居跡内溝の堆積土を詳細に選別した結果 265 点の鉄滓と、木炭片が検出された。鉄滓はいずれも重量 3 g 以下の小塊である。その他に木炭片が相当数発見された。また、磁石に付着する鉄細粒が 1,270 g 含まれていた。

住居 4(第 8 図、図版 4)

方形の住居、土坑 17 に切られる。柱穴は 1 本残る、深さ 23 cm。全体の 1/3 程度が残存している。主軸方位 N-16°-W、残存部で長軸 3.22 m、短軸 1.15 m、深さ 7 cm を測る。

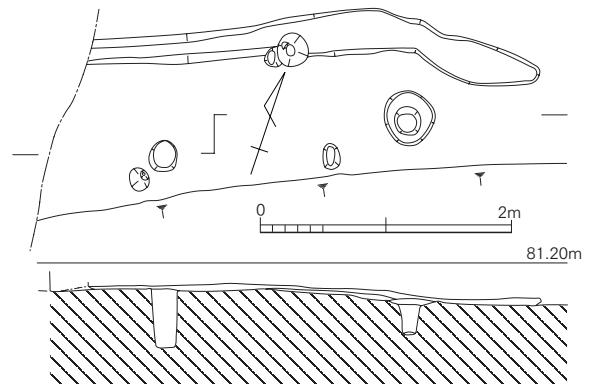
出土遺物(第 9 図、図版 38、39)

1 ~ 9 は陶器、1 は底部を欠く復元口径 14.5 cm の大きさの皿。2 ~ 4 は碗の類で 2、3 は内外面に鉄釉が掛り、2 の外面下半には藁灰釉がみられる。4 の釉は白の釉の下に淡い黄緑色の藁灰釉が垂れるように掛る。5 は甕の底部であろうか内面に指頭ナデの凹凸が残り、外面に蓆状圧痕がある。6 ~ 8 は甕で 6 の口縁部には鉄釉が掛るが、7・8 は素焼きで同一個体の可能性がある。口縁部が肥厚気味で端部内側が突出する特徴を持つ。9 は復元口径 36 cm、器高 12 cm 余の大きさの捏ね鉢で、赤褐色に焼き締められ口縁部内外面に灰オリーブ系の釉が掛る。口縁部は内面側に突出するように肥厚する。これらの陶器では 17 世紀初 ~ 前半の特徴をもつが、9 の捏ね鉢は 17 世紀後半まで下る可能性がある。

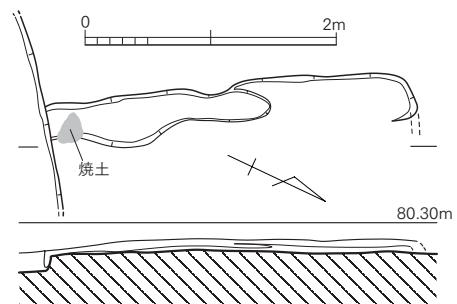
(2) 土坑

土坑 1(第 10 図、図版 4、5)

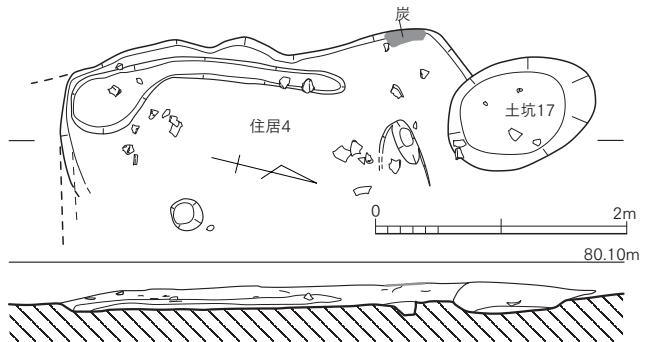
主軸方位 N-64°-E、東西 1.23 m、南北 1 m の楕円形の土坑。2 層の上面で石材を検出している。



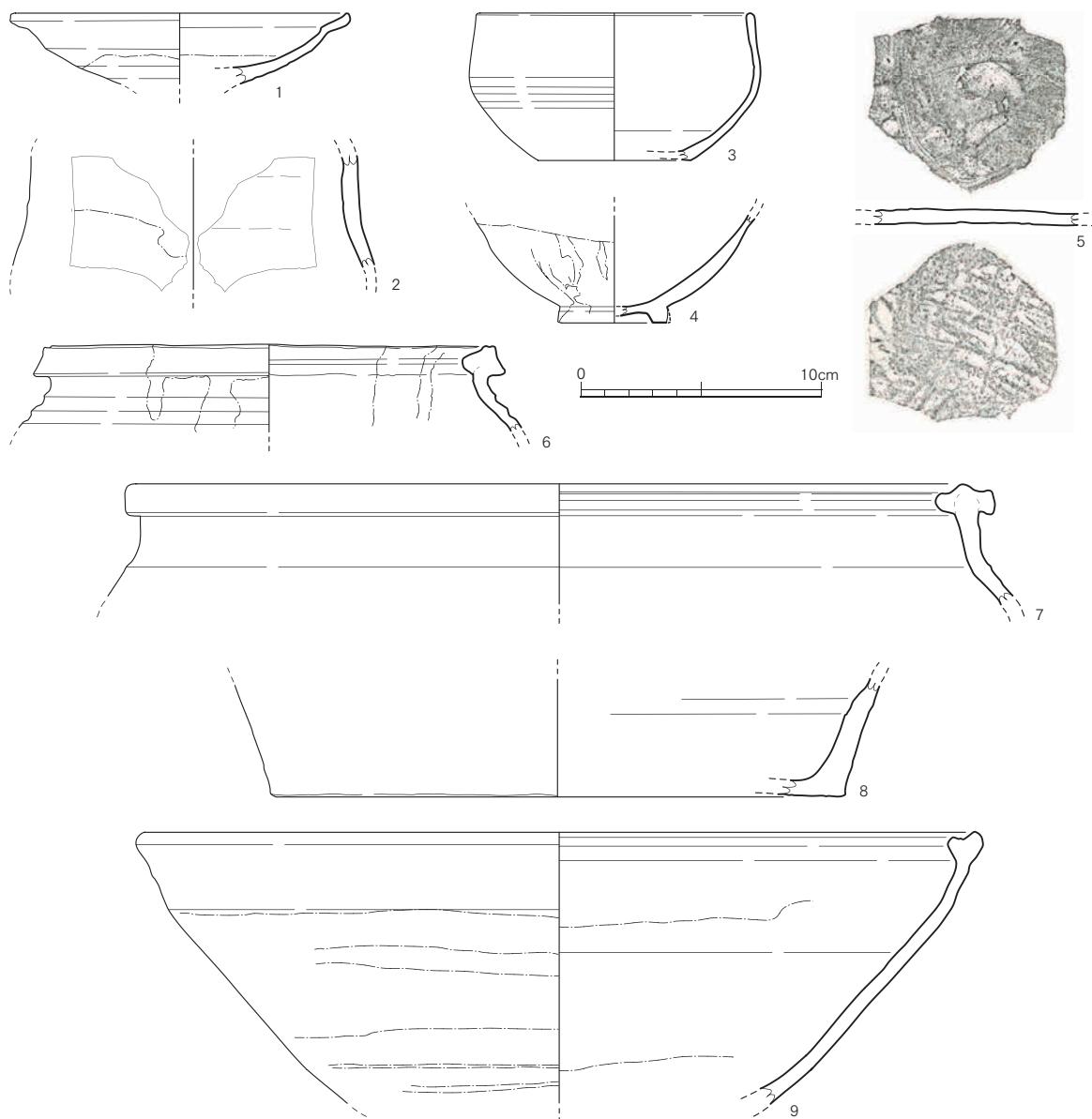
第 6 図 住居 2 実測図 (1/60)



第 7 図 住居 3 実測図 (1/60)



第 8 図 住居 4 実測図 (1/60)



第9図 住居4出土遺物実測図 (1/3)

土坑2(第11図、図版5、6)

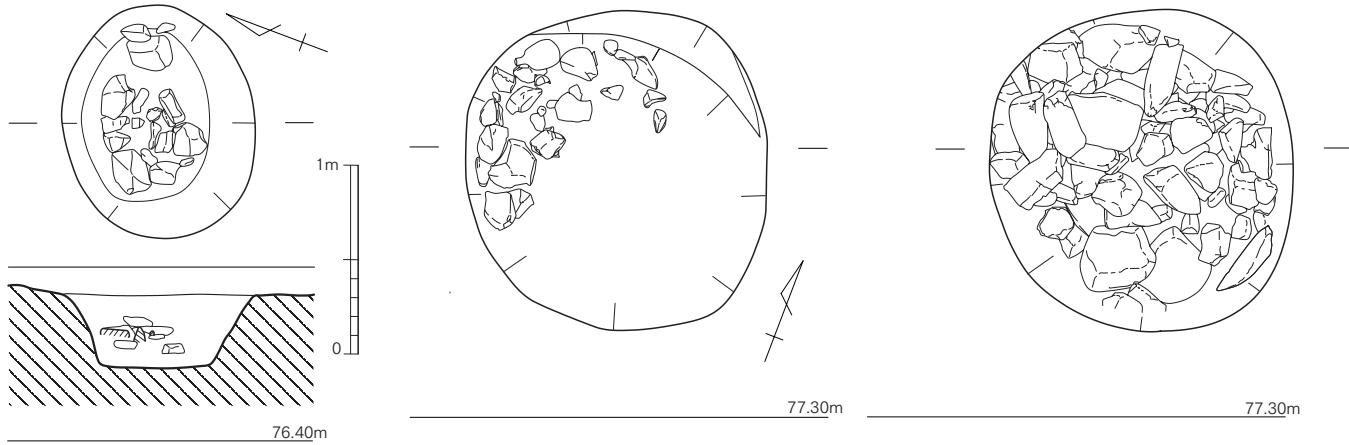
井戸と考えられ、主軸方位 N-66.6°-E、南北 1.68 m、東西 1.58 m を測る。深さは 2.9 m 以上でありこれ以上の掘削は危険を伴い、井戸枠と考えられる石材を確認できたため掘削を終了した。

出土遺物(第12～14図、図版38・39)

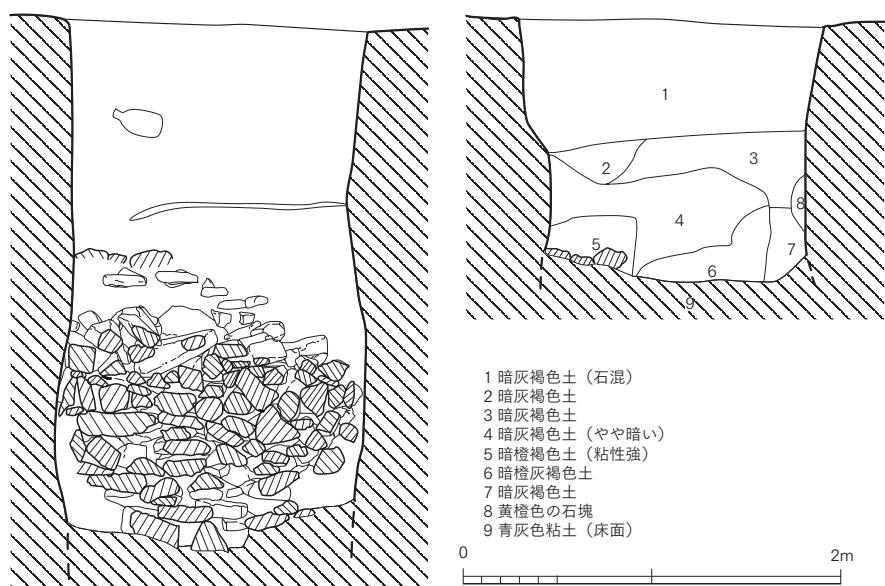
10～14 は陶器甕。小形の樽形甕で、12、13 は同一個体の可能性がある。また 12、14 は注ぎ口をもつ片口タイプのもの。10、11 は内外面に鉄釉が掛り、11 の胴部には淡黄色、14 の底部には灰白色の藁灰釉が重なる。12、13 では胴部に暗めのオリーブ系の釉が掛る。10、12、14 共に口縁部は内側に折り返し気味に肥厚し、10、14 共に頸部下に 2 条の沈線が巡る。

15 は陶器台付鉢、口径 27.0 cm、器高 9.7 cm の大きさで踏ん張る形の高台をもち口縁端部は短く外反する。内外面に淡いオリーブ系の釉が掛り方形の露胎部分を空ける上野焼の特徴的な文様である。内底面に目跡付着物があり、重ね焼きされたことが分かる。

16 は素焼き皿、復元口径 28.0 cm、器高 4.2 cm の大きさの土師器質の大皿で、口縁部は外反して折



第10図 土坑1実測図(1/40)



第11図 土坑2実測図(1/40)

り返すように肥厚する。

17～18は陶器擂鉢、内面の擂目が底部では接するが口縁部側では7～9本単位の目に隙間が生じる擂鉢で、口縁部は外側に折り返し気味に肥厚し沈線状の段を作り、21で片口部を確認できる。何れも焼き締められ、21の外面に鉄釉が掛る。

22は陶器短頸壺、復元口径11.6cmで直立気味に立ちあがる口縁部から最大径21cm以上に丸く膨らむ器形の壺で、肩部内面に指頭ナデの凹凸が残り、口唇内側が短く尖る。鉄釉が掛る。

23は素焼き壺、口縁部を失うが残存器高24.5cm、胴最大径18.1cmの大きさで頸が細く、底径15.3cmの安定した油瓶風のもの。器面が風化磨耗して器面調整の痕跡は不明。

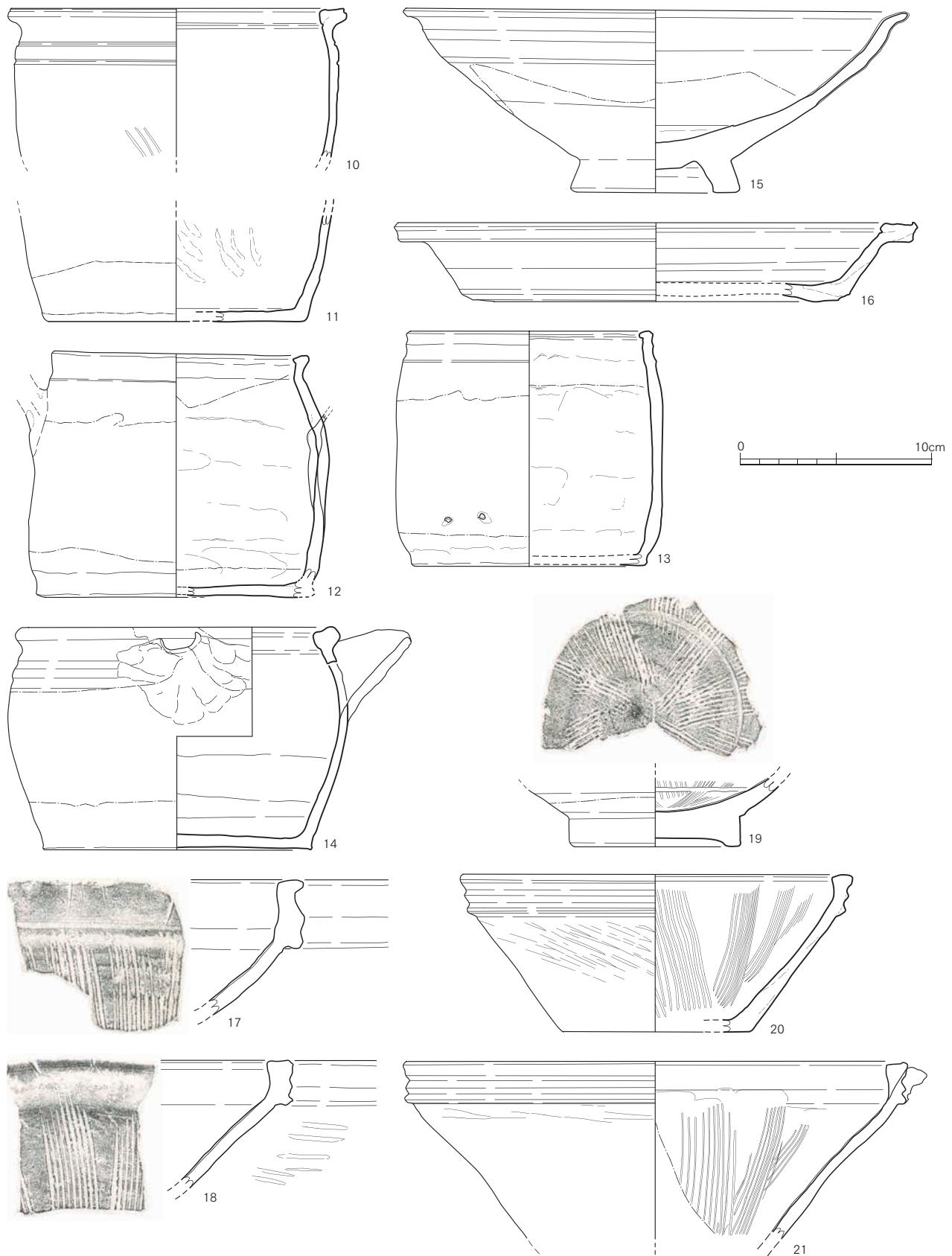
24は陶器甕、円筒状の破片で破片上端に注ぎ口と推定される膨らみがある。内外面に暗オリーブ色の釉が掛る。

25～28は陶器碗、25、27は体部から口縁部にかけて湾曲するもので、28は直に立ち上がる。

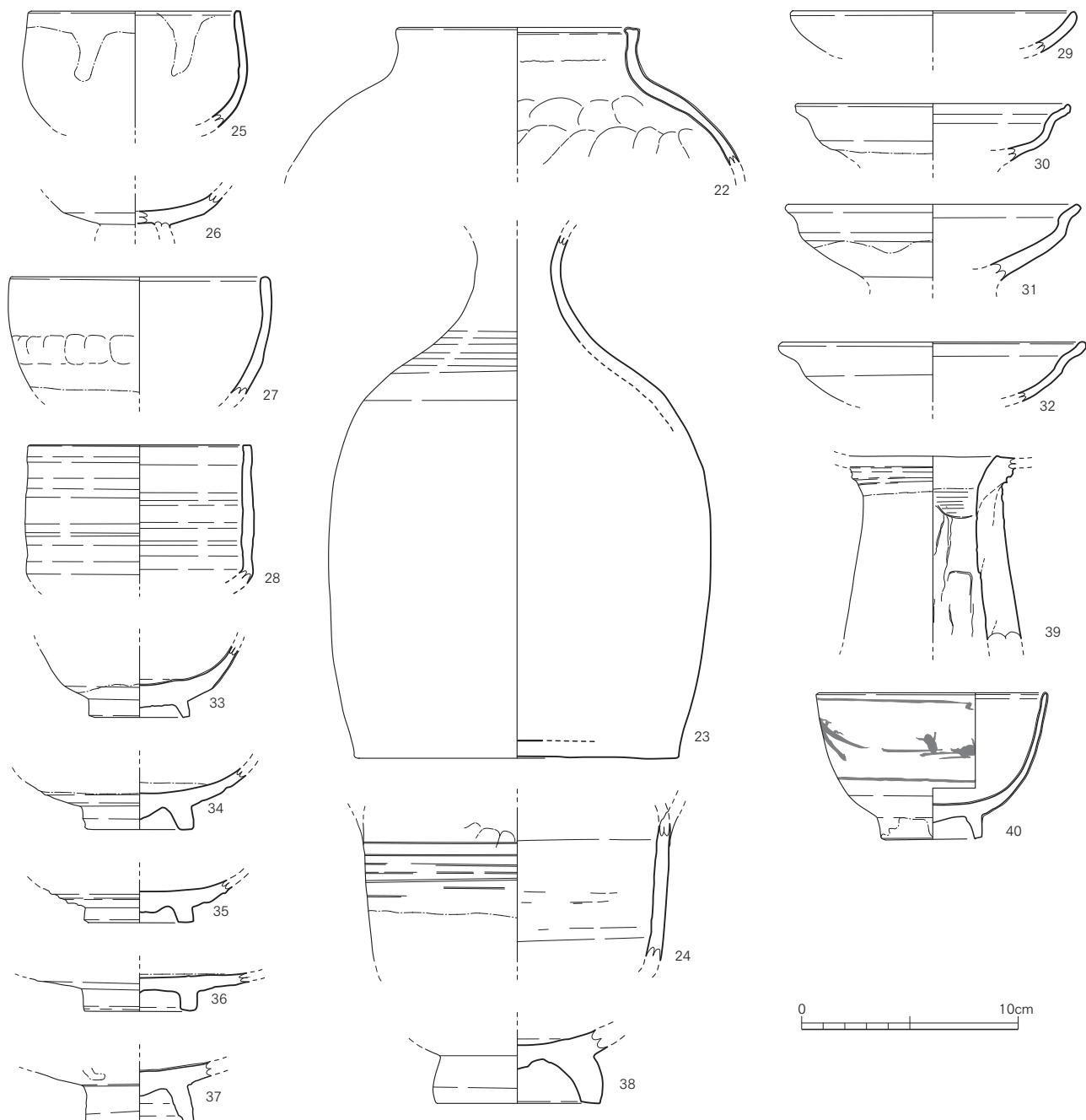
28は細砂粒を含む灰色の胎土で、器面に櫛目状の擦過痕がみられ、緑灰色の釉が掛る。

29～32は陶器皿、4点の皿口縁部片のうち30～32は端反口縁の皿で、何れも藁灰釉が掛る。

33～38は陶器底部、33～35は碗の底部と思われるが、33は小振りで湯呑の底部であろうか。



第12図 土坑2出土遺物実測図1(1/3)



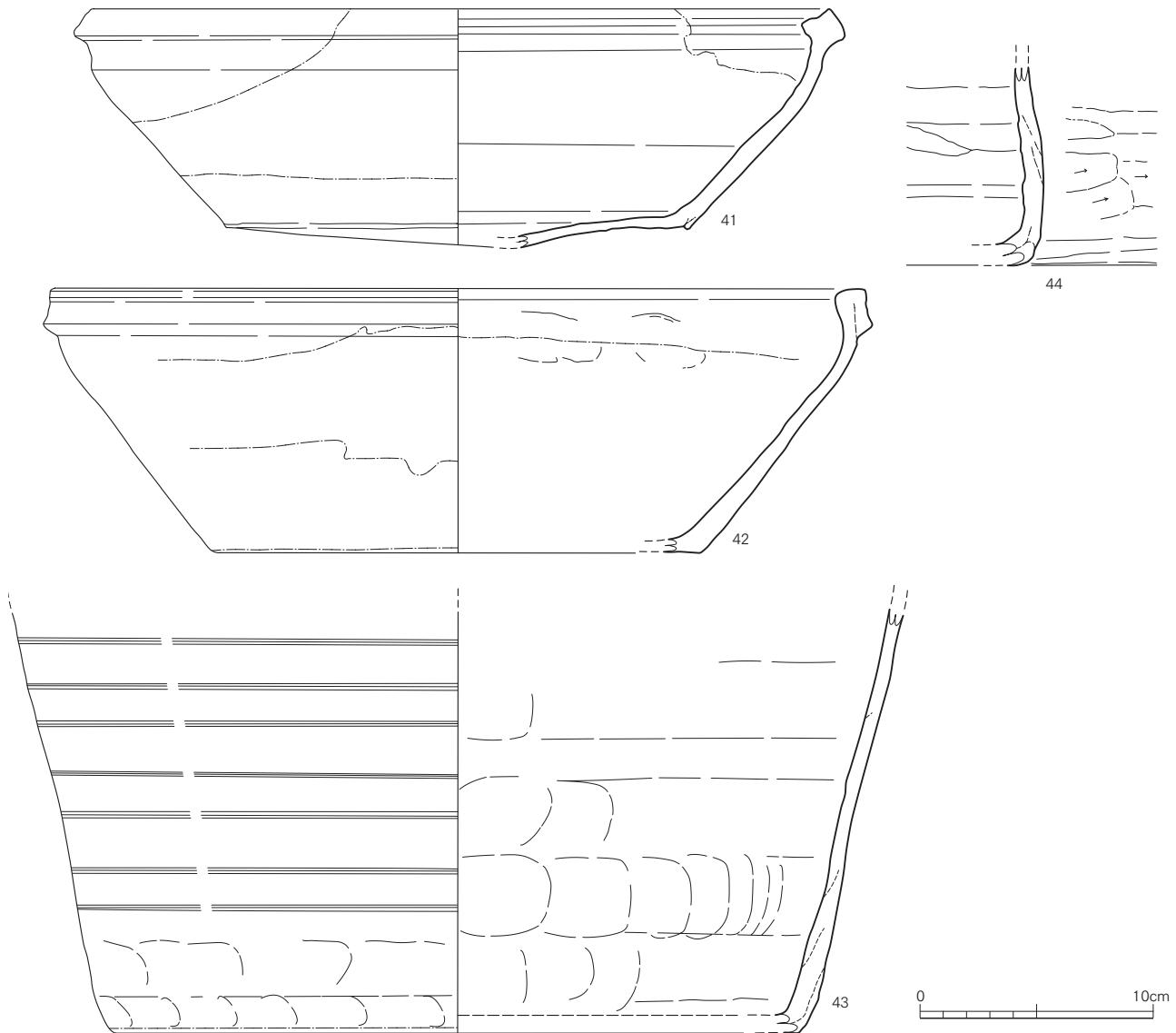
第13図 土坑2出土遺物実測図2(1/3)

このうち34は重ね焼きのため、高台部と内底面で高台底が触れる中央部は露胎である。36は皿の底部であろうか。36の内底面にも重ね焼きの折に高台底が触れる部分の内底面の釉を蛇目状に拭う。37、38の高台は踏ん張るような形状で大形皿などの器種と思われる。高台外面は露胎で、38の中央部内底面は露胎である。

39は陶器燭台、円筒形の柱状脚台の破片で、上下ともに欠損して全体の形状は不明。破片上端は中空ながら外側に開く受け皿状になると思われる。脚台部の器壁は厚く、外面に藁灰釉が掛る。

40は染付碗、復元口径11cm、器高6.9cmの大きさ。やや灰色味のある白色の清涼な胎土で淡灰色の釉が掛る。

41、42は陶器捏鉢。底から体部が直線的に開き、口縁部は外側に折り畳んで肥厚させて端部が内



第14図 土坑2出土遺物実測図3(1/3)

湾する鉢。1は復元口径32.6cm、器高9.5cmの大きさで、口唇端部は摘み出して尖る。底部中央部が歪み1cm程膨れる。白色砂粒を含む灰茶色の胎土で、暗赤褐色に焼成される。42は復元口径36cm、器高11.5cmの大きさ。細砂を含む褐色の胎土で茶褐色に焼成される。内面を中心に黄色味の強い藁灰釉が、外面を中心に茶緑色系の釉が掛る。

43は陶器樽、復元底径30cm、残存器高18.5cmの大きさで底部から直線的に開く器形で外面に竹節のような浅い沈線が2～3cm間隔で巡り底部付近は内外面に指頭の凹凸が残る。白色細砂粒を含む淡明褐色から灰茶色の胎土で良好な焼成。淡い灰黄色の釉と濃いオリーブ色の釉が掛る。44は土師質に近い素焼きの樽状の底部破片で、底径が38cm前後の大きさである。

台付鉢、擂鉢は何れも17世紀初～前半期とみられる。

石器類(第15図1～5、図版40)

1は磨製石斧、表面の風化が進む、蛇紋岩製の磨製石斧基部破片で残存長10.0cm、残存幅5.9cm、厚さ2.5cm、重量210gを測る。研磨仕上げされるが基部側縁部に敲打成形痕が僅かに残る。柄に装着した状態で伐採時に折損したものと推定される。

2～4は砥石、2、3は砂岩製石臼の上臼片を転用した砥石。2は花崗岩質砂岩で中砥だが部分的に肌理の細かな部分もある。上臼縁の上面、側面とも砥面に利用されて側面には沈線風の傷が入り、破片端部面の砥面は肌理が細かめである。上臼下面の砥面では目の痕跡が僅かに残る程度まで使用される。長さ13.6cm、幅6.9cm、厚さ6.0cm、重量699gを測る。3はやや肌理の細かな砂岩製で上臼の上面、下面、側面共に砥面に利用されるが、上臼の軸受け孔、もの配り孔が確認できる。長さ13.0cm、幅9.1cm、厚さ5.3cm、重量884gを測る。



第15図 土坑2出土遺物実測図4(1/3、4のみ1/4)

4は作業台として使用した可能性もある絹雲母片岩の扁平石で、上面の緩やかに膨らむ部分を砥面にしたもの。中砥と仕上げ砥の中間ぐらいで、10～15cm程の直線状の傷が10条ほど交叉する。長さ47.8cm、幅24.5cm、厚さ11.5cm、重量17.45kgを測り、砥面に利用された範囲は25×10cm程の広さである。

5は不明石製品、用途は不明ながら、円柱状の一部とみられる砂岩片で、弧を描く側面は磨耗する。推定直径24.0cm、残存長10.6cm、重量1784gを測る。

土坑3(第4図)

南側調査区の北東隅にある。主軸方位はN-31°-W、長軸1.37m、短軸1.12m、深さ0.36mを測る。
出土遺物(第25図45～48、図版39)

45、46は陶器小壺で45の口縁部の形態から見て短頸壺の類であろう。47は口縁端部で内側に折り畳むように肥厚する陶器擂鉢片で口径20cm前後の大ささだろう。48は陶器鉢の底部であろうか、外面に淡い黄色の釉が垂れる。

土坑4(第4図)

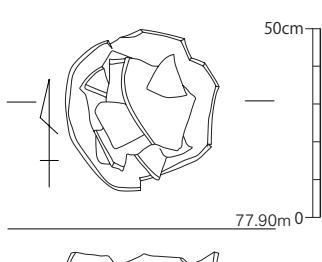
南側調査区の北東隅にある。長方形の土坑、田の造成時に東側を一部切られる。
出土遺物(第25図49～51、図版39、40)

49～51は陶器、49は陶器の小壺かと思われる胴部片である。精良な黄褐色の胎土で、内外面共にヨコナデ調整されて上半部に淡い黒褐色の釉が掛る。50、51は陶器擂鉢片で、51の破片は土坑2出土破片と接合する。50の口縁部片は暗灰茶褐色の胎土で須恵質に近く、外面に折り畳むように肥厚し、注ぎ口部では口縁端部が外反する。51は黄褐色の胎土で灰白色ないし淡灰褐色の釉が掛る。目は50に比して細く9本の目は詰まる

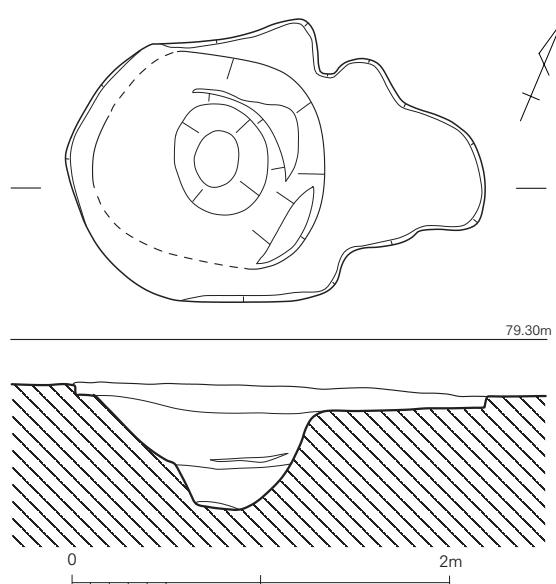
土坑5(第4図)

南側調査区の南端にある。不整形な土坑。近世の陶器が出土する。
出土遺物(第25図52～54、図版40)

52、53は陶器湯呑みの直に立ち上がる口縁部破片である。54は黄茶褐色の胎土で内外面共に暗茶



第16図 土坑7実測図(1/20)



第17図 土坑8実測図(1/40)

褐色の釉が掛る陶器擂鉢片で、口縁部はやや肥厚し端部で内面側に摘み出すように屈曲する。目は7本単位で、ほぼ隙間なく刻まれる。

土坑 7(第 16 図、図版 6)

類例より、トイレ遺構の可能性がある、ほとんど掘方のない近世の埋甕。瓦質の甕が据えられた状態で出土している。

出土遺物(第 43 図 124、図版 43)

器高 48cm、口径 54.5cm、底径 15.0cm を測る瓦質甕で、平底の底部から緩やかに内湾気味に開きながら口縁部まで立ち上がり、口縁部は外側に折り畳んで肥厚する。器壁の厚みは概ね 0.5 ~ 1.0cm で籠状の口縁部では 2cm 厚さで 4.5cm の幅を測る。胴部内外面共にハケ目があとにナデで調整されるが部分的に指頭圧痕が残る。砂礫を若干含むが比較的精良な胎土で灰白色に焼成される。

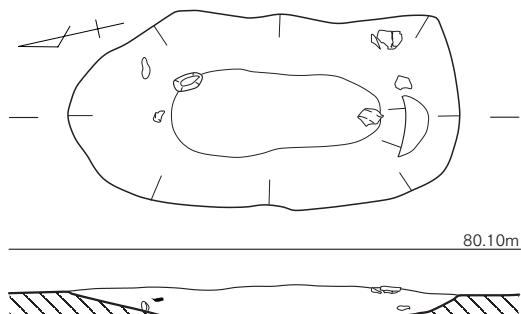
土坑 8(第 17 図、図版 6、7)

主軸方位は N-67°-E、長軸 2.16 m、短軸 1.39 m、深さ 0.66 m を測る。2段に掘り込まれる。出土遺物はない。

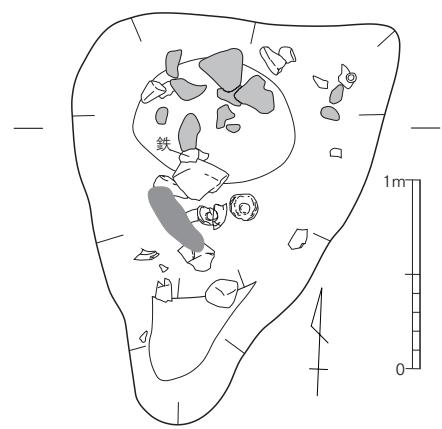
土坑 10(図版 7)

出土遺物(第 25 図 55、図版 40)

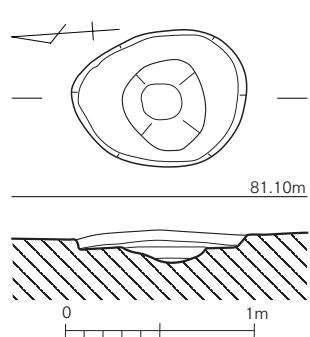
注口部と吊り手の片方を失うが、復元口径 8.2cm、胴最大径 15.0cm、残存高 11.0cm の大きさ、球形の体部で短く直立する口縁部をもつ陶器土瓶である。精良な胎土で外面底部や口縁端部の露胎部分などでは明褐色に焼成される。内面に黒褐色、外面に白色の釉が掛り、外面肩部に釉垂れがみられる。



第 18 図 土坑 11 実測図 (1/40)



第 20 図 土坑 13 実測図 (1/40)



第 19 図 土坑 12 実測図 (1/40)

鉄滓(第31図1、図版43)

長さ9.1cm、幅7.0cm、厚さ3.7cm、重量274gを測る小振りの椀形滓である。

土坑11(第18図、図版7)

主軸方位N-12°-E、南北2.06m、東西0.97m、深さ24cmを測る。須恵器片、土師質土器片が出土する。

出土遺物(第25図56、57、図版40)

56は口径12.5cm、器高3.8cm、底径7.0cmの大須恵器杯、ヘラ切りの外底面に板目圧痕が残る。57は復元口径14.5cm、器高5.6cm、高台外径7.3cmの土師質杯である。

土坑12(第19図、図版8)

主軸方位N-14°-W、南北0.93m、東西0.72m、深さ16cmを測る。

出土遺物(第25図58、図版40)

口径11.2cm、器高1.8cmで底面が膨らむ土師質皿で、器面の風化磨耗が進み、器面調整痕は不明。

土坑13(第20図、図版8、9)

主軸方位N-3°-E、南北2.15m、東西1.63m、深さ25cm測り、鉄滓が出土する。焼土、炭、鉄滓が出土し、当初鍛冶炉の可能性も考えたが、大量の鉄滓等が出土する状況から周辺の炉に付随する廃棄土坑と考えられる。

調査時近接する遺構と混同して遺物の取り上げを行ってしまう初步的なミスを犯してしまった。検証の結果、調査時に土坑14とした遺物の大半は土坑13出土であることが確認できたため土坑13出土として取り扱う。

出土遺物(第25図59～62、64～68、第26図69～73、図版40、41)

陶器台付皿(59～62) 59は太めの高台から直線的ながらもやや内湾気味に口縁部が開く台付皿で口径15.0cm、器高4.5cmの大きさ。淡灰色の胎土で灰オリーブからオリーブ黄色の釉が掛るが、内底面と外底部は露胎。破損後の破片に鉄滓が付着する。60～62は台付縁反皿で、62は口縁端部3か所を内側に凹ませて立ち上がる花縁になる。60は口径13.0cm、器高3.6cmの大きさで内底面に貝殻の目痕がみられる。62は薄く高めの高台が付き、内底面に貝殻の目痕がみられる。口径15.0cm、器高5.4cmの大きさで、淡灰色の胎土でオリーブ色系の釉が掛る。この皿の外面にもガラス質に溶けた融着物がみられる。

陶器小鉢(64) 復元口径12.1cm、残存器高6.1cmの大きさで、外径7.8cmから口縁部が直線的に立ち上がる器形である。灰色の胎土で黄褐色ないし暗褐色の釉が掛る。

陶器捏鉢(66) 口径33cmほどの大きさと思われる口縁端部が内面側に肥厚する鉢で灰色の胎土で研磨に近い丁寧なナデ調整痕がみられる。

陶器小甕(67) 復元口縁外径16.5cmの大きさで僅かに膨らみながらも直立気味に立ち上がる体部から外反する口縁部が丸く肥厚する器形で、体部内外面に僅かな指頭の凹凸が残る。紫灰色の胎土で暗めのオリーブ色の釉が掛る。

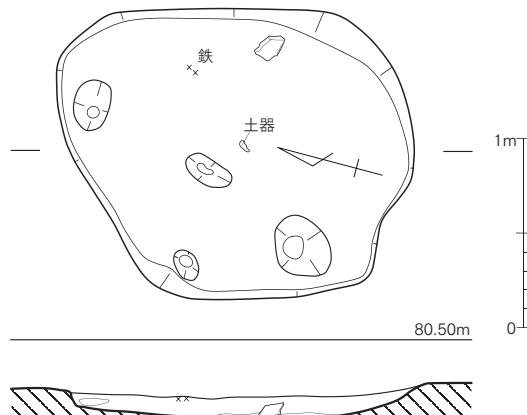
陶器甕(68) 脇最大径が31cmほどの大きさになる下膨れ筒状の脇部破片で、最大径の位置に2条の沈線が巡る。内面に指頭圧痕の凹凸が目立つ。

陶器鉢(71) 内面に目はみられないが擂鉢に似た器形の口縁部破片で、口縁端部は外面に折り返すように肥厚して2条の沈線が巡る。土坑16出土土器片と接合する。

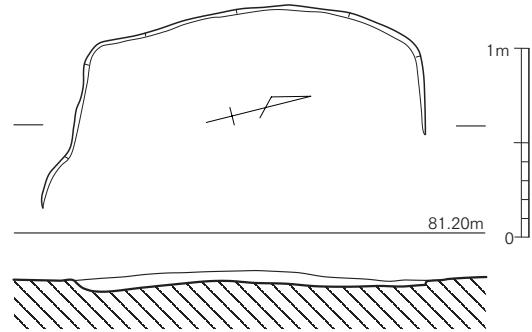
陶器擂鉢(72、73) 共に素焼きのままで釉薬はみられない。72は底径10.8cmの低い高台から体部が直線的に開く器形で外底面に縄目压痕が、内底面に開いた巴状と圈線を6本単位の目で刻み、体部も同じ原体で放射状に目を刻む。73は体部の器壁が薄く指頭によるナデの凹みが目立つ。口縁部は大きく外反するが内面側に折り畳むように肥厚する端部を持つ。目は細い8本単位で隙間を少なく刻んでいる。

陶器底部(63、65、69、70)、63のみ土坑14出土。65は磁器染付湯呑みであろう。69は陶器の脚付き皿と思われる底部破片で、脚は3、4本の可能性がある。灰黄色の胎土でオリーブ色系の釉が掛り、直径8cmほどの外底面は露胎。70は底径が18cmほどの大きさの器壁が薄い底部破片。

土坑13出土鉄滓など



第21図 土坑14実測図(1/40)

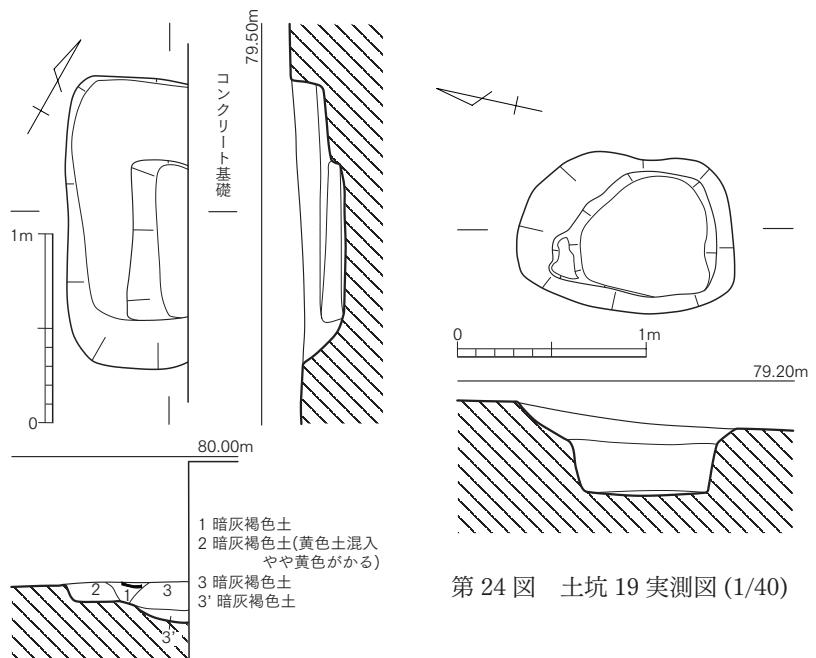


第22図 土坑15実測図(1/40)

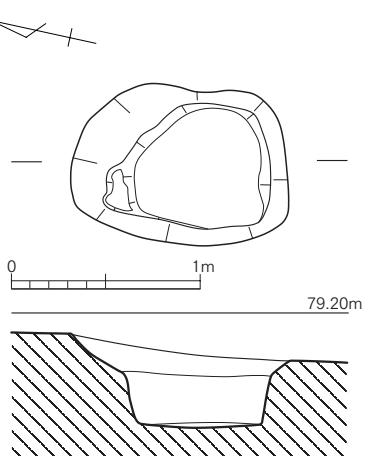
坑内堆積土を詳細に選別した結果655点の鉄滓が検出された。総重量3,719gを測る。その内訳は1cm角から3cm角ほどの大きさの小振りで重量50g以下の鉄滓が641点、4~5cm角ほどで100g以下のものが13点、100gを越すものが1点であった。木炭片もかなり含まれていた。また、磁石に付着する鉄細粒が38,040g含まれていた。

鉄滓(第27図1~4、図版43)

1~4は鉄滓、何れも椀形滓で、1~4の重量はそれぞれ874



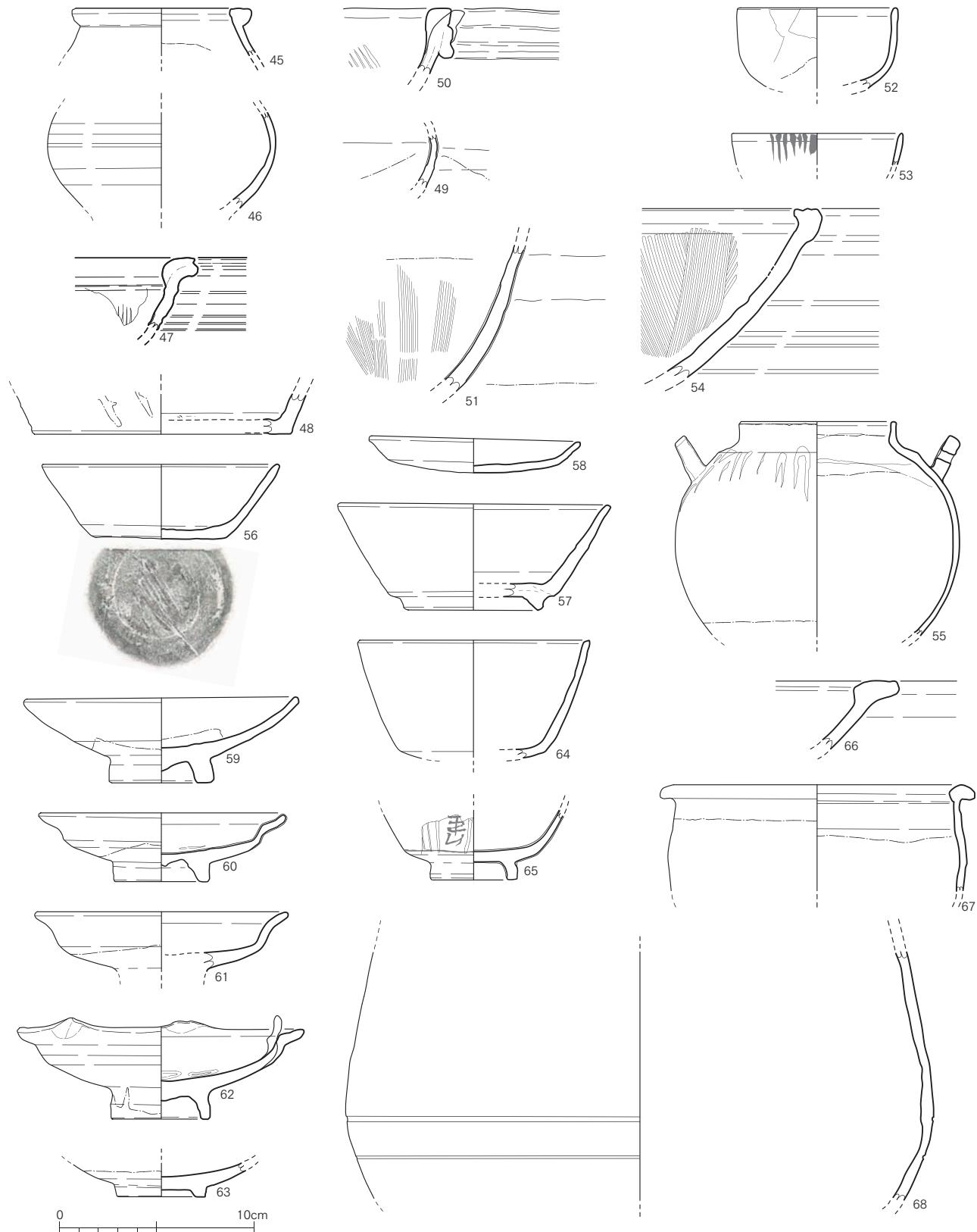
第23図 土坑16実測図(1/40)



第24図 土坑19実測図(1/40)

g、405 g、278 g、228 g である。1 は最も大振りで長さ 12.5cm、幅 11.0cm、厚さ 7cm 前後の大きさ。凹面に纖維のよう見える痕跡があり、凸面に木炭が銹着する。2 は長さ 12.7cm、幅 10.3cm、厚さ 5.0cm の大きさ。3 は長さ 10.0cm、幅 8.5cm、厚さ 4.0cm ほどの大きさ、4 は長さ 8.5cm、幅 7.0cm、厚さ 3.0cm 程の大きさで、4 の凹面は全体に滑らかである。

軽石製品 (第 27 図 5、図版 43)



第 25 図 土坑 3 ~ 14 出土遺物実測図 (1/3)

淡黄褐色を呈する比較的目詰まる軽石の塊で、6cm四方、厚さ2.5cmほどの大きさ。膨らむ面には一部削り整形のような痕跡があり、裏面や側面に一部細い溝状の凹みをもつ。重量20gを測る。

土坑14として取り上げた堆積土

坑内堆積土を詳細に選別した結果606点の鉄滓が検出され、総重量は5,680gを測る。その内訳は1cm角から3cm角ほどの大きさの小振りで重量が50g以下の鉄滓が588点、4~5cm角ほどで100g以下のものが8点、それ以上が10点であった。100~200gが3点、200~300gが図示した3、4の外に2点あり、大振りな鉄滓は図示した1、2の外に526gの1点がある。

鉄滓以外では、火熱を受けた石塊、粘土塊、木炭も相当量含まれ、磁石に付着する鉄細粒が45,750g含まれていた。

土坑14(第21図、図版10)

主軸方位N-15°-E、南北1.82m、東西1.44m、深さ0.14mを測る。陶器片と鉄滓が出土している。

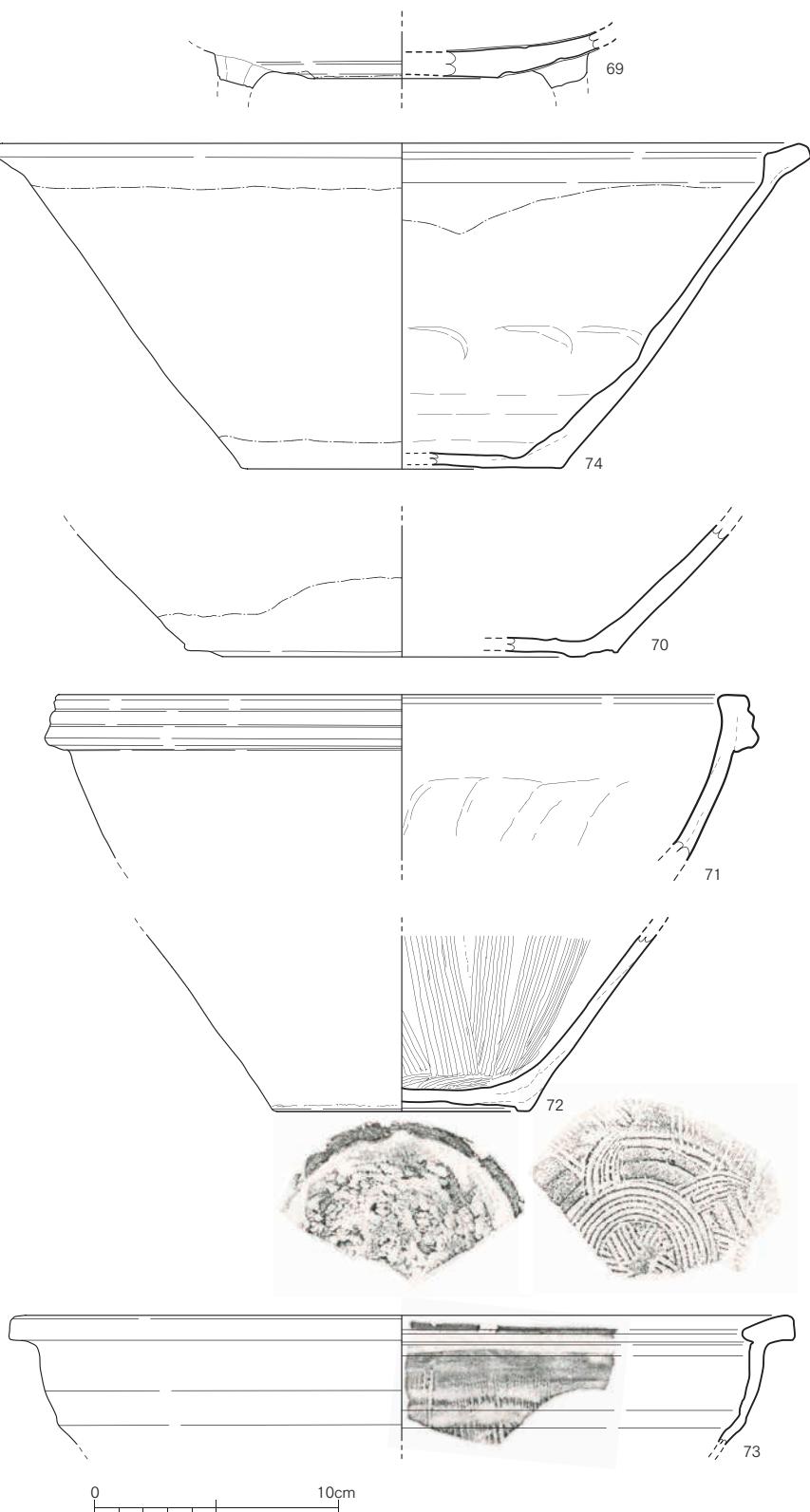
出土遺物(第25図63)

陶器皿の底部で高台は低い。

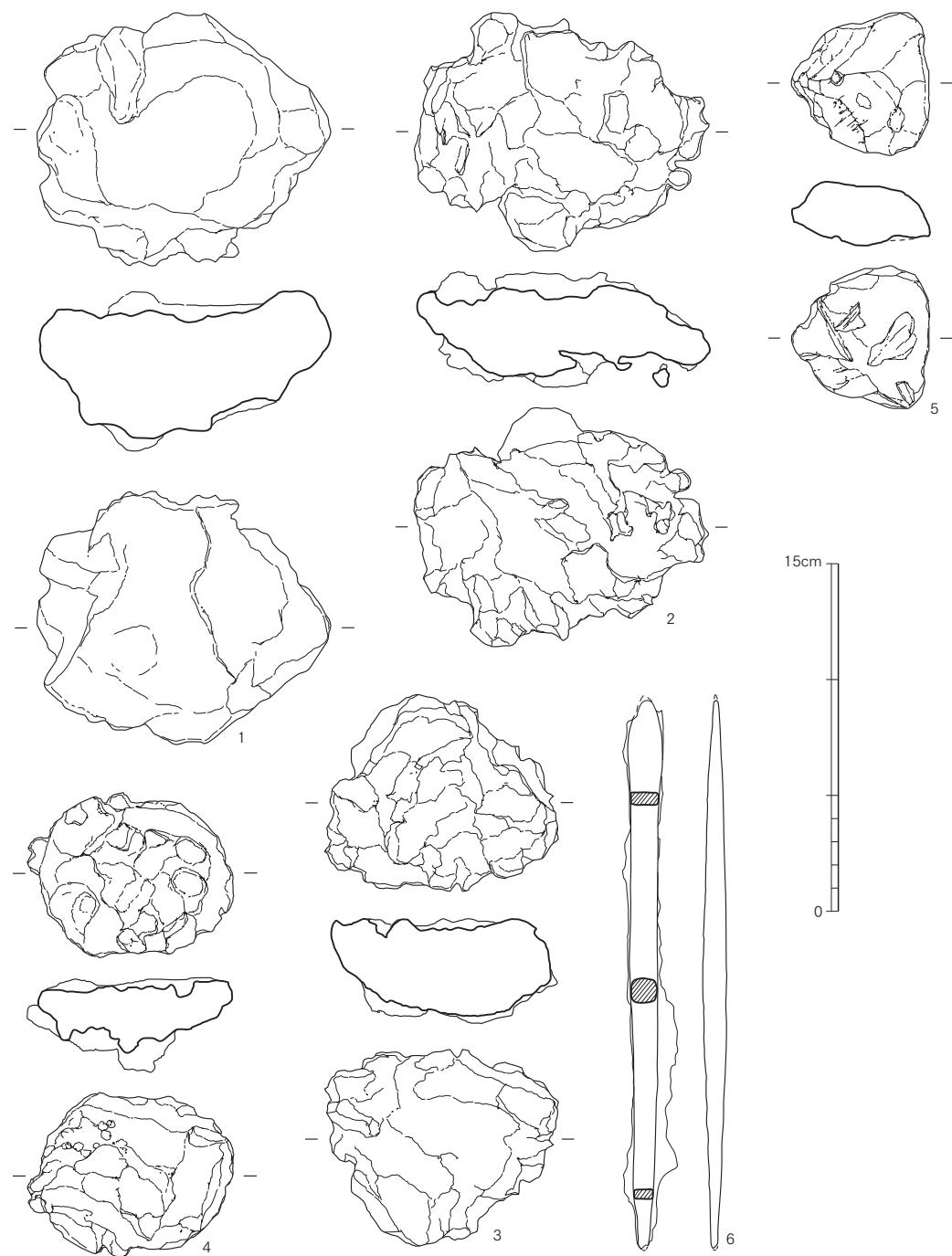
土坑15(第22図、図版11)

主軸方位N-14.5°-E、南北1.85m、残存部で東西1.06m、深さ3~6cmを測る。

土坑16(第23図、図版10)



第26図 土坑14、16出土遺物実測図(1/3)



第 27 図 土坑 13 出土鉄滓、軽石、試掘時出土鉄器実測図 (1/3)

主軸方位 N-30° -W、南北 1.51m、東西 0.64m、深さ 26cm を測る。

出土遺物 (第 26 図 74、図版 40)

復元口径 34.2cm、器高 13.6cm、底径 13.6cm の大きさの陶器鉢で器壁の薄い平底から体部が直線的に開き口縁部は内面側に摘み出すように肥厚する。茶褐色の胎土で体部内外面に暗オリーブ色の釉が掛るが外底面と口縁部内外面は露胎。

土坑 19(第 24 図)

主軸方位 N-13.5° -W、長軸 1.16 m、短軸 0.83 m を測る。

出土遺物 (第 31 図 2、図版 43)

長さ 6.3cm、幅 5.4cm、厚さ 2.0cm、重量 61 g を測る小さな椀形滓である。

(3) 溝

溝 1、2(第 4・28 図)

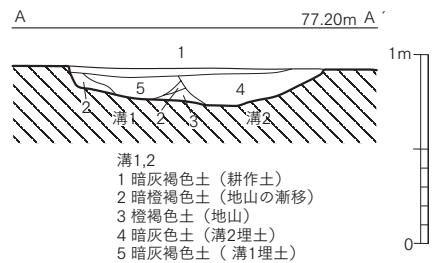
溝 1 が先行し、あとで掘削される溝 2 が溝 1 を切る状況が土層より観察できる。南側調査区の北より中央を南北に走る。

溝 1 では土師質の鉢、須恵器片、溝 2 では同様に土師器片が出土し付近に古代の遺構が存在する可能性がある。

出土遺物 (第 30 図 75 ~ 79、図版 40、41)

75 は須恵器甕の胴部破片で外面に格子目叩き痕、内面に同心円あて具痕がみられる。76 は土師質素焼きの直径 25 ~ 26cm ほどの大きさになる鉢口縁部片、77 は直径 10cm ほどの大きさの陶器鉢口縁部破片で端部は内側に曲げられる。

78 は口径 30cm ほどの大きさとみられる陶器甕の口縁部破片で外反する口縁端部は内外面共に折り返すように肥厚する。79 は陶器皿の体部破片でオリーブ色の釉が掛るが高台側は露胎である。



溝 3(第 4 図)

第 28 図 溝 1、2 土層実測図 (1/40)

C の調査区北側を東から中央付近へ走る。

出土遺物 (第 30 図 80 ~ 84、図版 41)

80 は土師質素焼きの口縁部破片で端部は内面側に折り返して肥厚する。81 は陶器擂鉢の口縁部破片で口縁端部は内面を摘み出して肥厚させるが片口部分はこれを押えて注ぎ口にする。82 は口径 20cm ほどの大きさとみられる陶器甕の口縁部破片。83、84 は陶器碗の底部破片で何れも高台底面を拭い取る。

鉄滓 (第 31 図 3 ~ 5、図版 43)

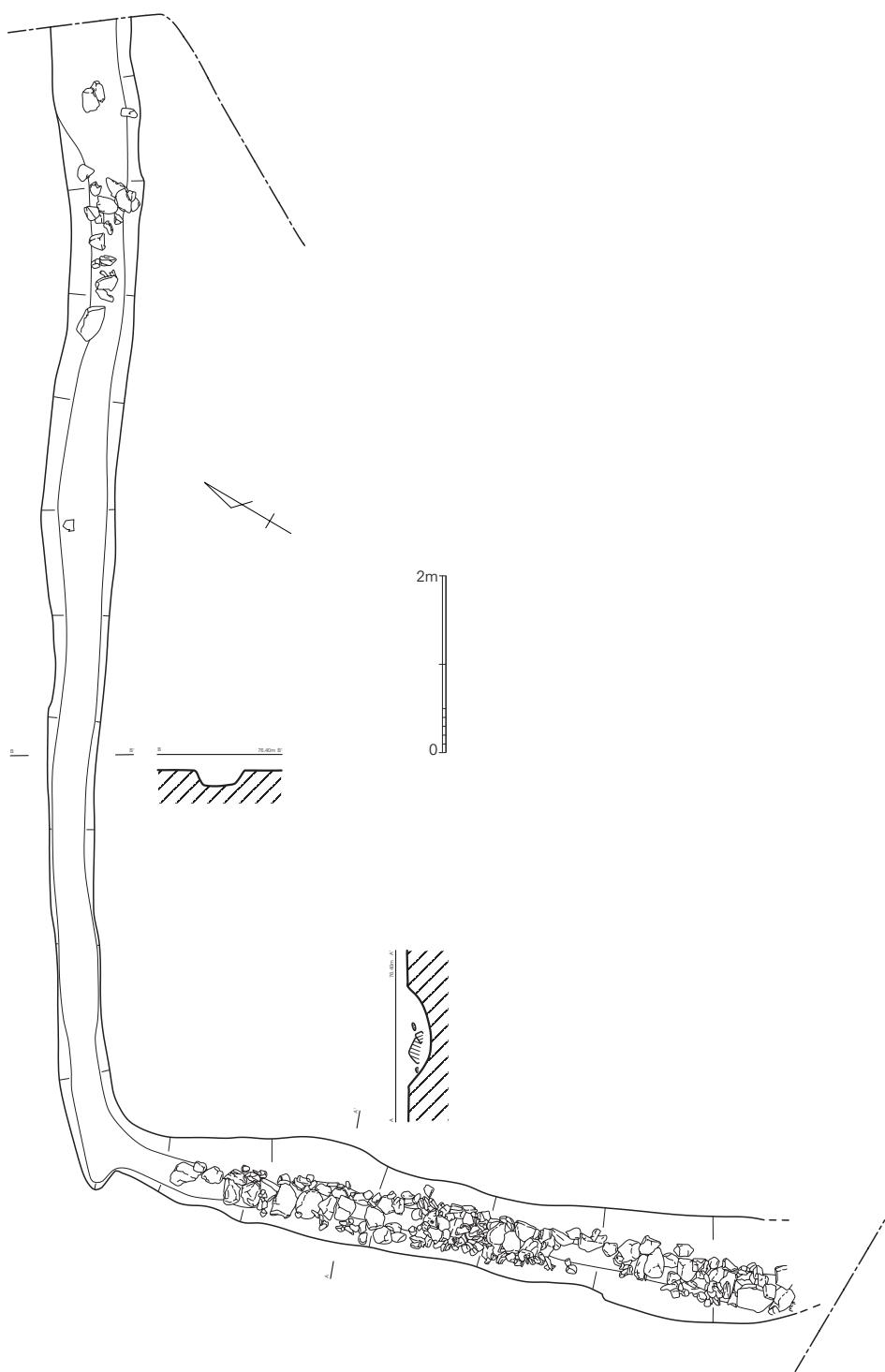
3 は長さ 6.7cm、幅 5.5cm、厚さ 3.4cm、重量 145 g を測る小さな椀形滓、4 は長さ 8.2cm、幅 7.9cm、厚さ 3.8cm、重量 241 g を測る小振りの椀形滓で、5 のやや小振りで 210 g を測る椀形滓の 3 点を図示したが、図示しない資料で 10、17、30、69 g を測る小塊がある。

溝 4(第 4 図)

溝 3 のすぐ北、C の調査区の東端付近を走る短い溝。

出土遺物 (第 31 図 6 ~ 9、図版 43)

6 点の鉄滓が出土し、これらは重量 38 g を測る小塊 1 点の他は 93 ~ 188 g を測る小振りの椀形滓であり、100 g を越す 4 点を図示した。長さ 7.8cm、幅 4.6cm、厚さ 3.4cm、重量 113 g を測るものから長さ 8.3cm、幅 7.0cm、厚さ 3.4cm、重量 188 g の大きさである。



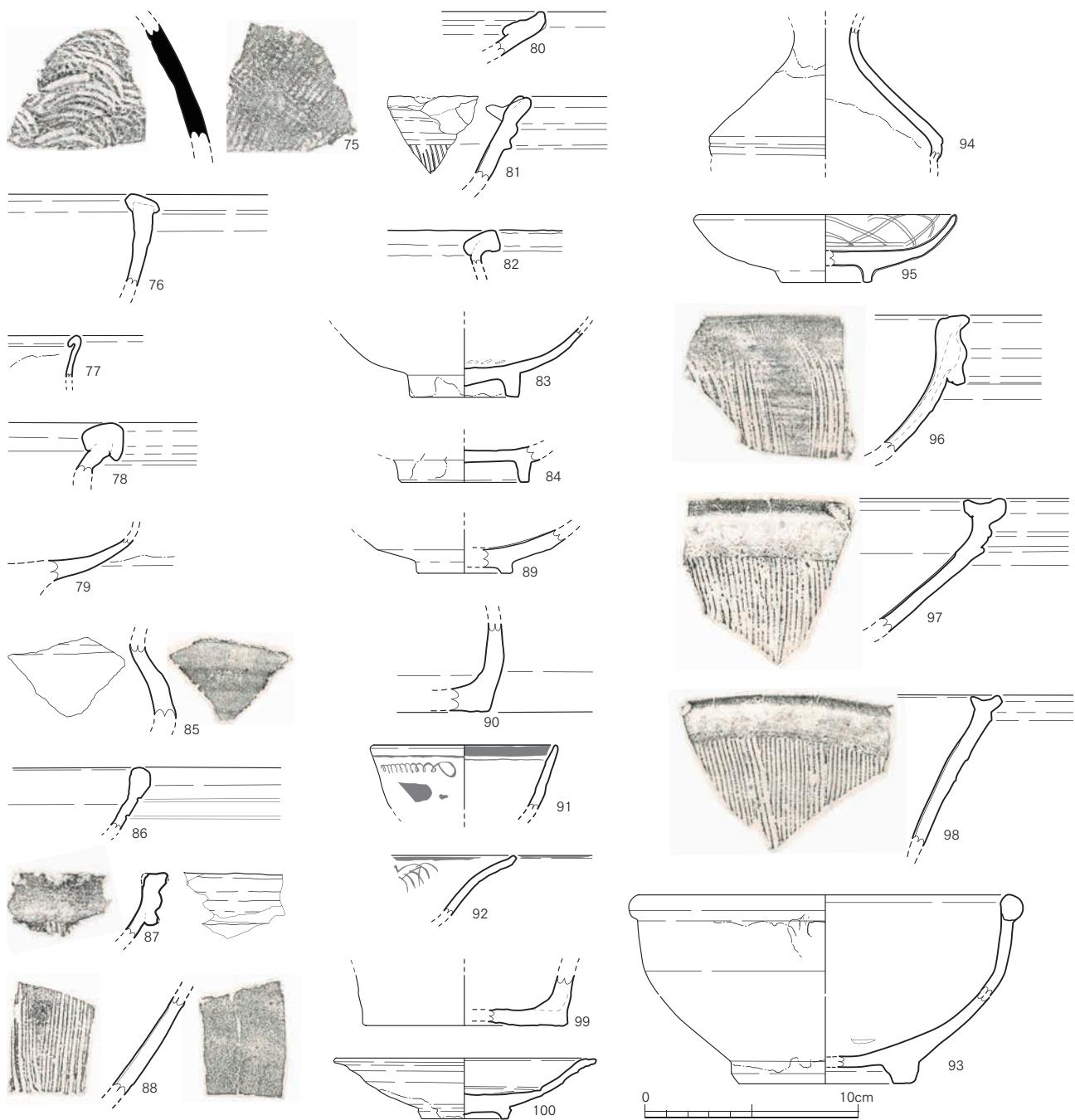
第29図 溝9実測図(1/80)

溝5(第4図)

南側調査区の中央付近を東西に走る、溝1、2と直行し近世の他の所作による溝と考えられる。近世の陶磁器を主に出土するものの、須恵質の鉢片も出土し付近に古代の遺構が存在する可能性もある。

出土遺物(第30図85~93、図版41)

85は陶器壺の肩部破片、86は須恵質の直径27cmほどの大きさの鉢口縁部片で端部は内面側に浅

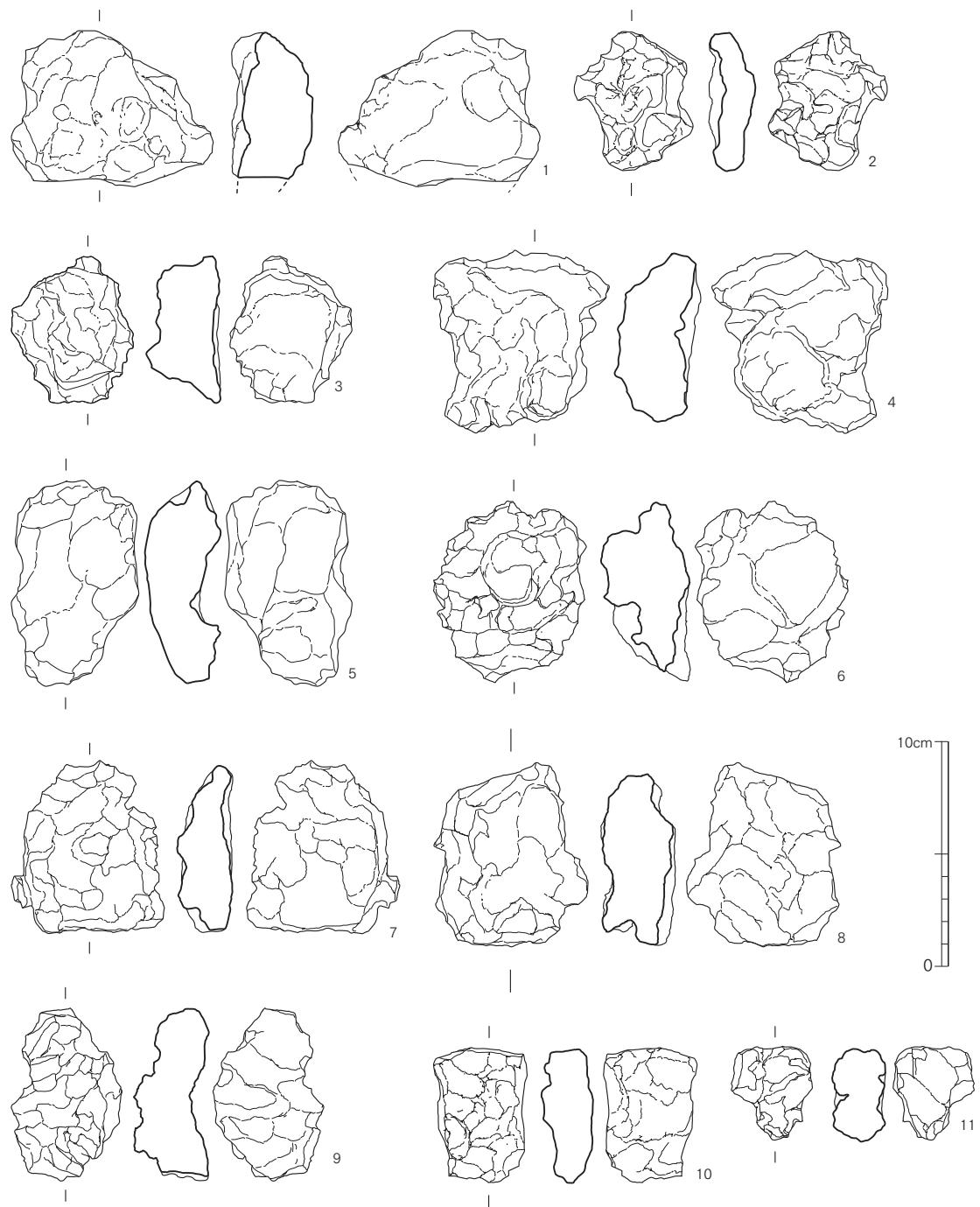


第30図 溝出土遺物実測図1 陶磁器(1/3)

い凹みを設けながら肥厚する。87は直径30cmほどの大きさの陶器擂鉢口縁部破片、88は陶器擂鉢の体部破片で目は5~6本単位である。89は陶器皿の底部破片、90は陶器甕の底部破片、91、92は磁器染付の湯呑みと縁反皿と思われる口縁部破片、93は陶器の片口になる玉縁の鉢である。復元口径19cmの大きさで注ぎ口部分の孔は直径1.5cmほどの大きさだろう。口縁部と底部は接合しないが概ね9cmほどの器高と思われる。高台部分は露胎で、内底部に胎土目痕が4か所ほど付く模様である。

溝9(第4・29図、図版11)

内部で複数のPitは検出しているものの、明確な建物は確認できていない。形状から屋敷地区画の

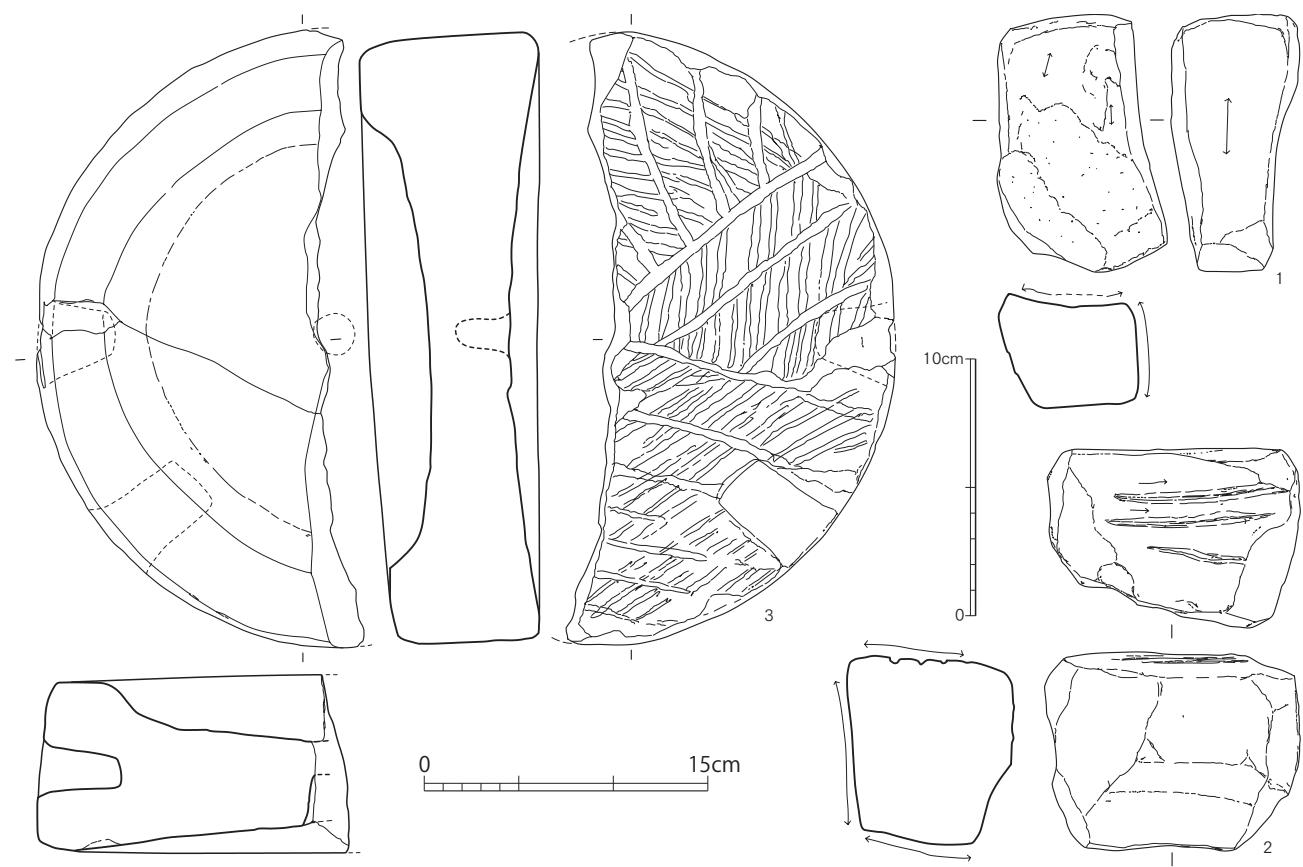


第31図 土坑・溝出土遺物実測図 鉄滓(1/3)

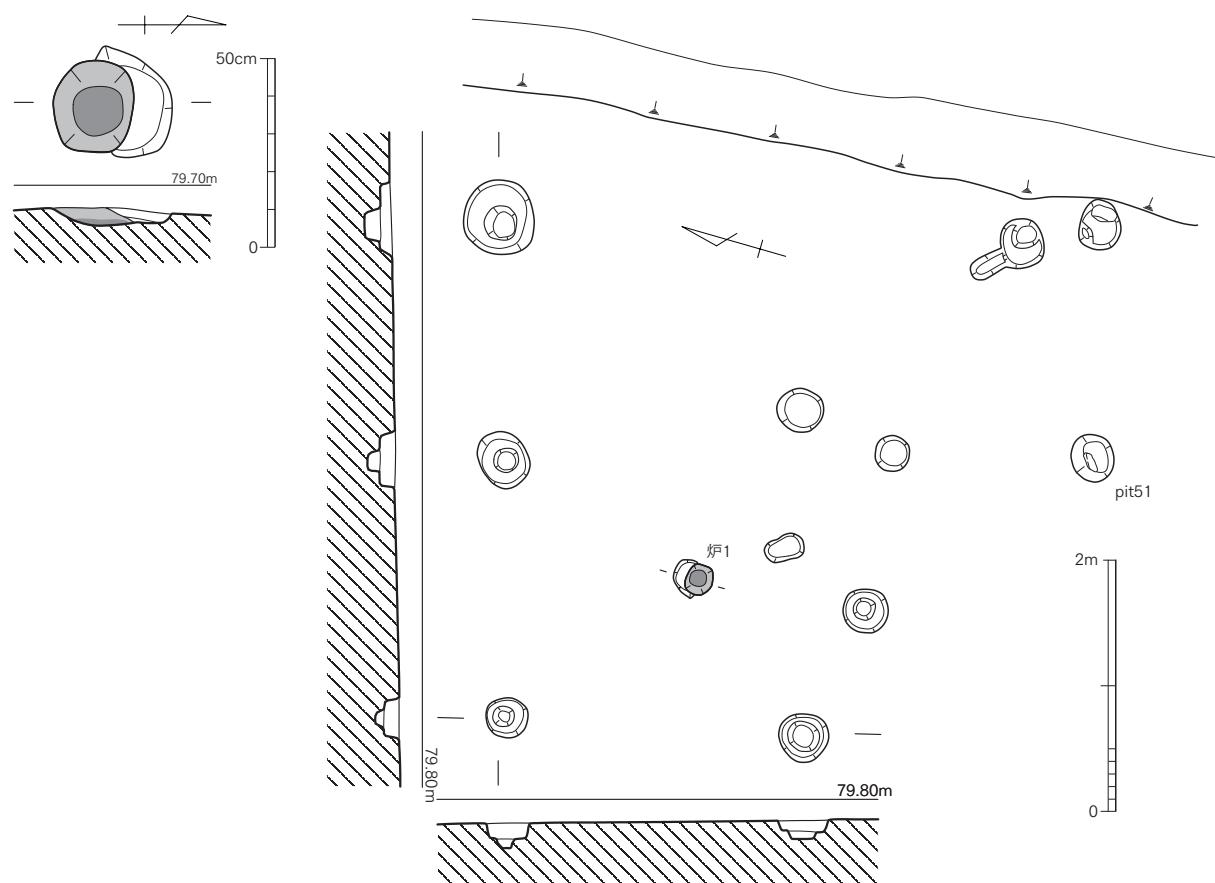
溝と考えられる。南側は調査区外となり、道路により削平されていると考えられる。北西に土坑2(井戸)が存在する。残存部で長さ20.36m、深さ20~22cm。溝9では多量の石材を検出している。主軸方位はやや東偏する。

出土遺物(第30図94~98、図版42)

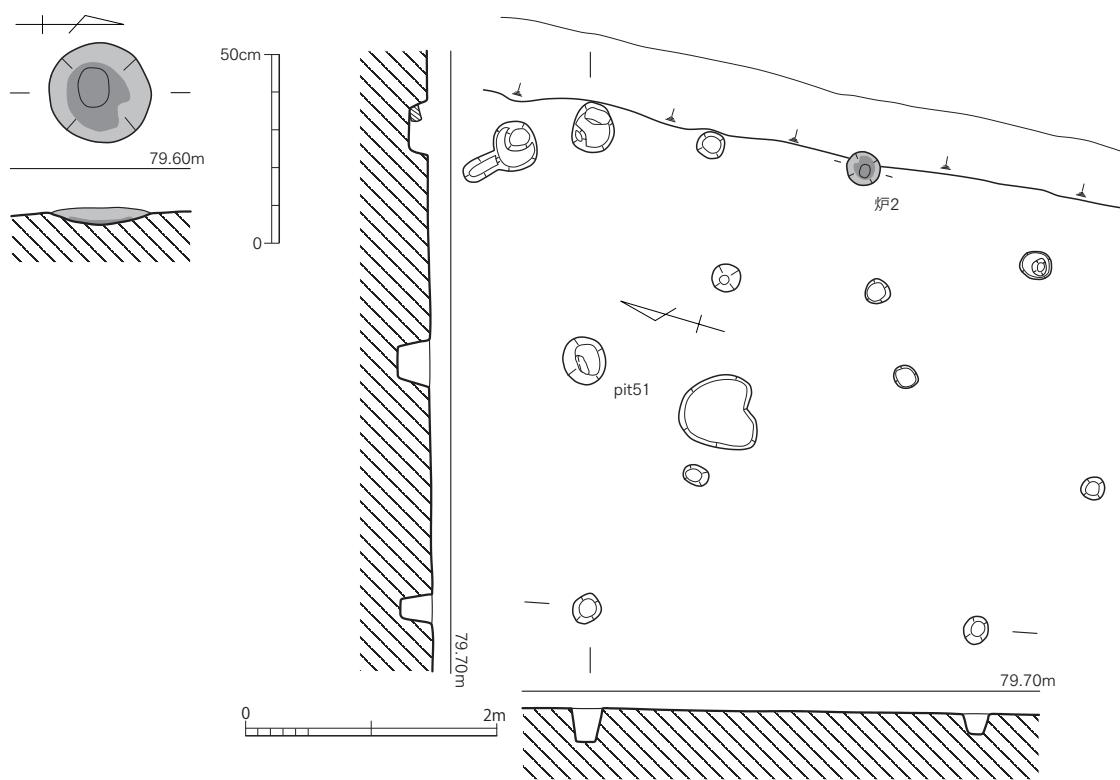
94は陶器の細頸になる瓶の肩部破片である。95は磁器染付皿で復元口径12.6cmの大きさ。高台底面は釉を拭い取り、内底面は蛇の目に釉が搔き取られる。96~98は陶器擂鉢の口縁部破片で96の口縁端部は外面に折り返して肥厚し凹線を2条巡らせるが、97、98は口縁端部を摘み出すように肥厚させるもの。前者は5~6本単位の目を開けて刻むが、後者は目の単位の本数が増え全面



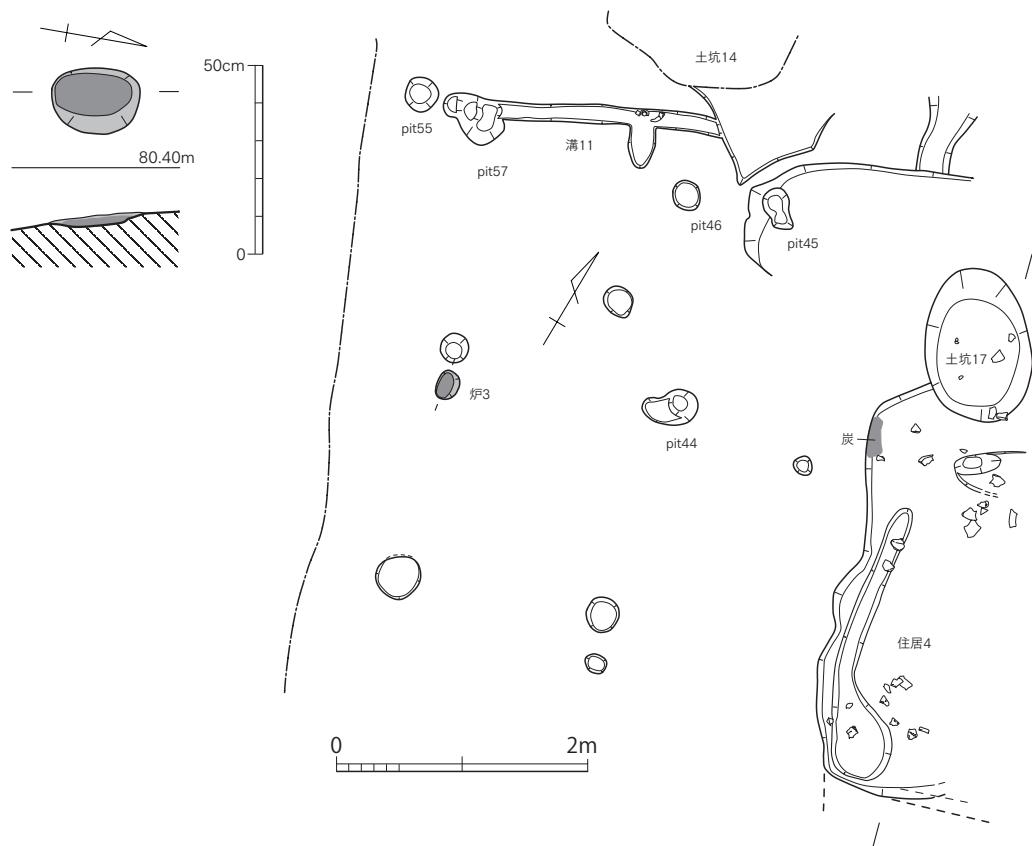
第32図 溝出土遺物実測図2 石器(1/3、3のみ1/4)



第33図 炉1実測図(1/20、1/60) 濃い網掛は炭化物が混じる部分、薄い網掛は焼土(炉壁か?)



第34図 炉2実測図(1/20、1/60)濃い網掛は炭化物が混じる部分、薄い網掛は焼土(炉壁か?)



第35図 炉3実測図(1/20、1/60)濃い網掛は炭化物が混じる部分、薄い網掛は焼土(炉壁か?)

に目を刻むもので、後者は17世紀後半代ごろ、前者はそれを遡るものだろう。

溝 10(第4図)

北側調査区の北端付近、I、Kの境目を東西に走る溝。近世以降の田の所作による溝と考えられる。

出土遺物

陶器(第30図99、図版42)

99は陶器の壺もしくは小甕の底部であろう、内底部には暗褐色の釉が掛る。

石器(第32図、図版43)

砥石(1・2) 1は淡黄褐色の色調をもつ細粒の凝灰質砂岩製砥石。棒状で残存長10.2cm、幅6.7cm、厚さ5cm、重量385gを測る。仕上げ砥石だろう。2は花崗岩質砂岩の石臼上臼片を転用した中砥で、下面と側面、内側破損面を砥面に利用するが側面にはやや深い3条の傷がみられる。長さ10.1cm、幅7.5cm、厚さ6.7cm、重量767gを測る。

石臼(3) 花崗岩質砂岩製の直径33cm、厚さ9.5cmの上臼片で、使用に伴う磨耗で偏減りが生じる。中央部下面に軸受孔、側面に挽手柄穴が2か所確認される。挽き面の目は刻み直しを繰り返した可能性がある。重量5.7kgを測る。

鉄滓(第31図10、11、図版43)

長さ6.1cm、幅4.3cm、厚さ2.3cm、重量91gを測る小振りのもの、長さ4.4cm、幅3.7cm、厚さ2.4cm、重量31gを測る小塊の2点が出土した。

溝 11(第4図)

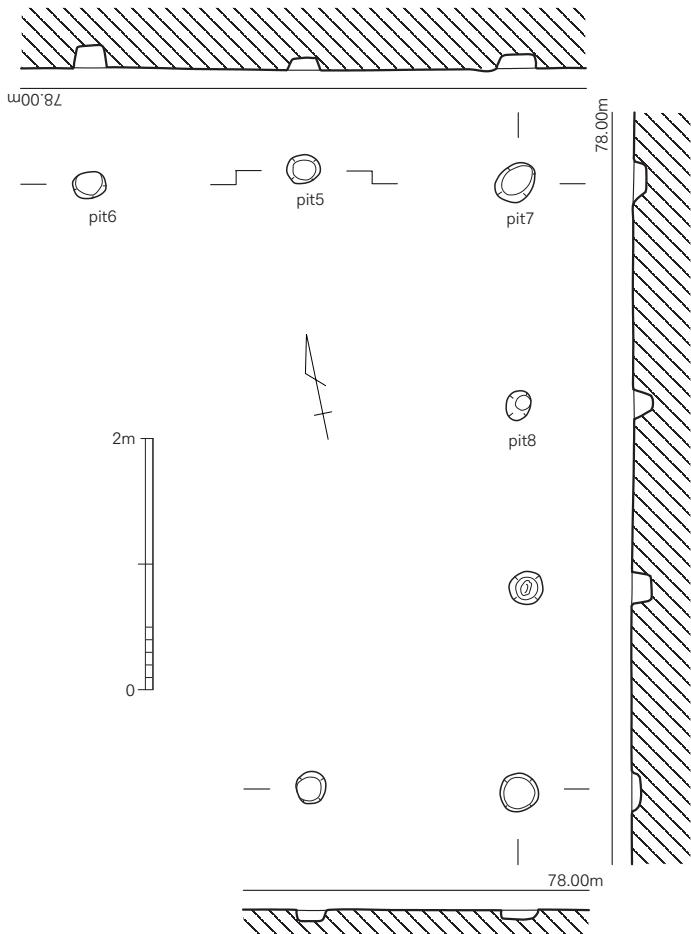
炉3北側を東西に走る。残存長2.18m、幅15.6cm程度。土坑14の南を東西に流れる。明確な役割は不明だが炉3への雨水等の侵入を防ぐための溝等炉に関すると考えられる。近世の陶磁器片が出土している。

出土遺物(第30図100、図版42)

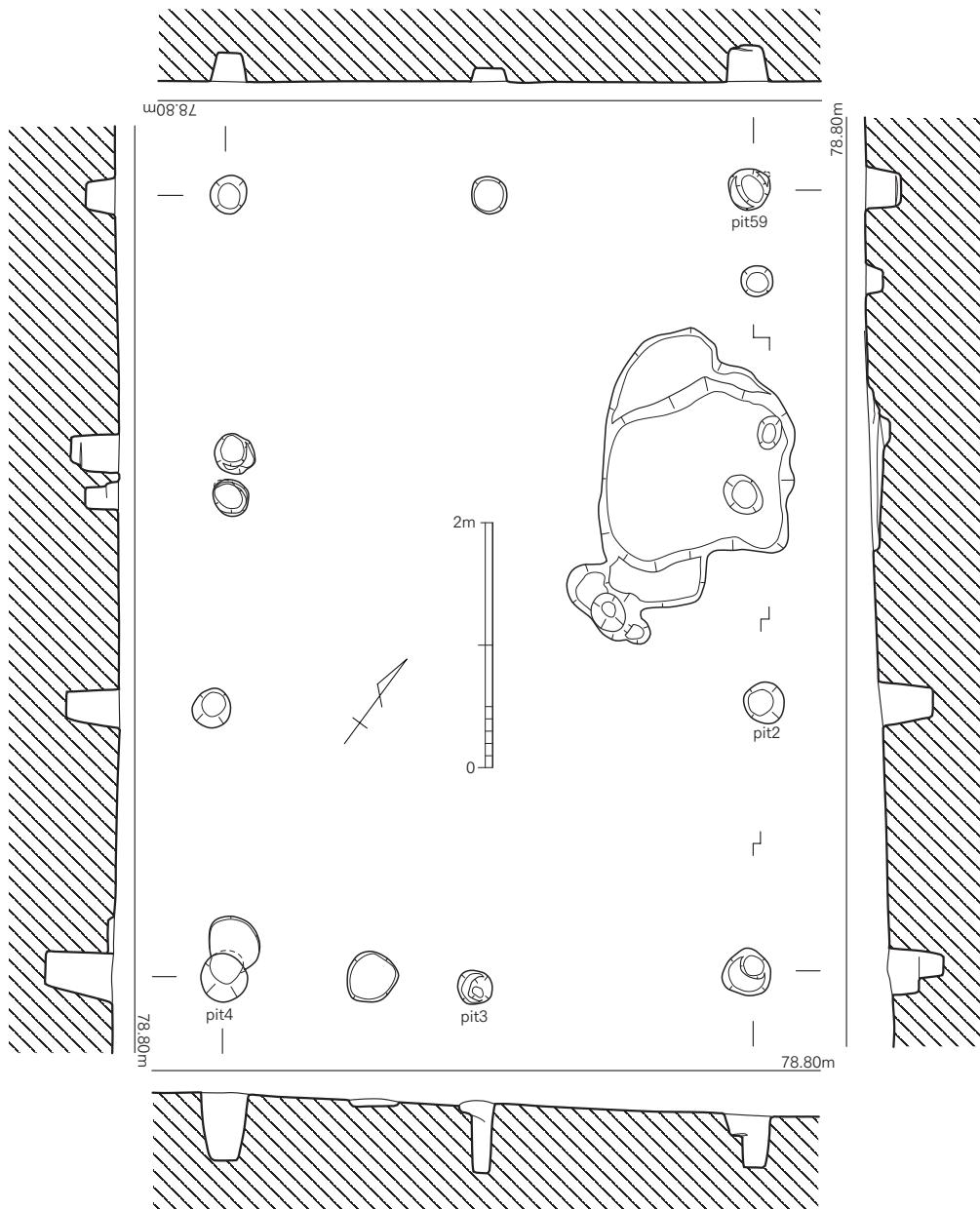
口径12.6cm、器高3.0cmの大きさの陶器縁反皿で、外底部は露胎、内底面に4か所の砂目痕がみられる。

(4) 炉

炉1(第33図、図版12)



第36図 SB1 実測図(1/60)



第37図 SB2 実測図 (1/60)

長軸 24cm、短軸 21cmを測る。囲むように Pit が並ぶ、覆屋的なものか。炉に関しては炉壁の残存部分で計測。形態は浅い皿状。周辺より鉄滓が出土しており、鍛冶炉の可能性がある。

炉 2(第34図、図版12、13)

長軸 19cm、短軸 15cmを測る。囲むように Pit が並ぶ、覆屋的なものか。炉に関しては炉壁の残存部分で計測。形態は浅い皿状。周辺より鉄滓が出土しており、鍛冶炉の可能性がある。

炉 3(第35図、図版13)

長軸 21cm、短軸 11cmを測る。炉に関しては炉壁の残存部分で計測。形態は浅い皿状。囲むように Pit が並ぶ、覆屋的なものか。周辺より鉄滓が出土しており、鍛冶炉の可能性がある。

炉 3付近 Pit 出土遺物(第42図107、図版42)

陶器の行平と思われる注ぎ口をもつ小形甕片で、外反する口縁端部は内面側に折り畳んで肥厚する。淡茶褐色の胎土で黄褐色の釉が掛る。

(5) 掘立柱建物

SB1(第 36 図)

残存する柱穴より 2 間 × 3 間の建物と考えられる。主軸方位は N-11.5° -E、7 つの Pit を確認している。SB1 に所属する Pit5 ～ 8 より須恵器片が出土するため古墳時代～古代の建物と考えられる。

柱穴出土遺物 (第 42 図 101 ～ 103、図版 42)

いずれも須恵器壺もしくは杯の可能性がある小破片で、器面は回転ナデ調整され、101 の外面にはヘラナデと思われる痕跡もある。

SB2(第 37 図、図版 13)

残存する柱穴より 2 間 × 3 間の建物と考えられる。主軸方位は N-37° -W、10 個の Pit を確認している。SB3 の Pit を切る状況を確認している。SB3 に所属する Pit2、3 より須恵器片、土師器片が出土、Pit3、4 では他に近世の陶器片が出土する。

柱穴出土遺物 (第 42 図 104)

須恵器甕の胴部破片で、外面は格子目叩き痕の後に回転ナデ調整が加わり、内面には同心円らしいあて具痕を消すナデ調整が加わる。

SB3(第 38 図、図版 13)

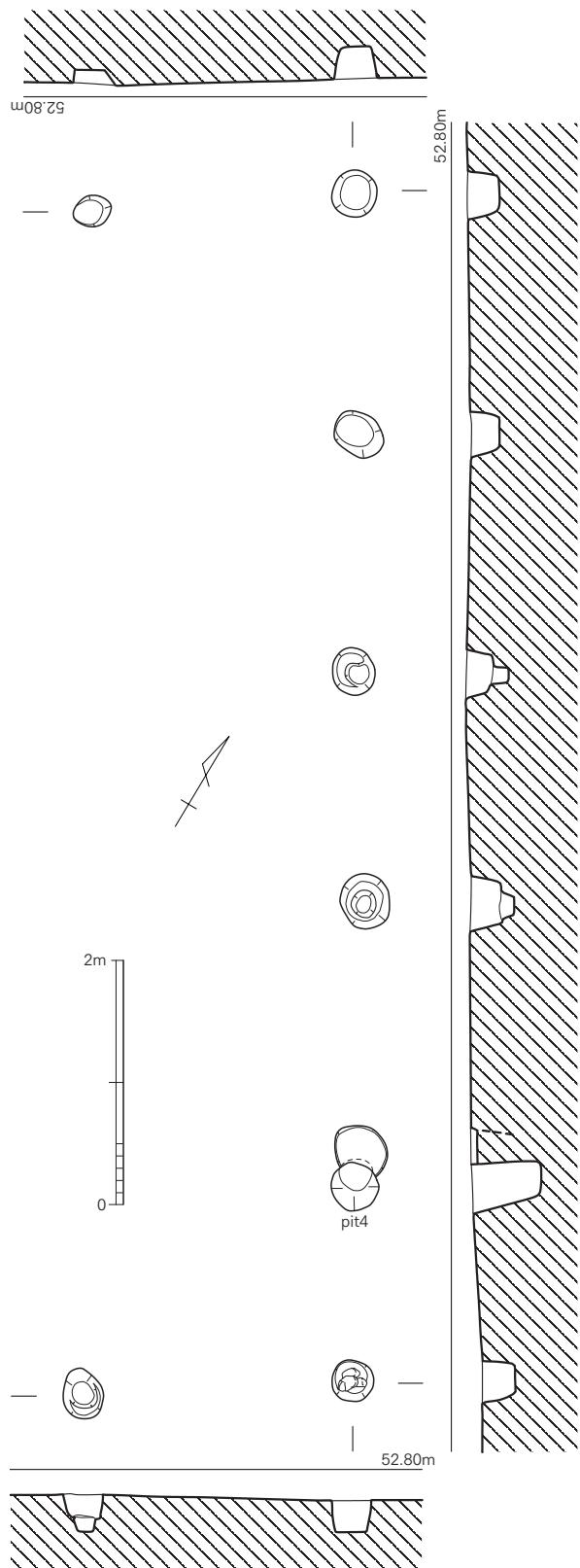
残存する柱穴より 1 間 × 5 間までは確認できる大型の建物。主軸方位は N-30° -W、8 個の Pit を確認している。西半部は調査区外に伸びると考えられ、この部分は現在赤坂神社の参道としてコンクリート舗装により整備されている。

SB4(第 39 図)

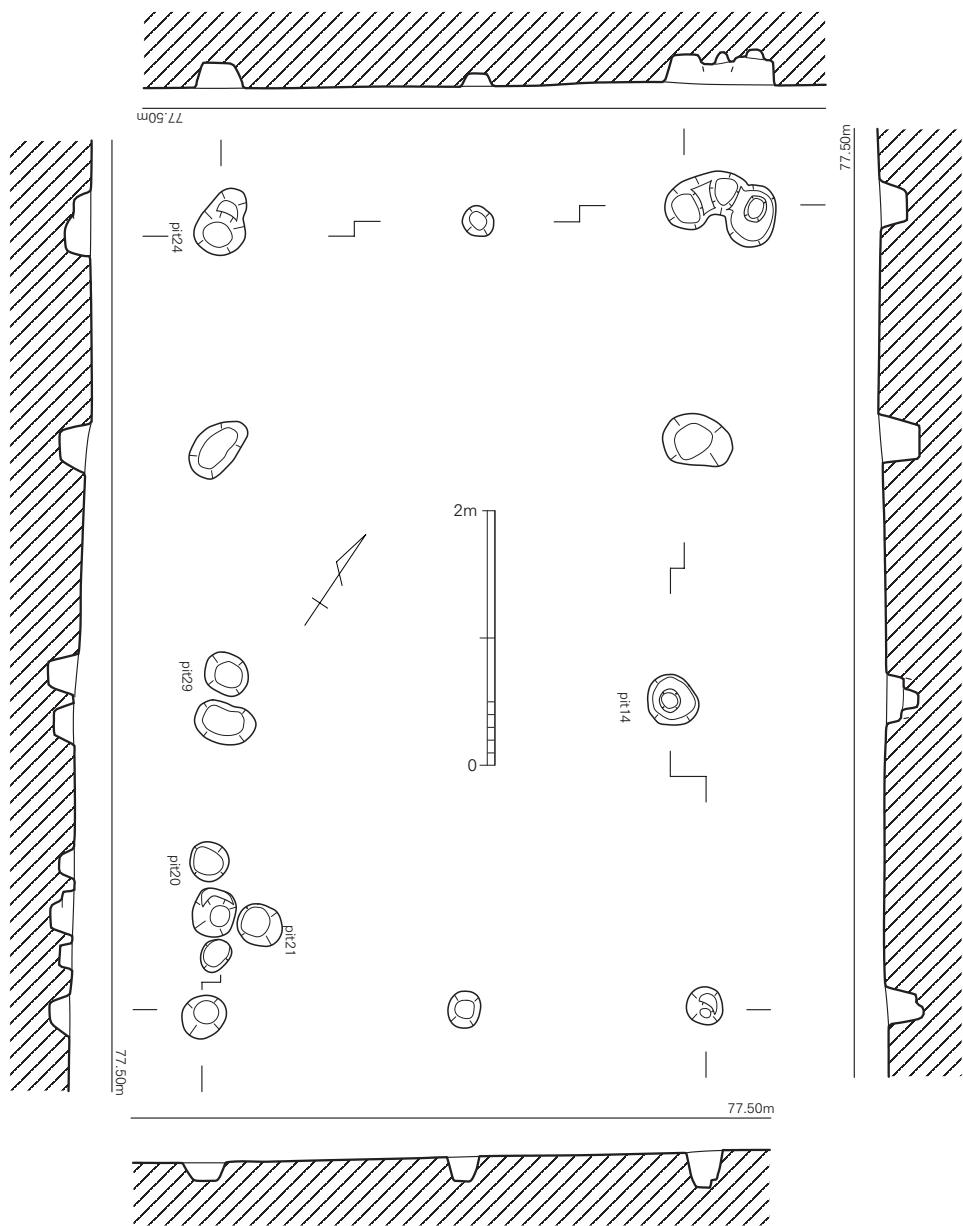
残存する柱穴より 2 間 × 3 間の建物と考えられる。主軸方位は N-35° -W、10 個の Pit を確認している。

柱穴出土遺物 (第 42 図 122、123、図版 43)

122、123 は磁器 共に磁器染付の高台をもつ小鉢で、123 は口径 8.2cm、器高 4.3cm の大きさ、明



第 38 図 SB3 実測図 (1/60)



第39図 SB4 実測図 (1/60)

るいオリーブ色の釉が掛り、内底面に2か所の目痕がみられる。

SB5(第40図)

残存する柱穴より2間×4間の建物と考えられる。主軸方位はN-31°-W、12個のPitを確認している。

柱穴出土遺物(第42図113、図版42)

口径13.8cmの大きさの陶器皿口縁部破片である。

SB6(第41図)

残存する柱穴より2間×2間の建物と考えられる。主軸方位はN-37.5°-W、6個のPitを確認している。SB4～6は建て替えを含む一連の建物か。南東に土坑2(井戸)が存在している。

柱穴出土遺物 (第42図106、図版42)

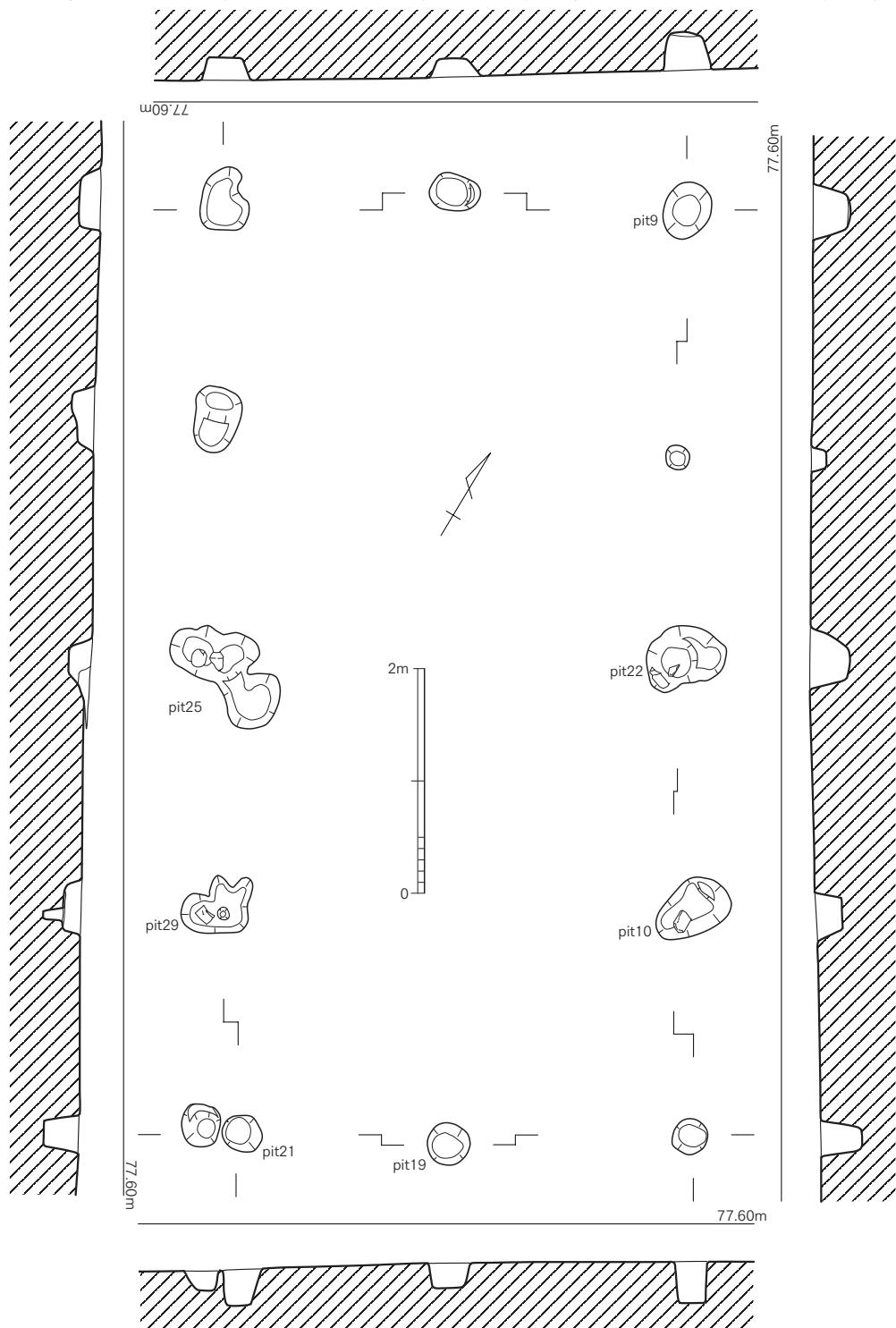
須恵器甕胴部片の周辺を打ち欠き調整した土製円板である。外面に格子目叩き痕、内面に同心円あて具痕がみられる。

(6) その他の出土遺物

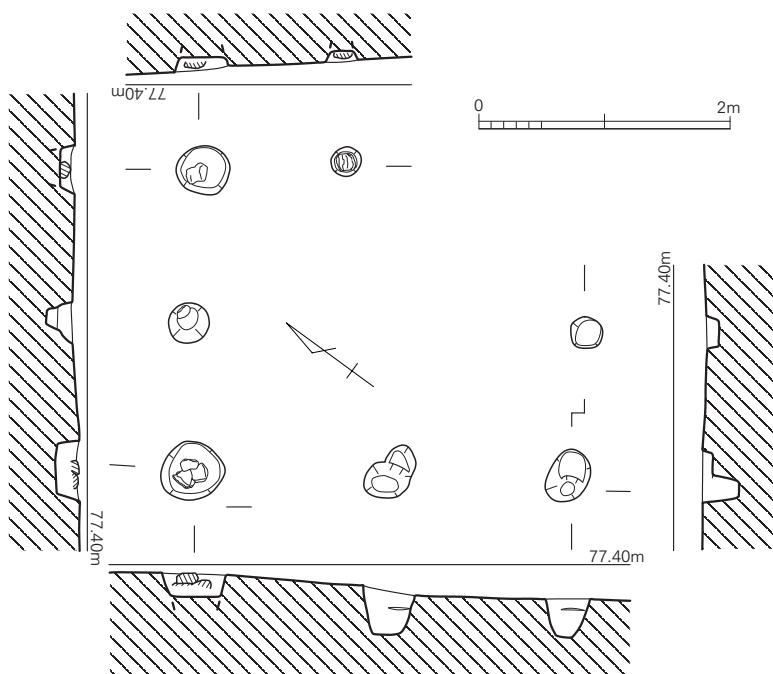
① Pit

Pit60 出土遺物 (第42図117、119、図版42、43)

117は出土の陶器小形甕で、底部を失うが口径19.6cm、残存器高11.5cmの大きさ。直径15cmほど



第40図 SB5 実測図 (1/60)



第 41 図 SB6 実測図 (1/60)

の底部から直立気味に内湾しながら立ち上がり、口縁端部は内外面に摘み出したように肥厚する。119 は瓦質の鉢底部で底面は内側にやや凹む。

土坑 5 周辺 Pit 出土遺物 (第 42 図 105、109 ~ 112、図版 42)

溝 7・8 で L 字形に区画される区域内の Pit 出土で、105 は須恵器杯片。109 は染付の瓶胴部片で灰黄色の釉が掛り赤色の線で文様を描いた染付の類である。110 ~ 112 は陶器の小形碗である。

その他 Pit 出土遺物 (第 42 図 117・119、図版 42、43)

117 は Pit60 出土の陶器小形甕で、底部を失うが口径 19.6cm、残存器高 11.5cm の大きさ。直径 15 cm ほどの底部から直立気味に内湾しながら立ち上がり、口縁端部は内外面に摘み出したように肥厚する。119 は瓦質の鉢底部で底面は内側にやや凹む。

② 遺構面出土遺物

C 区出土遺物 (第 44 図 2、図版 43)

鉄滓、長さ 15.2cm、幅 8.7cm、厚さ 5.1cm、重量 507 g を測る椀形滓である。

P 区遺構面出土遺物 (第 42 図 108、図版 42)

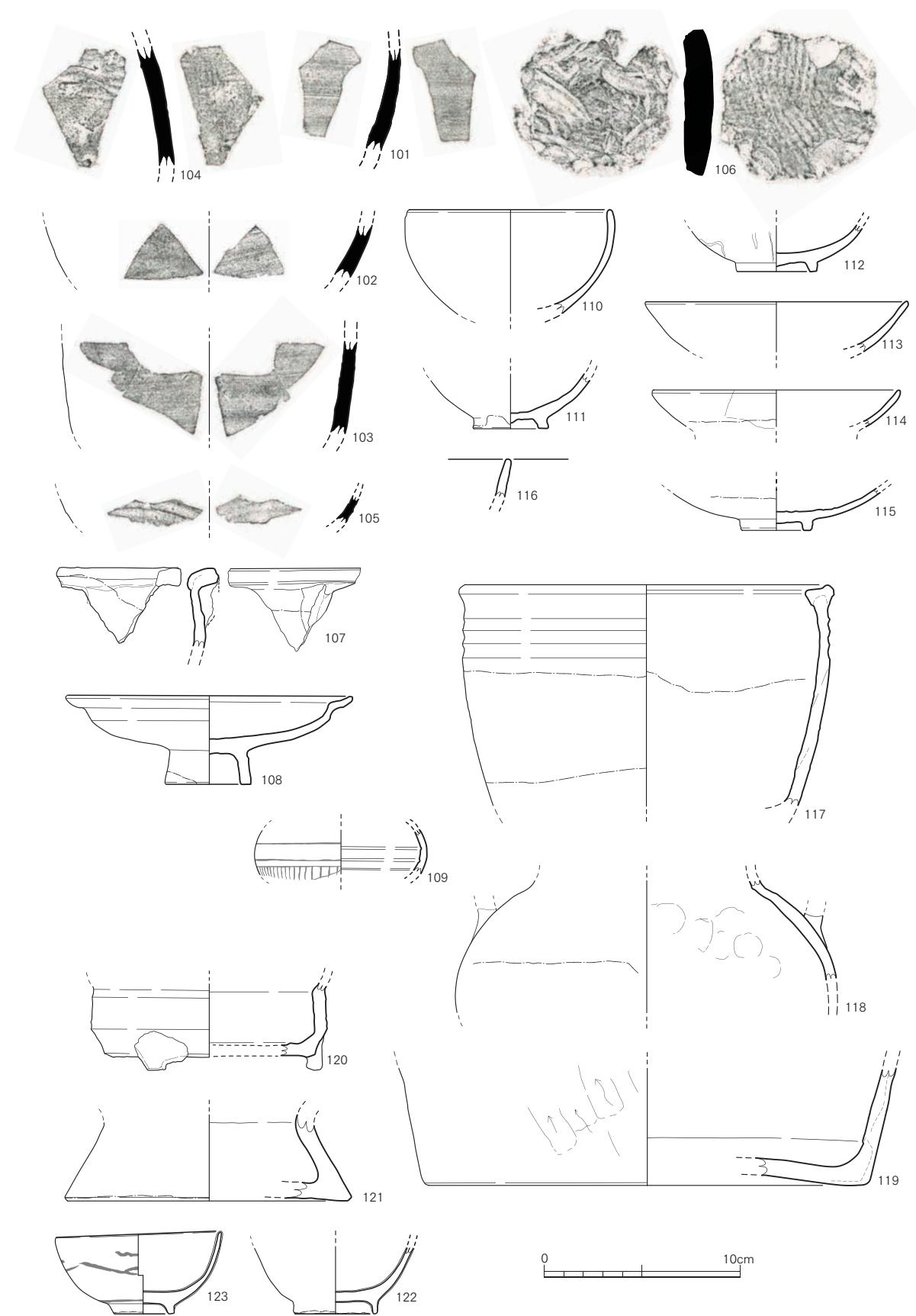
陶器台付縁反皿で、口径 15.0cm、器高 4.5cm の大きさ。暗めの灰色胎土で淡灰オリーブ色の釉が掛る。

N 区出土遺物 (第 42 図 114 ~ 116、120、121、第 43 図 125、図版 42、43)

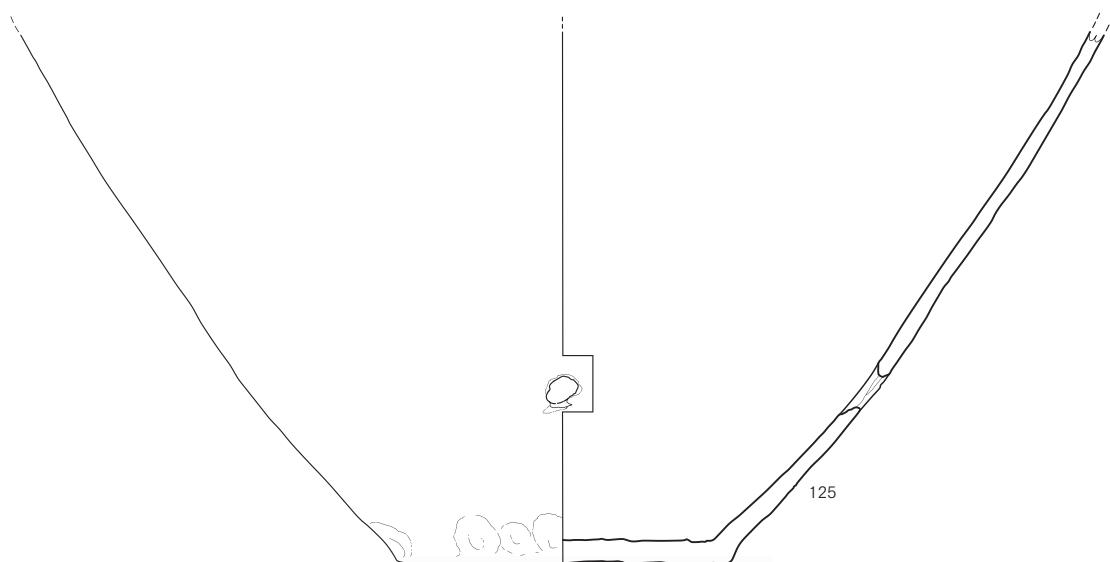
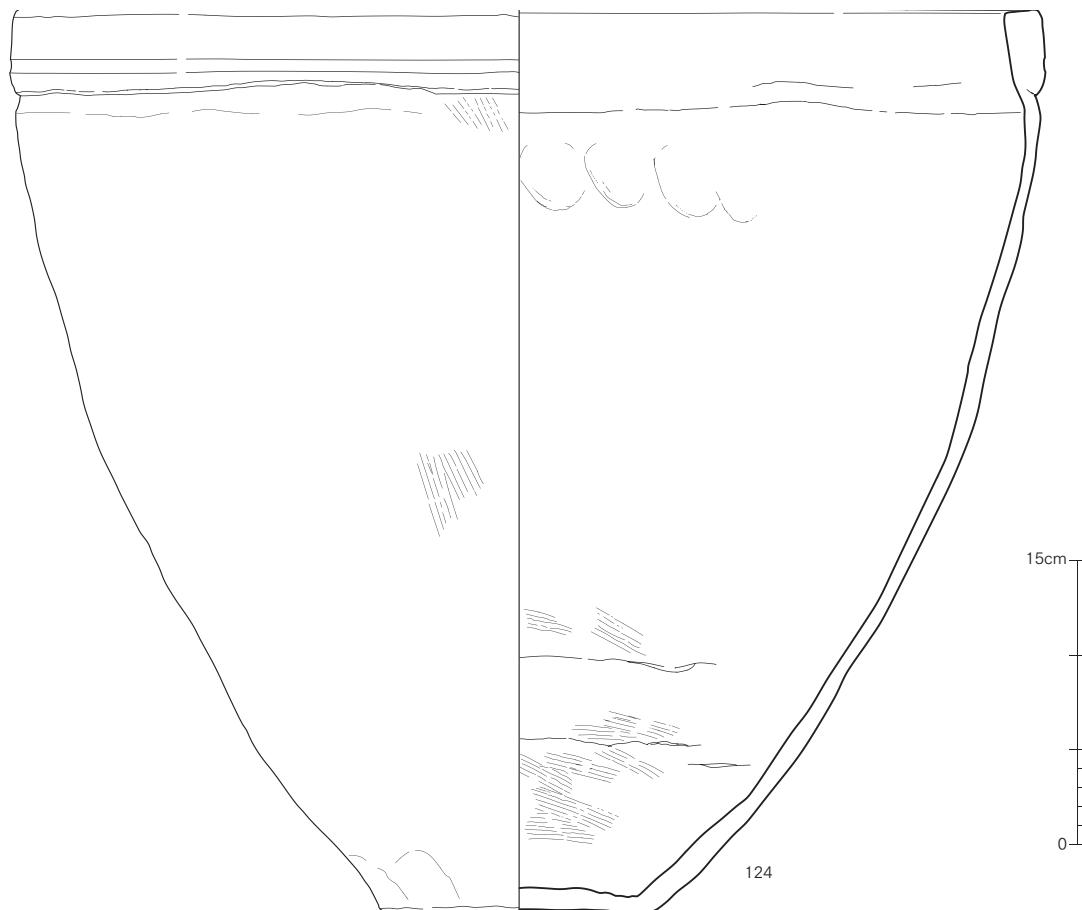
114、115 は陶器皿で同一個体の可能性もある、高台部は露胎、内底面は蛇の目に釉を搔きとる。

116 は陶器の湯呑み口縁部破片だろう。

120 は陶器の 3 か所に脚が付く香炉底部と思われる。淡茶褐色の胎土でやや赤みのある茶褐色に



第42図 Pit、遺構面など出土遺物実測図(1/3)



第43図 土坑7、N区遺構面出土遺物実測図(1/4)

焼成され、釉はみられない。121は陶器の花生け底部であろう。淡オリーブ色の釉が掛る。

125はN区東北部の段落ち付近に散乱していた破片が接合し、須恵器大甕と思われる。17.5cm大の平底底部から残存高28.0cmの胴部が直線的に開く。砂礫を含むが比較的精良な胎土で、概ね1.0cm程の器壁は全体にナデ調整されるが底部内外面に指頭圧痕、外底面に板状圧痕が残り、褐灰色に固く焼成される。なお底部に外側からの焼成後穿孔がある。

M区出土遺物（第44図1、図版43）

鉄滓、長さ10.6cm、幅8.1cm、厚さ4.5cm、重量427gを測る椀形滓である。

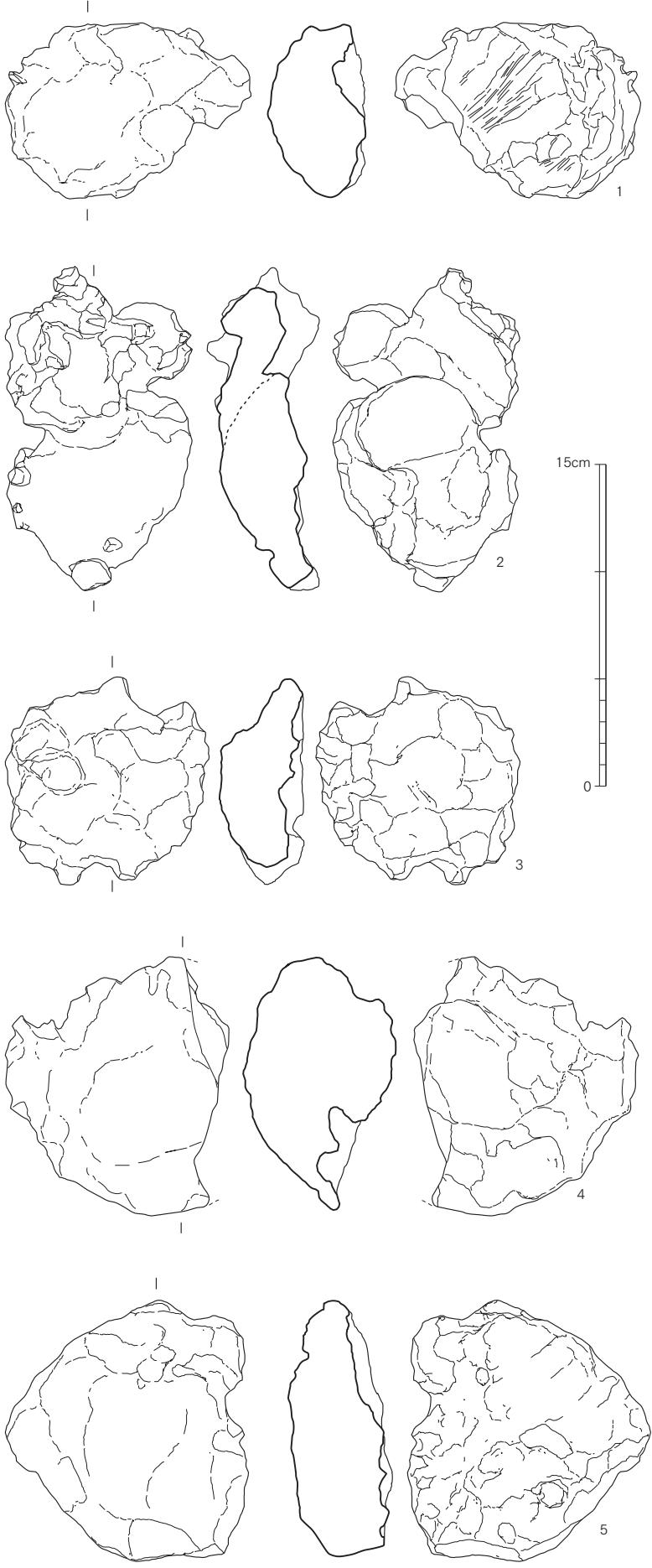
排土内採集遺物

（第44図3～5、図版43）

いずれも鉄滓で其々422g、829g、680gの重量を測る椀形滓である。

試掘トレンチ出土遺物（第27図6、図版40）

鉄器 端部を僅かに欠くが残存長23.7cm、幅0.5～1.5cm、最大厚1.0cmの大きさの棒状製品だが、幅が1.5cmに膨らむ先坦部が薄く鎌のよう尖る。体部中ほどは1.0cm角の棒状で先端・基部側共に扁平になり、基部端も尖る。共伴遺物がなく時期の特定は難しいが鉈の可能性もある。



第44図 遺構面等出土遺物実測図 鉄滓(1/3)

伊方中原遺跡

1. 遺跡の概要

伊方中原遺跡は伊方萩ヶ原遺跡と同様に福智山系より南へ伸びる丘陵上、標高 50 m 前後に位置する。丘陵の鞍部から東西方向へ緩傾斜していく斜面にあたる。試掘調査の結果及び今回の事業範囲のすぐ北に弥生時代の遺跡である中原遺跡が存在し、丘陵頂部を中心とし広範囲に遺構が分布すると考えられ試掘調査にて新たに確認した遺跡である。ただし試掘調査は、作付けの関係上部分的に行なつただけであり本来の遺跡の範囲をとらえることができていなかった。

2. 調査の方法と概要

伊方中原遺跡では調査対象地は南北に広がり、田の一面を一区画とし、①から⑪までのアラビア数字を振り、北側の調査対象地①より順次表土の除去を開始した。排土を調査対象地内で処理する必要があること、試掘調査が限定的であり、新たな遺構を検出する可能性もあったため部分的にトレンチを掘削し遺構の分布範囲の確認を同時に進め、調査範囲の絞り込みを行なった。①、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑩では住居、掘立柱建物、溝、土坑、Pit などの遺構を検出した。遺構の分布が確認されない①の北半、③、⑨、⑪及び工事による削平の影響を受けない④、⑤、⑦、⑧の西半と⑥の北半を表土と排土の置場として利用することとし調査区を設定した。作業員の作業開始後、福岡県土地改良事業団体連合会の測量成果を基に調査区内へのレベル移動、基準杭を設定し 1/10、1/20 の縮尺にて個別遺構図及び遺構配置図を作成した。

調査は、重機が 11 月 4 日より表土除去を開始し、作業員は 11 月 14 日より④の表土下に散布する弥生土器を中心とする遺物の採集をはじめ、①から遺構検出を開始し掘削作業を始めた。2 月 25 日に航空写真の撮影を行い、3 月 2 日より撤収作業を行い、3 月 10 日の清掃作業をもって終了した。

3. 遺構と遺物

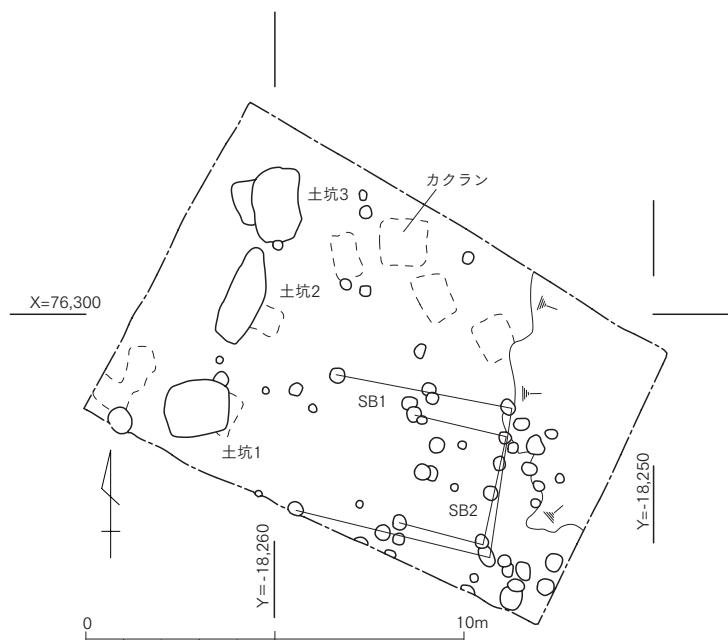
調査区①(第 46 図)

(1) 概要

トレンチ 1、トレンチ 2 を掘削し遺構の分布範囲の確認を行なった。トレンチ 1 の比較的浅い部分で遺構を確認、トレンチ 2 では地山は削平を受け遺構の残存は認められなかった。そのためトレンチ 1 を中心に地形等を考慮し、約 110m²を調査範囲とした。

基本土層(第 47 図、図版 16)

6 層とした層が地山上の堆積であり、この層に遺構は掘り込まれている。

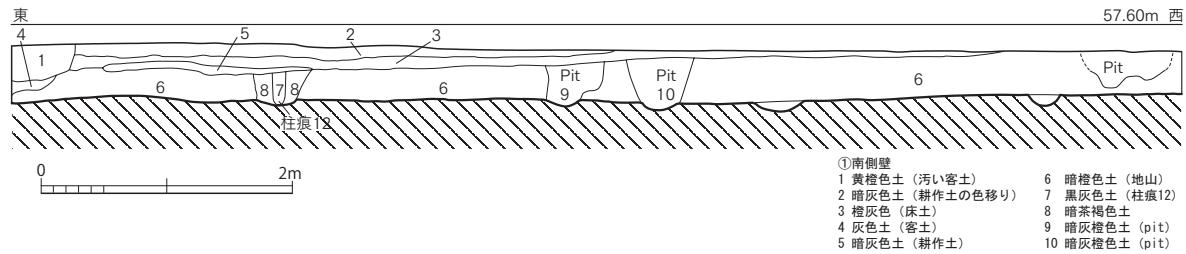


第 46 図 調査区①遺構配置図 (1/200)

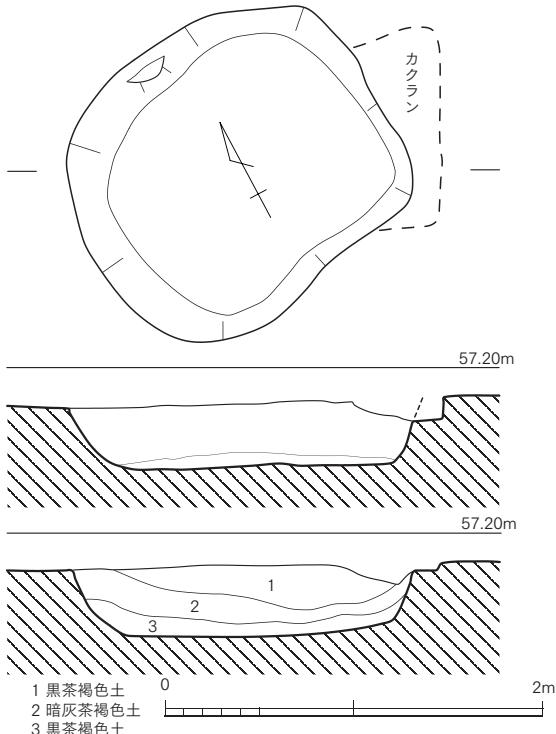


第45図 伊方中原遺跡周辺地形図

(2) 遺構と遺物



第 47 図 調査区①基本土層図 (1/60)



第 48 図 土坑 1 実測図 (1/40)

①土坑

土坑 1(第 48 図、図版 16、17)

主軸方位 N-62°-E、東西 1.79 m、南北 1.71 m を測る。弥生土器が多量に出土し廃棄土坑と考えられる。土層観察より 2 層目の暗黒茶褐色土を境に上下に分かれる。

出土遺物

弥生土器 (第 53 図 1 ~ 6、図版 44)

1 は壺の頸部から口縁部、口縁端部は肥厚し、外側に向かいやや垂れるいわゆる鋤先状口縁である。内外面ともに風化により調整は不明瞭、復元口径 28.3 cm、残存高 11 cm を測る。胎土には 3 mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

2 ~ 5 は甕の口縁部、頸部から口縁部にかけて 2、3 は如意形に近く屈曲し、4 はやや屈曲が強く、5 は逆 L 字状に近い。2 ~ 4 は体部から口縁部まで厚み

はほぼ変わらないが、5 の口縁部はやや肥厚し、口縁下部には断面三角形の突帯が 1 条巡る。2 ~ 4 は内面ナデ調整、口縁外側は横ナデ調整、2、3 の体部外表面はハケ目後ナデ調整を施す。2 は残存高 7 cm を測り、胎土には 2 mm 以下の砂粒を含み、内面褐色、外面上ぶい赤褐色を呈し、焼成は良好である。3 は残存高 6.7 cm を測り、胎土には 2 mm 以下の砂粒を多く含み、内面灰褐色、外面上ぶい橙色を呈し、焼成は良好である。4 は残存高 6.7 cm を測り、胎土には細砂粒を含み、内面橙色、外面上ぶい赤褐色を呈し、焼成は良好である。5 は残存高 7.7 cm を測り、胎土には 2 mm 以下の砂粒を多く含み、内面灰褐色、外面上ぶい橙色を呈し、焼成は良好である。6 は甕の底部、上底状となり、内面は風化により調整不明瞭、外表面はハケ目調整、底部外表面はナデ調整を施す。胎土には 4 mm 以下の砂粒を多く含み、内面褐色、外面上ぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

石器 (第 54 図 1、図版 52)

細粒砂岩製の 7.8 cm × 6.0 cm、厚さ 2.7 cm の大きさのやや中窪みの砥石片である。砥面の裏面や折損面も部分的に磨耗する。

土坑 2(第 49 図、図版 17、18)

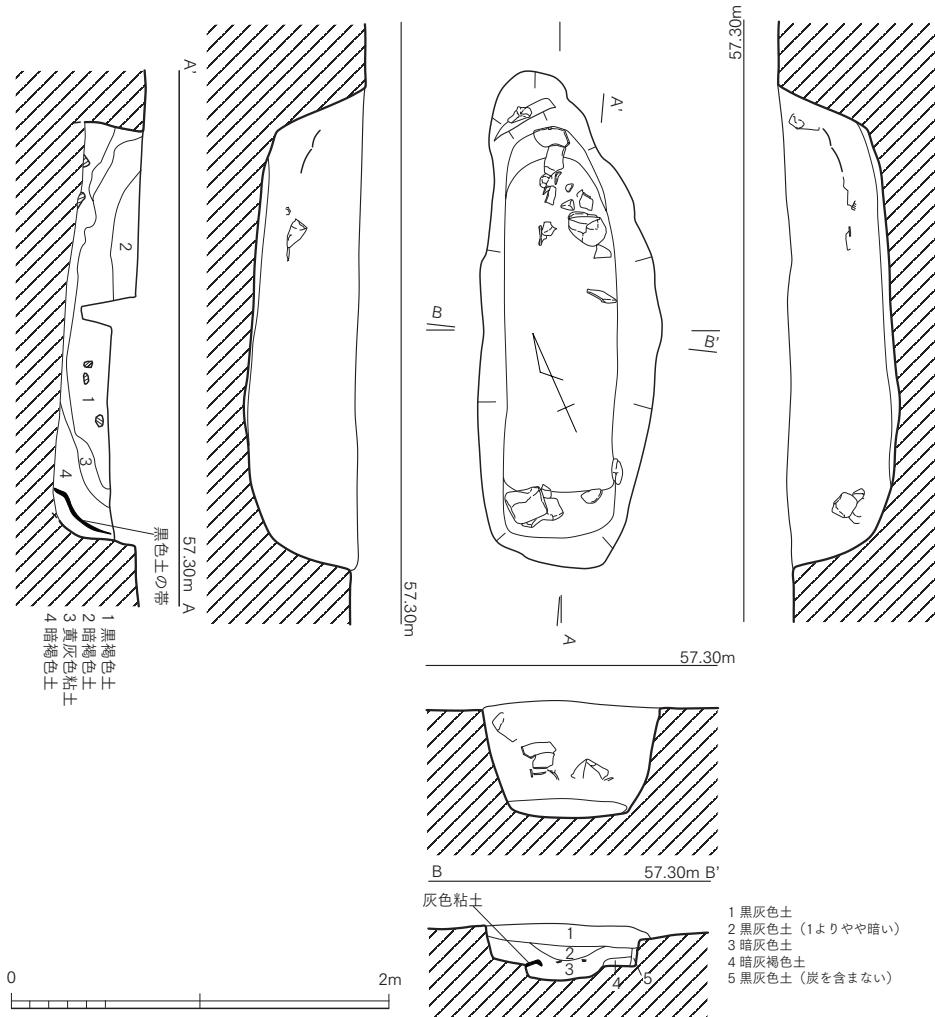
主軸方位 N-27.5°-E、南北 2.58 m、東西 0.92 m を測る。埋土は暗褐色土を基本とするが、間に黄灰色粘土、黒色土が帶状に入る。黄褐色粘土と黒色の炭化物層は木棺の可能性も考えられる。埋土中より炭化木材を検出している。

出土遺物

弥生土器 (第 53 図 7 ~ 20、図版 44)

7 は壺の口縁部、口縁端部は肥厚しいわゆる鋤先状口縁となる。口縁部内面は横ナデ調整、体部内面はミガキ調整、口縁部外面は横ナデ調整、体部外面はミガキ調整を施し、残存高 5 cm を測る。胎土には 2 mm 以下の砂粒を多く含み、内面褐灰色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。8 は壺の底部、内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり黒斑が確認できる、底径 7.5 cm、残存高 10.3 cm を測る。胎土には 2 mm 以下の砂粒を多く含み、内外ともに橙色を呈し、焼成は良好である。9 は鉢の口縁部から体部、内外面ともにナデ調整を施し、残存高 12 cm を測る。胎土には 2 mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。

10 ~ 14 は甕の口縁部、10、12 の口縁は緩やかに外反し、くの字状を呈し、端部はやや肥厚する。11 の口縁はやや屈曲が強く逆 L 字状をとなり 13 ではさらに屈曲が強く口縁端部はほぼ水平となる。14 の口縁はやや屈曲が強く逆 L 字状で口縁下部に断面三角形の突帯が 1 条巡る。10 の内面はナデ調整、外面は口縁端部には指頭圧痕がのこり、復元口径 26 cm、残存高 5 cm を測る。胎土には



第 49 図 土坑 2 実測図 (1/40)

1mm以下の細砂粒を含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。11は内外面ともに風化するものの内面ナデ調整、外面はハケ目調整を施し、残存高8cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成はやや不良である。12の内面はナデ調整を施し、外面は風化のため不明瞭であり、残存高8.7cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を多く含み、内外面ともににぶい褐色を呈し、焼成はやや不良である。13の内面はミガキ調整、外面はハケ目調整を施し、残存高6cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内面にぶい褐色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。14は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高は8.7cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。

15～19は甕の底部、全て上底状となり、19のみ上底というより台付甕の脚部のようであり、他の底部に比べ小型である。15の内面はナデ調整、外面はハケ目後ナデ調整を施し、底径9.2cm、残存高9.7cmを測る。胎土には細砂粒を多く含み、内面は灰褐色からにぶい橙色、外面はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。16の内面は風化し調整は不明瞭、外面はハケ目調整を施し、底径7.4cm、残存高5.7cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面は灰褐色からにぶい橙色、外面はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。17の内外面ともに風化し調整は不明瞭、底径7cm、残存高7cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面は灰褐色からにぶい橙色、外面はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。18の内外面ともに風化し調整は不明瞭、底径7.3cm、残存高5.5cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を含み、内面はにぶい橙色、外面は橙色を呈し、焼成は良好である。19の内面は風化し調整は不明瞭、外面はナデ調整を施し脚部状になる底部内面は指頭圧痕が残り、底径5.2cm、残存高5cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面は灰褐色、外面は橙色を呈し、焼成は良好である。20は蓋、内外面ともにミガキ調整を施し、つまみ部径5.5cm、残存高6.6cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を多く含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

石器(第54図2～4、図版52)

2は磨製石斧、蛇紋岩製のやや偏る両刃磨製石斧。折損して基部側を失うが残存長8.0cm、幅4.3cm、厚さ3.0cm、重量131gを測る。敲打成形の後に研磨調整するが側面に敲打痕が顕著に残る。縄文時代の磨製石斧だろう。

3、4は頁岩製の磨製石斧片で、3は抉りのある柱状片刃石斧、4は扁平片刃石斧だろう。4は残存長6.0cm、残存幅1.2cm、厚さ1.1cm、重量11gを測る。なお、図示しない資料で頁岩製磨製石斧片らしい1点と黒曜石剥片1点が出土している。

土坑3(第50図、図版18、19)

主軸方位N-2°-E、南北1.94m、東西1.21mを測る。埋土は暗灰色土を基本とし、横断土層では灰色粘土がブロック状に入り、縦断土層の観察では間に暗橙褐色土の層が確認できる。中央で粘土層を確認。

出土遺物

弥生土器(第53図21～31、図版44)

21は壺の口縁部、やや開きながら直線的に伸びる。内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高5.7cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内外面浅黄橙色を呈し、焼成は良好で

ある。22 は壺の底部、内面はナデ調整、外面はミガキ調整、底部はナデ調整を施し、底径 6.2cm、残存高 1.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい赤褐色、外面灰褐色を呈し、焼成は良好である。23 は壺の胴部、2 条の断面三角形の突帯を巡らす。突帯の間隔は狭い。内面はナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭であり、残存高 9.2cm を測る。3mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

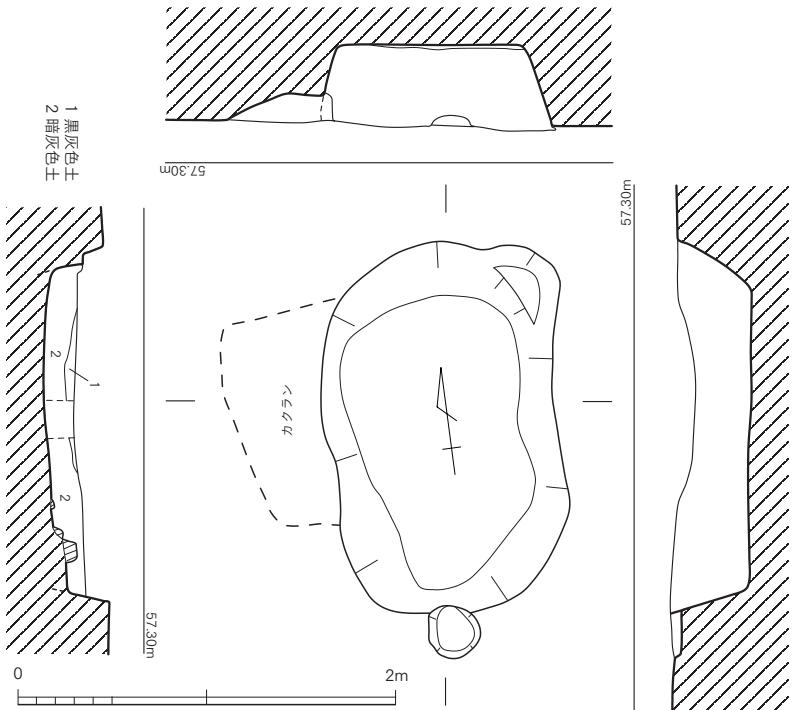
24～26 は甕の口縁部、24 は緩やかに外反しくの字状となり端部は肥厚する。25 は 24 と同様にくの字状となるがより屈曲が強く、端部は肥厚しない。26 は逆 L 字状となり短い。24 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 4cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。25 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 3.3cm を測る。胎土には細砂粒を含み、内外面ともにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。26 は内面ナデ調整、外面ハケ目調整を施し、残存高 5.6cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内外面ともに橙色を呈し焼成は良好である。

27～31 は甕の底部、27 は内外面ナデ調整を施し、底径 5.9cm、残存高 3cm を測る。胎土には細砂粒を多く含み、内面にぶい赤褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。28 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、復元底径 7.5cm、残存高 5cm を測る。胎土には 1mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい灰褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。29 は内外面ナデ調整を施し、底径 7cm、残存高 7cm を測る。胎土には 1mm 以下の細砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。30 は内外面ナデ調整を施し、底径 6.4cm、残存高 5.2cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面淡赤橙色を呈し、焼成は良好である。31 は内外面ナデ調整を施し、復元底径 8cm、残存高 5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。

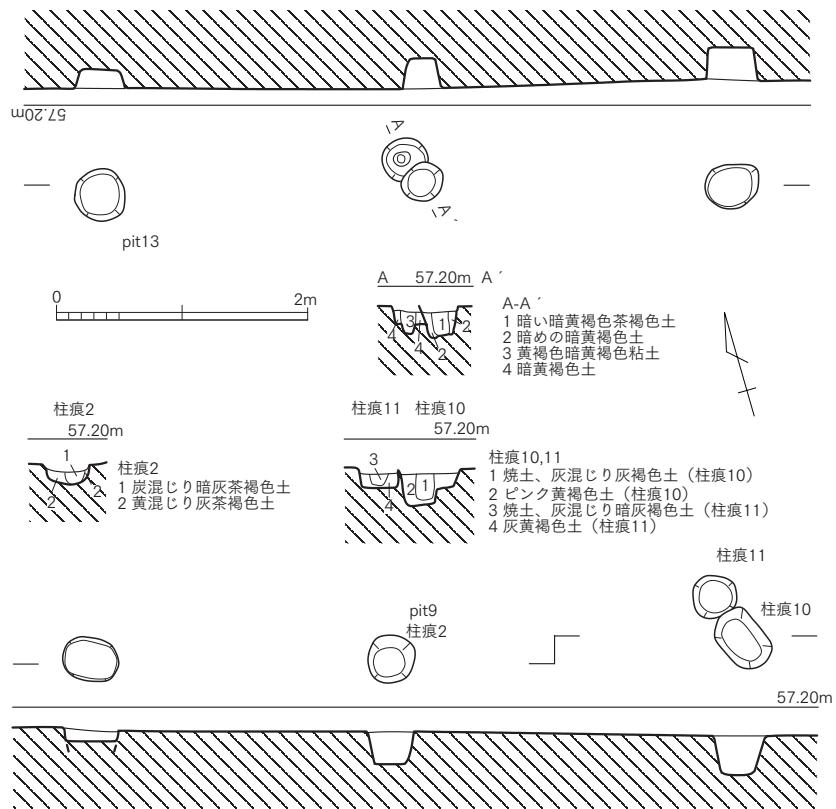
②掘立柱建物

SB1(第 51 図)

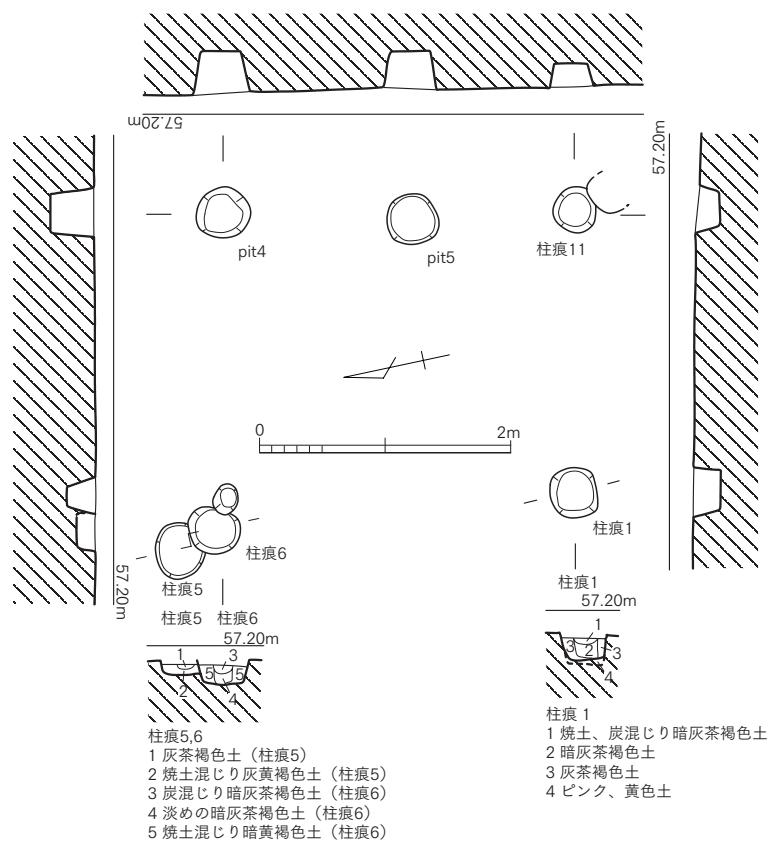
主軸方位 N-75°-W、残存する状況から 2 間 × 1 間の建物になると考えられる。柱は柱痕の状況から 15cm 程度と考えられる。



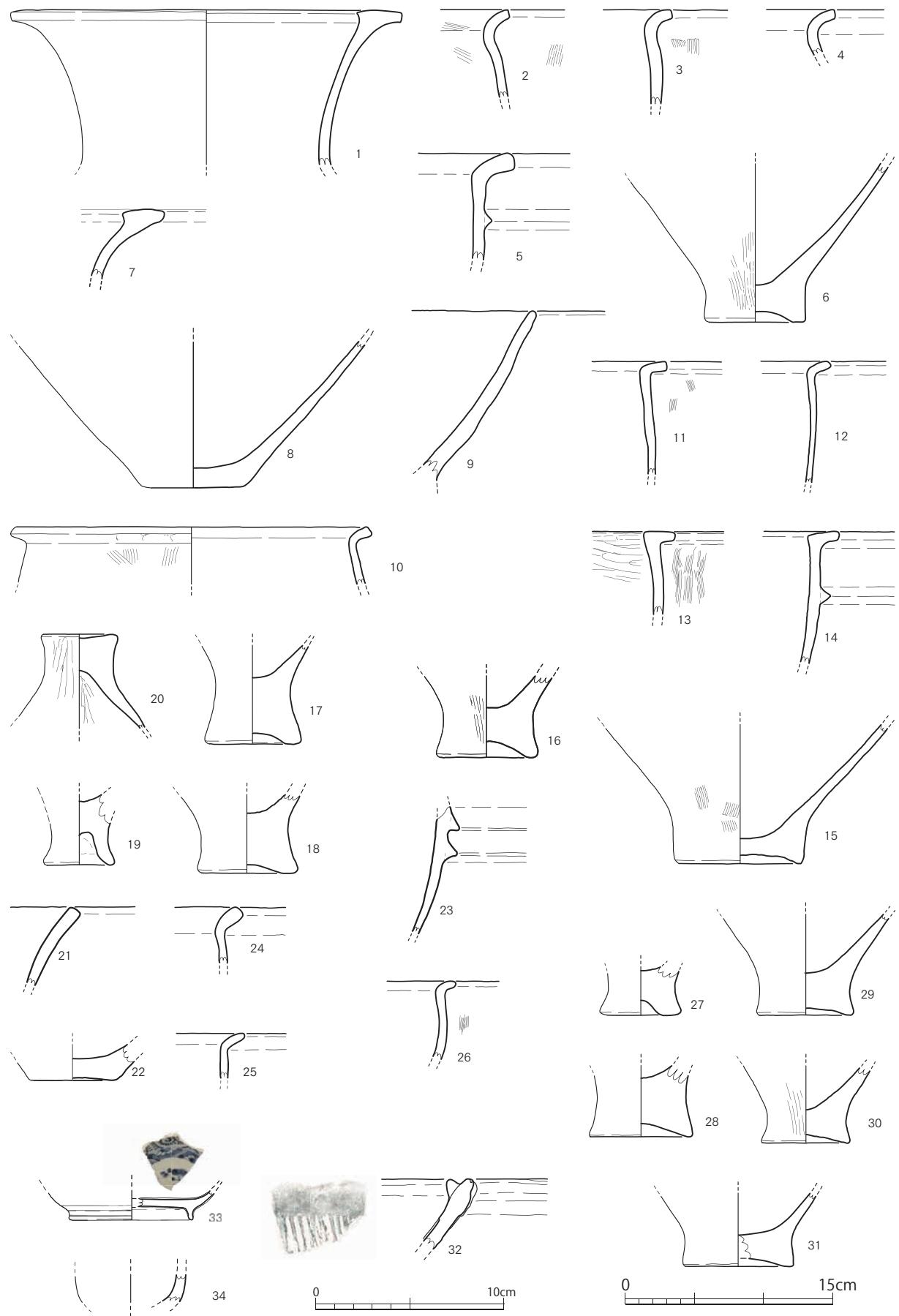
第 50 図 土坑 3 実測図 (1/40)



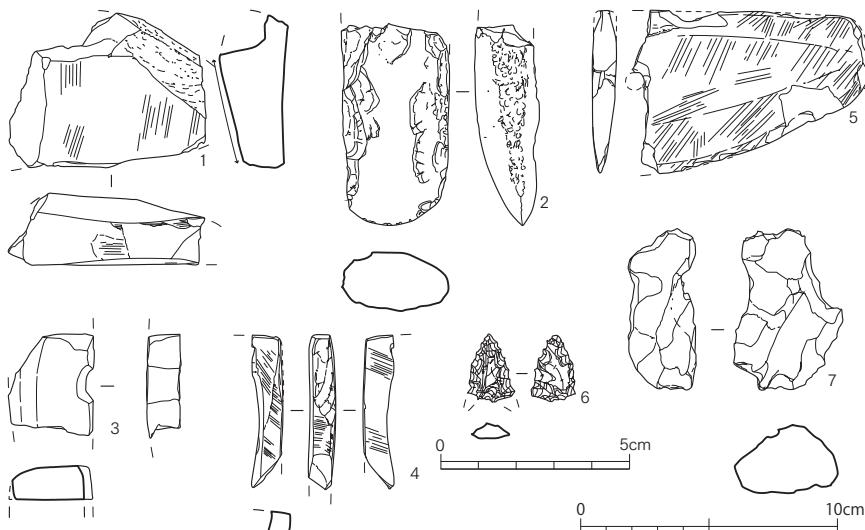
第 51 図 SB1 実測図 (1/60)



第 52 図 SB2 実測図 (1/60)



第53図 調査区①出土遺物実測図 1(1/4、32～34は1/3)



第 54 図 調査区①出土遺物実測図 2 石器・鉄滓 (1/3、6 のみ 1/2)

SB2(第 52 図)

主軸方位 N-11°-E、2 間 × 1 間の建物と考えられる。柱は柱痕の状況から 15 cm 程度と考えられる。

③その他の出土遺物

遺構検出面表採遺物

近世陶磁器

(第 53 図 32 ~ 34、図版 44)

32 は陶器摺鉢、残存高 3.8 cm を測り、胎土には細砂粒を少量含み、内外面ともににぶい黄橙色、33 は染付の磁器、復元底径 6.8 cm、残存高 1.5 cm を測る。34 は磁器碗。

石器

(第 54 図 5、6、図版 52)

5 はアズキ色の輝緑凝灰岩製石包丁片で、残存長 9.3 cm、幅 6.4 cm、厚さ 1.0 cm、重量 66 g を測る。穿孔部に紐ズレ痕は確認できない。

6 は打製石鎌で腰岳産黒曜石の不定形剥片を利用した凹基鎌で主要剥離面が残る。

表採の遺物

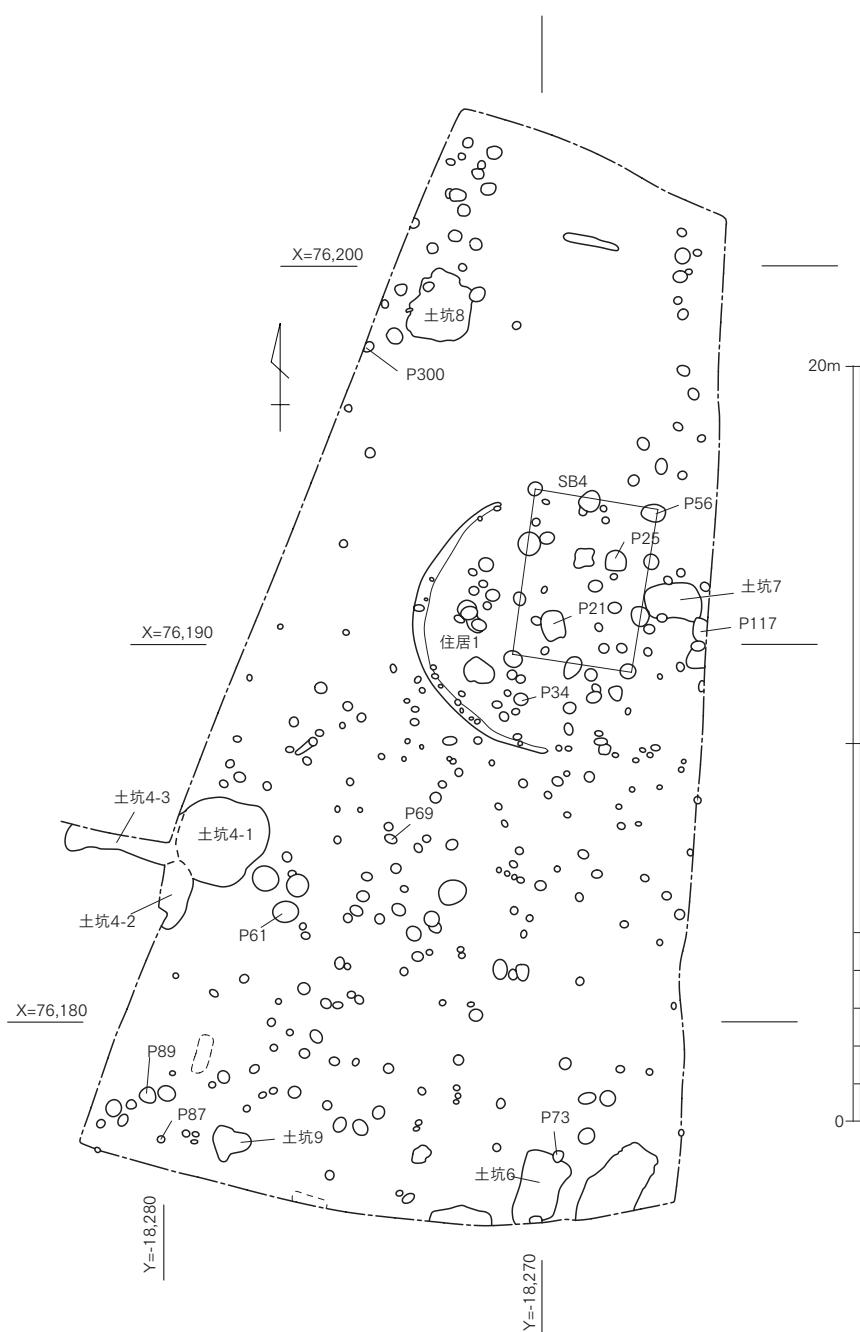
(第 54 図 7、図版 52)

鉄滓、長さ 6.4 cm、幅 4.3 cm、厚さ 3.2 cm、重量 94 g を測る。

調査区④(第 55 図)

(1) 概要

西半部は削平を受けるが、弥生土器の散布を確認。水



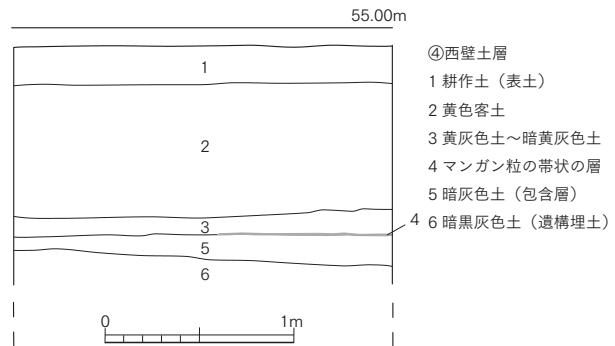
第 55 図 調査区④遺構配置図 (1/200)

路設置に伴い削平を受ける部分について客土を除去、遺構の確認を行った。結果、住居 1 軒を含む弥生時代の遺構を確認、水路構築により遺構は損壊するため水路の影響範囲を調査対象とした。

調査区内住居 4 の北側では出土遺物に須恵器が混じる Pit があり新しい時代の遺構が混じる可能性がある。

基本土層 (第 56 図、図版 20)

調査区西壁で確認、耕作土 (田の表土) 20cm の下層に黄色客土による整地層が見られ、土と考えられる黄灰色土～暗黄灰色土の層、暗灰色土の包含層が堆積する。



第 56 図 基本土層 (1/40)

(2) 遺構と遺物

①住居

住居 1 (第 57 図、図版 20、21)

径約 7 m の円形、掘方は深さ 12cm 程度残存、北から東側は削平を受ける。柱穴 9 本と中央土坑を検出、深さ 17cm 程の住居内周溝が 1/3 程度残存する。

出土遺物 (第 63 図 63)

63 は土師器壺の口縁部、やや外へ直線的に外反し複合口縁壺の可能性もある。内外面ともに風化し調整は不明瞭、残存高 4.2cm を測る。胎土には細砂粒を含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。

②土坑

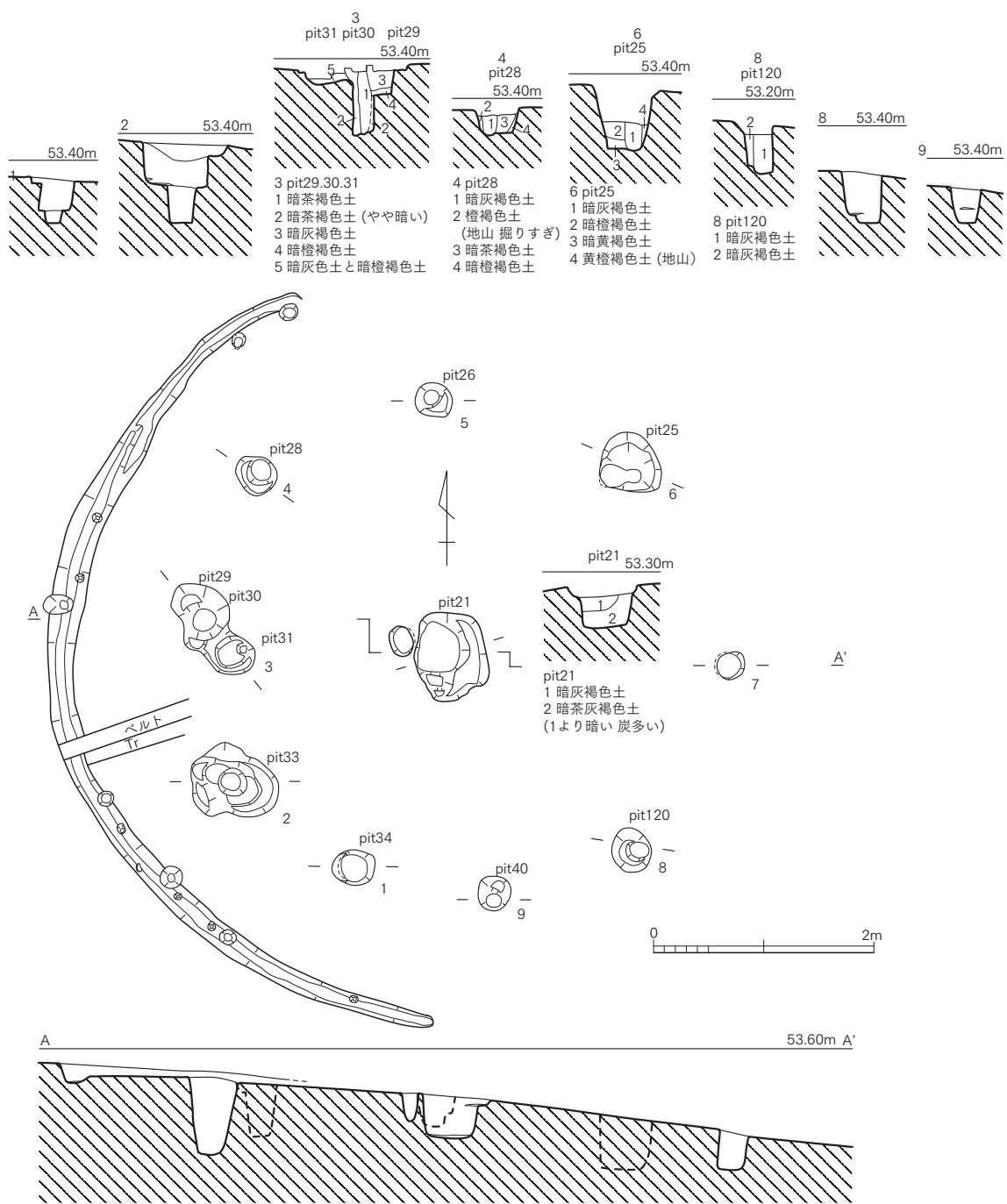
土坑 4 (第 58 図)

調査区の南西隅にある。切り合う土坑 4-1 から 4-3 からなる。

出土遺物 (第 59 図 35 ～ 61、第 60 図 62)

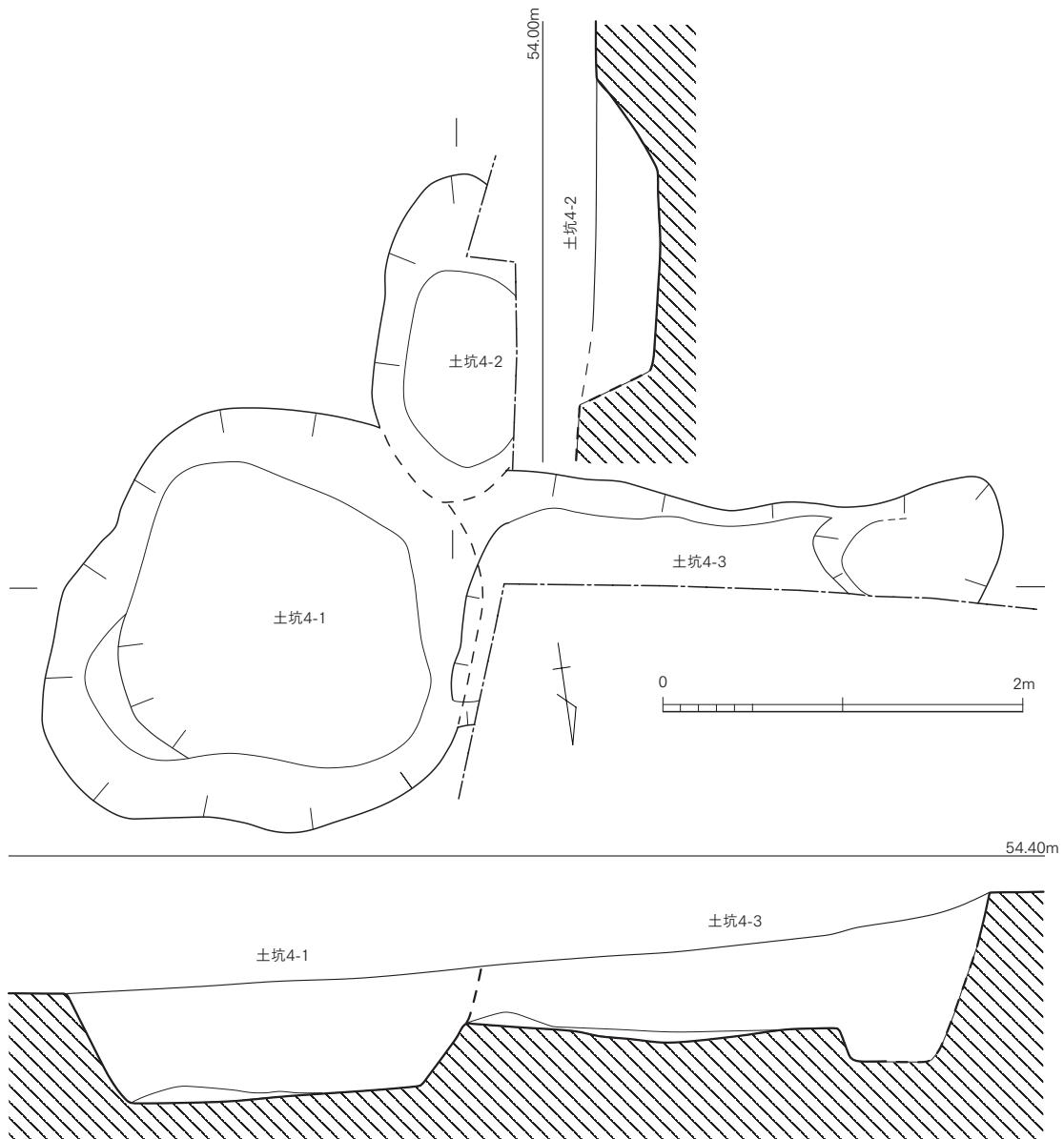
土坑 4 (第 59 図 35 ～ 55、図版 44、45)

全て弥生土器、35 ～ 39 は壺の口縁部、35、36 の口縁は肥厚し断面は四角形に近く、36 では上端ほぼ水平で外側へつまみ出したような形状となる。37 ～ 39 は頸部から口縁にかけて如意状に緩やかに外反する。35 の内面はナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭であり、復元口径 27.2cm、残存高 11.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。36 の内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 3.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。37 の内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、復元口径 16.6cm、残存高 5.3cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい黄橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。38 の内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、復元口径 17.6cm、残存高 5.4cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい黄橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。



第 57 図 住居 1 実測図 (1/60)

砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。39 の内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、復元口径 20.4cm、残存高 6cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい黄橙色、外面浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。40～43 は壺の底部、40 の内面はナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径 8.6cm、残存高 5.6cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。41 の内面はナデ調整、外面はハケ目調整のちナデ調整、底面はナデ調整を施し、底径 9cm、残存高 3.3cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい褐色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。



第 58 図 土坑 4 実測図 (1/40)

る。42 の内面は風化により調整は不明瞭、外面はナデ調整を施し、底径 10.5cm、残存高 2cm を測る。胎土には細砂粒を多く含み、5mm 程度の礫を若干含む。内外面ともに褐灰色を呈し、焼成はやや不良である。43 の内面外面ともにナデ調整を施し、底径 8.3cm、残存高 8cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい黄橙色、外面灰黄褐色を呈し、焼成は良好である。

44 ～ 48 は甕の口縁から体部、44 の口縁は緩やかに外反し如意状に伸び、46 では強く屈曲し逆 L 字状、45、47 ではやや屈曲が強くくの字状となる。48 は緩やかに外反し、口縁下部に断面三角形の突帯が 1 条巡る。44 の内面は風化により調整は不明瞭、外面体部はハケ目調整、口縁はヨコナデ調整を施し、復元口径 26cm、残存高 11cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面灰褐色、外面褐色を呈し、焼成は良好である。45 の内面はナデ調整、外面体部はハケ目調整、口縁指頭圧痕が残り、復元口径 23cm、残存高 9cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内外面にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。46 の内面はナデ調整、外面体部はハケ目調整、口縁指頭圧痕が残り、口径 21.8cm、残存高 10.5cm を測る。胎土には細砂粒を多く含み、3mm 以下の砂粒

を若干含む。内外面ともに灰黄褐色を呈し、焼成は良好である。47 の内面はナデ調整、外面体部はハケ目調整を施し、復元口径 22.2cm、残存高 9.2cm を測る。胎土には細砂粒を多く含み、3mm 以下の砂粒を若干含む。内面黒褐色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。48 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 5.8cm を測る。胎土には細砂粒を多く含み、内外面ともに浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。

49～53 は甕の底部、51、52 は上底状となり、53 は貫通する穿孔が見られる。49 はやや小型で、内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 5.2cm、残存高 6cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。50 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底面はナデ調整を施し、底径 6.9cm、残存高 8.6cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。51 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 7.5cm、残存高 7.2cm を測る胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。52 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底部はナデ調整を施し、底径 6.5cm、残存高 11.7cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。53 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 7.5cm、残存高 10cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。54、55 は鉢、54 は底部から口縁まで直線的に開き、内外面ともに風化により調整は不明瞭、復元口径 17.8cm、底径 8cm、残存高 10cm を測る。胎土には 2mm 前後の砂粒を多く含み、内外面ともに褐灰色を呈し、焼成はやや不良である。55 は体部から口縁部、口縁端部は肥厚し、内面はナデ調整、外面は風化するもののナデ調整、口縁部は指頭圧痕が残り、黒斑が見られる。復元口径 27.2cm、残存高 8.7cm を測る。胎土には 2mm 前後の砂粒を多く含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成はやや不良である。

石器(第 64 図 8～14、図版 52、53)

8 は輝緑凝灰岩製石包丁片で、図示する左折損面下端にも穿孔痕があり、この孔の部分で欠損したため刃部側に向けて側縁を調整した痕跡もみられる。

9～12 は磨製石斧、9 は泥岩質の石材で研磨面が 3 面あるものの長軸両端は折損、広い裏面は節理剥落して本来の形状は不明だが柱状の磨製石斧だろうか。10 は珪化木製の扁平片刃石斧で長さ 5.8cm、幅 2.4cm、厚さ 0.7cm、重量 21 g を測る。11 は蛇紋岩製磨製石斧の体部剥落片、12 は玢岩製の磨製石斧頭部片で、何れも橢円形断面の伐採用蛤刃のような磨製石斧であろう。

13 は磨製石剣、泥岩あるいは頁岩質の小破片で両面に残る研磨面からみて石剣の身部片と思われる。

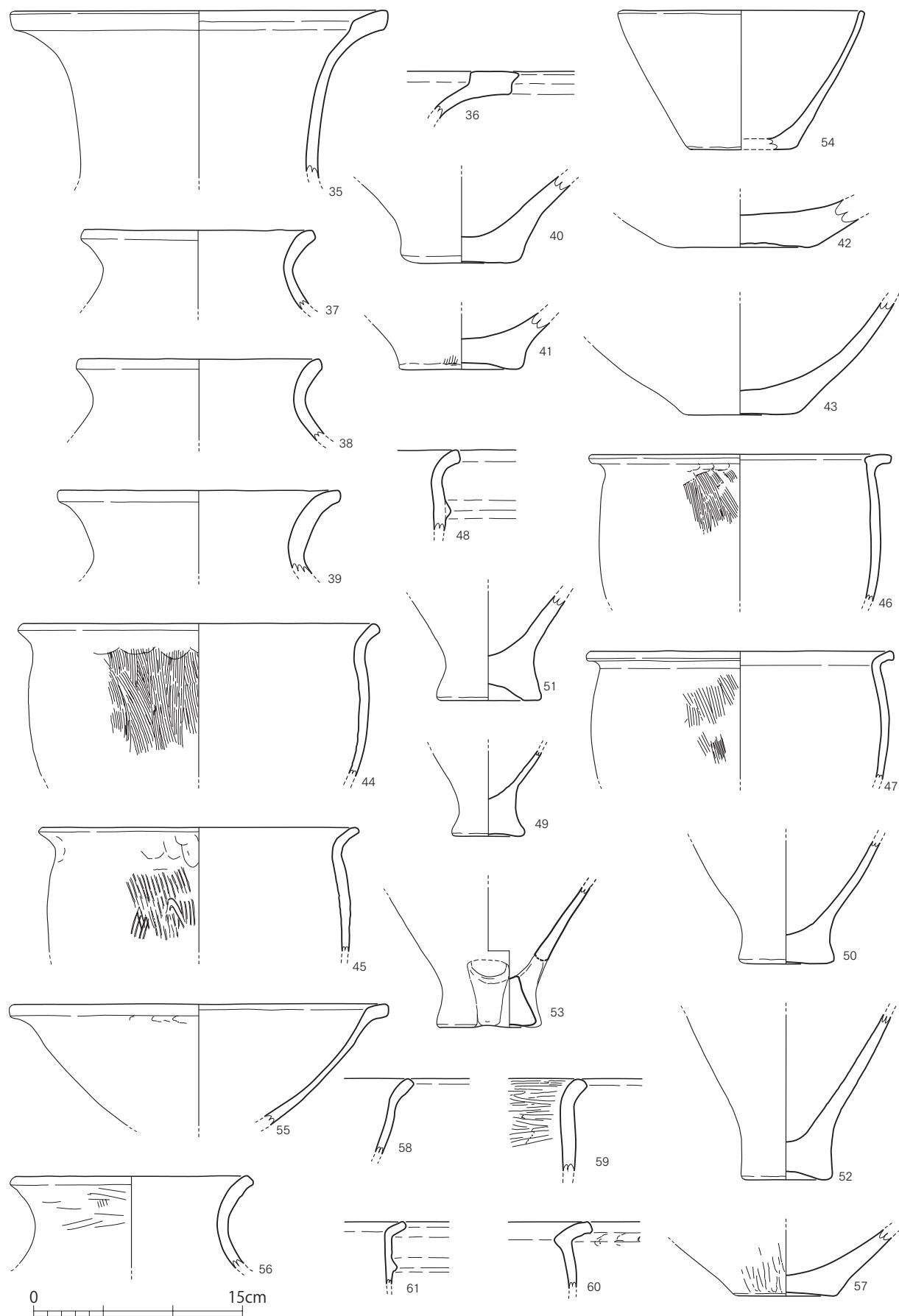
14 は細粒砂岩製の仕上げ砥石で一部欠損するが 8.5 × 8.5cm、厚さ 1.8cm の上下平坦面とともにやや中凹みの砥面である。なお、図示しないが泥岩質石材の砥石小片 1 点も出土した。

土坑 4-1(第 58 図)

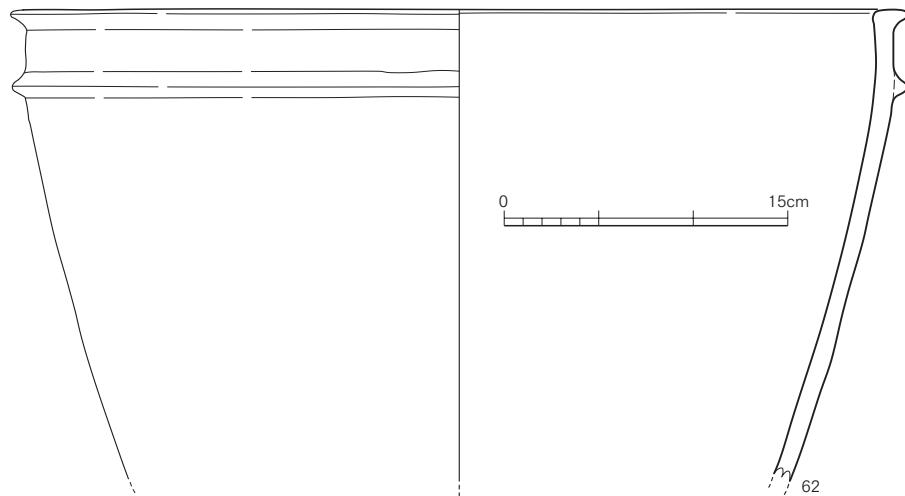
主軸方位 N-25°-E、南北 2.35 m、土坑 4-2 に一部切られるが東西 2.2 m、深さ 0.54 m を測る。

土坑 4-2(第 58 図)

主軸方位 N-8°-E、南北 1.8 m、土坑の西側は調査区外へ延びるが確認できる部分で東西 0.78m



第59図 土坑4出土遺物実測図1(1/4)



第 60 図 土坑4出土遺物実測図 2(1/4)

を測る。

出土遺物 (第 59 図 56、図版 45)

弥生土器壺の口縁部、内面は風化により調整は不明、外面はハケ目調整のちナデ調整を施し、復元口径 17.5cm、残存高 6.3cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面橙色、外面灰褐色を呈し、焼成は良好である。

土坑 4-3(第 58 図)

主軸包囲 N-76° -W、東西 2.7 m、北半部は調査区外に延びるが確認できる部分で南北 0.5 m、深さ 0.45m を測る。西側は別遺構の可能性も考えられる。

出土遺物

弥生土器 (第 59 図 57 ~ 61、第 60 図 62、図版 45)

57 は壺の底部、内面は風化のため調整は不明瞭、外面は体部にみがき調整を施し、底径 7.4cm、残存高 4.2cm を測る。胎土には 1mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。

58 ~ 61 は壺の口縁部、58 の体部はやや外に開き、口縁は緩やかに外反、59 の体部はほぼ垂直で口縁部は緩やかに外反、60 の体部は口縁に向かいやや内傾し、口縁部は屈曲が強く逆 L 字状、61 では体部はほぼ垂直で口縁部はやや強く屈曲しの字状となる。58 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 5.4cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい黄橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。59 の内面はミガキ調整、外面は風化により調整は不明瞭であり、残存高 6.6cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面黒褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。60 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、外面には黒斑がみられ、残存高 4.5cm を測る。胎土には 1mm 前後の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。61 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 5.4cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい黄橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良い。

62 は壺の体部から口縁、口縁は外につまみ出したような形状で、口縁下部に断面三角形の突帯を 1 条巡らす。内外面ともに丁寧なナデ調整を施し、復元口径 47.2cm、残存高 25cm を測る。胎土

には2mm以下の砂粒を多く含み、内外面ともにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。

土坑7(第61図、図版21)

調査区中央、住居1東側で確認した、主軸方位N-90°-E、南北0.82m、東西1.44m、深さ0.4mを測る、不整形な土坑。

出土遺物

弥生土器(第63図64、65)

64は壺の口縁部、口縁端部は肥厚し、外に向かってやや垂れるいわゆる鋤先状口縁である。内外面ともに風化により調整は不明瞭、残存高10cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内外面ともに明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

65は底部、形状から椀と考えられ、内外面ともに風化により調整は不明瞭、底径6.5cm、残存高3.3cmを測る。胎土には1mm前後の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外表面に橙色を呈し、焼成は良好である。

土坑6

出土遺物(第64図15、図版53)

泥岩質の仕上げ砥石片で図示する2面が砥面に使用される。

土坑8

出土遺物(第63図66、図版45)

弥生土器甕の底部、上底状を呈し、外表面に黒斑があり、内面はナデ調整、外表面はハケ目調整を施し、底径6.6cm、残存高8cmを測る。胎土には1mm前後の細砂粒を多く含み、内面明黄褐色、外表面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

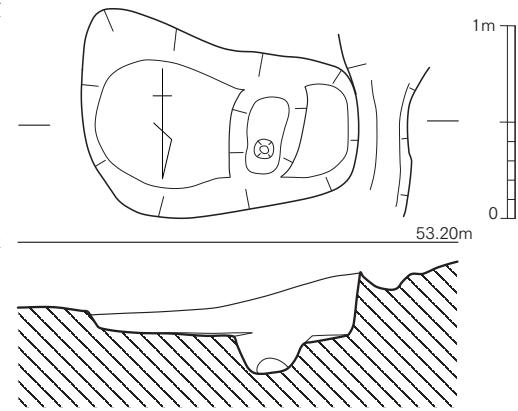
土坑9

出土遺物(第63図67~69)

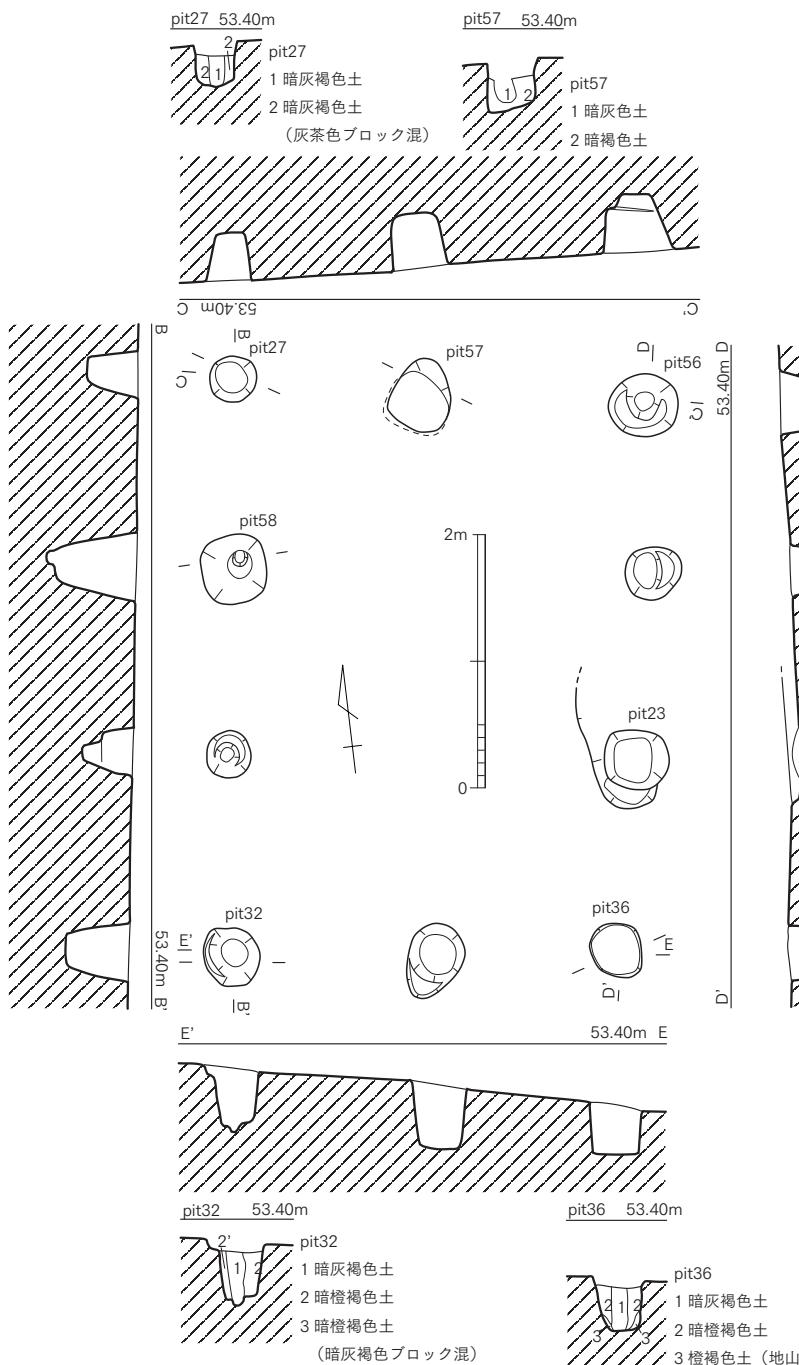
全て弥生土器、67は鉢と考えられる底部、内外面風化により調整は不明瞭であり、底径4cm、残存高2.5cmを測る。胎土には細かい砂粒を含み、内面灰褐色、外表面褐色を呈し、焼成は良好である。

68、69は甕の口縁部、68の口縁端部は緩やかに外反し外表面下部につまみ出したようになりやや下方が膨れる。69は口縁部はくの字状に広がり端部は肥厚する。68は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高5.3cmを測る。胎土には2mm以下の細砂粒を含み、内面明赤褐色、外表面に橙色を呈し、焼成は良好である。69の内面はナデ調整、外表面はハケ目調整を施し、残存高4.2cmを測る。胎土には砂粒をほとんど含まず、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。

③掘立柱建物



第61図 土坑7実測図(1/40)



第 62 図 SB4 実測図 (1/60)

SB4(第 62 図)

主軸方位 N-7.1°-E、2間×3間の建物。柱穴の一つである Pit56 から須恵器が出土し古代の建物の可能性がある。

④ その他の出土遺物

1) Pit

Pit21 出土 遺 物 (第 63 図 70、71)

いずれも弥生土器甕の口縁部、ともに端部のみ残存し、70 の口縁端部は肥厚し断面長方形、71 は直角に近く屈曲し、端部の外面下部につまみ出したようになりやや下方が膨れる。70 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 1.6 cm を測る。胎土には 1mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成はやや不良である。71 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 1.4 cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を少量含み、内面浅黄橙色、外面にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。

である。

Pit25 出土遺物 (第 63 図 72)

72 は弥生土器の一部と考えられる細い筒状の土製品、内径 1cm、外径は復元値で 2cm、残存高 1.7cm を測り、内外面ともに橙色を呈し、比較的胎土は精良である。注口土器等の破片の可能性がある。

Pit34 出土遺物 (第 64 図 16、図版 52)

打製石鏃 腰岳産黒曜石製の凹基鏃で端部を欠損するが長さ約2cm、幅約3cm、厚さ4.4mmの大きさで両面から押圧剥離調整される。この他に腰岳産黒曜石剥片2点が出土したが図示しない。

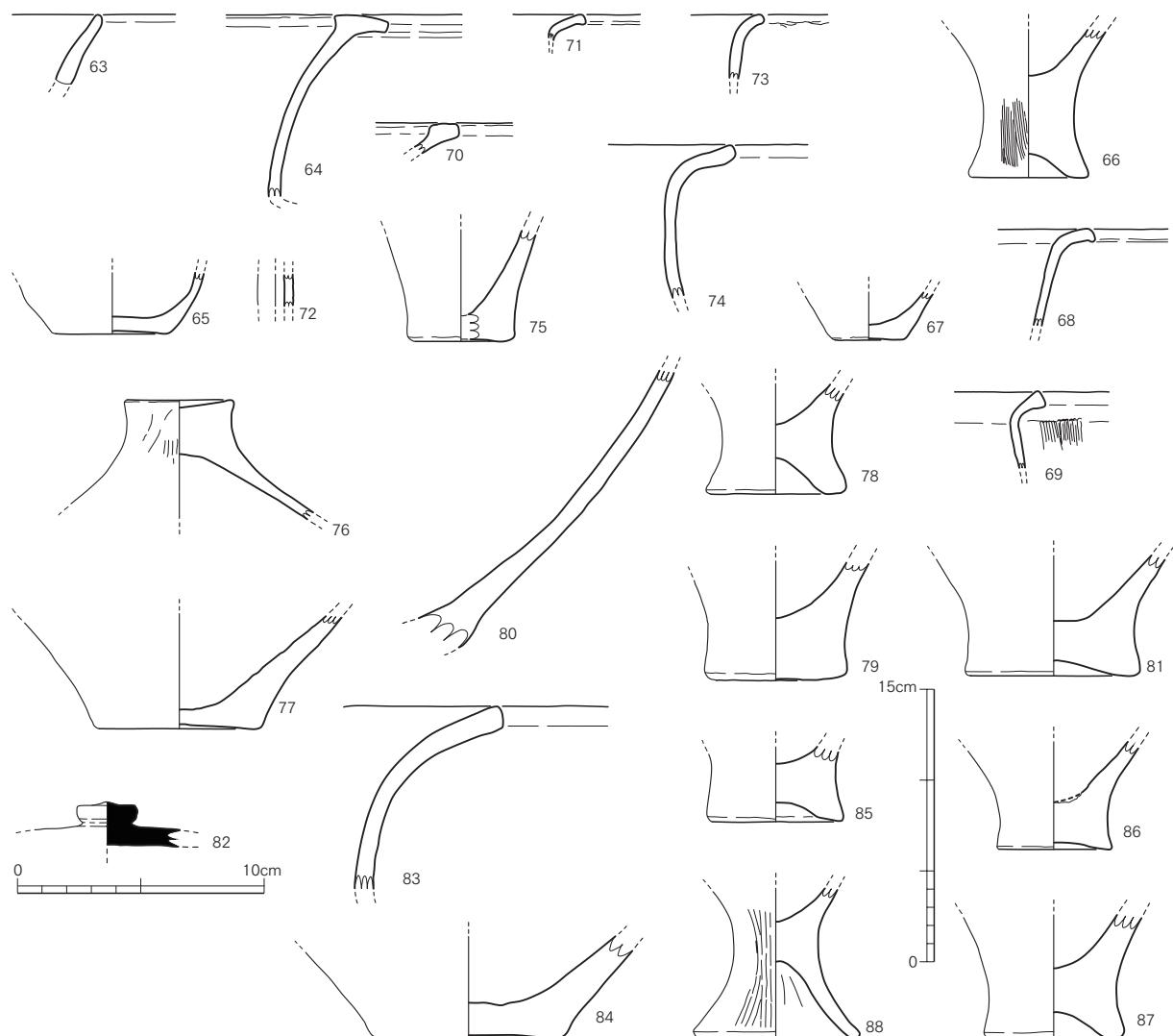
Pit56 出土遺物（第63図82）

須恵器杯蓋 宝珠を潰したようなやや扁平なつまみがつき、内面は不定方向のナデ調整、外面はつまみ部は横ナデ、他はつまみ貼り付け後の横ナデ調整を施し、つまみ部径2.5cm、残存高1.7cmを測る。胎土には精良であり、内外面ともに灰白色を呈し、焼成は良好である。

Pit61 出土遺物（第63図73～75）

全て弥生土器、73、74は甕の口縁部、73は如意形、74はやや強く屈曲し、口縁端部はやや肥厚する、73は内面は風化により調整は不明瞭、外面はナデ調整を施し、残存高3.5cmを測る胎土には2mm以下の砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。74は内外面ともにハケ目調整のちナデ調整を施し、残存高8.3cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内外面ともにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

75は甕の底部、内外面ともに風化により調整は不明瞭、復元値で底径6cm、残存高5.9cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内面橙色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。



第63図 調査区④出土遺物実測図1 弥生土器、須恵器(1/4、82のみ1/3)

石器 (第 64 図 17、図版 53)

台石 花崗岩の扁平な円礫が欠損したので、敲打による痘痕状の凹みと磨耗痕がみられる。残存長 20.5cm、厚さ 7.3cm、重量 1134g を測る。

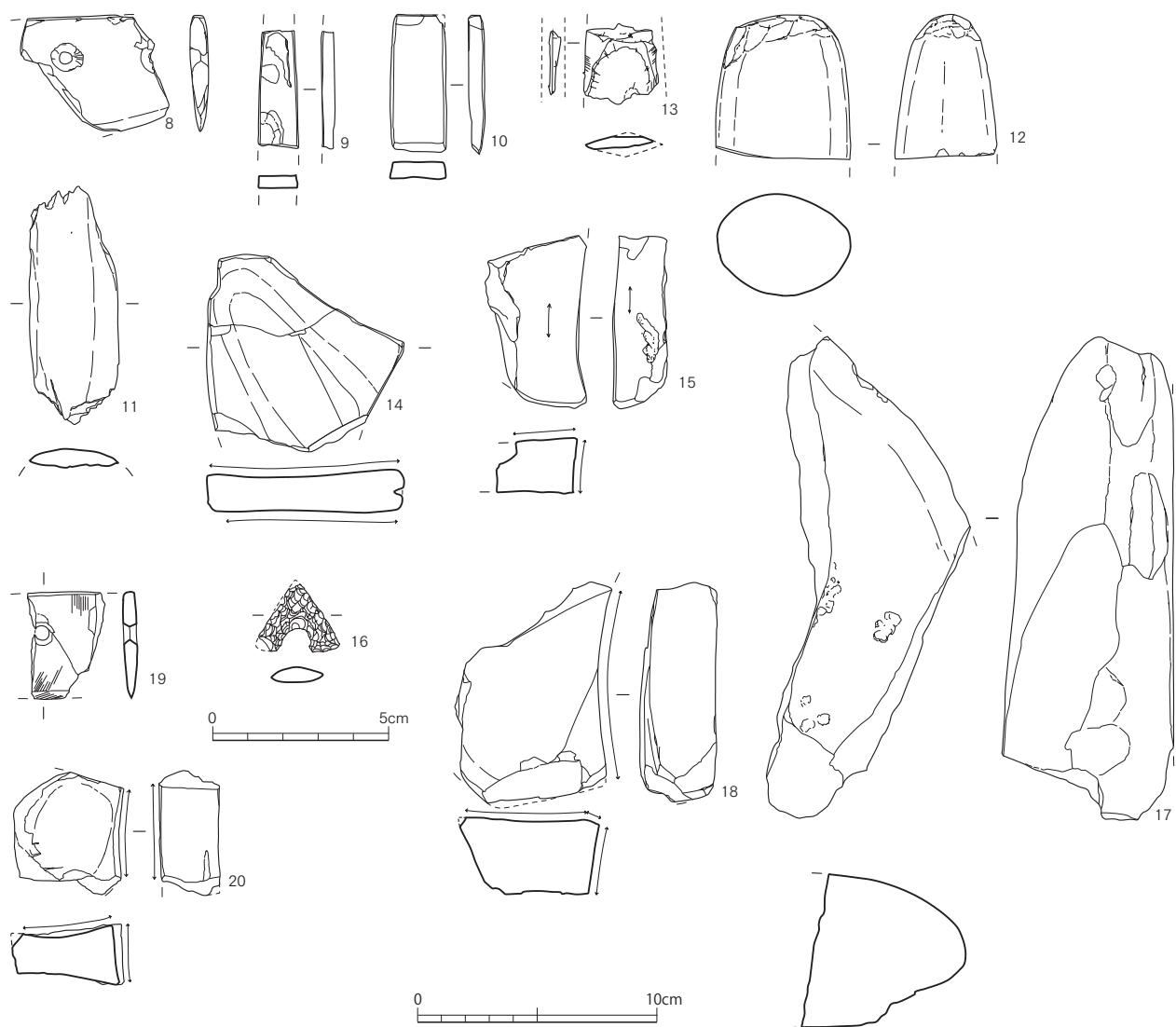
Pit69 出土遺物 (第 63 図 76、図版 45)

弥生土器蓋、内面は風化により調整は不明瞭、外面はハケ目のちナデ調整を施し、つまみ部径 6cm、残存高 6.2cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を多く含み、内面はにぶい橙色、外面は橙色を呈し、焼成は良好である。

Pit73 出土遺物 (第 63 図 77、78、図版 45)

いずれも弥生土器、77 は壺の底部、内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 9.2cm、残存高 5.8cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面橙色、外面明黄褐色を呈し、焼成は良好である。78 は甕の底部、上底状となり、内外面とも風化により調整は不明瞭であり、底径 7.7cm、残存高 5.5cm を測る。

Pit87 出土遺物 (第 64 図 18、図版 53)



第 64 図 調査区④出土遺物実測図 2 石器 (1/3、16 のみ 1/2)

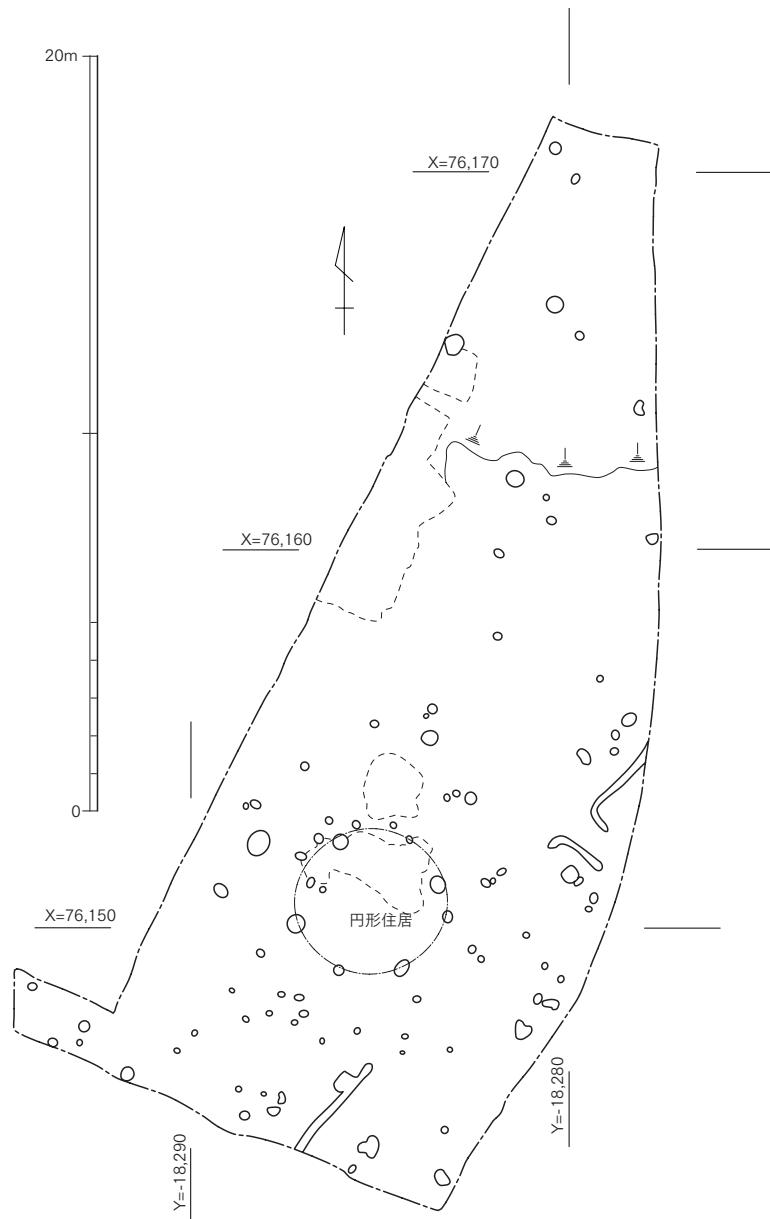
泥岩質石材製の仕上げ砥石で、図示する2面が砥面に使用された。9.0×6.5cm、厚さ3.3cm、重量258gを測る。

Pit89 出土遺物（第63図79）

弥生土器甕の底部、内面はナデ調整を施し、外面は風化により不明瞭であり、底径7.8cm、残存高6.4cmを測る。胎土には2mm以下の細砂粒を多く含み、内面灰褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

Pit117 出土遺物（第63図80、図版45）

弥生土器壺の体部片、下端の形状から底部付近の破片と考えられ、内外面ともには風化のため調整は不明瞭であるが外面には赤色顔料が残り、残存高15cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。



第65図 調査区⑤遺構配置図(1/200)

Pit300 出土遺物 (第 63 図 81、図版 45)

弥生土器甕の底部、上底状となり、内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径 9.6cm、残存高 7.4cm を測る。胎土には 1mm 以下の細砂粒を含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

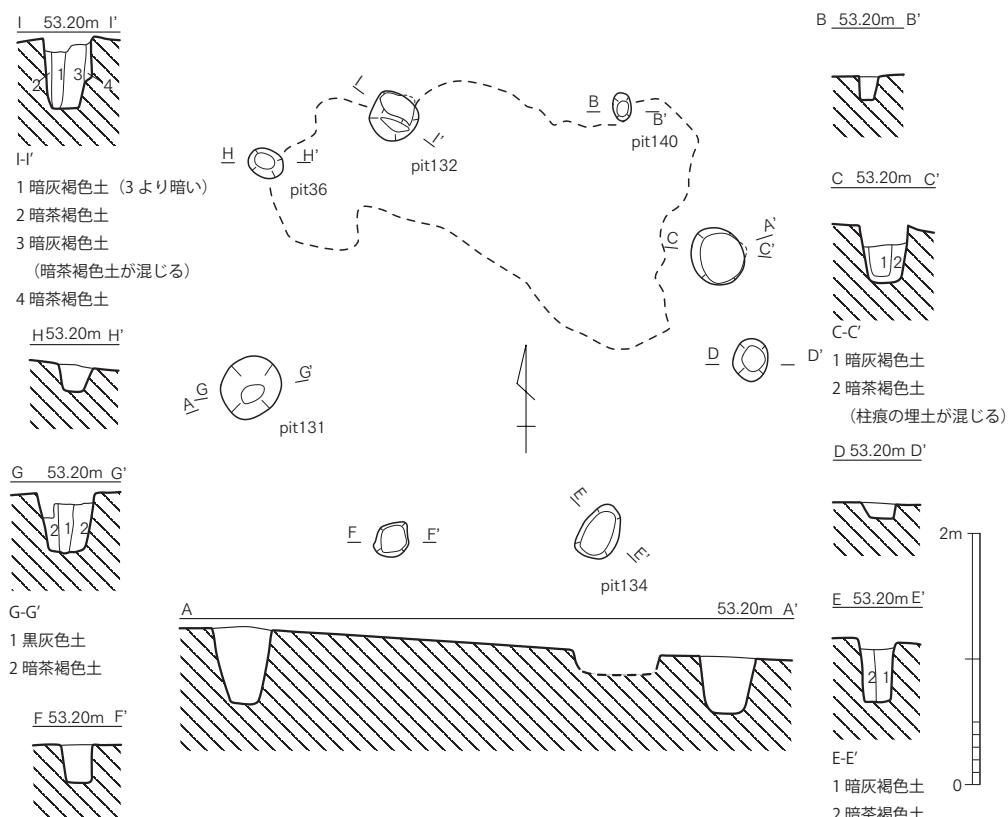
2) 遺構検出面出土遺物 (第 63 図 83 ~ 88、図版 45)

全て弥生土器、83 は壺の口縁部、外反し外へ広がる、内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整不明瞭であり、残存高 10cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともににぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。

84 は壺の底部、内外面ともにナデ調整を施し、底径 10.5cm、残存高 5cm を測る。胎土に 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面浅黄橙色、外面にぶい褐色～橙色を呈し、焼成は良好である。

85 ~ 87 は甕の底部、85、87 は上底状を呈し、85 は内外面ともに風化により調整は不明瞭で、底径 7.5cm、残存高 3.8cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい黄褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。86 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 6.3cm、残存高 5.5cm を測る。胎土には 1mm 以下の細砂粒を含み、内外面ともに明赤褐色を呈し、焼成は良好である。87 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 7.7cm、残存高 6.5cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい黄橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

88 は台付甕の脚部、内面はナデ調整、外面はハケ目調整、脚部内面はナデ調整を施す。底径 8.8cm、残存高 8.2cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。



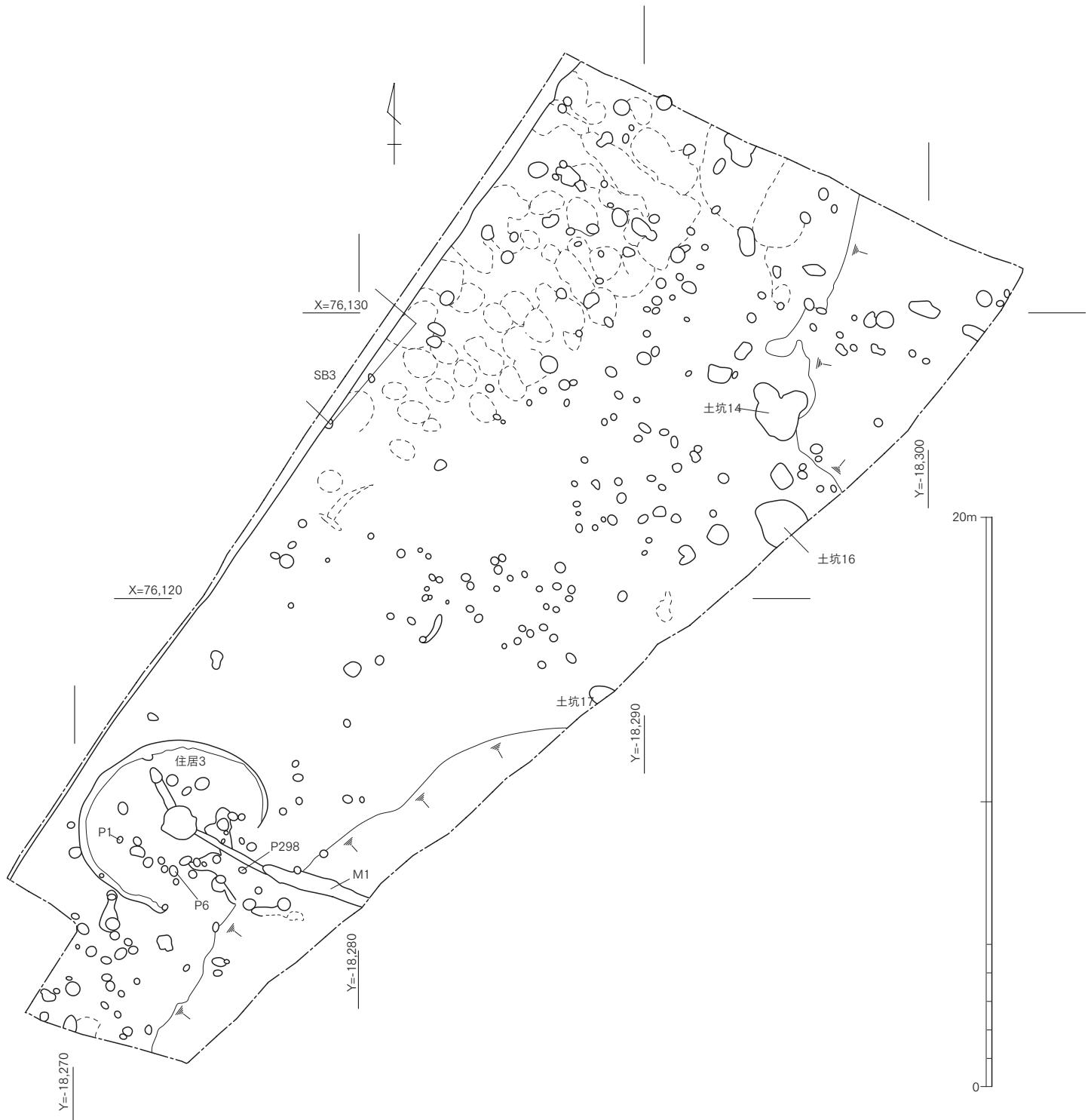
第 66 図 住居 6 実測図 (1/60)

3) 調査区内採集遺物

石器 (第 64 図 19、20、図版 52、53)

19 は頁岩質石材の石包丁片で、穿孔に紐ズレ痕は確認できない。

20 は泥岩系の細粒砂岩製の仕上げ砥石片で、図示する 2 面が砥面に利用されるが凹面の窪みが顕著である。



第 67 図 調査区⑥遺構配置図 (1/200)

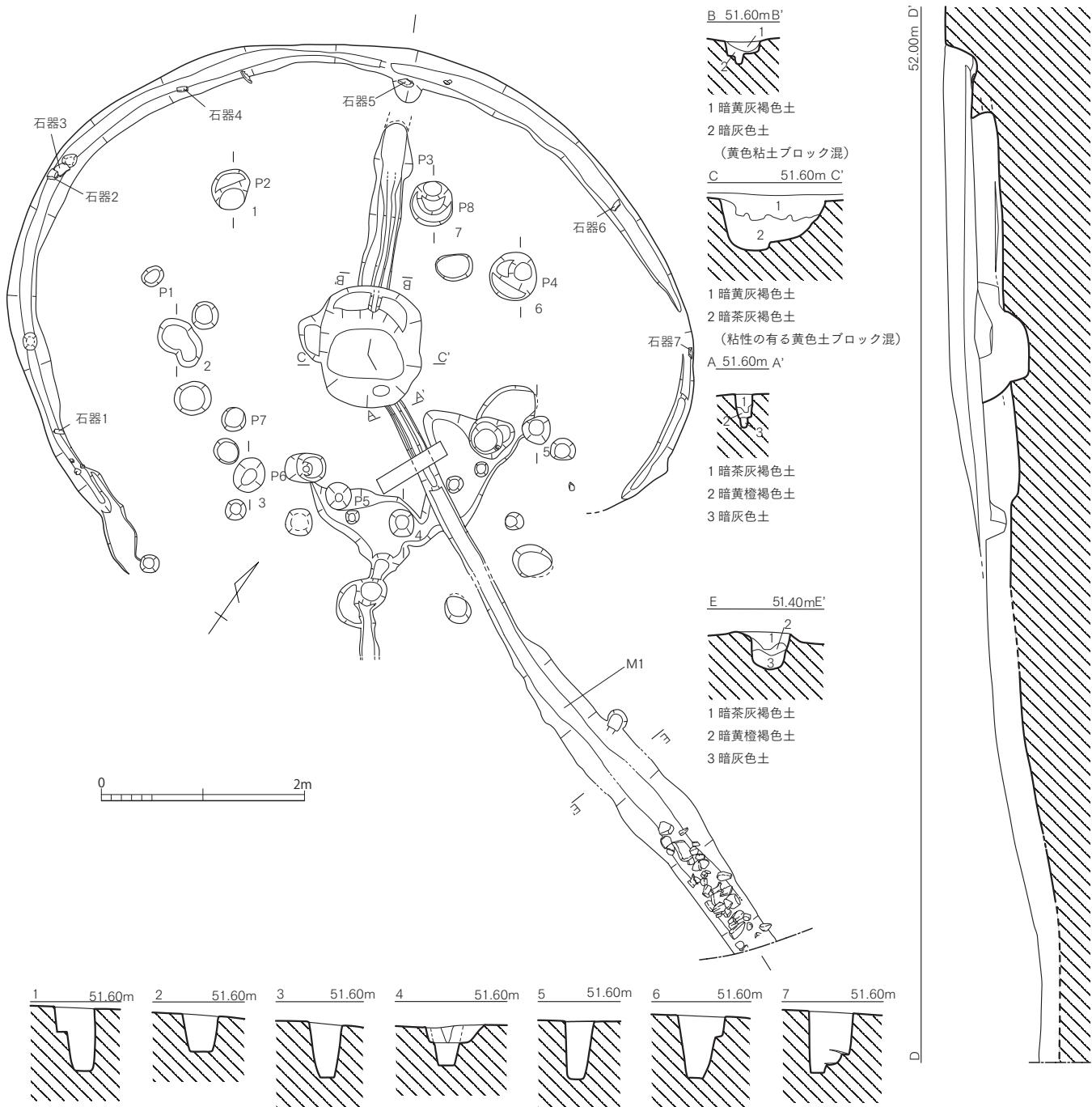
この他に先端側が欠損した姫島産黒曜石製打製石鏃片 1 点も発見されたが図示しない。

なお、図示はしないが Pit25、29 で各 1 点腰岳産黒曜石剥片が、Pit84 で粘板岩質石材製の穿孔部が残る石包丁片 1 点も出土したが図示に堪えない。

調査区⑤(第 65 図)

(1) 概要

道路予定部分にトレンチ 8 を設定し掘り下げたが、地山まで削平を受け遺構、遺物は確認できない。水路で削平を受ける部分は遺構、遺物が確認でき水路工事での影響範囲を調査対象とした。遺



第 68 図 住居 3 実測図 (1/60)

構の分布は希薄である。

(2) 遺構と遺物

①住居

住居6(第66図)

掘り方は残存しないが、柱穴の配置状況から円形住居と判断した。柱穴の中央で直径3.8m程の小型の住居と考えられる。

調査区⑥(第67図)

(1) 概要

トレンチ9、13～15より遺構の分布は希薄であり遺物等も確認できないため北半部は調査対象より外し、南半部のみを調査対象とした。

調査区北側では遺物に須恵器が混じり新しい時代の遺構が存在した可能性がある。

(2) 遺構と遺物

①住居

住居3(第68図、図版21～24)

南北主軸N-56°-E、東側は削平を受けるが、全体の4/5ほど残存している。残存部より南北6.54m、東西5.2mのやや楕円形と考えられる。

住居内周溝が残存し、同じように4/5ほど確認できる。幅は20cm程度、深さは15cm程である。この住居内周溝では意図的に置かれたものか、砥石や石斧などの石製品が7点在する。

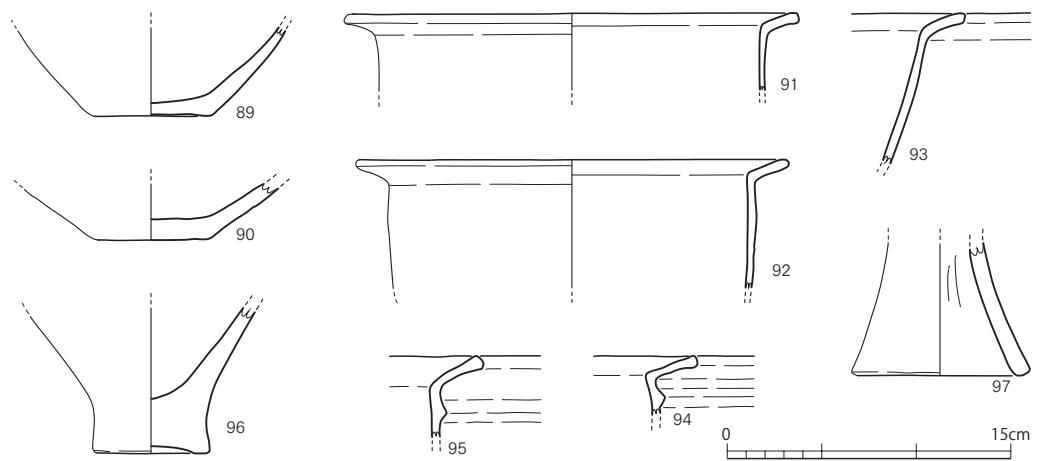
屋内土坑より東西へ延びる排水溝を確認した。東側の溝は住居内ではトンネル状となり住居外の東西方向に流れる溝1につながる。屋内土坑の土層観察では、土坑内の堆積は2層確認でき上層は暗灰褐色土、下層は暗茶褐色土であり粘性のある橙色のブロックが混入する。下層は止水層と考えられ、上層に相当する部分の土坑東壁に排水溝の取水口がある。

屋内土坑より伸びる排水溝であるが、屋内土坑の東側では最も上層は暗茶褐色土(貼床)、その下部に暗茶褐色土、暗黄橙褐色土、最下層は溝の埋土と考えられる暗灰色土が続く。貼床の下部に2層の堆積が溝の蓋のように確認できることから当初より排水溝はトンネル状に作られたと考えられる。溝は住居外へ延び溝1につながり斜面の下部へ流れ出る。西側では暗茶褐色土(貼床)は凹状に堆積し、その下部は黄色の粘土ブロックの混入した暗灰色土である。東側と違い明確にトンネルを意識し、蓋をしたような構造ではない。西側の周溝は調査区⑦の東端にある土坑につながると考えられる。

出土遺物

弥生土器(第69図89～97、図版45)

89、90は壺の底部、いずれも内外面ともに風化し調整は不明瞭である。89は復元底径6cm、残存高4.5cmを測る。胎土には1mm前後の細砂粒を含み、内面浅黄橙色、外面灰褐色を呈し、焼成は良好である。90は復元底径6cm、残存高2.7cmを測る。胎土には1mm以下の細砂粒を多く含み、内面橙色、外面灰白色を呈し、焼成は良好である。91～95は甕の口縁部、91、92の口縁部は逆L



第 69 図 住居 3 出土遺物実測図 (1/4)

字状に屈曲し外側へ伸び口縁部はやや肥厚し、94、95 ではくの字状に外側へ伸びやや肥厚し、口縁下部に断面三角形の突帯を 1 条巡らし、端部は上方へ摘み上げたような形態である。91 は内外面ともに風化し不明瞭であり、復元口径 24cm、残存高 4cm を測る。胎土には細砂粒を含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。92 内外面ともに風化し不明瞭であり、復元口径 23cm、残存高 6.8cm を測る。胎土には細砂粒を含み、内外面ともにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。93 は内外面ともに風化し不明瞭であり、残存高 8cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい黄橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成はやや不良である。94 は内外面ともに風化し不明瞭であり、残存高 3cm を測る。胎土には細砂粒を含み、内面灰褐色、外面にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。95 は内外面ともにナデ調整を施し、残存高 4.2cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。96 は甕の底部、内面は風化により調整不明瞭、外面はナデ調整を施し、底径 6.2cm、残存高 7.4cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、淡赤褐色を呈し、焼成は良好である。97 は器台の脚部、内面はしぶり痕が残り、下部はナデ調整を施し、外面は風化により不明瞭であり、底径 9.4cm、残存高 7cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

石器 (第 72 図 21 ~ 33、図版 53)

21 は住居内 Pit8 から出土したアズキ色輝緑凝灰岩製石包丁の端部片。背は直線的で刃部側縁との角度が 60° 以上あり、ほとんど使用しないうちに欠損した破片と思われる。

22、23 は磨製石斧、22 は周溝内出土の柱状片刃石斧片、乳白色を帯びる頁岩質で、幅 1.9cm、厚さ 2.1cm、残存長 5.7cm の方柱状で片刃の刃部先端と基部側を失う。重量 29g。23(石器 4) は周溝内出土の緑色片岩製偏刃磨製石斧。敲打成形後に研磨仕上げする。刃部先端を欠くが残存長 11.8cm、幅 4.9cm、厚さ 2.6cm、重量 245g を測る。

24 ~ 26 は磨製石剣、24 は周溝内出土、25 は住居内 p.1 出土。24 は頁岩製の磨製石剣基部側破片。残存長 5.1cm、関部幅 2.7cm、厚さ 0.6cm、重量 14g を測る。茎部は長さ 1.9cm、幅 2.1cm。25 は粘板岩質の関に近い身部片と思われるが片側縁は敲打痕の後に研磨を加えていて石包丁片の可能性も排除し難い。

26 は打製石鏃、周溝内出土のサヌカイト製凹基鏃。両面ともに押圧剥離される。

27～30は砥石、何れも周溝内出土の27は粘板岩、28(石器3)、30は凝灰岩質細粒砂岩の仕上げ砥石。29(石器2)は花崗岩質砂岩の中砥石である。27は3cm角ほどの小破片で、折損面にも研磨痕がみられるため砥石以外の用途の可能性も排除できない。28(石器3)は長さ12.5cm、幅8.9cm、厚さ2.3cm、重量259gを測り、砥面は僅かに中凹みになる。29(石器2)は10cm×7cm、厚さ4.5cm、重量243gを測る。30(石器6)は残存長13cm、7×7cm程の六角柱状破片で重量805gを測り、3面が砥面に使用されている。

31～33は周溝内の(石器1、5、7)で、何れも周溝内出土で、順に花崗岩質、珪化木、緑色片岩質の石材。長さ11～13cm、幅4.5～6cmの大きさで、部分的に磨耗する。

この他に黒曜石、サヌカイトの剥片が各1点出土したが図示しない。

②土坑

土坑14

出土遺物

弥生土器(第71図108～112、図版46)

108は壺の口縁部、口縁端部は肥厚し外面に沈線上の窪みがめぐる。内面は横ナデ、外面はナデ調整を施し、口径15cm、残存高3.8cmを測る。胎土には細砂粒を少量含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。109は壺の胴部から肩部にかけてであり、胴部最大径付近と肩部にそれぞれ1条の断面台形状の突帯が巡る。内面は風化により不明瞭であり、外面には下部にミガキ調整を施す。胎土には2mm以下の細い砂粒を含み、内外面ともにぶい橙色を施し、焼成は良好である。

110～112は甕の底部であり、110はそれほど顕著ではないものの全て上底状となる。110は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径8.2cm、残存高8cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内面灰褐色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。111は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径6.3cm、残存高7cmを測る。胎土には2mm以下の細砂粒を多く含み、内面にぶい褐色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。112は二次的な被熱の痕跡があり、内外面ともにナデ調整を施し、底径7cm、残存高5.5cmを測る。胎土には細砂粒を含み、2mm程度の砂粒を若干含む。内面にぶい橙色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

石器(第72図34、図版53)

淡青灰色の輝緑凝灰岩製石包丁で端部を欠損するが残存長12cm、幅3.9cm、厚さ0.7cm、重量42gを測る。穿孔には背側寄りに紐ズレ痕が確認される。

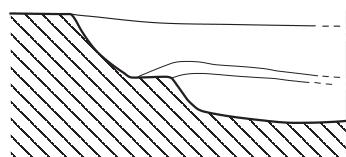
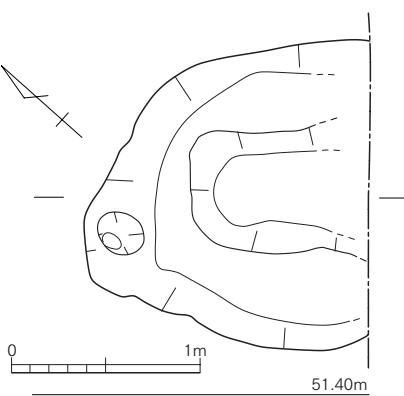
土坑16(第70図、図版24)

調査区の北東隅にある、主軸方位N-42°-W、残存部で東西1.45m、南北1.59m、深さ0.5mを測る。2段に掘りこまれ、東半部は調査区外へ延びるが、擁壁等が設置され削平されているものと考えられる。

土坑17

出土遺物(第72図35、図版53)

アズキ色の輝緑凝灰岩製石包丁片で残存長6.9cm、残存幅4.1cm、厚さ0.7cm、重量29gを測る。



第 70 図 土坑 16 実測図 (1/40)

③溝

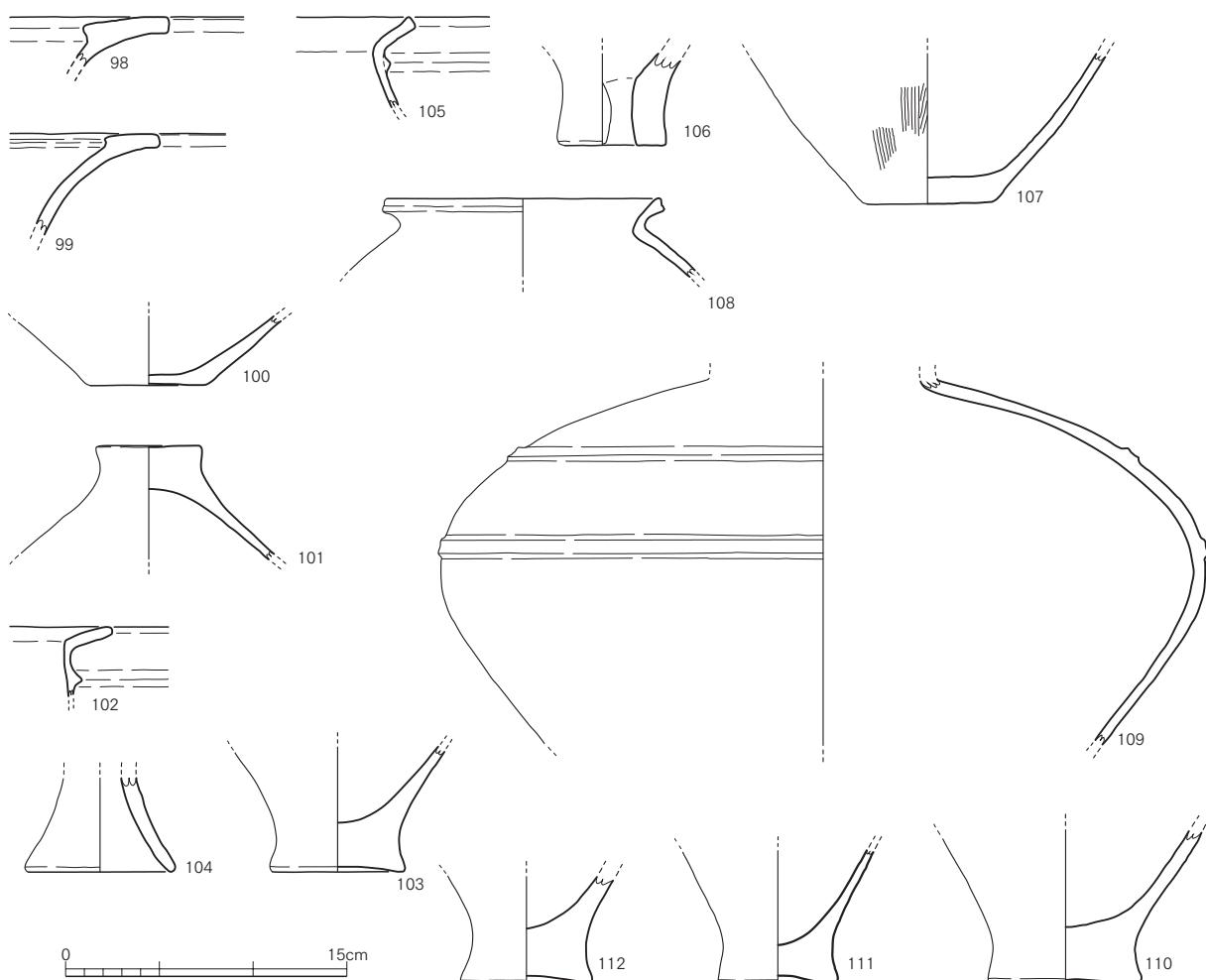
溝 1(第 67 図、図版 22)

住居 3 の屋外排水溝になる溝。

出土遺物

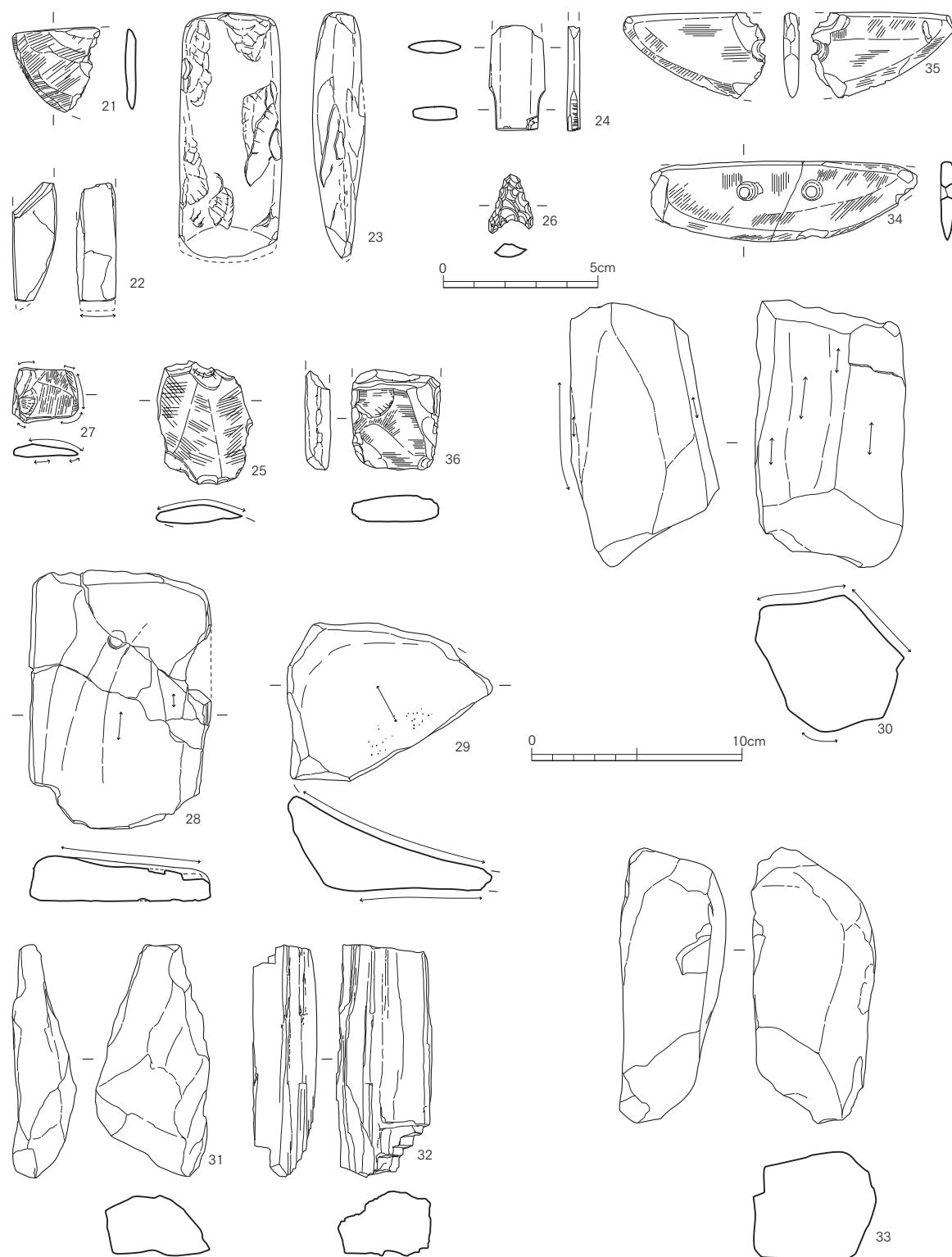
弥生土器 (第 71 図 98 ~ 104、図版 45)

98、99 は壺の口縁部、いずれも口縁端部は肥厚しいわゆる鋤先状口縁である。98 は内外面ともに風化し調整は不明瞭であり、残存高 2.5cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。99 は内外面ともに風化し不明瞭であるが内面にごく一部ナデ調整を施し、残存高 5.3cm を測る。胎土には 1mm 前後の砂粒を含み、内面橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。100 は壺の底部、内外面ともに風化し調整は不明瞭であり、底径 6.4cm、残存高 3.4cm を測る。101 は蓋、内外面ともに風化し調整は不明瞭であり、つまみ部径 5.6cm、残存高 5.8cm を測る。胎土には細砂粒と 4mm 程度の粗い砂粒を含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。102 は甕の口縁部、口縁部の中ほどがやや肥厚し、



第 71 図 調査区⑥・⑦出土遺物実測図 弥生土器 (1/4)

口縁下部に断面三角形の突帯を1条巡らす。調整は内外面ともに風化し不明瞭であり、残存高3.6cmを測る。胎土には1mm前後の砂粒を含み、内面灰褐色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。103は甕の底部、調整は内外面ともに風化し不明瞭であり、底径7.2cm、残存高6.4cmを測る。胎土には1mm以下の細砂粒を含み、内面浅黄橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。104は



第72図 調査区⑥出土遺物実測図 石器(1/3、26のみ1/2)

器台の底部、内外面ともに風化し調整は不明瞭であり、底径8cm、残存高5cmを測る。胎土には2

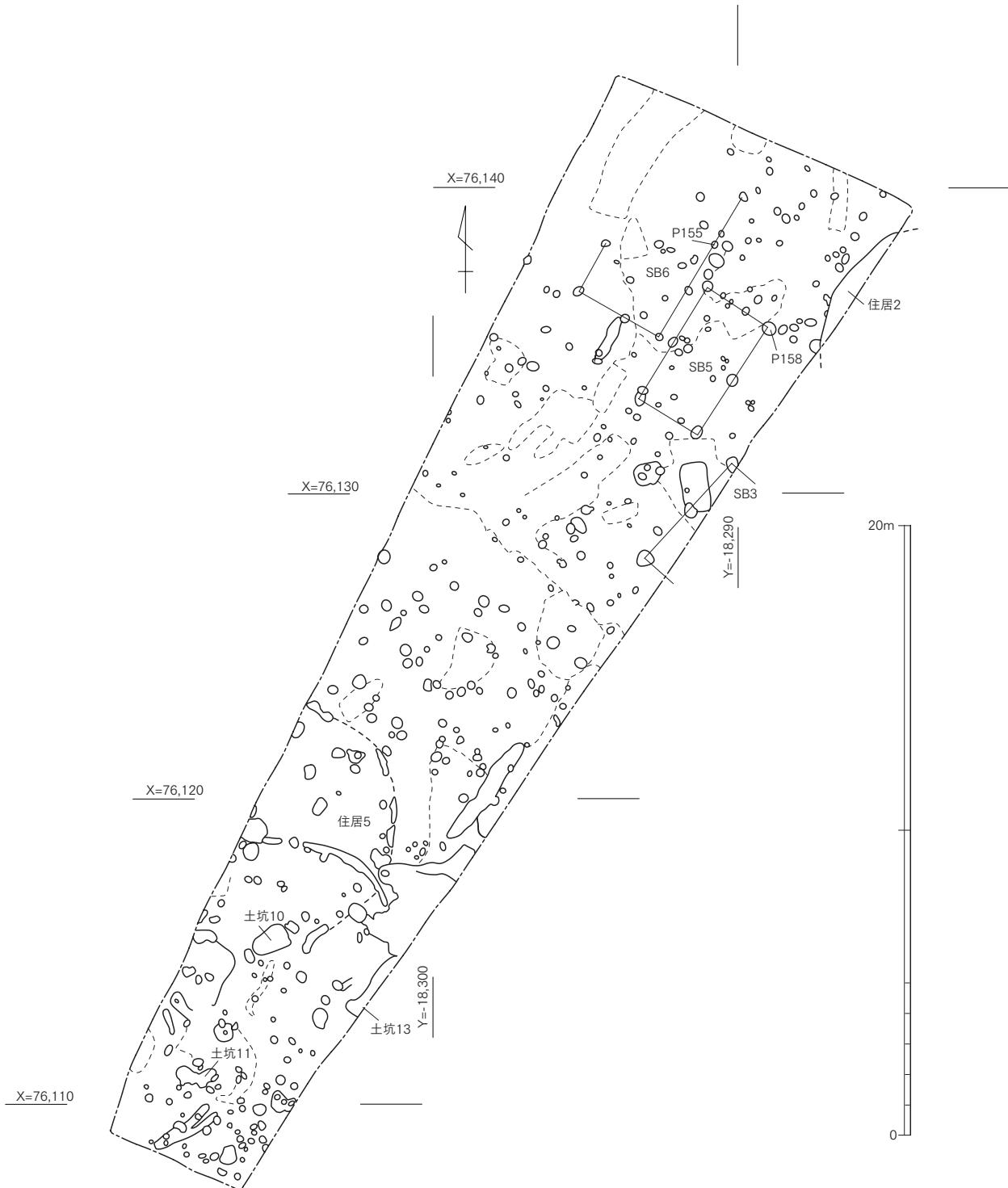
mm以下の砂粒を含み、内面淡赤橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

④その他の出土遺物

Pit

Pit298 出土遺物 (第 72 図 36、図版 53)

石戈、粘板岩質石材の破片で残存長 4.8cm、幅 4.3cm、厚さ 1.2cm の大きさ、3 側縁が敲打調整後



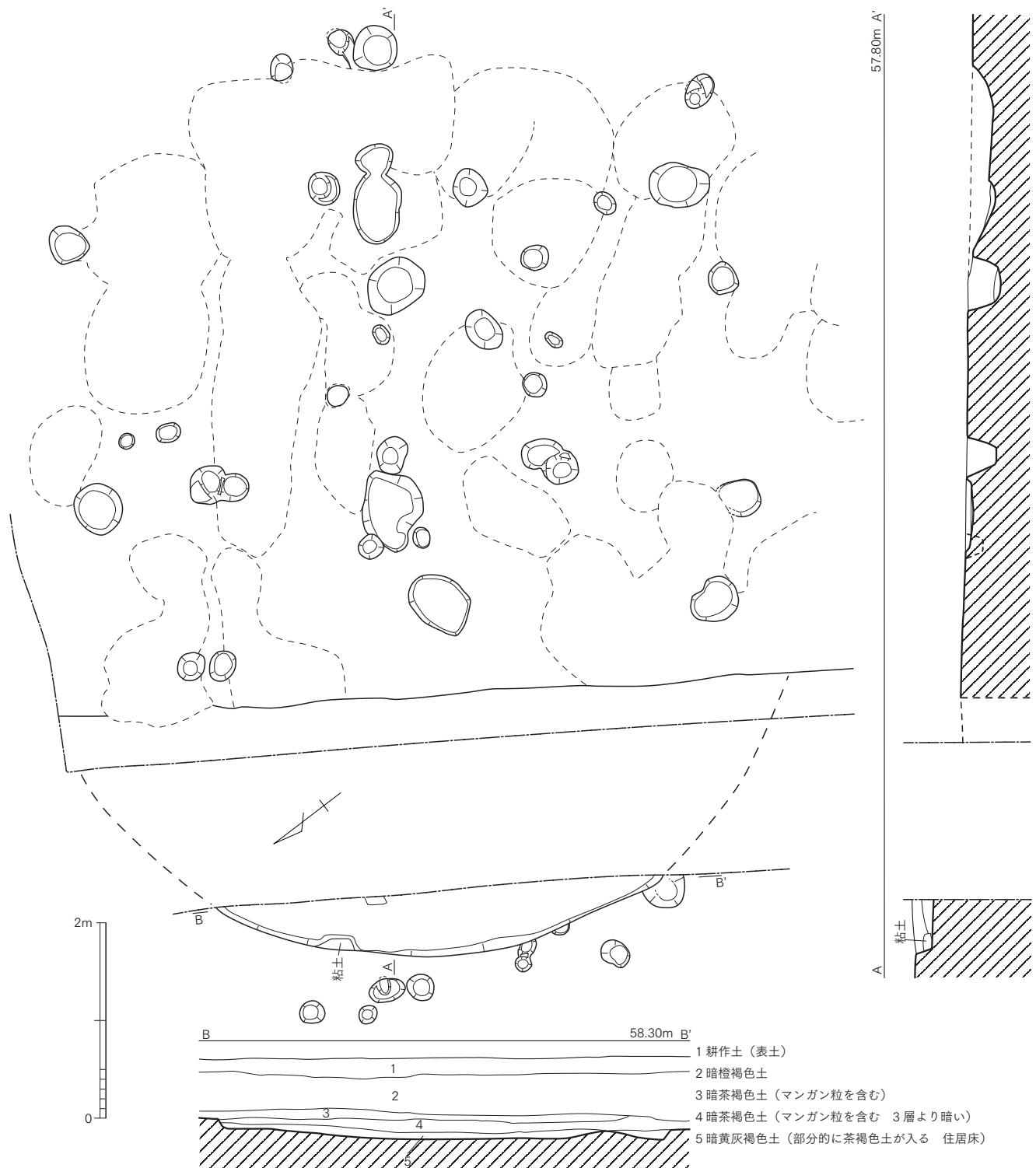
第 73 図 調査区⑦遺構配置図 (1/200)

に研磨が加わり、他の1面が折損することからみて石戈の茎部であろう。

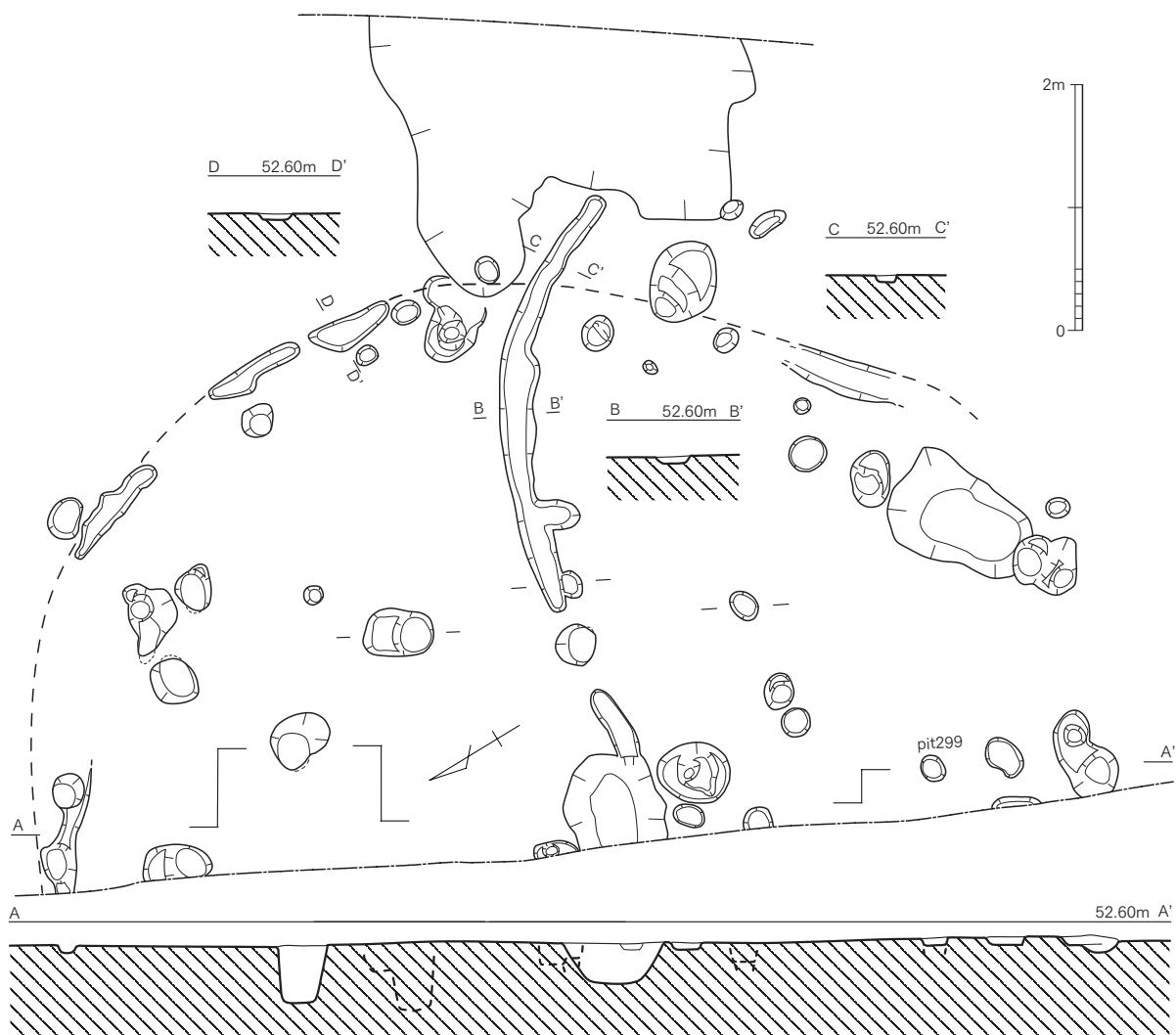
調査区⑦(第73図)

(1) 概要

トレーナー10を掘削、遺構の分布を確認。西半部は盛土による造成が行われるため調査対象外とし、



第74図 住居2実測図(1/60)



第 75 図 住居 5 実測図 (1/60)

水路の影響範囲のみを調査対象とした。

基本土層 (第 74 図、図版 25)

住居 2 の東壁で土層観察を行った。20cm程度の耕作土 (表土)、その下層は 30 ~ 40cm程度の暗橙褐色土の整地層が確認できる。この層の下層から遺物等が確認できるマンガン粒を含む暗茶褐色土が 20cm程度続く。このマンガン粒を含む層は上層と下層に分離でき、下層のほうがやや暗い。その下は部分的に茶褐色土が入る暗黄灰褐色土、住居の床と考えられる層が続く。

(2) 遺構と遺物

①住居

住居 2 (第 74 図、図版 25)

西側の一部を検出した。貼床が 10cmほど確認でき円弧状の形態から住居と想定した。この住居に伴うと考えられる土坑、Pit を調査区⑥で確認し、円形住居と考えられる。

出土遺物

石器（第 81 図 37、図版 53）

砥石 4 層で出土、花崗岩製の方形石材で、図示する 23.0cm × 18.5cm の扁平面の約半分が中凹みの砥面になる。砥石以外にも作業台として使用された可能性がある。高さ 9.0cm で重量約 6,600g を測る。

住居 5(第 75 図)

削平を受け住居の掘方等は残存していない。そのため当初は住居との認識はなかったが、調査区南の中央付近で排水溝と考えられる溝を確認、この溝は調査区西端の土坑につながると考えられ住居 3 の状況から見て住居になる可能性が高いと判断した。

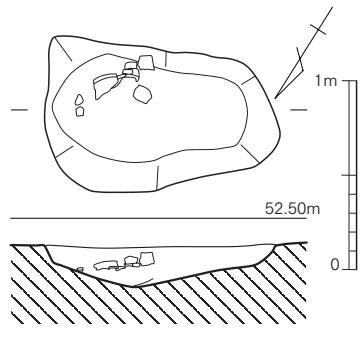
②土坑

土坑 10(第 76 図、図版 26)

主軸方位 N-56.5° -E、南北 1.3 m、東西 1.26 m、深さ 0.23m。弥生土器の甕が倒れた状態で出土。土坑 11 も同様の状態であり性格は同じであると考えられる。

出土遺物（第 71 図 105、106、図版 45）

全て弥生土器、105 は甕の口縁部、口縁下部に 1 条の断面三角形の突帯が巡り、口縁端部はややつまみあげ、肥厚する。内外面ともにナデ調整を施し、残存高 4.7cm を測る。胎土には細砂粒と 8mm 程度の礫を若干含み、内面橙色、外面浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。106 は甕の底部、調整は風化により不明瞭であり、二次的な被熱を受けた痕跡がみられ、底径 5.8cm、残存高 4.5cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内面褐灰色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。



第 76 図 土坑 10 実測図 (1/40)

土坑 11 出土遺物（第 71 図 107、図版 46）

弥生土器壺の底部、内面は風化により不明瞭、外面には下部にはハケ目調整を施し、底径 7cm、残存高 7.8cm を測る。胎土には細砂粒と 5mm 程度の礫を含み、内面にぶい黄橙色、外面灰黄褐色を呈し、焼成は良好である。

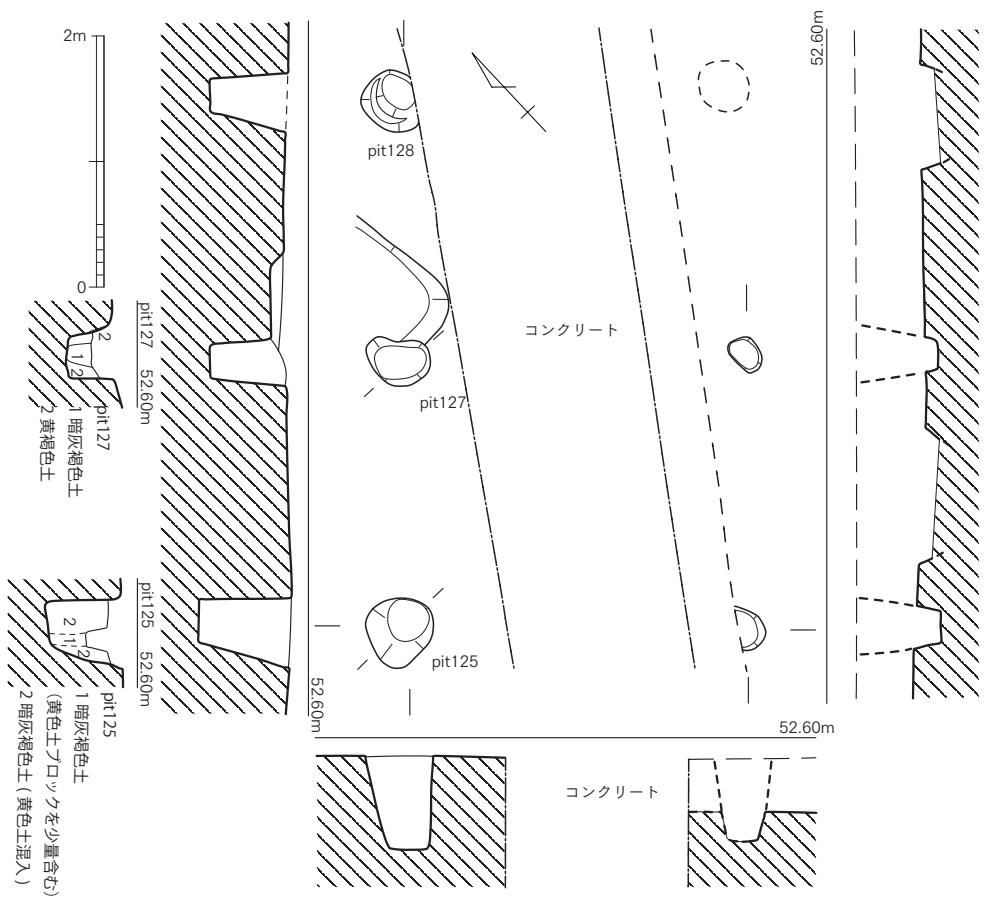
③掘立柱建物

SB3(第 77 図)

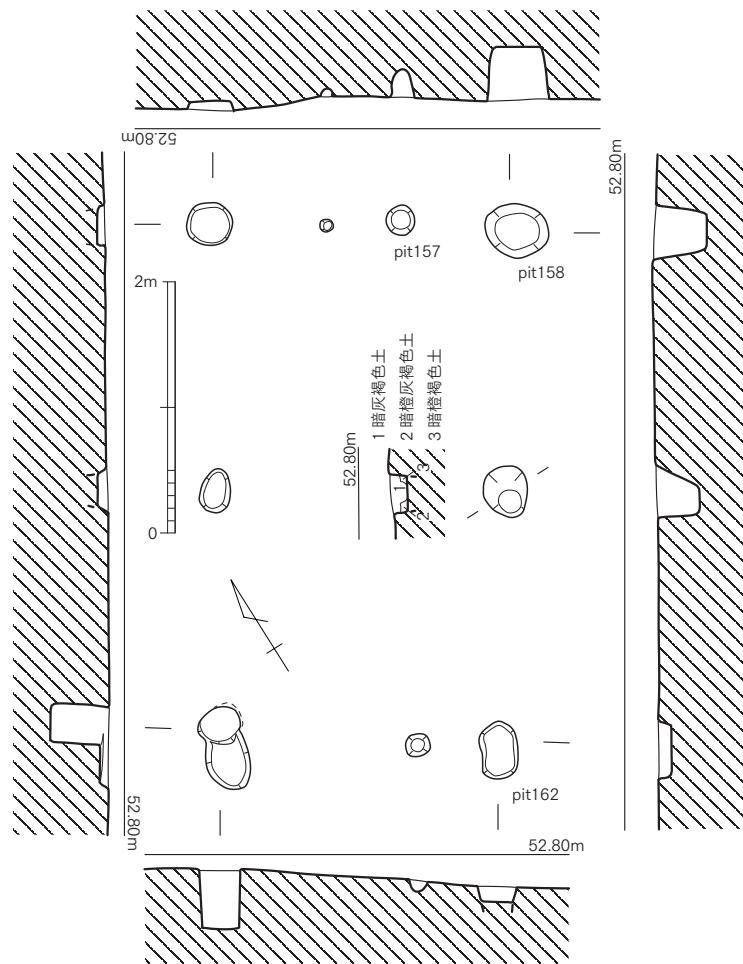
調査区の北東隅にある、調査時は不明瞭であったものの、調査区⑥と⑦にまたがる事が確認できた。主軸方位 N-43° -E、現状で 5 本の柱穴を確認している。

SB5(第 78 図)

主軸方位 N-33° -E、現状で 6 本の柱穴が確認でき、1 間 × 2 間の建物と考えられる。



第77図 SB3 実測図 (1/60)



第78図 SB5 実測図 (1/60)

SB6(第79図)

主軸方位 N-31°-E、現状で7本の柱穴が確認でき、2間×3間の建物と考えられる。

④その他の出土遺物

Pit

Pit155 出土遺物

(第81図38、図版53)

アズキ色の輝緑凝灰岩製の破片で穿孔が2孔あり、片方には穿孔縁に沿って同心円の傷が巡る。重量40gを測る。

Pit58 出土遺物

石器

磨製石斧未製品

(第81図39、図版53)

玢岩製で敲打成形した段階で折損したもの。残存長13.9cm、幅7.0、厚さ4.4cm、重量740gを測る。

この他に⑦のPit128から砂岩製の砥石小片1点、Pit181から腰岳産黒曜石剥片1点が出土したが図示に堪えない。

調査区⑦表採遺物

石器(第81図40、図版53)

緑色の雲母片岩製の基部端が僅かに凹む全面研磨の扁平な磨製石鏃で長さ3.7cm、幅2.0cm、厚さ0.2cmの大きさ。

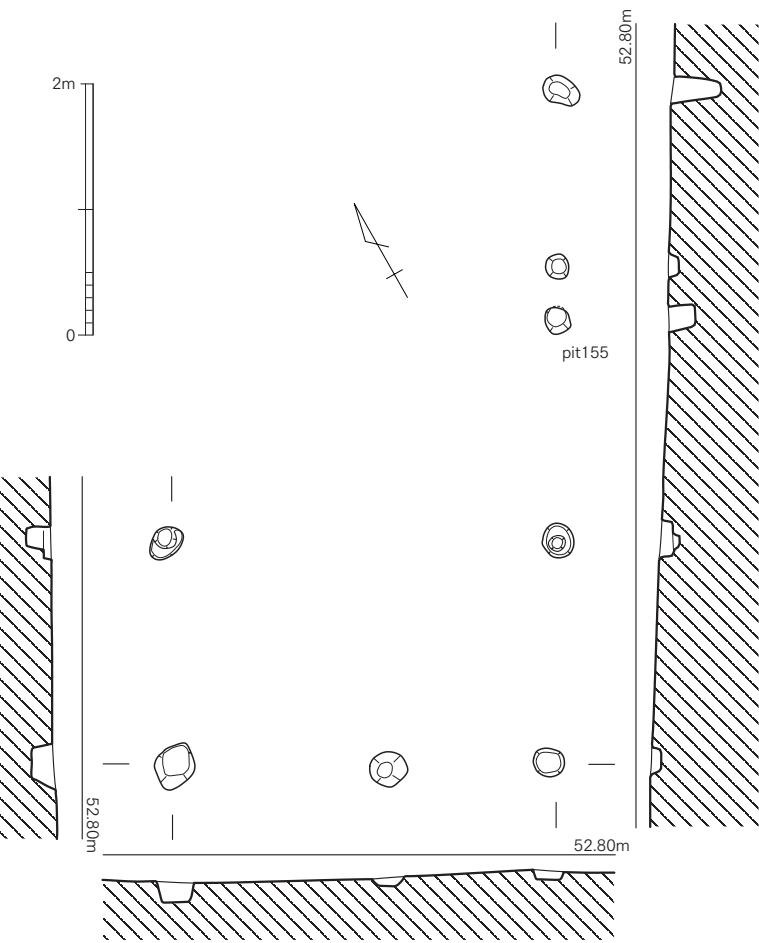
なお、⑦では頁岩質石材の石包丁小片2点と、凝灰岩製の穿孔部が残る石包丁片1点も採集されたが図示に堪えない。

調査区⑤・⑦遺構面出土遺物

(第80図113～122、図版46)

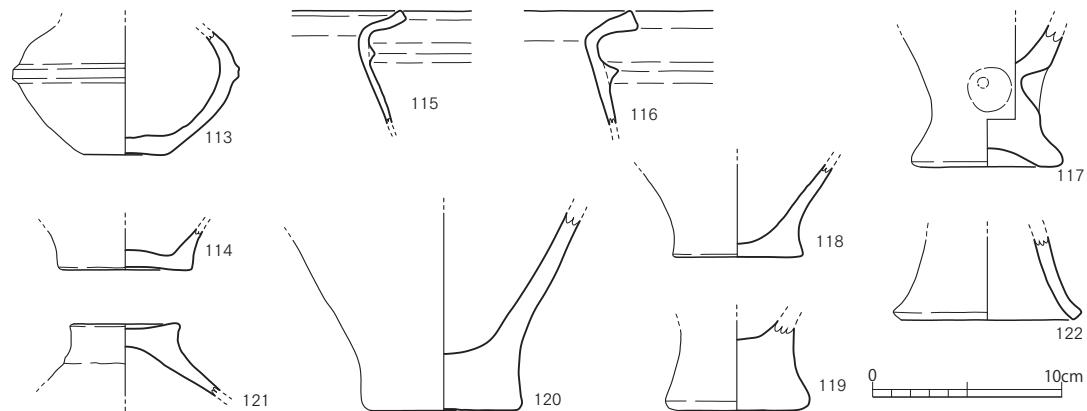
全て弥生土器で、117のみ⑤、他は⑦出土である。

113は頸部から口縁部を欠く小型の壺、胴部には1条の断面台形の突帯が巡る。調整は内外面ともに風化により不明瞭であり、底径4.5cm、胴部径11.9cm、残存高6.8cmを測る。胎土には2mm前後の少し粗い砂粒を多く含み、内面灰黄褐色、外面にぶい黄橙色を呈し、焼成はやや不良である。114は底部より上部を欠く壺の底部、内面には指頭圧痕が残り、外面はナデ調整を施し、底径7.1cm、

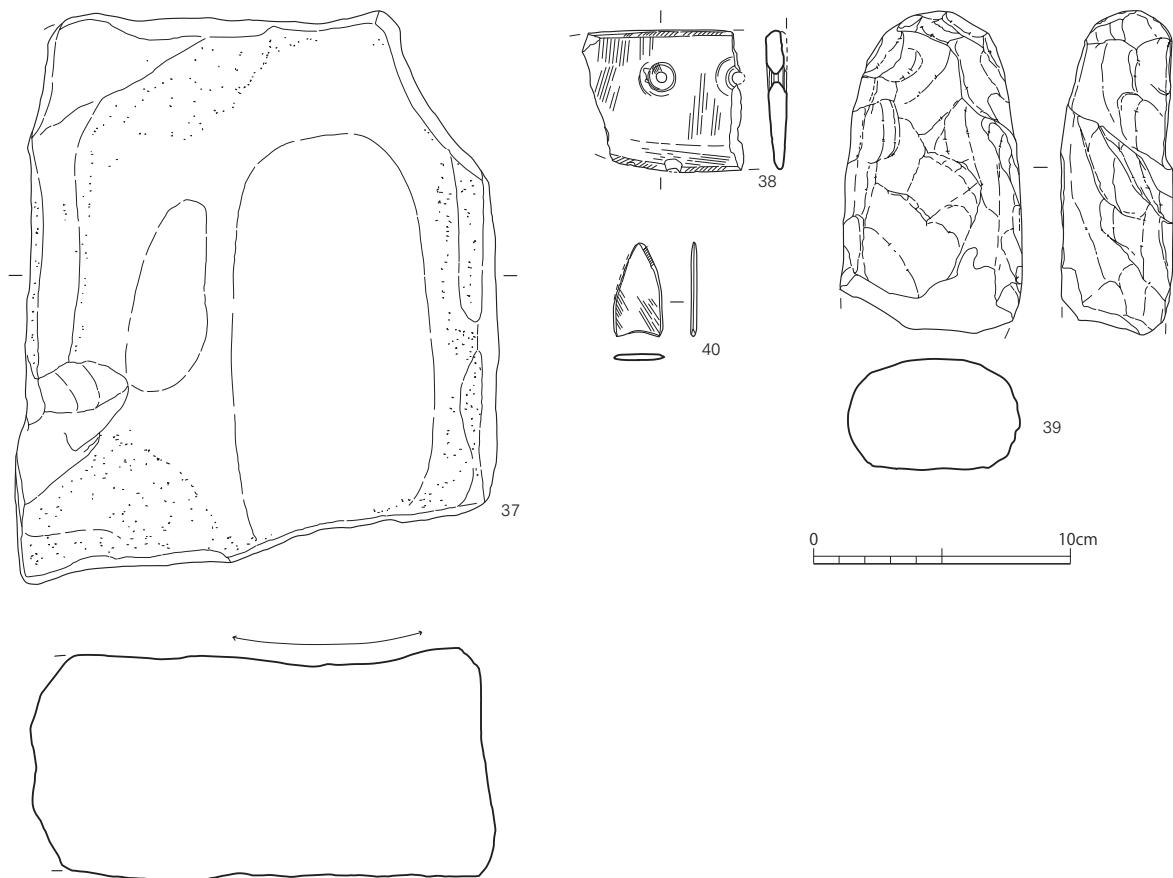


第79図 SB6 実測図(1/60)

残存高 2cm を測る。115、116 は甕の口縁部、どちらも口縁下部に 1 条の断面三角形の突帯が巡り、口縁端部はややつまみあげ、肥厚する。115 は内外面ともに風化により調整は不明であり、残存高 5.9cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を含み、内面橙色、外面明褐灰色を呈し、焼成は良好である。116 は内外ともにナデ調整を施し、残存高 6cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を多く含み、内面浅黄橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。117～120 は甕の底部、117 には焼成前に施された $2.3 \times 2.4\text{cm}$ の円形の窪みが残り、118 では二次的な被熱を受けたような痕跡が残る。117 の調整は内外面ともにナデ調整を施し、底径 8cm、残存高 6.8cm を測る。胎土には 2mm 前後の砂粒を多く含み、内面赤色、外面赤橙色を呈し、焼成は良好である。118 の調整は内外面ともに不明瞭であり、



第 80 図 調査区⑤、⑦出土遺物実測図 弥生土器 (1/4)



第 81 図 調査区⑦出土遺物実測図 石器 (1/3)

底径 6.8cm、残存高 4.7cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を含み、内面褐灰色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。119 の調整は内外面ともに不明瞭であり、底径 7.6cm、残存高 4.3cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面明赤褐色、外面灰褐色を呈し、焼成は良好である。120 の調整は内外面ともに不明であり、底径 8.5cm、残存高 10cm を測る。胎土には 3mm 以下の少し粗い砂粒を多く含み、内面褐灰色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。121 は蓋、内外面ともに風化し調整は不明瞭であり、つまみ部径 5.8cm、残存高 3.8cm を測る。胎土には細砂粒を含み、内面明褐灰色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

122 は器台の底部片である。内面はナデ調整、外面は風化により不明であり、底径 10cm、残存高 4.4cm を測る。胎土には細かい砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。

調査区⑧(第 82 図)

(1) 概要

トレンチ 11、12 より西半部は削平を受け遺構等の残存はない。水路の影響範囲には遺構が残るため、水路の影響範囲を調査対象とした。遺構の分布は薄い。

調査区⑩(第 83 図)

(1) 概要

53cm の掘削が予定され、トレンチ 19 の状況等から表土面より -50cm で遺構面を確認した。全面が削平を受けるため、⑩全面を調査対象とした。

(2) 遺構と遺物

①住居

住居 4(第 84 図、図版 26)

調査区の南東隅にある、わずかに住居の西端部が残り、形状と貼床上の痕跡が確認できたため住居とした。主軸方位 N-65°-E、東西 0.7 m、南北 2.75 m、深さ 0.2 m 程残存する。

出土遺物

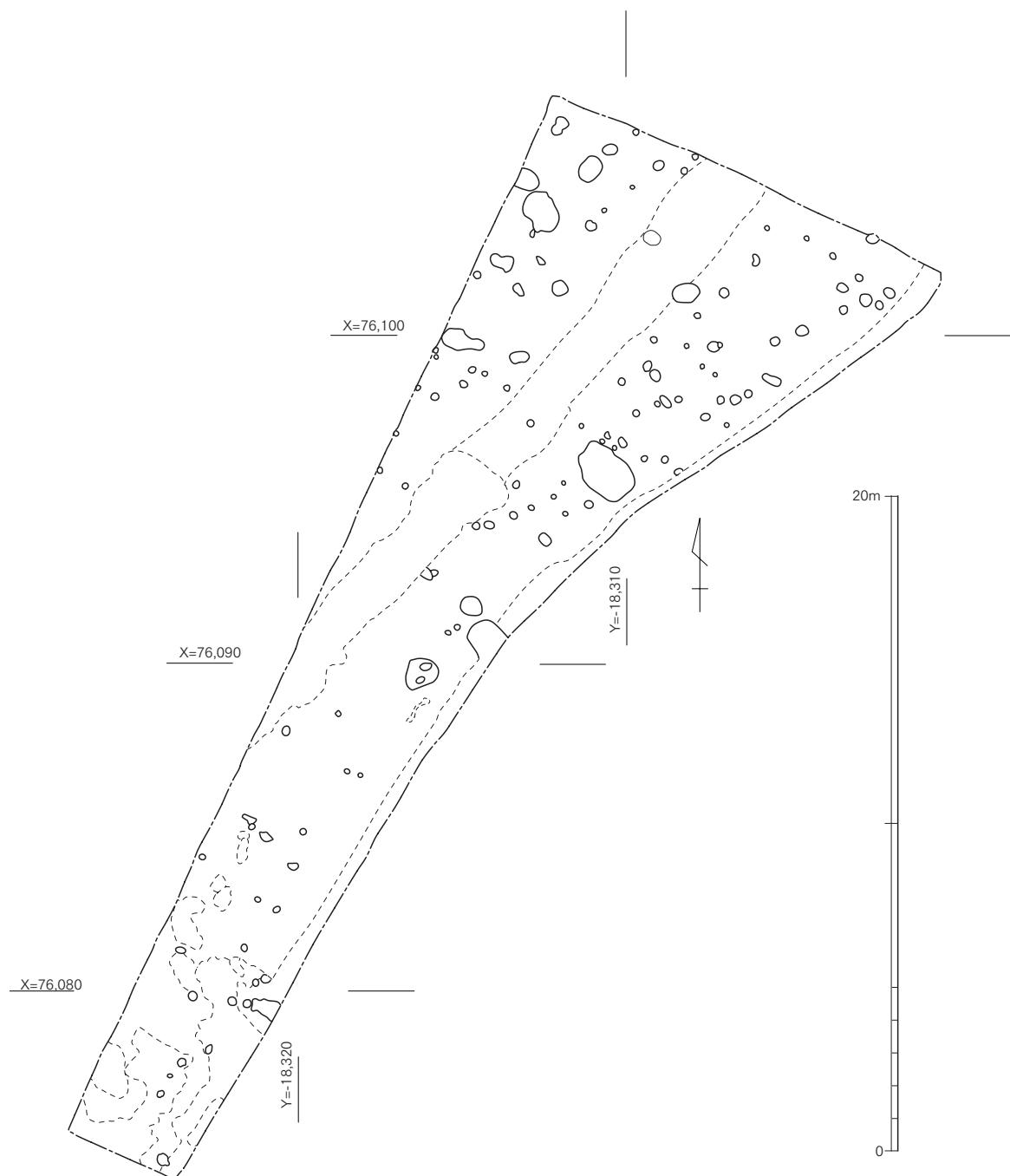
弥生土器(第 85 図 123、124、206、207、図版 46)

123 は壺の底部、内外面ともに風化し調整は不明瞭であり、底径 6cm、残存高 6cm を測る。胎土には 4mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。

124 は甕の口縁部、口縁はやや強く届曲し逆 L 字状に近く、下部に断面三角形の突堤が 1 条巡る。残存高 5.6cm を測り、内外面ともに風化のため調整は不明瞭である。胎土には 2mm 以下の細砂粒を多く含み、内面にぶい黄橙色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

206、207 は甕の底部、206 は内外面ともに風化のため調整は不明瞭であり、二次的な被熱を受けたような痕跡があり、底径 7.8cm、残存高 6.8cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面黒褐色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。207 の内外面ともに風化のため調整は不明瞭であり、底径 7cm、残存高 9cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面黒褐色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

②土坑



第 82 図 調査区⑧遺構配置図 (1/200)

土坑 20(第 86 図、図版 27)

調査区南東隅にある、主軸方位 N-34°-E、東西 2.24 m、南北 1.9 m、深さ 0.18 m を測る。大量の弥生土器片が出土する。

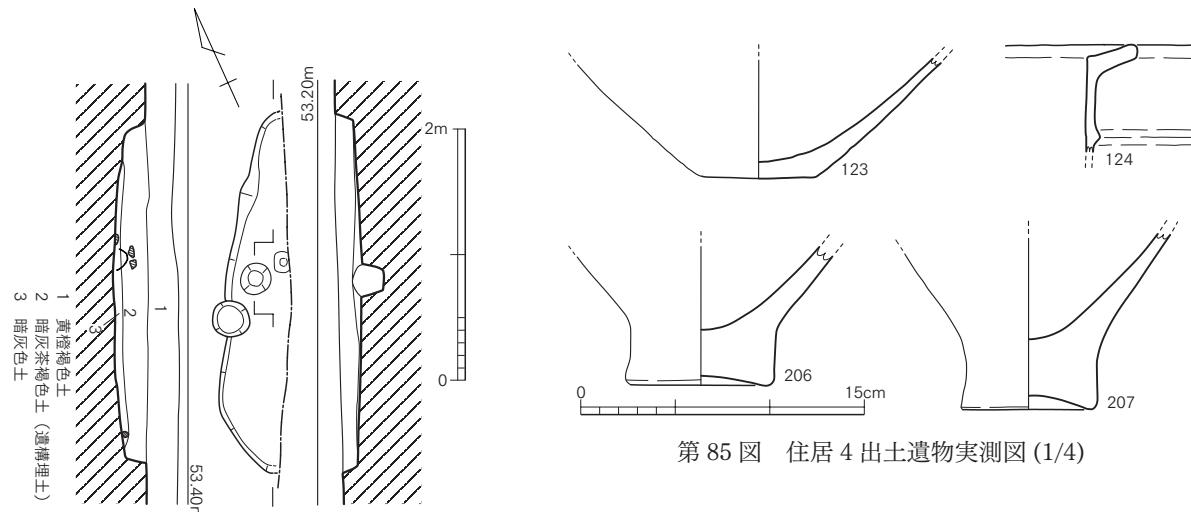
出土遺物

弥生土器 (第 87 図 125 ~ 131、図版 46)

125 は壺の底部、内面は風化の為不明瞭であり、外面はハケ目のちナデ調整を施し、底径 9cm、残存高 13cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は



第 83 図 調査区⑩遺構配置図 (1/250)



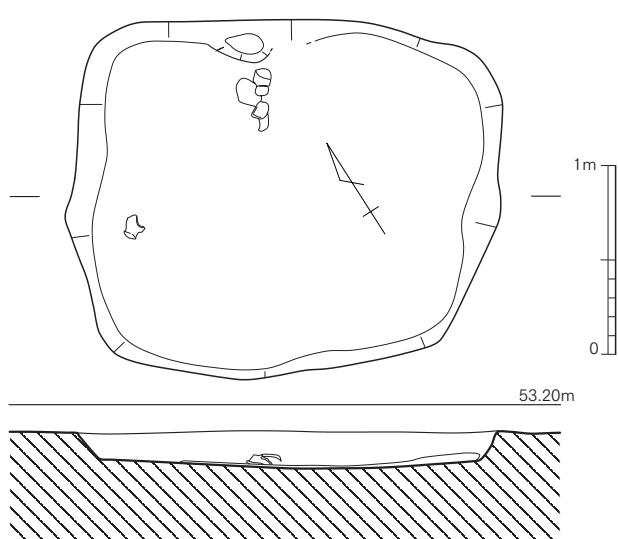
第 84 図 住居 4 実測図 (1/60)

第 85 図 住居 4 出土遺物実測図 (1/4)

良好である。

126 は甕の口縁部、126 の口縁端部はややつまみ上げるような形状である。内面の調整は風化により不明瞭であり、外面はハケ目調整を施し、体部下部に炭化物が付着する。復元口径 42cm、残存高 18cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面浅黄橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

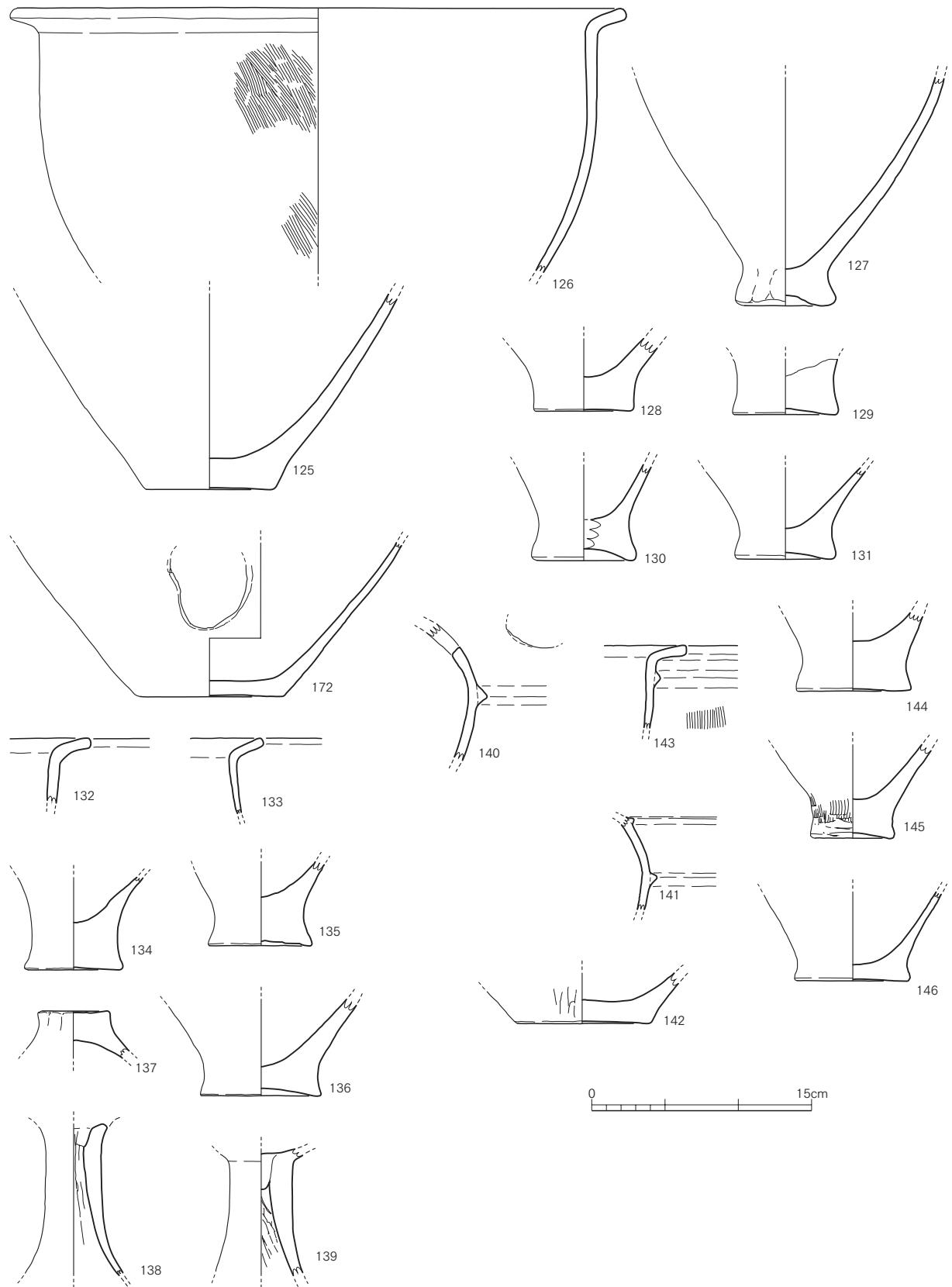
127 は甕の底部から体部、128 ～ 131 は甕の底部である。127、129 ～ 131 は上底状となる。127 は内外面共風化により調整は不明瞭、外面下部に整形の際の指頭圧痕が残り、底径 6.8cm、残存高 15.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい赤褐色、外面橙色を呈し、焼成はやや不良である。128 は内外面ともに風化により調整は不明瞭、底径 6.8cm、残存高 4.3cm を測る。



第 86 図 土坑 20 実測図 (1/40)

胎土には 4mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。129 は内外面ともに風化により調整は不明瞭、底径 7.2cm、残存高 3.8cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。130 は内面はハケ目調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭、復元底径 7.2cm、残存高 6.4cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面灰褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。131 は内外面ともに風化により調整は不明瞭、底径 6.8cm、残存高 6cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい

橙色、外面赤褐色を呈し、焼成は良好である。



第 87 図 土坑 20、23、28 出土遺物実測図 (1/4)

土坑 28

出土遺物 (第 87 図 140 ~ 146、172、図版 47)

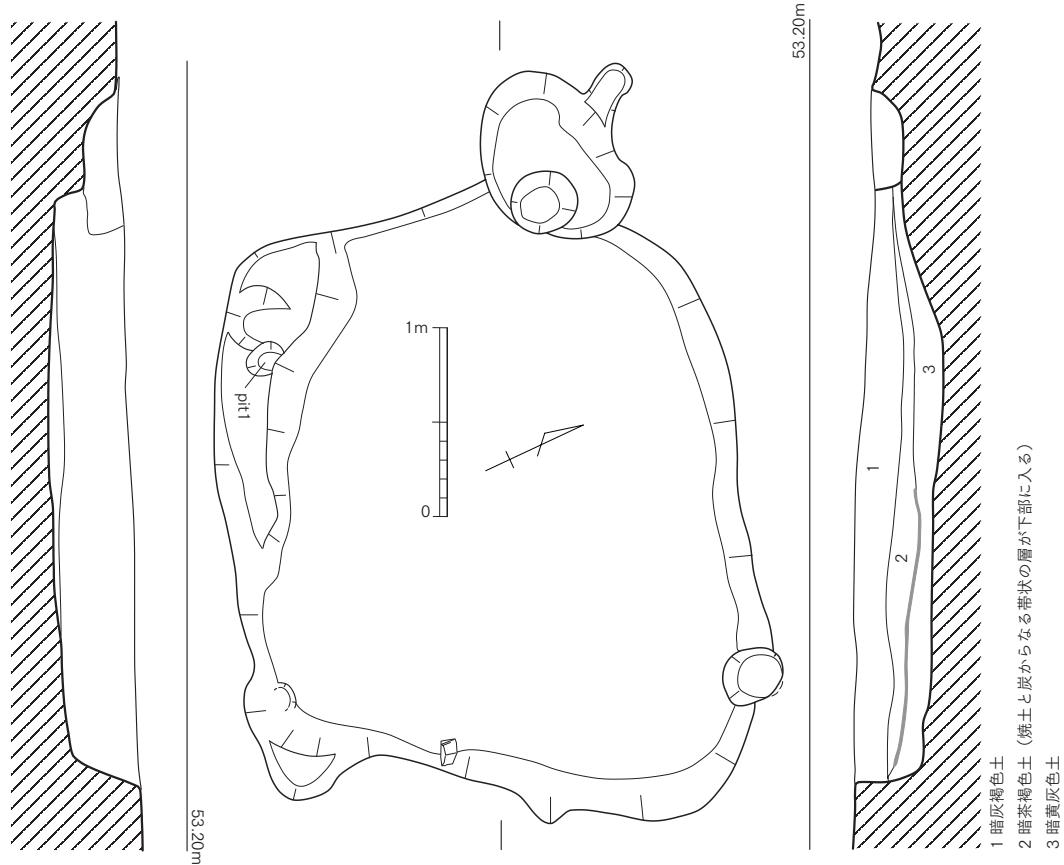
140、141 は壺の胴部片、140 では 1 条、141 では 2 条の断面三角形の突帯を巡らす。140 の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭、胴部最大径は復元値で 41cm、残存高 9.3cm を測る。胎土には 1mm 以下の細砂粒を含み、内面は褐灰色、外面は明赤褐色を呈し、焼成は良好である。141 の内面はナデ調整、外面は丁寧なナデ調整を施し、残存高 6.1cm を測る。胎土には細砂粒を含み、内面は褐灰色、外面は灰黄褐色を呈し、焼成は良好である。

142 は壺の底部、内面はナデ調整、外面は磨き調整を施し、底径 9cm、残存高 2.7cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にはにぶい橙色、外面にはにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。

143 は甕の口縁部、口縁部はほぼ直角に屈曲し、端部はやや肥厚し、口縁部下部に断面三角形の突帯を 1 条巡らす。内面はナデ調整、外面はハケ目調整を施し、残存高 5.6cm を測る。胎土には細砂粒を含み、内面は灰黄褐色、外面は褐灰色を呈し、焼成は良好である。

144 ~ 146 は甕の底部、145 はやや上底状を呈する。144 は内外面ともに風化により調整は不明瞭、底径 7.9cm、残存高 5cm を測る。胎土には 2mm 前後の砂粒を多く含み、内面は橙色、外面は明赤褐色を呈し、焼成は良好である。145 の内面はナデ調整、外面はハケ目調整を施し、底径 5.7cm、残存高 6cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を多く含み、内外面ともに明褐灰色を呈し、焼成は良好である。146 の内面は風化するものの内外面ともにナデ調整を施し、底径 7.9cm、残存高 6.9cm を測る。胎土には細砂粒を多く含み、内面灰褐色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

172 は壺の底部から体部、体部下方に焼成後に開けられた穿孔がある。172 の内外面ナデ調整を施し、底径 10cm、残存高 10.3cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙灰色を呈し、焼成は良好である。



第 88 図 土坑 29 実測図 (1/40)

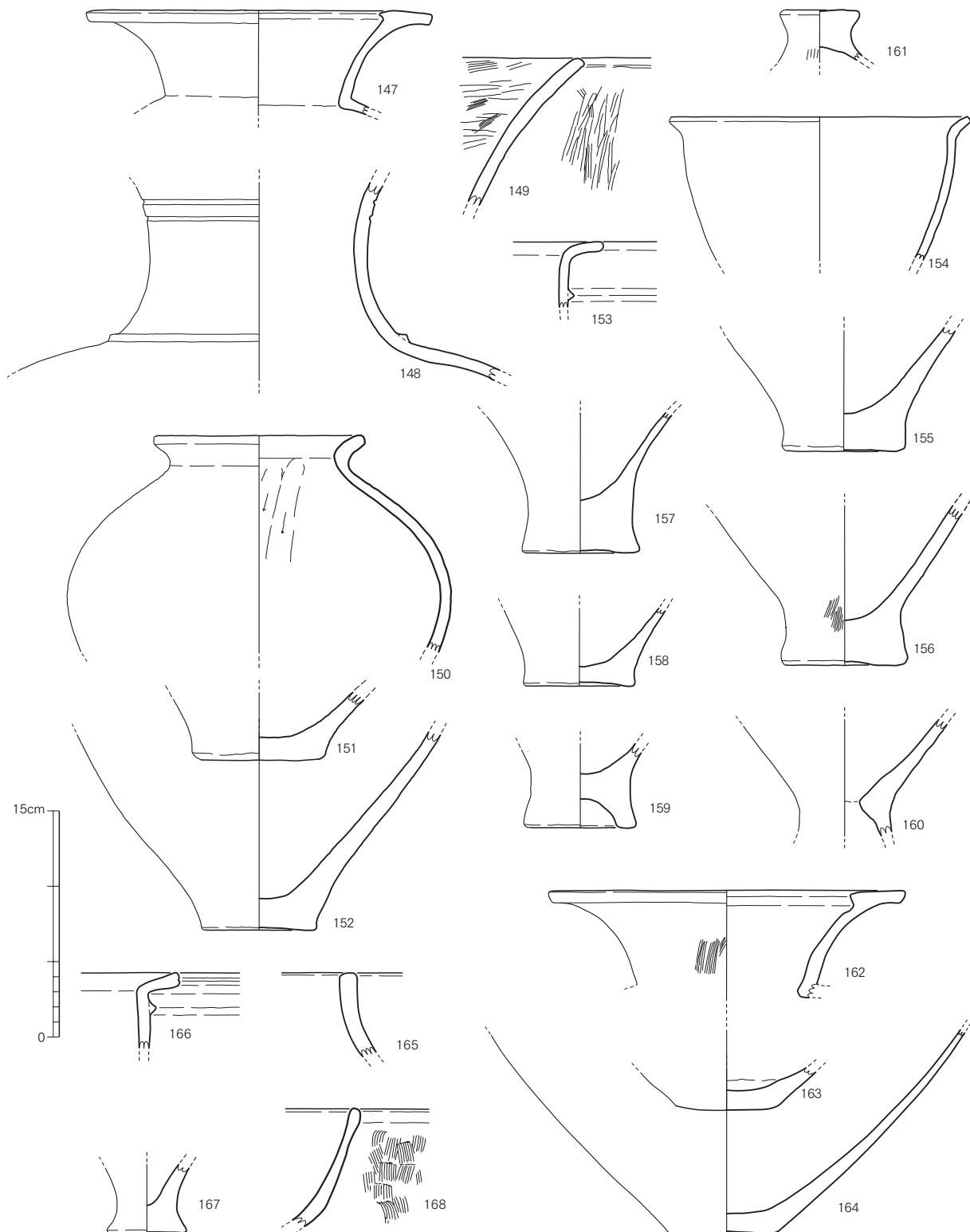
土坑 29(第 88 図、図版 27)

調査区南西隅にある、主軸方位 N-64°-W、東西 2.75 m、南北 3.22 m、深さ 0.33 m を測る。大量の弥生土器片が出土する。

出土遺物

弥生土器 (第 89 図 147 ~ 161、図版 47)

147、148 は壺の頸部から口縁部、147 の頸部は緩やかに外へ開き、口縁は肥厚し鋤先状口縁となる。
148 は体部から頸部、頸部はやや外反するもののほぼ直線的に伸び、上部に 2 条の沈線を巡らし、



第 89 図 土坑 29、30 出土遺物実測図 (1/4)

体部と頸部の境目付近には断面三角形の突帯を1条巡らす。147は内外面ともに風化により調整不明瞭、口径23cm、残存高6cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面明褐灰色を呈し、焼成は良好である。148は内外面ともに風化により調整不明瞭、復元頸部径14.4cm、残存高12cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を多く含み、内外面ともににぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。

149は壺の口縁、内外面ともにハケ目調整の後ミガキ調整を施し、残存高9.8cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内面灰黄褐色、外面にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。

150は底部を欠く壺、体部は球形に近く、頸部は短く直ぐに外へ開く口縁部が取り付く。口縁はやや肥厚する。内面にはケズリによる調整の痕跡が残り、外面は風化のために調整は不明瞭であり顔料が残る。口径13.8cm、胴部最大径25.4cm、残存高14.3cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面灰白色、外面浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。

151、152は壺の底部、151は内外面ともに風化により調整は不明瞭、底径8.8cm、残存高4cmを測る。胎土には2mm前後の砂粒を多く含み、内面灰白色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。152の内面はナデ調整、外面はハケ目調整の後ミガキ調整を施し、底径7.7cm、残存高13cmを測る。胎土には2mm前後の砂粒を含み、内面浅黄橙色、外面にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。

153、154は甕の頸部から口縁部、153は口縁は強く屈曲し逆L字状となり、口縁下部に断面三角形の突帯が1条巡る。154は体部から口縁にかけてゆるやかに外反し口縁はくの字状となる。153は内外面ともに風化により調整は不明瞭、残存高4.3cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内外面ともに浅黄橙色を呈し、焼成はやや不良である。154の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭、口径20cm、残存高9.5cmを測る。胎土には2mm前後の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色～橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成はやや不良である。

155～160は甕の底部、159のみ脚状になる。160は底部を一部欠失するが、底部中央付近に焼成前に開けられた貫通する穿孔がある。155の内外面ともにナデ調整を施し、底径8.2cm、残存高8cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。156は二次的な被熱を受けたようであり、内面はナデ調整、外面はハケ目調整の後ナデ調整、底部はナデ調整を施す。底径8.4cm、残存高10cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を多く含み、5mm程度の礫を少量含む。内面にぶい橙色、外面灰褐色を呈し、焼成は良好である。157は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径7.8cm、残存高9cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を多く含み、内面浅黄橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。158は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径7.4cm、残存高5cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面灰白色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。159は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径7.5cm、残存高5cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。160は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、穿孔は2cm、残存高7.6cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

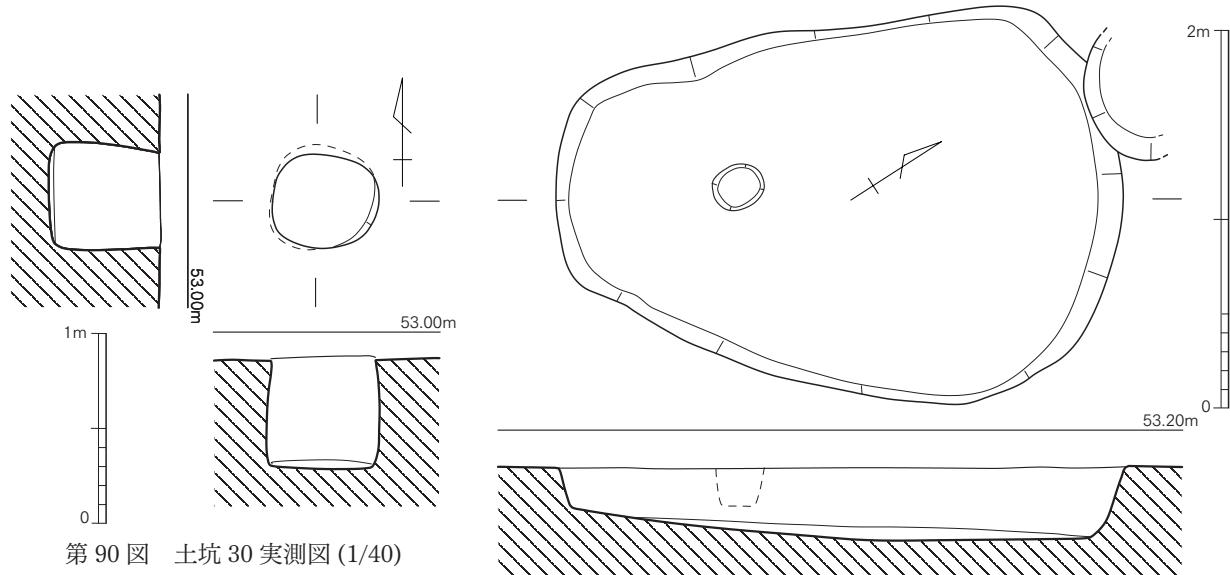
161は蓋、内面はナデ調整、外面はハケ目後ナデ調整、天井部はナデ調整を施し、つまみ部径5.3cm、残存高3.4cmを測る。胎土には細砂粒を少量含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

土坑 30(第 90 図)

調査区南東隅にあり、主軸方位はほぼ座標北、東西 0.55 m、南北 0.48 m、深さ 0.6 m を測る。丹塗りの弥生土器片が出土する。断面形がやや台形状を呈し、上端より下端の方がやや広がる。小型の貯蔵穴の可能性もある。

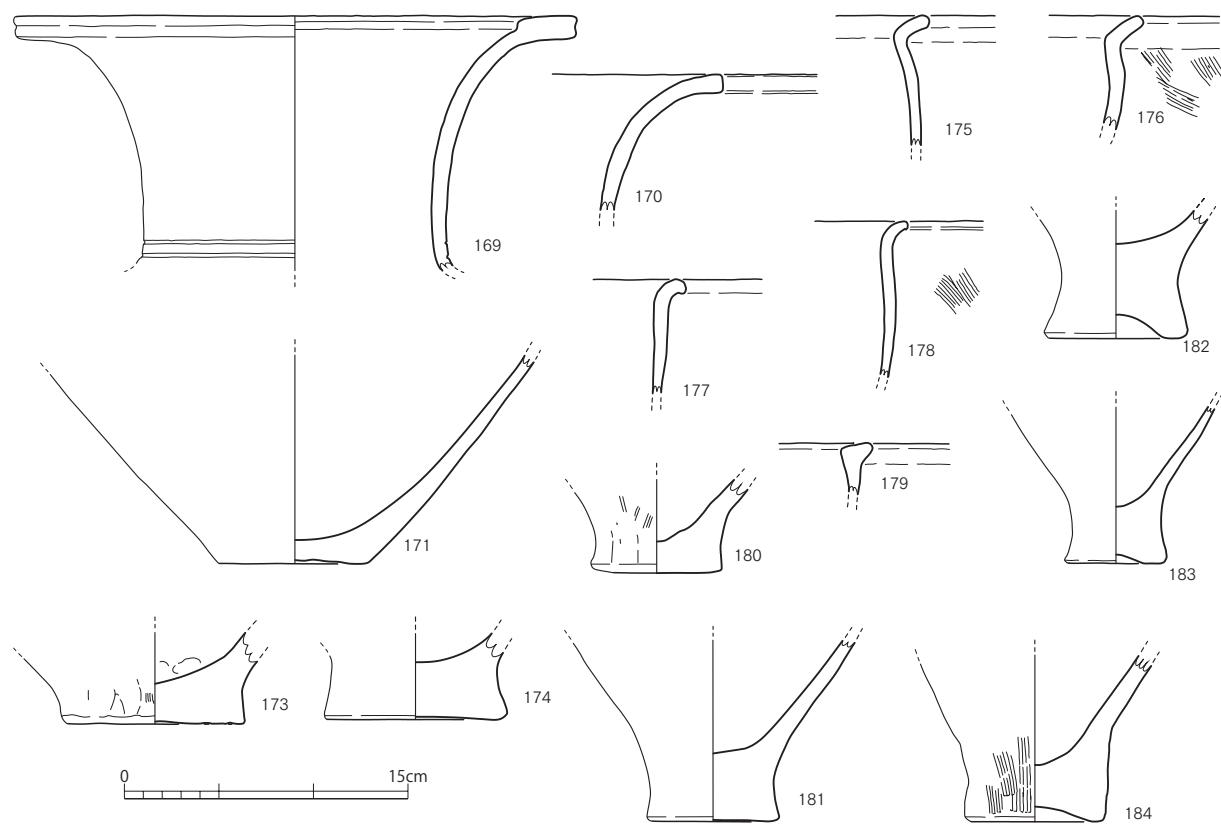
出土遺物

弥生土器 (第 89 図 162 ~ 168、図版 47)



第 90 図 土坑 30 実測図 (1/40)

第 91 図 土坑 31 実測図 (1/40)



第 92 図 土坑 31 出土遺物実測図 (1/4)

162 は壺の頸部から口縁部、頸部は緩やかに外へ開き、口縁は肥厚し鋤先状口縁となる。内面は風化により調整は不明瞭、外面はハケ目後ナデ調整、口縁部はヨコナデ調整を施し、復元口径 23.6cm、残存高 7.1cm を測る、胎土には 1mm 以下の砂粒を多く含み、内面浅黄橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。

163、164 は壺の底部、163 の内面は風化により調整は不明瞭、外面はナデ調整を施し、底径 6.7cm、残存高 2.5cm を測る、胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに鈍い赤橙色を呈し、焼成は良好である。164 の内面はナデ調整、外面は丁寧なナデ調整を施し、底径 7.3cm、残存高 13.2cm を測る、胎土には 1mm 前後の砂粒を多く含み、内外面ともに浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。

165 は壺の口縁、口縁は内傾し端部はほぼ水平であり他の口縁とは異質である。内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭、残存高 5.3cm を測る、胎土には 1mm 以下の細砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

166 は甕の口縁、口縁は強く屈曲し逆 L 字状となり端部は肥厚し 1 条の沈線が巡り、口縁下部には断面三角形の突帯が 1 条巡らす。内外面ともに風化により調整は不明瞭、復元口径約 40cm、残存高 5 cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

167 は甕の底部、内外面ともに風化により調整は不明瞭、復元底径 5.2cm、残存高 4.3cm を測る、胎土には細砂粒を多く含み、内面褐灰色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

168 は鉢の体部から口縁、やや外へ開き口縁端部は肥厚する。内面は風化により調整は不明瞭、外面はハケ目調整を施し、残存高 7.8cm を測る。胎土には 1mm 以下の砂粒を少量含み、内面灰黄褐色、外面にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。

土坑 31(第 91 図)

調査区南側、中央付近にあり、主軸方位はほぼ N-33°-E、東西 1.95 m、南北 3 m、深さ 0.4 m を測る大型で浅い土坑。焼成された粘土塊が出土する。

出土遺物

弥生土器 (第 92 図 169 ~ 171、173 ~ 184、図版 47)

169、170 は壺の頸部から口縁、いずれも頸部は緩やかに外反し伸びる、169 の口縁は肥厚し断面は四角形に近く、外面の端部中央は沈線状になり、170 では口縁までほぼ同じ厚みで、端部は平滑である。169 の内面は風化により調整は不明瞭、外面はナデ調整を施し、復元口径 29.7cm、残存高 13 cm を測る。胎土には 2mm 前後の砂粒を多く含み、内面灰褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。170 の内外面は風化により調整は不明瞭、復元口径 24cm、残存高 7.2cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内面橙色、外面浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。

171、173、174 は壺の底部。171 の内面は風化により調整は不明瞭、外面はナデ調整を施し、黒斑がみられ、底径 7.7cm、残存高 10.6cm を測る、胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面明褐灰色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。173 の内面はナデ調整、外面は指頭圧痕が残り、底径 9.5cm、残存高 3.3cm を測る、胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。174 の内面はナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭、底径 9.6cm、残存高 3.5cm を測る、胎土には 2mm 前後の砂粒を多く含み、内面明灰色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

175 ~ 179 は甕の口縁、175、176 の体部はやや内傾気味に口縁まで伸び、やや強く屈曲し口縁に

かけてはくの字状となる。177、178 の口縁は短く外反し、179 では断面逆三角形状である。175 の内面はナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭、残存高 7cm を測る、胎土には 2mm 前後の細砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面明黄橙色を呈し、焼成は良好である。176 の内面は風化により調整は不明瞭、外面はハケ目調整を施し、残存高 6cm を測る。胎土には 2mm 前後の砂粒を多く含み、内面橙色、外面褐灰色を呈し、焼成は良好である。177 の内外面ともに風化により調整は不明瞭、残存高 6cm を測る、胎土には 2mm 前後の細砂粒を多く含み、内面褐灰色、外面をにぶい黄橙色呈し、焼成は良好である。178 の内面は風化により調整は不明瞭、外面はハケ目調整、残存高 8cm を測る、胎土には 3mm 前後の粗い砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。179 の内外面ともに風化により調整は不明瞭、残存高 2.7cm を測る、胎土には 2mm 前後の細砂粒を多く含み、内面橙色、外面褐灰色を呈し、焼成は良好である。

180～184 は甕の底部、182～184 は上底状となる。180 の内面は風化により調整は不明瞭、外面はハケ目調整を施し、底径 7cm、残存高 4.3cm を測る、胎土には細砂粒を含み、内面橙色、外面黒色を呈し、焼成は良好でありかなり焼き締まっている。181 の内外面ともに風化により調整は不明瞭、底径 7cm、残存高 9.5cm を測る、胎土には 3 から 2mm の砂粒を多く含み、内面にぶい褐色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。182 の内外面ともに風化により調整は不明瞭、底径 7.5cm、残存高 6.3cm を測る、胎土には 2mm 前後の砂粒を多く含み、内面明赤褐色、外面明褐色を呈し、焼成は良好である。183 の内面はナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭、底径 5.4cm、残存高 8.2cm を測る、胎土には 2mm 以下の細砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面明黄橙色を呈し、焼成は良好である。184 の内面はナデ調整、外面はハケ目調整を施し、調整はやや粗い。底径 7.5cm、残存高 8.3cm を測る、胎土には 2mm 前後の粗い砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。

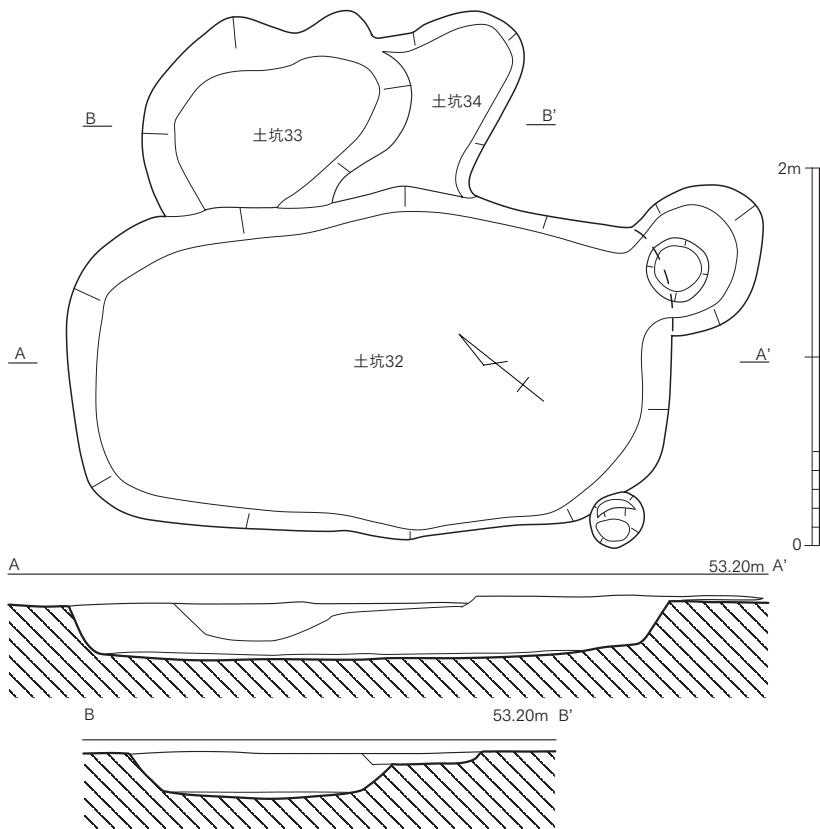
土坑 32(第 93 図)

調査区南側にあり、土坑 33、34 を切って掘られた大型の長方形の土坑。主軸方位 N-41°-W、東西 1.9 m、南北 3.15 m、深さ 0.2 m を測る。

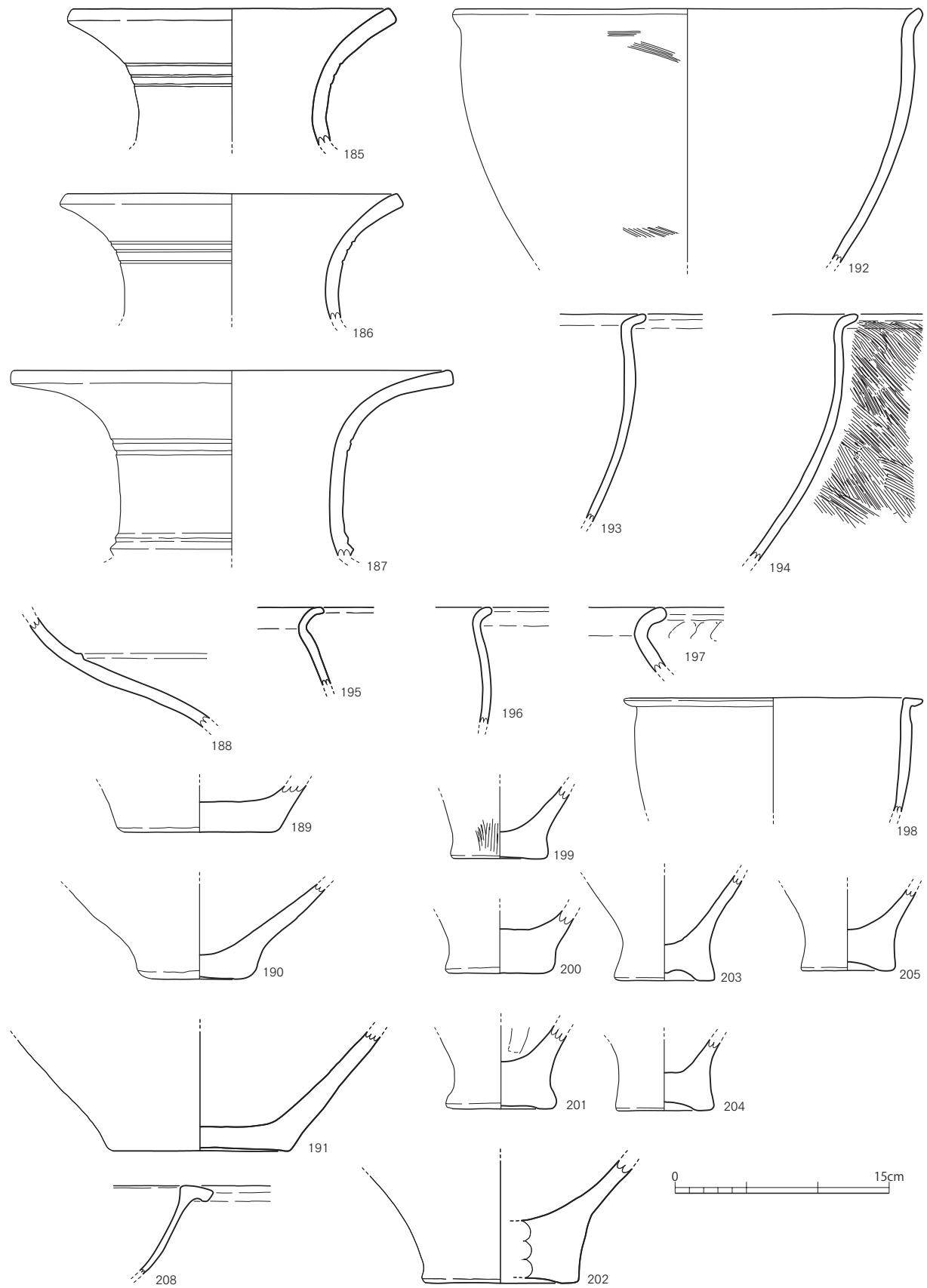
出土遺物

弥生土器(第 94 図 185～205、208、図版 47、48)

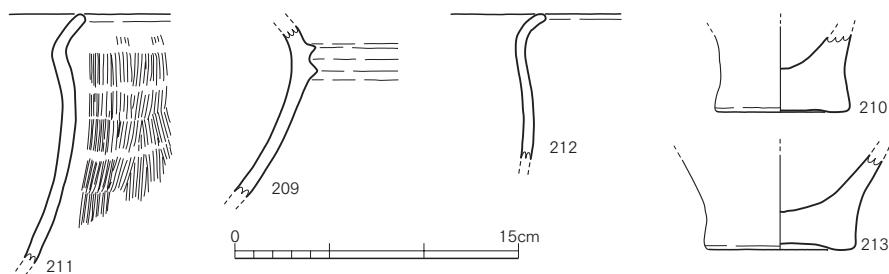
185～187 は壺の頸部から口縁、いずれも緩やかに外反し口縁端部までほぼ同じ厚みであり、187 のみやや口縁部が他



第 93 図 土坑 32、33、34 実測図 (1/40)



第94図 土坑32出土遺物実測図(1/4)



第95図 土坑33、35、36出土遺物実測図(1/4)

より長い。185、186は頸部に3条の沈線を巡らし、187は2条の沈線と体部との境目付近に2条の断面三角形の突帯を巡らす。185の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭、復元口径23cm、残存高9.2cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、4mm程度の粗い砂粒を少量含み、内外面ともに浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。186の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭、復元口径24cm、残存高8.7cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色から橙色、外面浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。187の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭、口径31cm、残存高13cmを測る。胎土には2mm前後の砂粒を多く含み、8mm前後の粗い礫を少量含む。内面にぶい橙色、外面灰白色を呈し、焼成は良好である。

188は壺の肩部、頸部との境目付近に断面三角形の突帯を1条巡らす。内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭、残存高7cmを測る。胎土には2mm前後の砂粒を多く含み、8mm前後の粗い礫を少量含む。内面浅黄橙色、外面灰白色を呈し、焼成は良好である。

189～191は壺の底部、190の内外面ともに風化により調整は不明瞭、底径8.4cm、残存高6.3cmを測る、胎土には2mm前後の砂粒を多く含み、内面浅黄橙色、外面にぶい黄橙色を呈し、焼成はやや不良である。191の内外面ともに風化により調整は不明瞭、底径12.5cm、残存高8cmを測る、胎土には2mm前後の砂粒を多く含み、内面灰白色、外面明黄橙色を呈し、焼成は良好である。

192～198は甕の体部から口縁、192、196は如意形、194、195、197はやや屈曲が強くの字状となり、193、198は屈曲が強く逆L字状になる。192の内面は丁寧なヨコナデ調整、外面はハケ目後丁寧なナデ調整を施し、黒斑があり、復元口径33cm、残存高16.7cmを測る、胎土には細砂粒を含み、5mm前後の粗い礫を若干含む。内外面ともににぶい褐色を呈し、焼成は良好である。193の内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高14.5cmを測る、胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、5mm前後の粗い礫を若干含む。内面にぶい褐色、外面灰褐色を呈し、焼成は良好である。194の内面はナデ調整、外面はハケ目調整を施し、残存高17cmを測る、胎土には細砂粒を含み、5mm前後の粗い礫を若干含む。内外面ともにぶい褐色を呈し、焼成は良好でありかなり焼き締まっている。195の内外面ともに風化のため調整は不明瞭であり、残存高5.3cmを測る、胎土には2mm以下の砂粒を含み、内面は橙色、外面はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。196の内面はナデ調整を施し、外面は風化により不明瞭であり、残存高8cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を多く含み、内面は黒褐色、外面灰褐色を呈し、焼成は良好である。197の内外面ともに風化により調整は不明瞭であるが口縁外面に指頭圧痕が残り、残存高4.2cmを測る、胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内外面ともに褐白色を呈し、焼成は良好である。198の内外面ともに風化により不明瞭であり、復元口径20.8cm、残存高8.5cmを測る、胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面にぶい褐色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

199～205 は甕の底部、199、200 以外上底状となり、199 の内面はナデ調整、外面は風化し調整は不明瞭であるがハケ目調整を施し、底径 6.8cm、残存高 4.5cm を測る、胎土には 2mm 以下の細砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。200 の内外面ともにナデ調整を施し、底径 7.7cm、残存高 3.8cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒含み、内面褐灰色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。201 の内面はナデ調整、外面は風化し調整は不明瞭であり、底径 7.7cm、残存高 5cm を測る、胎土には 2mm 前後の粗い砂粒を含み、内面にぶい褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。202 の内面は風化し調整は不明瞭であり、外面はナデ調整を施し、復元底径 11cm、残存高 8cm を測る、胎土には 3mm 前後の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。203 の内面はナデ調整、外面は風化のため調整は不明瞭であり、底径 7cm、残存高 7cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面黒褐色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。204 の内面はナデ調整、外面は風化のため調整は不明瞭であり、底 6.9cm、残存高 4.7cm を測る。胎土には 2mm 前後の粗い砂粒を含み、内面にぶい褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。205 の内外面ともに風化のため調整は不明瞭であり、底径 6.6cm、残存高 5.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

208 は高杯の杯部、体部から口縁である。内面はナデ調整、外面は風化により不明瞭であるが口縁部外面には指頭圧痕が残り、残存高 5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい黄橙色、外面浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。

石器(第 109 図 41～45、図版 53)

41 は砂岩製の石包丁片、42、43 は頁岩製磨製石剣片、44、45 は緑色岩、頁岩製の砥石。44 は平坦面と側縁に敲打痕がみられて敲石を兼ねたすり石のようなもの。45 は図示する平坦面と側縁が砥面になる仕上げ砥石である。土坑 32 からはこの他にサヌカイト片 1 点と、凝灰岩質と泥岩質の砥石小片が各 1 点出土したが、1 点は磨製石剣片を転用した可能性がある。

土坑 33(第 93 図)

土坑 34 を切って掘りこまれ、後に土坑 32 が掘りこまれる際に切られている。主軸方位 N-41°-W、東西 1.42 m 残存、南北 0.94 m、深さ 0.2 m を測る。

出土遺物

弥生土器(第 95 図 211、図版 48)

211 は甕の口縁から体部、口縁は体部からくの字状に緩やかに伸びる。内面はナデ調整、外面はハケ目調整を施し、残存高 13.2cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともににぶい褐色を呈し、焼成は良好である。

土坑 34(第 93 図)

最初に掘りこまれたと考えられ土坑 33、35 に切られる。主軸方位 N-41°-W、東西 0.8 m 残存、南北 0.5 m、深さ 0.05 m を測る。

出土遺物

石器(第 109 図 46、47、図版 53)

46 はサヌカイト製の平基打製石鏃、47 は姫島産黒曜石製の凹基打製石鏃でともに全面に調整剥

離が及ぶ。

土坑 35

出土遺物

弥生土器 (第 95 図 209、210、図版 48)

209 は壺の体部、2 条の断面三角形の突帯が巡る。内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 9cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい黄橙色、外面灰白色を呈し、焼成は良好である。

210 は甕の底部。内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 7.1cm、残存高 3cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、4mm 前後の粗い砂粒を若干含み、内面灰白色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

土坑 36

出土遺物

弥生土器 (第 95 図 212、213、図版 48)

212 は甕の口縁から体部、口縁は体部から緩やかに外反して伸びる。内外面ともに風化し調整は不明瞭であり、残存高 7.6cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。

213 は甕の底部、やや上げ底状となる。内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径 8cm、残存高 4.7cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面にぶい赤褐色を呈し焼成は良好である。

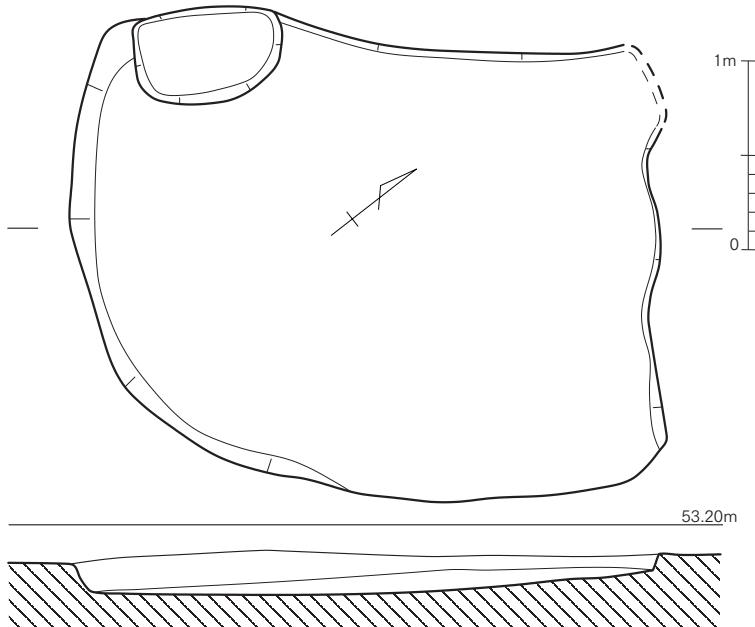
土坑 37(第 96 図)

調査区南東隅にある。主軸方位 N-34°-W、南北 3.1 m、東西 2.4 m を測る、長方形の大型の土坑。

出土遺物

弥生土器 (第 101 図 215 ~ 231、図版 48)

215、216 は壺の口縁、215 は肥厚し、断面四角形に近く、216 は直線的に伸びる。215 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 3.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面浅黄橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成はやや不良である。216 は内面は丁寧なナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭であるものの口縁端部にはヨコナデ調整を施し、残存高 2cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面橙色



第 96 図 土坑 37 実測図 (1/40)

を呈し、焼成は良好である。

217 は壺の頸部、体部との境目付近に断面三角形の突帯を 1 条巡らし、内外面ともにナデ調整を施し、残存高 5.7cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。

218 は壺の底部、内外面ともに風化のため調整は不明瞭であり、底径 10.2cm、残存高 3.2cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、4mm 程度の粗い砂粒を若干含む。内面灰白色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

219 ~ 225 は甕の頸部から口縁、219 は如意形に伸び、220 はやや屈曲が強く断面くの字状になり、221、222 は直線的に伸びる口縁、223 は頸部から強く外反し、224 は垂直に伸び端部外面は窪む、225 は断面逆 L 字状になり短い口縁がつく。219 は内外面ともにナデ調整を施し、残存高 8.4cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい赤褐色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。220 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 10cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい黄橙色、外面灰白色を呈し、焼成はやや不良である。221 は内面はナデ調整、外面は丁寧なナデ調整を施し、残存高 3.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい赤褐色、外面に灰褐色を呈し、焼成は良好である。222 の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、残存高 4.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに明赤褐色を呈し、焼成はやや不良である。223 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 6cm を測る。胎土には 3mm 以下の粗い砂粒を多く含み、5mm 程度の砂粒を若干含む。内外面ともに赤橙色を呈し、焼成はやや不良である。224 は内外面ともにナデ調整を施し、残存高 7cm を測る。胎土には 1mm 以下の砂粒を含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。225 は内外面ともにナデ調整を施し、残存高 3cm を測る。胎土には細砂粒を含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

226 ~ 231 は甕の底部、227、228 は上底状となり、231 は高台のような形態となる。226 は内外面ともに風化のため調整は不明瞭であり、底径 7.5cm、残存高 5.7cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内面灰褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。227 は内面ナデ調整を施し、外面は風化のため調整は不明瞭であり、底径 7cm、残存高 5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面灰褐色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。228 は内外面ともに風化のため調整は不明瞭であり、底径 8.5cm、残存高 6.5cm を測る。胎土には 2mm 前後の砂粒を多く含み、内面灰褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。229 は内面には幅 1.5cm 程度の工具痕が残り、外面は風化のため調整は不明瞭であり、底部はナデ調整を施し、底径 6.7cm、残存高 5cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面褐灰色、外面にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。230 は内外面ともに風化のため調整は不明瞭であり、底径 8cm、残存高 5.8cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を非常に多く含み、内面灰黄褐色、外面明浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。231 は内外面ともに風化のため調整は不明瞭であり、底径 7cm、残存高 5.2cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を多く含み、内面橙色、外面にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。

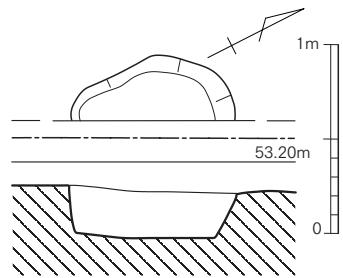
石器 (第 109 図 48 ~ 50、図版 53)

48 は先端部を失うが粘板岩製の有茎式の磨製石剣片で、欠損部以外は全面研磨される。残存長 15.3cm、幅 6.3cm、厚さ 1.6cm、重量 189g を測る。基部側縁が左右で 1cm ほど長さが違い長い方の

関部側縁に浅い挿入部がある。49 は雲母片岩製の仕上げ砥石とみられる砥石片、50 はサヌカイト製の全面に調整剥離が及ぶ浅い凹基の打製石鏃。この他に土坑 37 から腰岳産黒曜石小片 4 点が出土したが図示に堪えない。

土坑 39(第 97 図、図版 28)

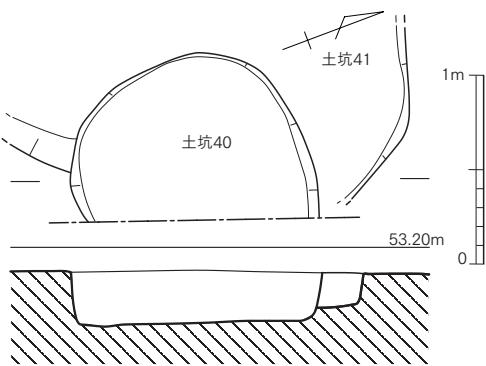
調査区南東隅にあり、1/2 ほど掘削を行った。調査区外へ続くと考えられる。主軸方位 N-27°-E、南北 0.86 m、東西 0.34 m を測る、円形の土坑。



第 97 図 土坑 39 実測図 (1/40)

土坑 40(第 98 図、図版 28)

調査区南東隅にあり、1/2 ほど掘削を行った。調査区外へ続くと考えられる。主軸方位 N-20°-E、南 1.17 m、東西 0.89 m を測る、円形の土坑。



第 98 図 土坑 40 実測図 (1/40)

土坑 41(第 98 図)

後から掘りこまれる土坑 40 に切られる、主軸方位 N-33°-E 東西 1.2 m、南北 3.4 m を越える大型の土坑。

出土遺物

弥生土器 (第 101 図 232 ~ 238、図版 48)

232、233 壺の頸部、232 は頸部上部に 1 条、下部に 2 条の沈線を巡らし、内外面ナデ調整を施し、頸部径 11.2cm、残存高 8.6 cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい黄橙色、外面灰白色を呈し、焼成は良好である。233 は頸部の下部、3 条の沈線を巡らし、内面は風化により調整は不明瞭であり、外面はナデ調整を施し、残存高 3cm を測る。胎土には 1mm 前後の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面灰褐色を呈し、焼成は良好である。

234 は壺の底部、内面はナデ調整を施し、底部には指頭圧痕が残り、外面風化のため調整は不明瞭であり、底径 8cm、残存高 3.9cm を測る。胎土には 2mm 前後の砂粒を多く含み、内面にぶい赤褐色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

235、236 は甕の体部から口縁、235 の口縁は外反し如意形に近く、236 では口縁は強く屈曲し逆 L 字状となる。235 の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、残存高 7.4 cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。236 の内面はナデ調整を施し、外面はハケ目調整、口縁はナデ調整を施し、残存高 7cm を測る。胎土には 3mm 前後の粗い砂粒を多く含み、内面にぶい黄橙色、外面黄褐色を呈し、焼成はやや不良である。

237、238 は甕の底部、ともに上底状で 238 はやや高台状となる。237 は内外面ともに風化のため調整は不明瞭であり、底径 7cm、残存高 8cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい黄褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。238 は内外面ともに風化のため調整は不明瞭であり、底径 6.8cm、残存高 4cm を測る。胎土には 2mm 前後の砂粒を多く含み、内面橙色、外面にぶ

い橙色を呈し、焼成は良好である。

土坑 42(第 99 図、図版 28)

調査区南東隅にある、1/2 ほど掘削を行った。調査区外へ続くと考えられる。主軸方位 N-27°-W、南北 2.1 m 残存、東西 2.45 m を測る不整形の土坑。

出土遺物

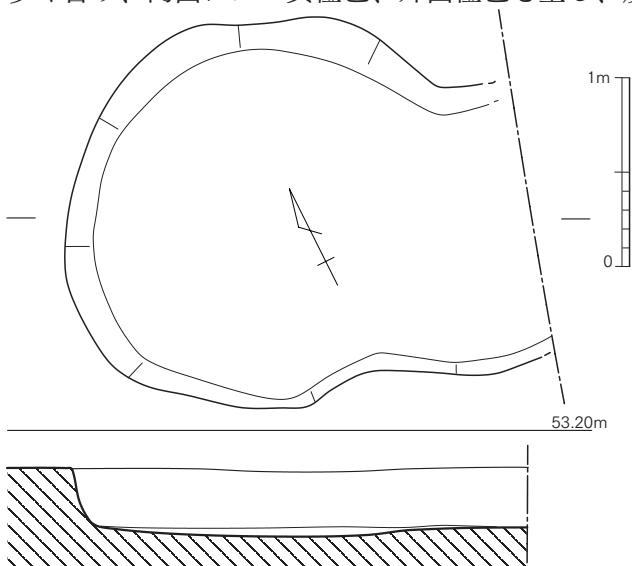
弥生土器 (第 101 図 239 ~ 249、図版 48、49)

239 は壺の頸部から口縁、頸部中程に 1 条と肩部との境目付近に 2 条沈線をめぐらし、下方の沈線下部に斜文のような文様が見られる。内外面ともナデ調整を施し、復元口径 21cm、残存高 7.2cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を含み、内面にぶい褐色、外面にぶい橙色を呈し。焼成は良好である。

240 は壺の体部、内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、胴部最大径は復元値で 34cm、残存高 15.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい黄橙色、外面浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。

241 は壺の底部、内面はナデ調整を施し、外面は風化のため調整は不明瞭であり、底径 8.5cm、残存高 5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、4mm 程度の砂粒も少量含む。内面灰褐色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。

242 ~ 244 は甕の体部から口縁、242 はやや大型でくの字状に伸びる口縁、243 はやや内傾する体部に緩く屈曲しながら伸びる口縁、口縁下部に 2 条の沈線を巡らし、断面は緩いくの字状、244 は屈曲は弱く如意形に近い。242 の内面は風化するもののミガキ調整が残り、外面はハケ目調整を施し、残存高 5.7cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒含み、内外面ともに灰黄色を呈し、焼成は良好である。243 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 12.6cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面浅黄橙色、外面黄橙色を呈し、焼成はやや良好である。244 は内面ナデ調整、外面ハケ目調整を施し、口径 29cm、残存高 14.3cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい黄橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。



第 99 図 土坑 42 実測図 (1/40)

245 ~ 249 は甕の底部、247 は底部付近に穿孔がある。245 の内面はナデ調整を施し、外面は風化のため調整は不明瞭であり、底径 7.4cm、残存高 6.3cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい褐色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。246 は内外面ともにナデ調整を施し、底径 7.2cm、残存高 7.8cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面灰褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。247 の内面はナデ調整を施し、外面はハケ目調整後ナデ調整を施し、底径 8cm、残存高 7.8cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、5mm 前後の礫を若干含

み、内面灰褐色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。248 の内外面は風化のため調整は不明瞭であるものの、外面部に指頭圧痕、ナデ調整が残り、底径 10.5cm、残存高 5.3cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、4mm 程度の砂粒も少量含む。内面橙色、外面にぶい赤褐色を呈し、焼成は良好である。249 の内外面ともに風化のため調整は不明瞭であり、底径 7.8cm、残存高 7.3cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

石器 (第 109 図 51、52、図版 53)

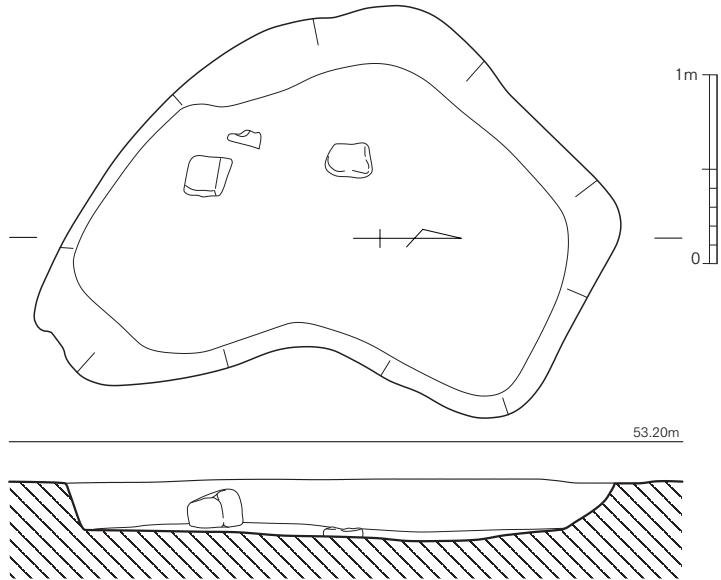
51 は腰岳産黒曜石製の全面剥離凹基式打製石鏸、52 は頁岩質石材製の全面研磨の平基磨製石鏸。其々 0.5 g、4.0 g を測る。この他にサヌカイト製剥片 1 点も出土したが図示に堪えない。

土坑 43

出土遺物

石器

腰岳産黒曜石製の不定形剥片に調整剥離を加えた平基式らしい打製石鏸片 1 点が出土したが、図示していない。



第 100 図 土坑 44 実測図 (1/40)

土坑 44(第 100 図、図版 29)

主軸方位は磁北、南北 2.9 m、東西 1.9 m、深さ 0.3 m を測る。

出土遺物

石器

頁岩製の研磨痕がみられる小破片 1 点が出土した。石包丁あるいは砥石の可能性もあるが図示に堪えない。

土坑 45(第 102 図)

主軸方位は磁北、南北 1.26 m、東西 0.8 m、深さ 0.35 m を測る、小型の土坑。

弥生土器 (第 104 図 250、図版 49)

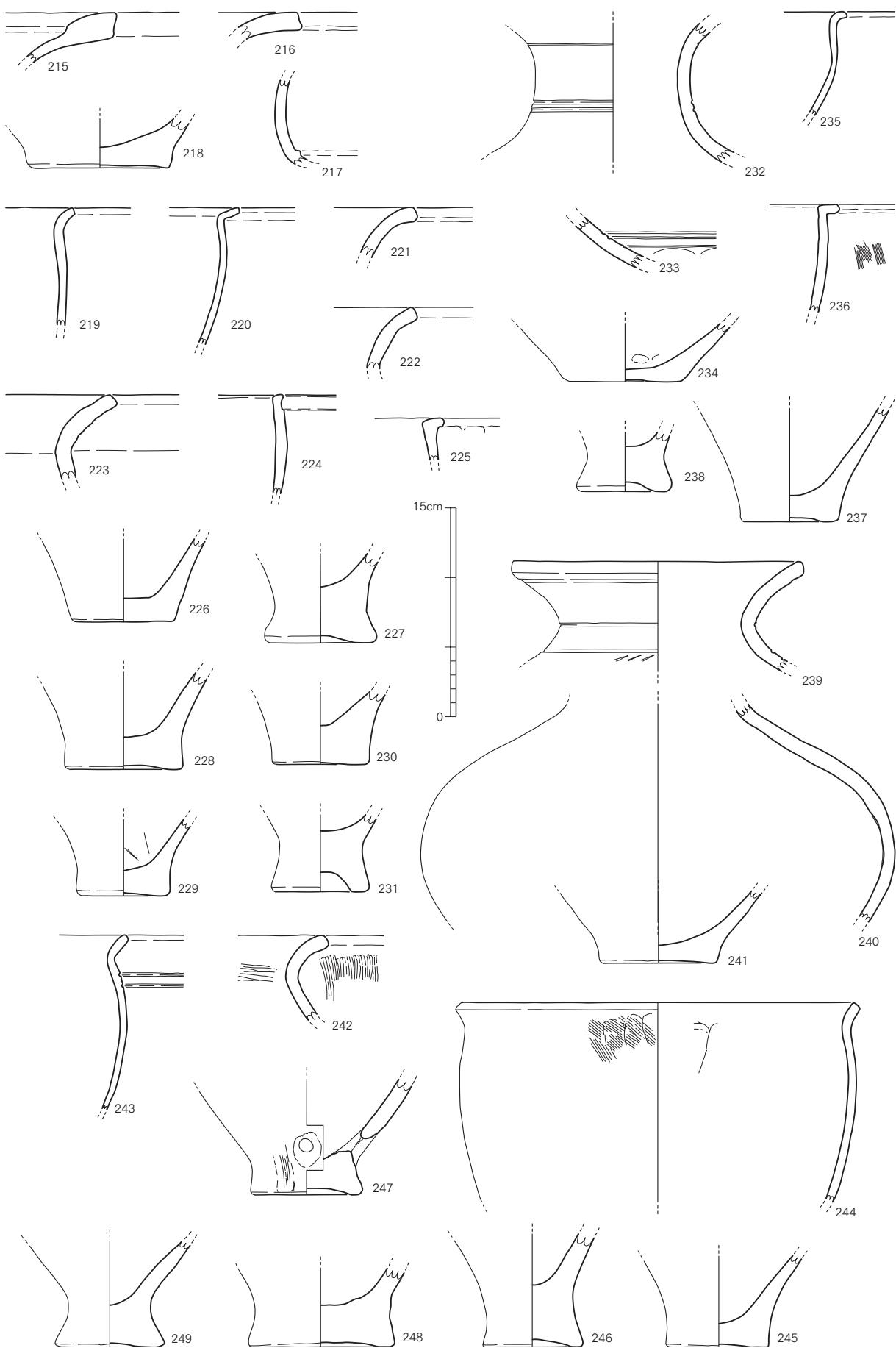
250 は壺の体部から肩部、内外面ともに風化により調整は不明瞭であるが、肩部に連弧文がみられ、肩部から頸部にかけて 5 条の沈線を巡らし、残存高 12.9cm を測る。内外面ともに風化のために調整は不明瞭であり、黒斑が見られ、残存高 12.9cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒と 5mm 程度の礫を多く含み、内外面とも明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

土坑 46(第 102 図、図版 30)

主軸方位は N-90°-E、東西 2.7 m、南北 1.33 m、深さ 0.3 m を測る。後に掘られる土坑 45 に切られる。

出土遺物

弥生土器 (第 104 図 251 ~ 254)



第 101 図 土坑 37、41、42 出土遺物実測図 弥生土器 (1/4)

251 は壺の底部、内面は風化により調整は不明瞭であり、外面はナデ調整、底部は高台状となり指で整形した痕跡が残る。底径 9.7cm、残存高 4.2cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内外面とともに明褐灰色を呈し、焼成は良好である。

252 は甕の体部から口縁、やや外に開く体部に強く屈曲し口縁が接続する。口縁はやや肥厚し短い。内面はナデ調整、外面はハケ目調整、口縁はヨコナデ調整を施し、残存高 4.5cm を測る。胎土には 1mm 前後の砂粒を含み、内面褐灰色、外面灰褐色を呈し、焼成は良好である。

253、254 は甕の底部、いずれも上底状となり、253 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であるが、底部外面はナデ調整を施し調整の際の指頭圧痕が残る。底径 8.6cm、残存高 6.2cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面灰褐色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。254 は内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径 7cm、残存高 6.2cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面褐灰色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

石器（第 109 図 54、図版 53）

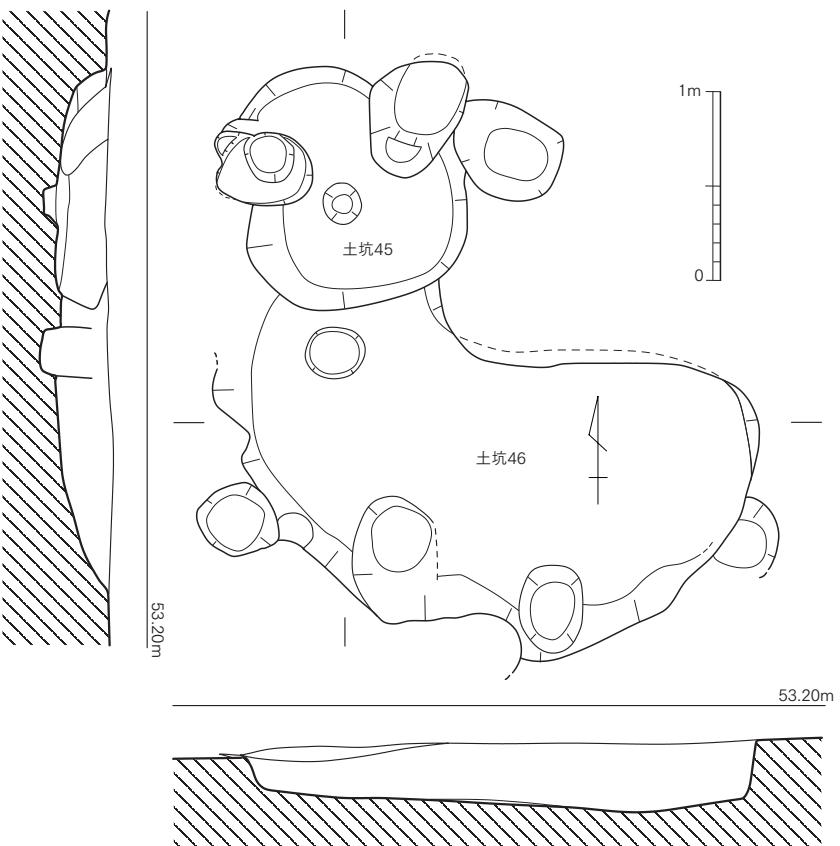
砂岩製の砥石片で元来は方柱状の中砥石であろう。この他に泥岩質石材製石包丁の可能性がある研磨痕がある小破片 1 点も出土したが図示に堪えない。

土坑 47

出土遺物

弥生土器（第 104 図 255～266、図版 49）

255～257 は壺の頸部から口縁、255 は外反する頸部から口縁は直線的に伸び、端部はやや摘み上げるような形態となる。256 は肥厚し、断面長方形の口縁、257 は口縁を欠失する外反する頸部である。255 の内面はミガキ調整、外面はナデ調整、口縁端部はヨコナデ調整を施し、残存高 5.6cm を測る。胎土には 1mm 以下の砂粒を多く含み、内面灰白色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。256 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 1.6cm を測る。胎土に



第 102 図 土坑 45、46 実測図 (1/40)

は2mm以下の砂粒を多く含み、内面灰白色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。257の内面は丁寧なナデ調整、外面ナデ調整を施し、復元頸部径22cm、残存高6.8cmを測る。胎土には1mm以下の細砂粒を含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

258～261は甕の体部から口縁、258、261は頸部の屈曲がやや強く、口縁はくの字状、259の口縁は緩やかに屈曲し如意形となり口縁下部に沈線を1条巡らす、260の口縁は外反する頸部から直線的に伸び、口縁下部に断面三角形の突帯を1条巡らす。258は風化により内外面ともに調整は不明瞭であり、残存高2.5cmを測る。胎土には1mm以下の細砂粒を含み、内面浅黄橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。259の内面はナデ調整、外面には一部ハケ目調整が残り、指頭圧痕が見られ、残存高4.3cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面にぶい褐色を呈し焼成は良好である。260は内外面ともにナデ調整を施し、残存高7.5cmを測る、胎土には1mm以下の細砂粒を含み、内面灰白色、外面浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。261は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高8.5cmを測る、胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面浅黄橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

262～264は甕の底部、264は上底状となる。262の内面はナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径6.6cm、残存高4.5cmを測る。胎土には1mm以下の砂粒を多く含み、内面にぶい赤褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。263の内面はナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径7.8cm、残存高4.3cmを測る。胎土には2mm以下の細砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。264の内面はナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径7cm、残存高6.5cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面にぶい褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

265は高杯の脚部、内面は脚部整形の際の絞り痕が残り、外面はナデ調整、杯部との接合部付近にはヨコナデ調整を施し、脚部径4cm、残存高4.9cmを測る。胎土には1mm以下の砂粒を含み、内面灰褐色、外面褐灰色を呈し、焼成は良好である。

266は支脚(器台)、内面は脚部整形の際の絞り痕が残り、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径11cm、残存高6.4cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

土坑48

出土遺物

弥生土器(第104図267～281、図版49)

267は壺の体部から口縁、体部はあまり広がらず、口縁は頸部から直線的に伸び、端部付近は肥厚する。内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、口径15cm、残存高15.5cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面浅黄橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

268～271は壺の底部、268の内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径10cm、残存高6.3cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内外面ともに明黄橙色を呈し、焼成は良好である。269の内外面ともにナデ調整を施し、底径7.7cm、残存高4.2cmを測る。胎土には3mm以下の細砂粒を多く含み、内外面ともに明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

270 の内外面とも風化により調整は不明瞭であり、底径 9cm、残存高 7.2cm を測る。胎土には 1mm 以下の砂粒を含み、内面灰褐色、外面明褐灰色を呈し、焼成は良好である。271 の内外面とも風化により調整は不明瞭であり、底径 12.8cm、残存高 4.4cm を測る。胎土に 3mm 前後の砂粒を多く含み、内面褐灰色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

274、275 は甕、甕の体部から口縁、体部はほぼ垂直に伸び口縁は外側へ摘み出すように肥厚し、断面三角形となる。274 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 6cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を含み、内面灰褐色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。275 の内面は風化により調整は不明瞭であり、外面はナデ調整を施し、残存高 9.5cm を測る。胎土には 3mm 前後の砂粒を多く含み、内外面ともににぶい褐色を呈し、焼成は良好である。

276～279 は甕の底部、276 は上底状である。276 の内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 6.5cm、残存高 8.2cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。277 の内面はナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭であり、復元底径 7cm、残存高 4.4cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、8mm 程度の礫も含む。内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。278 の内外面ともに風化により調整は不明瞭であるが内面に指頭圧痕が残り、底径 8.9cm、残存高 4.8cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。279 の内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 7.2cm、残存高 4cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに灰褐色を呈し、焼成は良好である。

280 は蓋、内面はナデ調整、外面は丁寧なナデ調整を施し、つまみ部径 6cm、残存高 5.1cm を測る。胎土には 1mm 以下の砂粒を含み、8mm 程度の礫を若干含み内外面ともに明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

281 は台付壺、脚部のみ残る。内面はナデ調整、外面はハケ目調整を施し、底径 4.1cm、残存高 4cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面赤褐色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

土坑 47・48 出土遺物

石器 (第 109 図 55～57、図版 53)

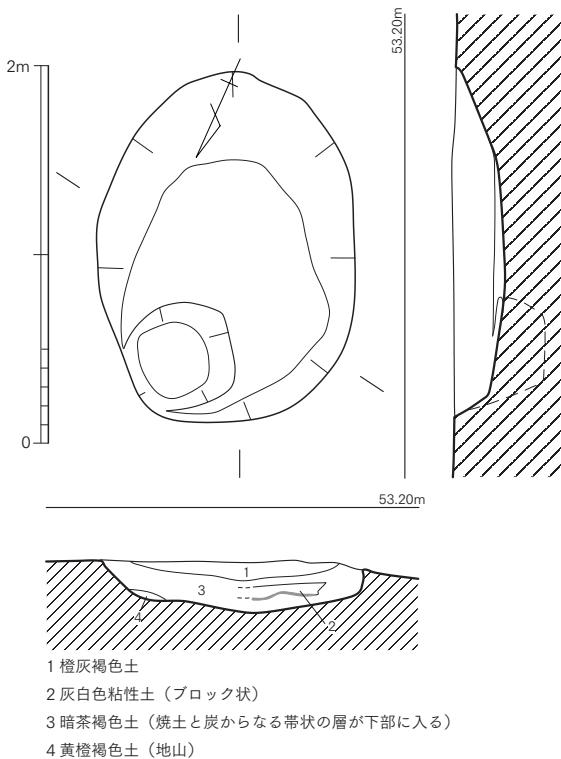
55 は頁岩質石材製のほぼ平基の全面研磨の磨製石鏃片。重量 3.0 g を測る。56 は刃部端を失うが粘板岩質石材製の柱状片刃石斧で、残存長 9.8cm、幅 3.2cm、厚さ 2.8cm、重量 177g を測る。57 は土坑 48 出土の頁岩製石戈基部の剥離片だろうか。稜のある身部で稜を挟む穿孔があり、基部側の茎部は 5mm ほど薄く関は僅かながらも弧状になる。重量 8.2 g。この他に頁岩製石包丁小片 1 点も出土したが図示に堪えない。

土坑 49(第 103 図、図版 30、31)

主軸方位 N-19.5°-W、南北 1.84 m、東西 1.35 m、深さ 0.28 m を測る。堆積状況は、橙灰褐色土が最も上層に見られ、その下層に灰白色粘性土がブロック状に堆積し最下層は暗茶褐色土である。灰白色粘性土の上部と下部に黒色土層が帶状に入る。この黒色土層には炭化物が混じる。

出土遺物

弥生土器 (第 104 図 282～288)



第 103 図 土坑 49 実測図 (1/40)

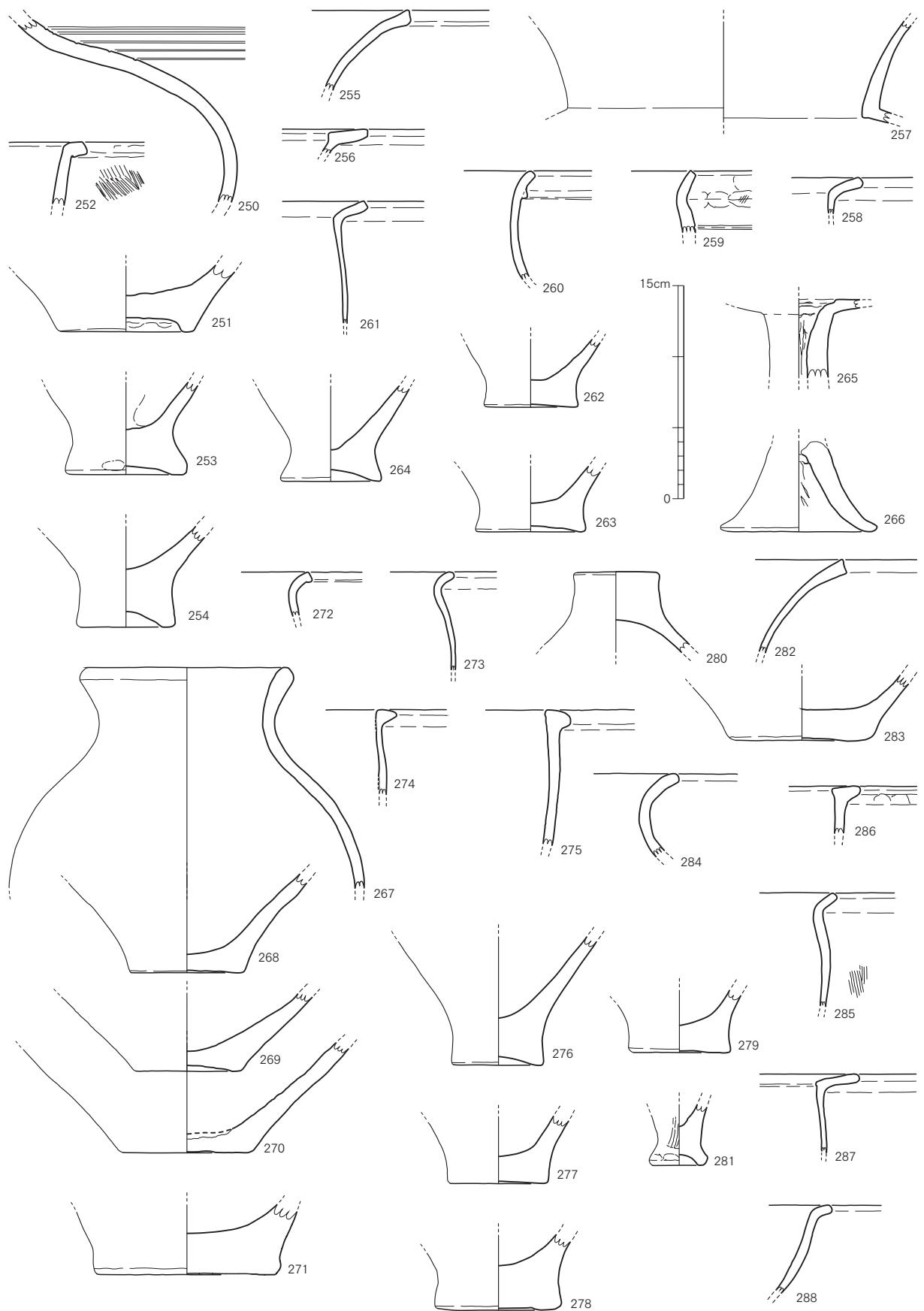
282、284 は壺の口縁、282 は外反する頸部から直線的に口縁が伸び、端部はやや肥厚する。284 は短い頸部から屈曲し口縁が接続する。282 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 6.5cm を測る。胎土には細砂粒を含み、5mm 程度の礫を若干含む。内面淡橙色、外面橙色を呈し。焼成は良好である。284 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 5.4cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。

283 は壺の底部、内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 10cm、残存高 4cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を多く含み、内面明黄橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

285 ~ 288 は甕の体部から口縁、285、288 の口縁は体部から如意形に伸び、286 は体部はほぼ垂直に伸び口縁は外側へ摘み出すように肥厚し、断面三角形になり、287 では体部からやや屈曲が強く断面逆 L 字状となる。285 の内面はナデ調整、外面はハケ目調整、口縁部はナデ調整を施し、残存高 8cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。286 の内外面ともにナデ調整を施し、残存高 3.2cm を測る。胎土には 1mm 以下の砂粒を含み、内外面ともにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。287 は内外面ともに風化し調整は不明瞭であり、残存高 5.5cm を測る。胎土には 1mm 以下の細砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。288 の内外面ともに風化し調整は不明瞭であり、残存高 6.2cm を測る。胎土には 1mm 以下の砂粒を含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成はやや不良である。

土坑 53(第 105 図、図版 31)

主軸方位 N-37°-E、南北 2.3m、東西 2.04m、深さ 0.76m を測る。暗灰茶褐色土の単一層であり、



第104図 土坑43、45～49出土遺物実測図(1/4)

暗茶褐色粘性土、暗灰色粘土がブロック状に入る。暗茶褐色粘性土のブロックより上層は炭が混入する。

出土遺物

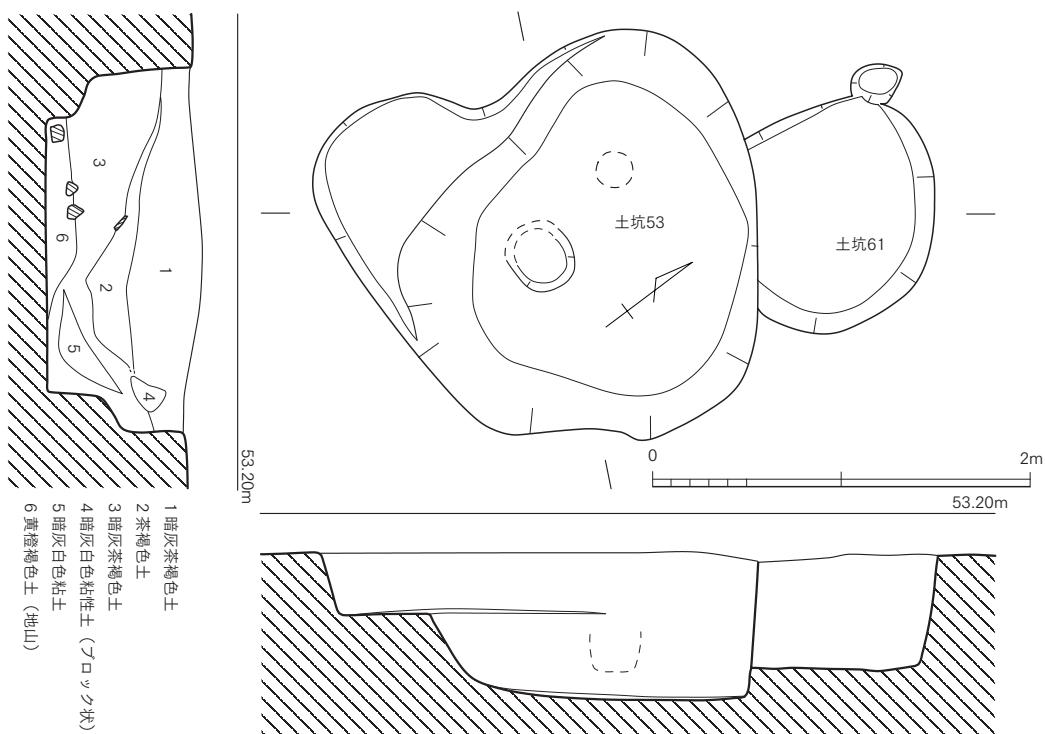
弥生土器 (第 107 図 289 ~ 297、図版 49)

289 は壺の口縁、外反する頸部に肥厚する口縁が接続し、口縁は断面四角形となる。内外面ともに風化し調整は不明瞭であり、残存高 4cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。

290 ~ 293 は壺の底部、290 の内面は器壁が剥離し調整は不明瞭、外面は風化により調整は不明瞭であるものの底部にヘラ状工具の痕跡が残り、底径 9.5cm、残存高 4.3cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。291 の内面はナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径 6.2cm、残存高 4cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。292 は内外面ともにナデ調整を施し、外面底部には指頭圧痕が残り、底径 8.5cm、残存高 6cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。293 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 13.5cm、残存高 6.3cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

294 は甕の口縁、口縁は強く屈曲し逆 L 字状となり、内外面ともにナデ調整を施し、外面口縁の屈曲部に指頭圧痕が残り、残存高 2.6cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。

295 ~ 297 は甕の底部、296 の底部は高台状となる。295 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 7.2cm、残存高 4.7cm を測る。胎土には 1mm 以下の細砂粒を多く含み、内外面ともに



第 105 図 土坑 53、61 実測図 (1/40)

橙色を呈し、焼成は良好である。296 の内面はナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径 8cm、残存高 4.2cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を多く含み、内面にぶい褐色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。297 の内面は器壁が剥離し調整は不明瞭、外面はハケ目調整を施し、底径 7.6cm、残存高 6.8cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。

石器

サヌカイト製剥片 1 点が出土したが図示に堪えない。

土坑 56(第 106 図、図版 31)

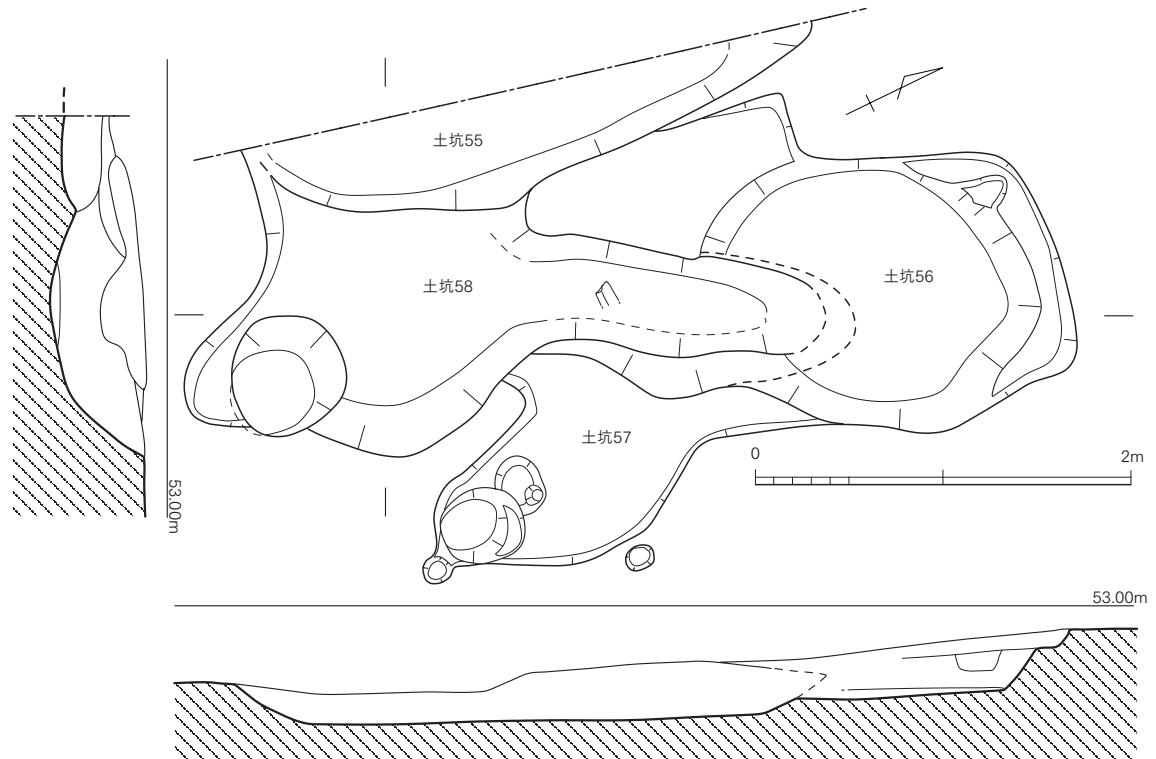
主軸方位 N-27°-E、南北 1.2m、東西 1.47m、深さ 0.27m を測り、後に掘り込まれる土坑 58 により切られる。

出土遺物

弥生土器 (第 107 図 298 ~ 300)

298、299 は壺の頸部から口縁部、298 は外に開く頸部に直線的に口縁が伸び、299 の口縁は鋤先状口縁、屈曲し外に開く頸部に接続する。298 の内面は風化し調整は不明瞭であり、外面はナデ調整を施し、残存高 7cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。299 の内外面ともに風化し調整は不明瞭であり、残存高 6.7cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。

300 は甕の体部から口縁、口縁は体部から屈曲し、断面くの字状に伸び、端部は上方へつまみ上げたような形状となる。内外面ともに風化し調整は不明瞭であり、残存高 7.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を含み、内面浅黄橙色、外面淡橙色を呈し、焼成は良好である。



第 106 図 土坑 55 ~ 58 実測図 (1/40)

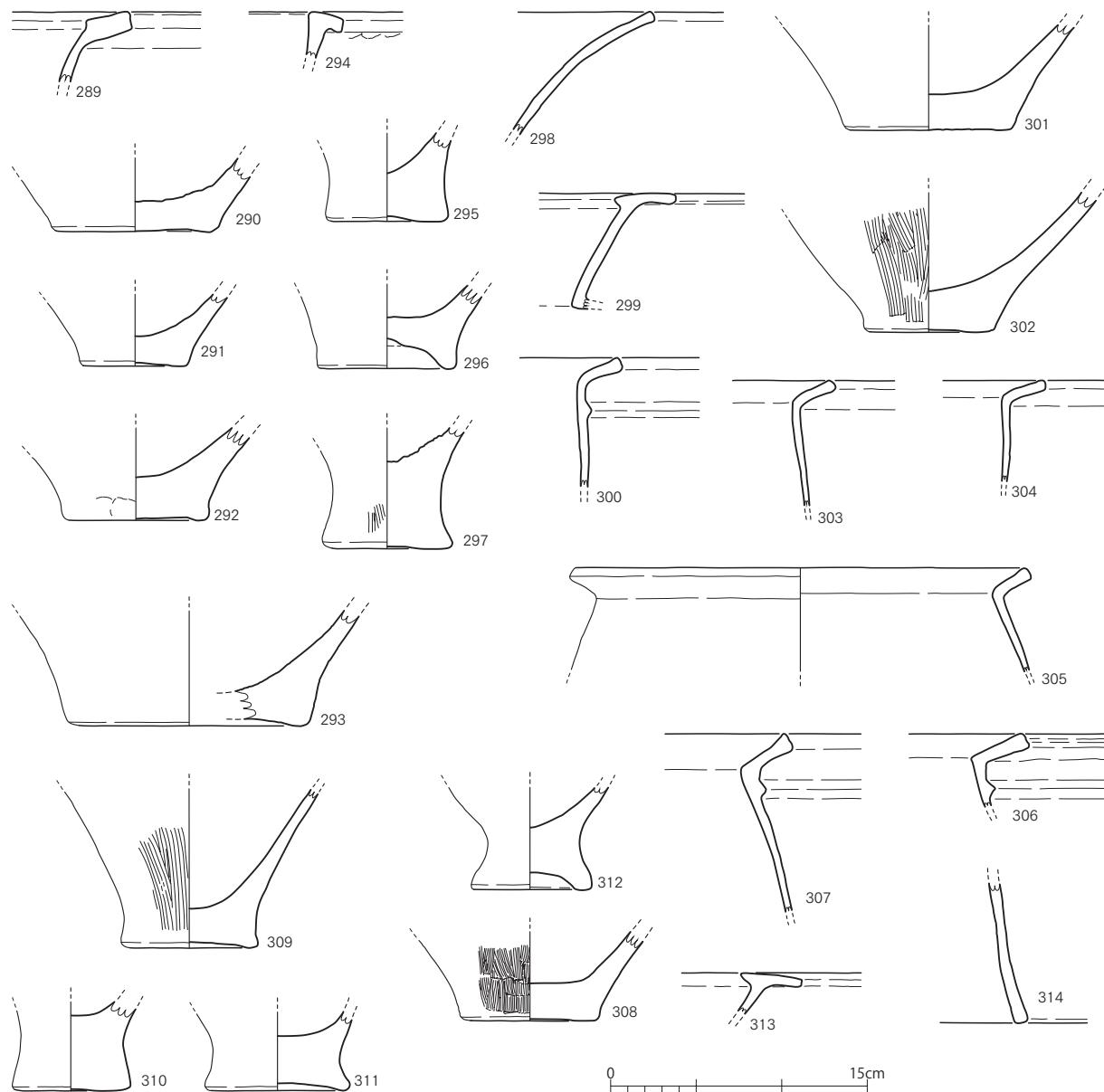
土坑 55、57(第 106 図、図版 32)

出土遺物

弥生土器(第 107 図 301 ~ 314、図版 49)

301、302 は甕の底部、301 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 10cm、残存高 6cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成はやや不良である。302 の内面はナデ調整、外面はハケ目調整、底部はナデ調整を施し、底径 7.6cm、残存高 7.7cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面灰白色、外面浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。

303 ~ 307 は甕の体部から口縁、いずれも体部から口縁にかけてやや強く屈曲し、断面くの字状であり、303 から 305 の口縁端部はやや上方へつまみ上げたような形状となる。306、307 はより屈曲が強く、口縁下部に断面三角形の突帯を 1 条巡らす。303 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 7.3cm を測る。胎土には 1mm 以下の細砂粒を含み、内外面ともににぶい橙色を



第 107 図 土坑 53、55 ~ 58 出土遺物実測図 (1/4)

呈し、焼成は良好である。304は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高6cmを測る。胎土には細砂粒を含み、3mm程度のものを若干含む。内面にぶい褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。305は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、復元口径27cm、残存高6cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内外面ともにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。306の内面はナデ調整、外面は口縁部にヨコナデ調整を施し、指頭圧痕が残り、残存高4.2cmを測る。胎土には1mm以下の砂粒を多く含み、内面浅黄橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。307の内外面ともに風化により調整は不明瞭であるものの外面には一部ナデの痕跡が見られ、残存高10.3cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内面浅黄橙色、外面灰白色を呈し、焼成は良好である。

308～312は甕の底部、312は高台状となり、309、311は上底状である。308の内面はナデ調整、外面はハケ目調整、底部はナデ調整を施し、底径7.8cm、残存高4.6cmを測る。胎土には2mm以下の細砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。309の内面はナデ調整、外面はハケ目調整、底部はナデ調整を施し、底径8cm、残存高9cmを測る。胎土には2mm以下の細砂粒を多く含み、内面灰褐色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。310は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径7cm、残存高4.8cmを測る。胎土には2mm前後の砂粒を含み、内面明赤灰色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。311の内面はナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径8.5cm、残存高4.5cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面灰白色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。312は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径7cm、残存高6cmを測る。胎土には2mm以下の細砂粒を多く含み、内外面ともに灰白色を呈し、焼成は良好である。

313は高杯の口縁、鋤先状口縁であり、内外面ともにナデ調整を施し、残存高2.5cmを測る。胎土には1mm以下の細砂粒を多く含み、内面灰白色、外面浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。

314は器台の脚部、内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高8cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。

石器(第109図58、59、図版53)

58は泥岩質石材製の石包丁片で幅3.4cmの身部のほぼ中間に穿孔が位置するほど刃部の磨耗が著しい。59は層灰岩質石材製の扁平片刃石斧。長さ6.9cm、幅4.1cm、厚さ1.2cm、重量64gを測る。

土坑58(第106図、図版31)

出土遺物

石器

輝緑凝灰岩製石包丁片らしい破片1点が出土したが図示に堪えない。

土坑61(第105図、図版31)

主軸方位N-37°-E、南北(0.92m)、東西1.14m、深さ0.6mを測る。後に掘り込まれる土坑53に切られる。

出土遺物

弥生土器(第111図315、316)

315は壺の底部、内面はナデ調整を施し、外面は風化のため調整は不明瞭であり、底径7cm、残

存高 6.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい黄橙色、外面灰白色を呈し、焼成は良好である。

316 は甕の体部から口縁、口縁は強く屈曲し断面三角形となる。内外面ともに風化のため調整は不明瞭であり、残存高 6cm を測る。内面にぶい橙色、外面は橙色を呈し、焼成は不良である。

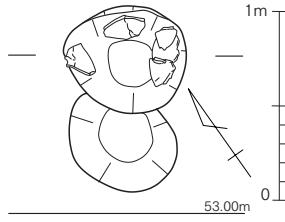
土坑 62

出土遺物

弥生土器 (第 111 図 317、318)

317 は弥生土器壺の口縁、内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 3.8cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、6mm 程度の礫を若干含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。

318 は弥生土器壺の頸部から口縁、内外面ともにナデ調整を施し、口径 19cm、残存高 5cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに明赤褐色を呈し、焼成は良好である。



第 108 図 土坑 63 実測図 (1/40)

土坑 63 (第 108 図、図版 32)

主軸方位 N-53°-E、南北 63cm、短軸 56cm を測る。弥生土器の甕がつぶれた状態で出土。浅い Pit 状の遺構、本来甕が寝た状態で設置されていたと考えられる。



第 109 図 土坑 64 実測図 (1/40)

土坑 64 (第 110 図、図版 32、33)

2 つの土坑からなる。北側の 64-1 は主軸方位はほぼ座標北、南北 2.15m、東西 2.64m、深さ 0.68m を測る。2 層を挟むように焼土と炭からなる帯状の層が確認できる。64-2 は主軸方位 N-15°-E、南北 3.26m、東西 2.02m、深さ 0.7m を測る。

出土遺物

弥生土器 (第 111 図 320 ~ 338、図版 49、50)

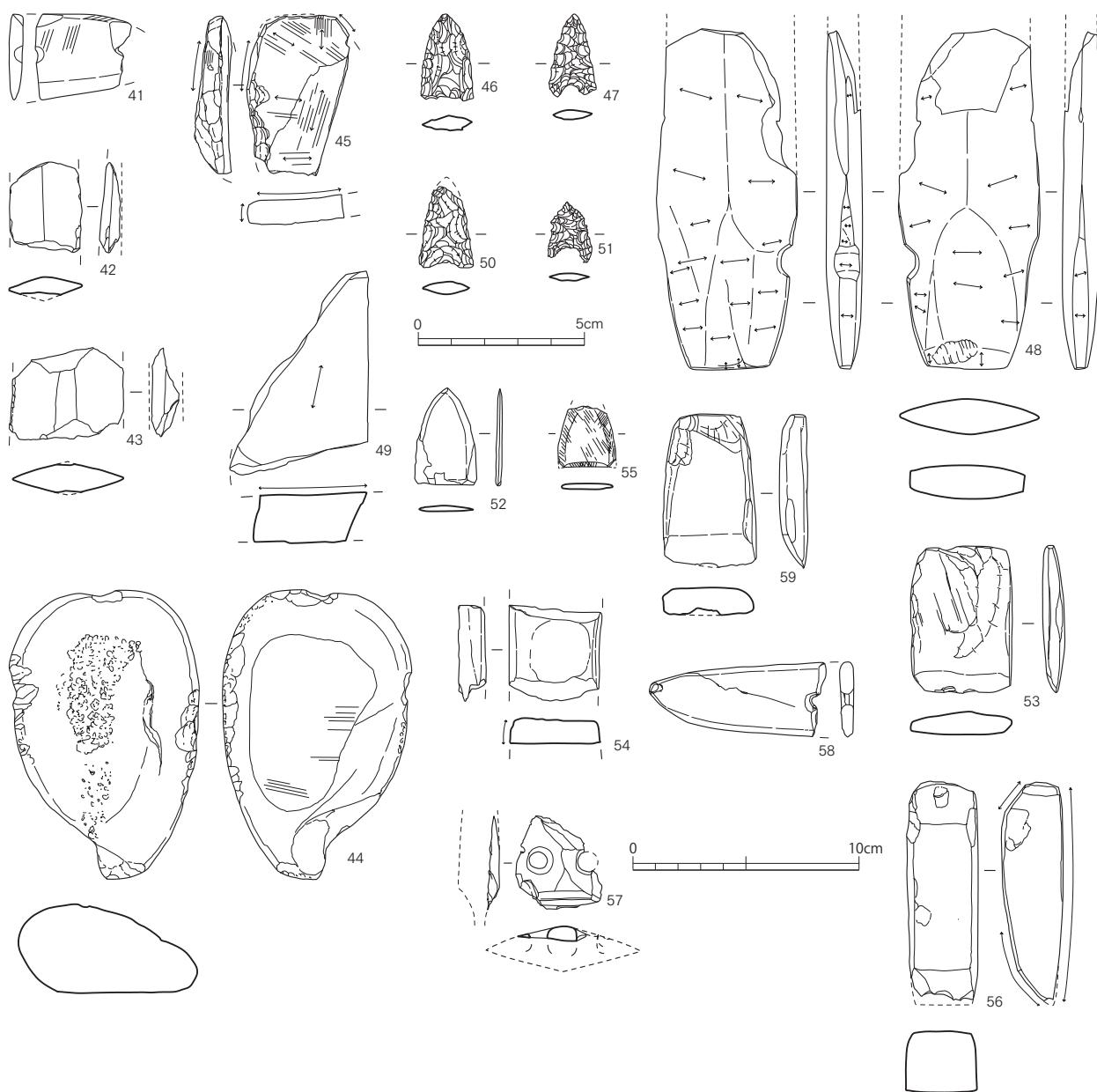
320 ~ 322 は壺の頸部から口縁、320 は頸部から外反し直線的に口縁が伸び、口縁下部に断面三角形の突帯を 1 条巡らす。321、322 は直線的に伸びる頸部に肥厚する口縁が接続する。322 は鋤先状口縁となる。320 の内面はナデ調整、外面はハケ目調整の後ナデ調整を施し、残存高 11cm を測る。胎土には細砂粒を含み、内面にぶい黄橙色、外面灰褐色を呈し、焼成は良好である。321 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、復元口径 18.2cm、残存高 4.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内外面ともに明黄橙色を呈し、焼成は良好である。322 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、復元口径 26cm、残存高 5.8cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

323 ~ 326 は壺の底部、323 の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径 6.8cm、残存高 4.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。324 の内面はナデ調整、外面はミガキ調整を施し、底径 6.5cm、残存高 6.7cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を含み、内面灰褐色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。325 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 8.5cm、残存高 8cm を測る。胎土には 3mm

前後の砂粒を多く含み、内面浅黄橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。326は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径8cm、残存高10.8cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内面浅黄橙色、外面橙色を呈し、焼成はやや不良である。

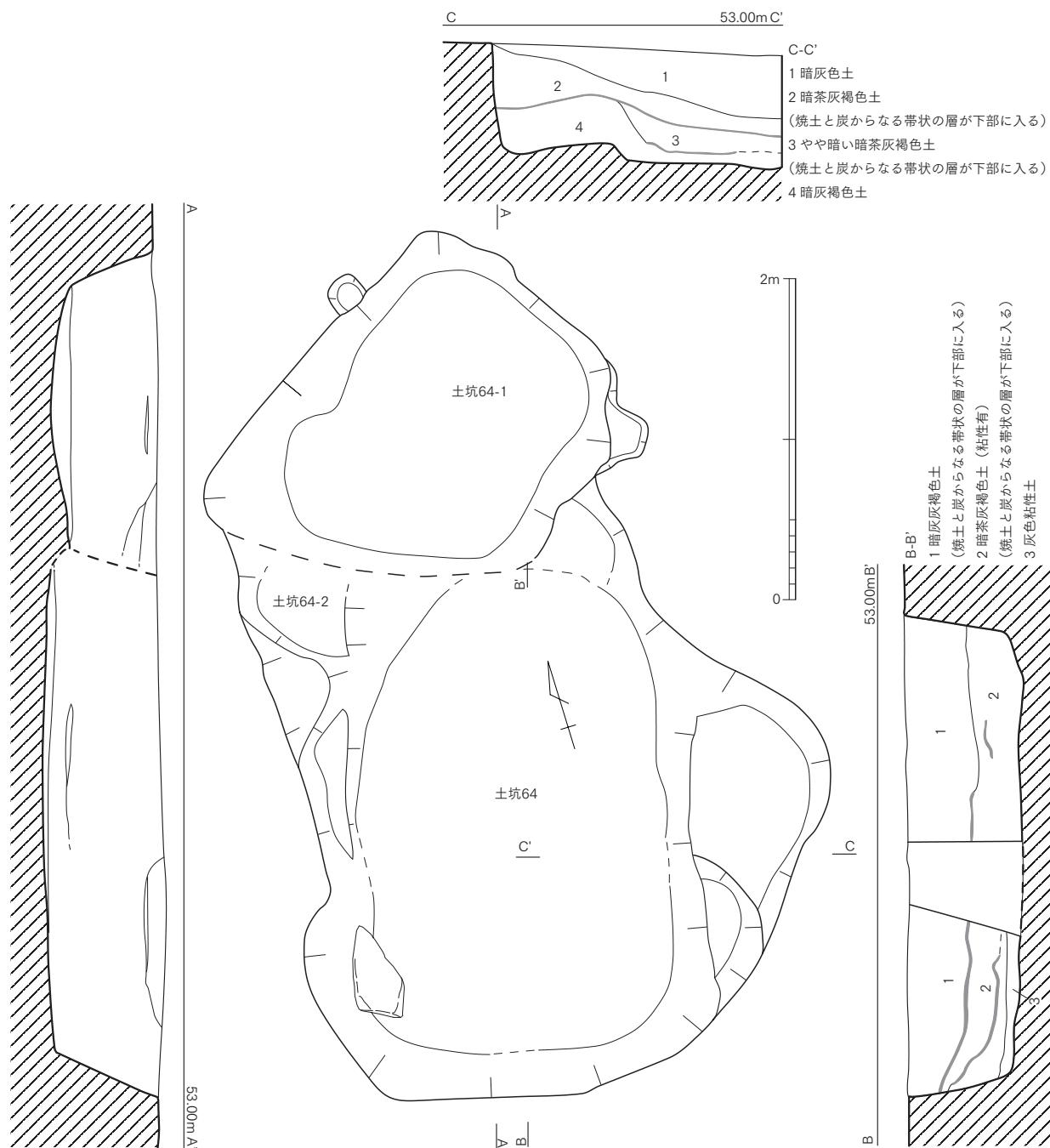
327、328は甕の体部から口縁、327の口縁は強く屈曲し逆L字状となり、328は肥厚しながら外反しくの字状になる。327は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高10cmを測る。胎土には3mm前後の砂粒を含み、外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。328の内面はナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭であるが、口縁はヨコナデ調整を施し、残存高9.8cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。

329～335は甕の底部、332～335は上底状となり、334は高台状となる。329は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径6.8cm、残存高9cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内面灰褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。330の内面はナデ調整を施し、外面は風化によ



第109図 調査区⑩出土遺物実測図 石器1(1/3、46・47・50・51は1/2)

り調整は不明瞭であり、黒斑がみられ、底径 6.7cm、残存高 8.4cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。331 の内面はナデ調整を施し、外面はハケ目調整、底部はナデ調整を施し、底径 6.3cm、残存高 8cm を測る。胎土に 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面赤褐色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。332 の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径 7cm、残存高 13.5cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに灰褐色を呈し、焼成は良好である。333 の内面は丁寧なナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、黒斑がみられ、底径 5.7cm、残存高 8.4cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい黄橙色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。



第 110 図 土坑 64 実測図 (1/40)

334 の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径 6.3cm、残存高 10.1cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい褐色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。335 の内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底部外面は指頭圧痕が残り、ナデ調整を施し、底径 7.1cm、残存高 10cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい赤褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

337 は蓋、338 は台付椀である。337、338 ともに穿孔があり、紐などを通し使用していたとも考えられ、セットで使用されたことが想定される。337 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、径 8 cm、器高 2.9cm を測り、穿孔は 1mm である。胎土には細砂粒を多く含み、内外面ともにぶい褐色を呈し、焼成は良好である。338 の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、口径 7.3cm、底径 5cm、器高 9.7cm を測る。胎土には細砂粒を多く含み、内面灰褐色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。

336 は鉢の体部から口縁、緩やかに内湾曲する体部に直線的に口縁が接続する。内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、残存高 10cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面浅黄橙色、外面橙色、焼成は良好である。

石器 (第 134 図 60 ~ 64、図版 53)

60 は蛇紋岩製の磨製石斧で敲打成形した後に両刃の刃部を中心に研磨調整で仕上げられる。長さ 14.1cm、幅 5.9cm、刃部幅 4.0cm、厚さ 3.7cm、重量 455 g を測る。61 は粘板岩質石材製の抉りのある柱状片刃石斧。刃部先端を僅かに欠損するがほぼ長さ 14.0cm、幅 2.6cm、厚さ 3.3cm、重量 221 g を測る。62 は粘板岩質石包丁の完形品である。長さ 14.5cm、幅 3.0cm、厚さ 0.7cm、重量 43 g を測るが、使用と砥ぎ直しの頻度が高く幅が狭いのが特徴である。図示する面の穿孔部背側縁に紐ズレ痕がみられ、63 は緑泥片岩製の石包丁片で穿孔背側縁にも紐ズレ痕がある。64 は粘板岩製の磨製石剣片である。図示する基部側は元来切先側だったが折損した後に折損面を研磨成形し、両面の鎬も 12cm ほど研磨して厚みを減らして基部に転用したとみられる。再利用後にも関部付近で再び折れたものであろう。現存長 14.5cm、幅 4.2cm、厚さ 2.2cm、重量 130 g を測る。

この他に土坑 64 から砂岩と頁岩製の砥石小片各 1 点と腰岳産黒曜石剥片 1 点が出土したが図示に堪えない。

土坑 67(第 112 図、図版 33)

調査区中央の西側にある。掘り方は判然としない。

出土遺物

弥生土器 (第 111 図 341、342)

341 は壺の口縁、口縁は直線的に伸び、内外面ともにナデ調整を施し、残存高 4cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。

342 は甕の口縁、逆 L 字状となり、内外面ともにナデ調整を施し、残存高 2cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい黄橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

土坑 70(第 113 図、図版 33)

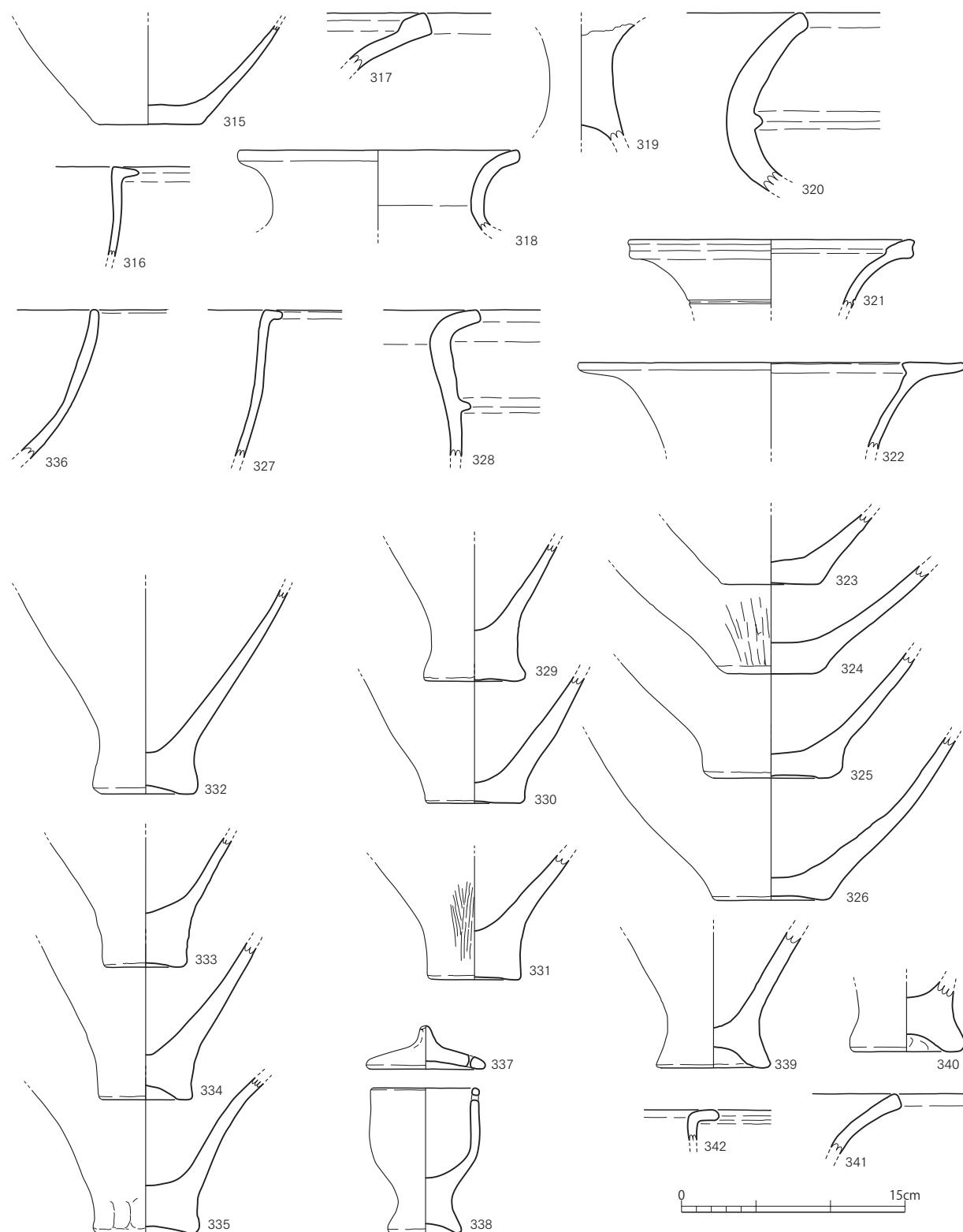
調査区の中央付近にある。後に掘削される土坑に切られる。主軸方位は磁北、南北は残存部で

2.6 m、東西 2 m、深さ 0.53 m を測る長楕円形の土坑。

出土遺物

弥生土器 (第 114 図 343 ~ 361、図版 50)

343 は壺の頸部から口縁、口縁は頸部から外へ開きながら直線的に伸びる。内外面ナデ調整を施



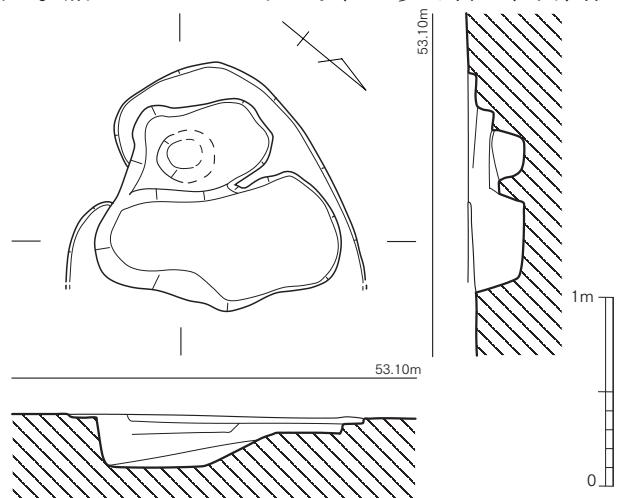
第 111 図 土坑 61、62、64、66、67 出土遺物実測図 (1/4)

し、残存高 7.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面灰白色、外面浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。

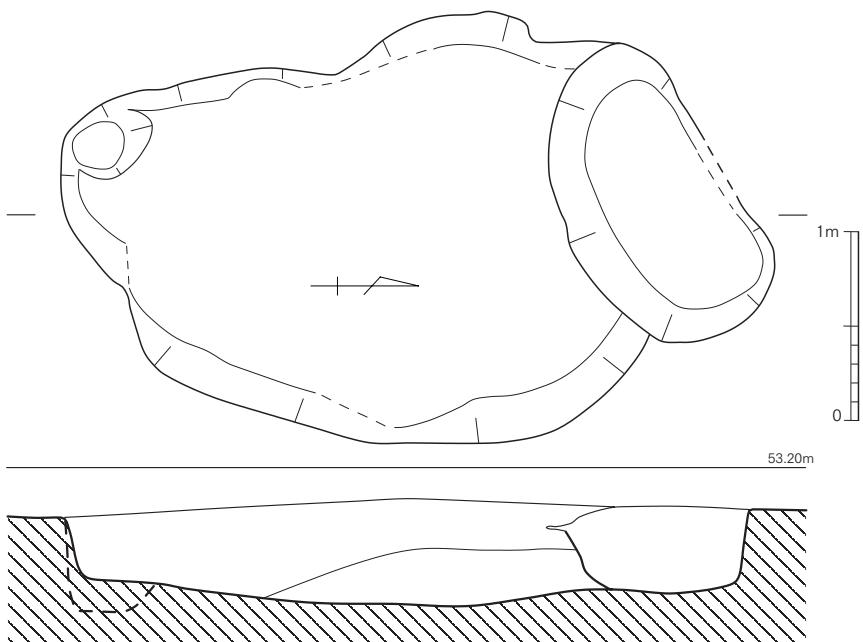
344 は小型の壺である。頸部から口縁を欠失する。内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、胴部中程に断面三角形の突帯を 1 条巡らし、底径 4.2cm、残存高 6cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を含み、内面褐灰色、内面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

345～350 は壺の底部、350 のみ上底で高台状となる。345 の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径 8.5cm、残存高 7.2cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面に明褐灰色を呈し、焼成は良好である。346 の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径 7.5cm、残存高 4cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。347 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 8.5cm、残存高 3.5cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面褐灰色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。348 の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径 8cm、残存高 8.5cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。349 の内面は風化により調整は不明瞭であり、外面はミガキ調整を施し、黒斑がみられ、底径 10cm、残存高 13.5cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。350 の内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 10.4cm、残存高 5cm を測る。胎土には 2mm 以下の細かい砂粒を含み、内面橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

351～356 は甕の頸部から口縁、351 は断面三角形の突帯を 1 条巡らし、352 は緩やかに外反し肥厚する口縁、355、356 は体部から屈曲し口縁へ接続し逆 L 字状の口縁となる。351 の内外面ともに風化により調

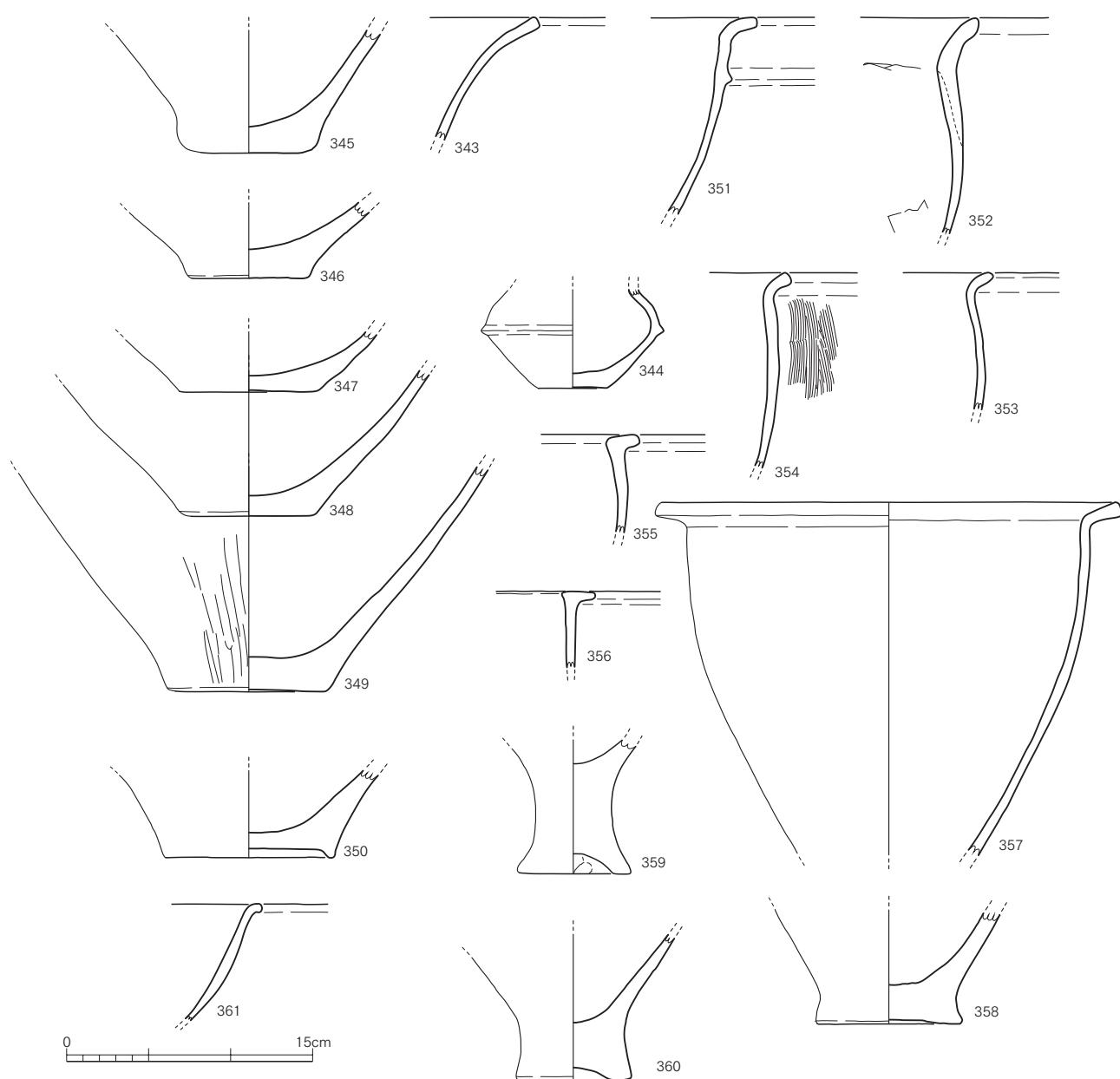


第 112 図 土坑 67 実測図 (1/40)



第 113 図 土坑 70 実測図 (1/40)

整は不明瞭であり、口縁外面にヨコナデ調整を施し、残存高 12cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面褐灰色、外面灰黄色を呈し、焼成は良好である。352 の内外面ともにナデ調整を施し、残存高 13cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を多く含み、内面黄橙色、外面黒褐色を呈し、焼成は良好である。353 の内外面ともに風化のため調整は不明瞭であり、残存高 8.3cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。354 の内面は風化のため調整は不明瞭であり、外面はハケ目調整、口縁はヨコナデ調整を施し、残存高 12cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面黒色、外面黒褐色を呈し、焼成は良好である。355 の内面は風化のため調整は不明瞭であり、外面はナデ調整、口縁には指頭圧痕が残り、残存高 6cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内外面ともに明赤褐色を呈し、焼成は良好である。356 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 4.6cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい黄橙色、外面褐灰色を呈し、焼成は良好である。357 は底部のみ欠失し、口縁にかけて肥厚する。内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、口径 28.4cm、残存高 21.5cm を測る。



第 114 図 土坑 70 出土遺物実測図 弥生土器 (1/4)

胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面明褐灰色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

358～360は甕の底部、359、360は上底で高台状となる。358は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、二次的な被熱を受けた痕跡が見られ、底径9cm、残存高6.7cmを測る。胎土には2mm以下の細砂粒を多く含み、内面褐灰色、外面淡赤橙色を呈し、焼成はやや不良である。359は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底部外面はナデ調整を施し、底径6.9cm、残存高7.7cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。360は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径7cm、残存高8.6cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面明褐灰色、外面橙色を呈し、焼成はやや不良である。

361は鉢の体部から口縁、内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高7.1cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成はやや不良である。

石器(第134図65、66、図版53)

65は硬質砂岩製の蛤刃磨製石斧刃部片で体部に敲打成形痕?が残る。残存長10.0cm、幅5.4cm、厚さ4.2cm、重量303gを測る。66は頁岩製の両端部を折損する磨製石剣身部の両面の鎬が剥げたもの、残存幅7.6cm、残存厚さ1.2cm、重量65gを測る。この他に頁岩製で剥離調整痕らしい痕跡のある剥片1点と研磨痕のある剥片各1点と緑色岩製の磨製石斧らしい剥片1点も出土したが図示に堪えない。

鉄器(第134図67、図版53)

用途は不明ながら基部側が欠損した鉄鎌に似た形状で基部の幅と厚みが1cm×0.7cm、先端部の幅2.0cm、厚さ0.4cm、残存長3.9cm、重量11gを測る。

土坑72

調査区中央付近にある、大型の土坑。

出土遺物

弥生土器(第115図362～376、図版50)

362、363は壺の口縁、362は体部から直線的に口縁が伸びる、363は体部は内傾し伸び、鋤先状口縁となる。362の内面は風化により調整は不明瞭であり、外面はナデ調整を施し、残存高7.3cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内面明褐灰色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。363は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高6.2cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を多含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。

364～367は壺の底部、366は上底状となる。364は内外面ともに調整は不明瞭であり、底径7.4cm、残存高8.2cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。365は内外面ともにナデ調整を施し、底径7.5cm、残存高12cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。366は風化により調整は不明であり、外面は工具痕が残り、底部はナデ調整を施し、底径11.2cm、残存高5.8cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を多く含み、内面明赤褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。367の内面はナデ調整、外面はハケ目調整後ミガキ調整を施し、底径13.5cm、残存高10.5cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を多く含み、内外面ともにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。

368～370は甕の体部から口縁、368、369は緩やかに外反し如意形になる口縁、370は口縁はや

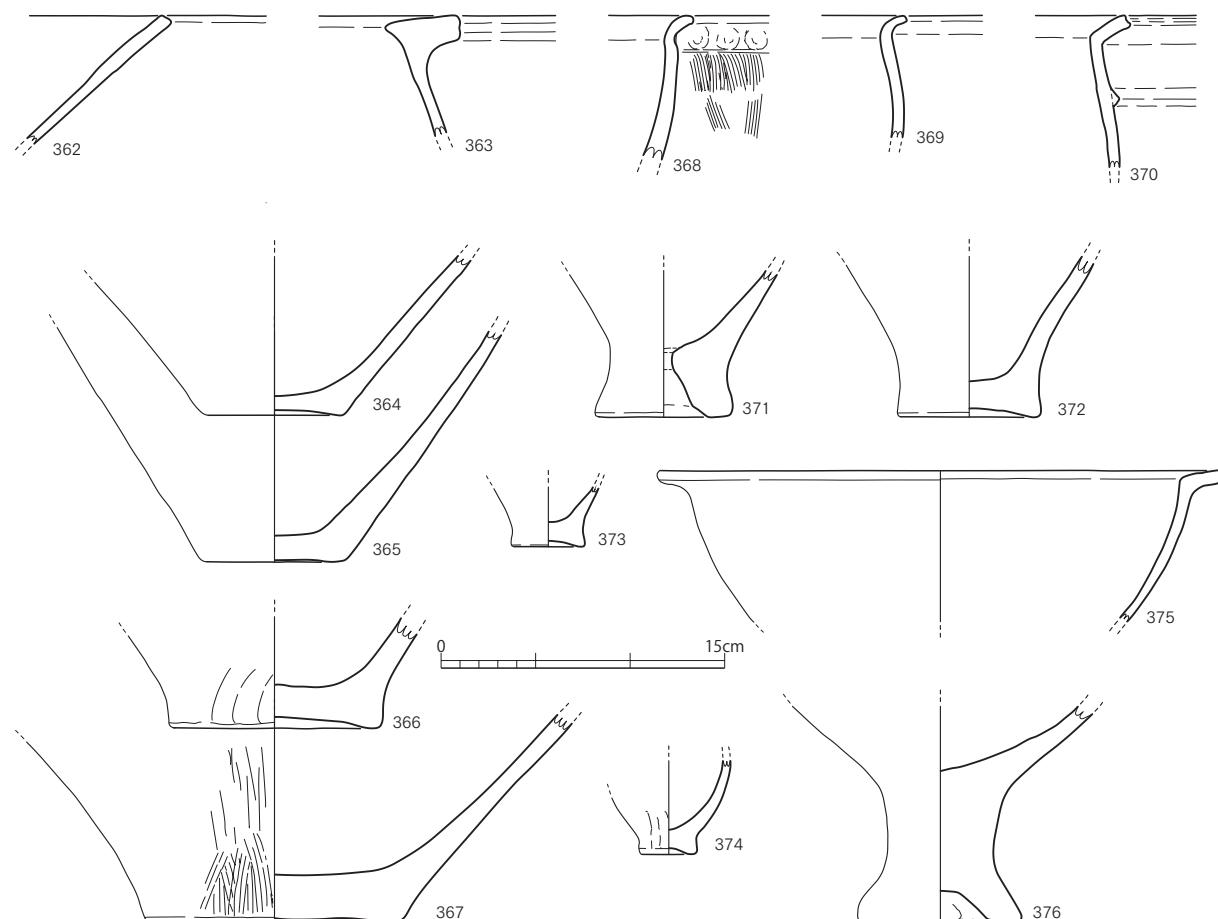
や強く屈曲して接続しくの字状となる口縁。368 の内面はナデ調整、外面はハケ目調整を施し、口縁外面に指頭圧痕が残り、残存高 7.6cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい褐色、外面褐灰色を呈し、焼成は良好である。369 は内外面ともに調整は不明瞭であり、残存高 6.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい黄橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。370 の内外面ともにナデ調整を施し、口縁外面はヨコナデ調整を施し、残存高 8cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

371、372 は甕の底部、371 は底部に貫通する穿孔がある。371 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底部外面にはナデのような痕跡が見られ、底径 7.3cm、残存高 7.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面灰褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。372 の内面はナデ調整を施し、外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底部外面にはナデのような痕跡が見られ、底径 7.6cm、残存高 8cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

373、374 は小型の甕、いずれも上底状となり、373 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 3.9cm、残存高 3.1cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい褐色、外面黒色を呈し、焼成は良好である。374 は内外面ともにナデ調整を施し、底径 3cm、残存高 5cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内外面明黄橙色を呈し、焼成は良好である。

375 は鉢、内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、復元口径 30cm、残存高 8cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

376 は台付鉢、内外面ナデ調整を施し、底径 8.7cm、残存高 11cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂



第 115 図 土坑 72 出土遺物実測図 弥生土器 (1/4)

粒を多く含み、内外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

石器(第134図68、図版53)

腰岳産黒曜石製の全面に調整剥離が及ぶが、裏面に原石面が一部残る凹基打製石鏸。長さ2.2cm、幅2.1cm、厚さ0.45cm、重量2gを測る。この他にも腰岳産黒曜石の小剥片1点が出土したが図示しない。

土坑73～75(第116図、図版34)

土坑73は主軸方位N-32.5°-E、南北3.4m、東西2.4m、深さ90cmを測る、楕円形の土坑。土坑74はN-27.5°-E、南北1.9m、東西1.4m、深さ73cmを測る、楕円形の土坑。土坑75はN-88°-E、南北1.9m、東西1.4m、深さ70cmを測る、楕円形の土坑。

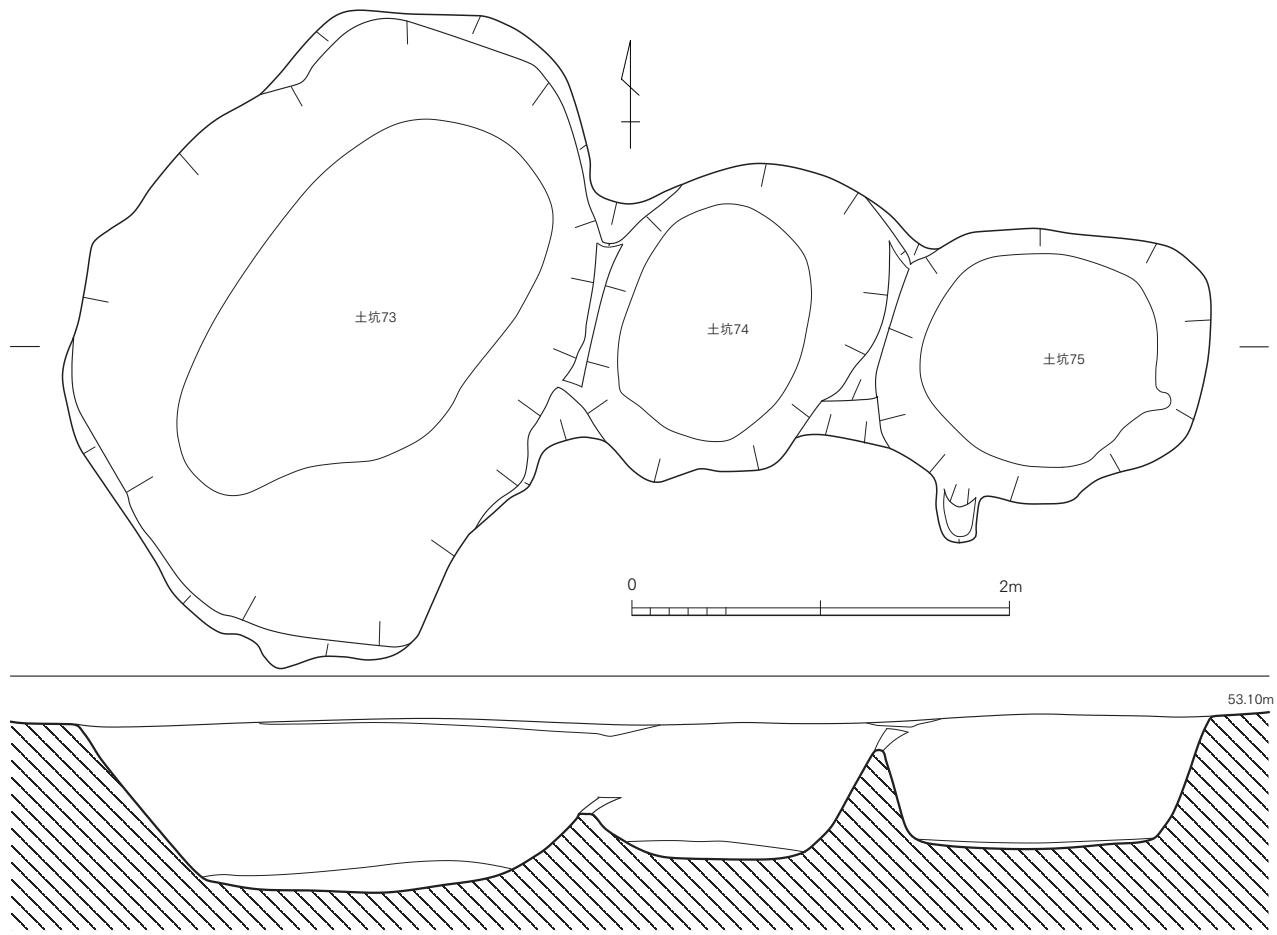
土坑73～75は連なり、意図的につないだと考えられる。掘削途中では浄水施設等の可能性も考えたものの堆積状態からはろ過材等は確認できず用途は不明である。

土坑73(第116図)

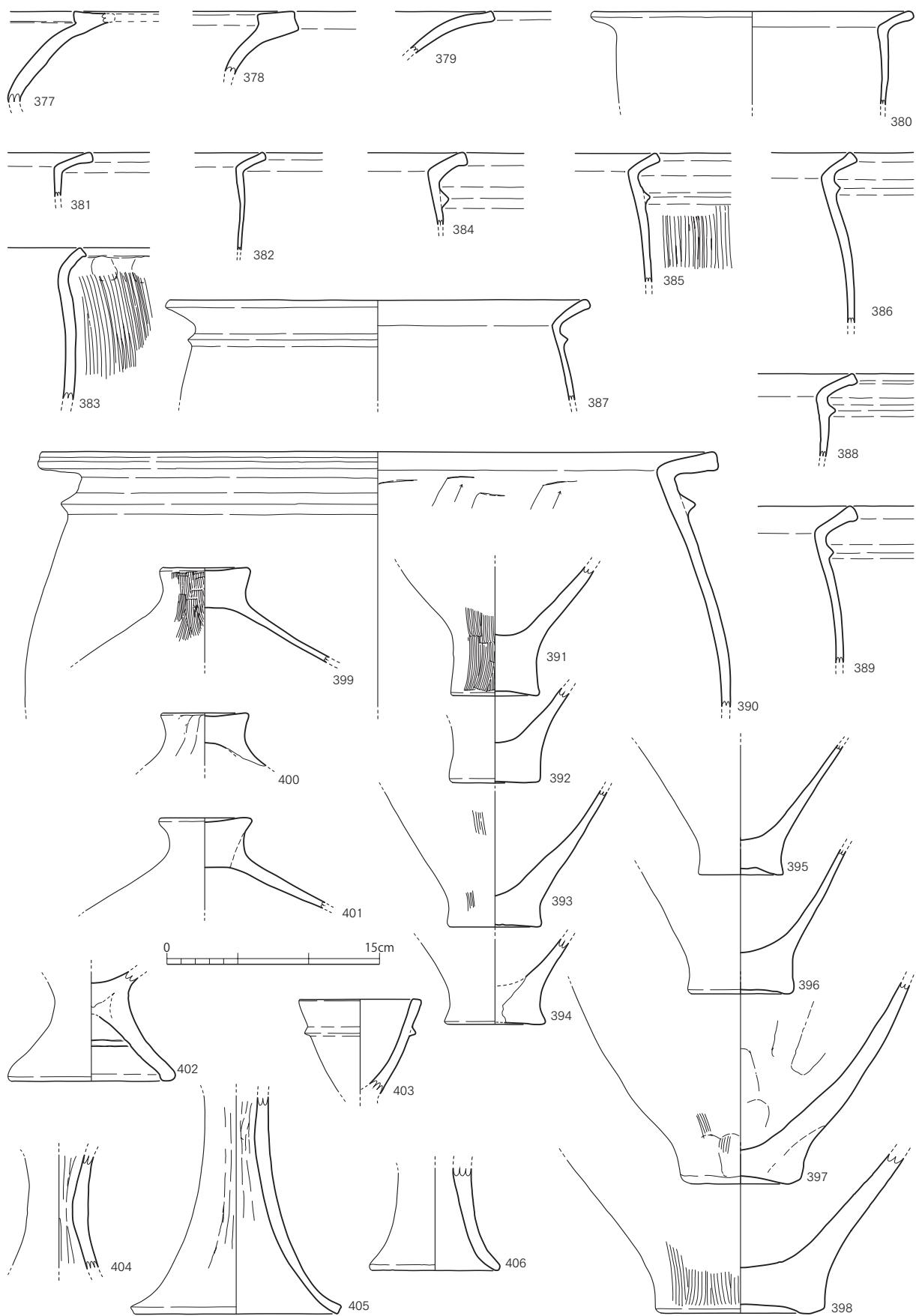
出土遺物

弥生土器(第117図377～406、図版50)

377～379は壺の口縁、377は鋤先状口縁、378は肥厚し断面四角形、379は直線的に伸びる口縁。377は内外面ともにナデ調整、口縁外面の上端はナデ調整を施し、残存高6.6cmを測る。胎土には1mm以下の砂粒を含み、内外面ともに灰褐色を呈し、焼成は良好である。378の内面はナデ調整を施



第116図 土坑73～75実測図 (1/40)



第 117 図 土坑 73 出土遺物実測図 弥生土器 (1/4)

し、外面は風化により調整は不明瞭であり、残存高 4.5cm を測る。胎土には 3mm 以下の細砂粒を含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。379 は内外面ともにナデ調整を施し、残存高 3cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面灰白色、外面浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。

380 から 390 は甕の体部から口縁、380 から 383 は断面くの字状、384 から 389 は断面くの字状の口縁で下部に断面三角形の突帯を 1 条巡らし、390 は屈曲が強く逆 L 字状の口縁で下部に断面三角形の突帯を 1 条巡らす。380 は内外面とも風化により調整は不明瞭であり、復元口径 22.8cm、残存高 6.5cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。381 は内外面ともにナデ調整、残存高 3cm を測る。胎土には細砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。382 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 6.8cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面褐灰色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。383 の内面はナデ調整、外面はハケ目調整、口縁は指頭圧痕が残り、端部はナデ調整を施し、残存高 10.6cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。384 の内外面ともにナデ調整を施し、残存高 5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい褐色、外面にぶい赤褐色を呈し、焼成は良好である。385 の内面はナデ調整、外面はハケ目調整、口縁はナデ調整を施し、残存高 9cm を測る。胎土には 1mm 前後の砂粒を含み、内面明褐灰色、外面灰褐色を呈し、焼成は良好である。386 の内外面ともにナデ調整、口縁外面はヨコナデ調整を施し、復元口径 30cm、残存高 12cm を測る。胎土には細砂粒を多く含み、内面浅黄橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。387 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、復元口径 30cm、残存高 7cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面灰白色、外面浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。388 の内外面ともにナデ調整、口縁外面はヨコナデ調整を施し、残存高 5.8cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面浅黄橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。389 の内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、復元口径 36cm、残存高 11cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面浅黄橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。390 の内面はナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭であり、口縁外面はヨコナデ調整を施し、復元口径 48cm、残存高 18cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

391 から 398 は甕の底部、395 から 398 は上底状となる。391 は内面はナデ調整、外面はハケ目調整、底部はナデ調整を施し、底径 6.2cm、残存高 8.8cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を多く含み、内面にぶい褐色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。392 は内面はナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭であり、底部外面はナデ調整を施し、底径 6.5cm、残存高 6.3cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面灰褐色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。393 は内面はナデ調整、外面はハケ目調整を施し、底部外面はナデ調整を施し、底径 6.7cm、残存高 9.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい黄橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。394 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 7cm、残存高 5.7cm を測る。胎土には細砂粒を含み、内面褐灰色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。395 は内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、煤の付着と二次被熱の痕跡が見られ、底径 6cm、残存高 9.2cm を測る。胎土には 1mm 前後の細砂粒を含み、内面灰褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。396 は内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、二次的な被

熱の痕跡が見られ、底径 7cm、残存高 10cm を測る。胎土には 1mm 前後の細砂粒を含み、内面灰褐色、外面にぶい橙色を呈し、焼成はやや不良である。397 は内外面ともにナデ調整を施し、底径 8.6cm、残存高 14cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面灰褐色、外面赤褐色を呈し、焼成は良好である。398 は内面はナデ調整を施し、外面はハケ目調整、底部はナデ調整を施し、底径 12cm、残存高 11cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内面灰褐色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

399 から 401 は蓋である。399 は内面はナデ調整、外面はハケ目調整、天井部はナデ調整を施し、つまみ部径 6.4cm、残存高 6.3cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面浅黄橙色、外面灰白色を呈し、焼成は良好である。400 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、つまみ部径 6.2cm、残存高 3.7cm を測る。胎土には細砂粒を含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成はやや不良である。401 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、つまみ部径 6.6cm、残存高 6cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面浅黄橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成はやや不良である。

402 は台付の小型の鉢と考えられる脚部、脚部内面はヨコナデ調整、他はナデ調整を施し、底径 11.8cm、残存高 7.3cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、若干礫を含む。内面橙色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。403 は台付の小型の鉢と考えられる鉢部、体部に断面三角形の突帯を 1 条巡らす。内面はナデ調整、外面はヨコナデ調整を施し、復元口径 8.6cm、残存高 6.6cm を測る。胎土には細砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

404、405 は高杯の脚部、404 の脚部内面は絞り痕が残り、外面はナデ調整を施し残存高 7.8cm を測る。胎土には 1mm 以下の細砂粒を含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。405 の脚部内面は絞り痕が残り、外面はナデ調整を施し、底径 14.8cm、残存高 15.2cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を多く含み、内外面ともに明赤褐色を呈し、焼成は良好である。406 は器台の脚部、内面はナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径 9.2cm、残存高 7.2cm を測る。胎土には細砂粒を含み、内面赤色、外面赤褐色を呈し、焼成は良好である。

石器(第 134 図 69、71、図版 53)

69 は砂岩製の石包丁片で、穿孔の背側縁と裏面側の穿孔間側縁に紐ズレ痕がみられる。71 は硬質砂岩らしい磨製石剣の切先に近い身部片だろうか。厚さ 1.3cm、幅 4.2cm ほどであろう。この他にも頁岩製の石包丁の可能性のある小破片 1 点も出土したが図示に堪えない。

土坑 74(第 116 図)

出土遺物

石器(第 134 図 72、73、図版 53)

頁岩製石包丁とみられる破片である。

土坑 75(第 116 図)

出土遺物

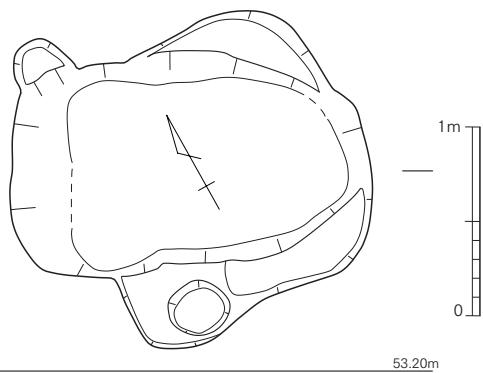
弥生土器(第 119 図 407、図版 51)

407 は甕、ほぼ完形に復元できる。くの字状に屈曲する口縁を持ち、内面はナデ調整、外面はハケ目調整、底部はナデ調整を施し、復元口径 28cm、器高 32cm、底径 7.7cm を測る。胎土には 3mm 前後の砂粒を多く含み、

1cm前後の礫を若干含む。内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

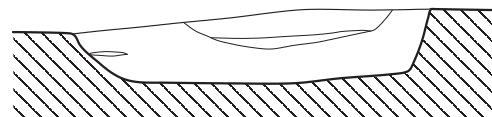
石器(第134図74、75、図版53)

74は頁岩質石材製の石包丁片で、残存長10.0cm、幅6.0cm、厚さ0.8cm、重量66gを測り、穿孔の背側縁に紐ズレ痕がみられる。75は雲母片岩製蛤刃石斧の刃部片で、残存長9.2cm、幅6.0cm、厚さ3.8cm、重量290gを測る。

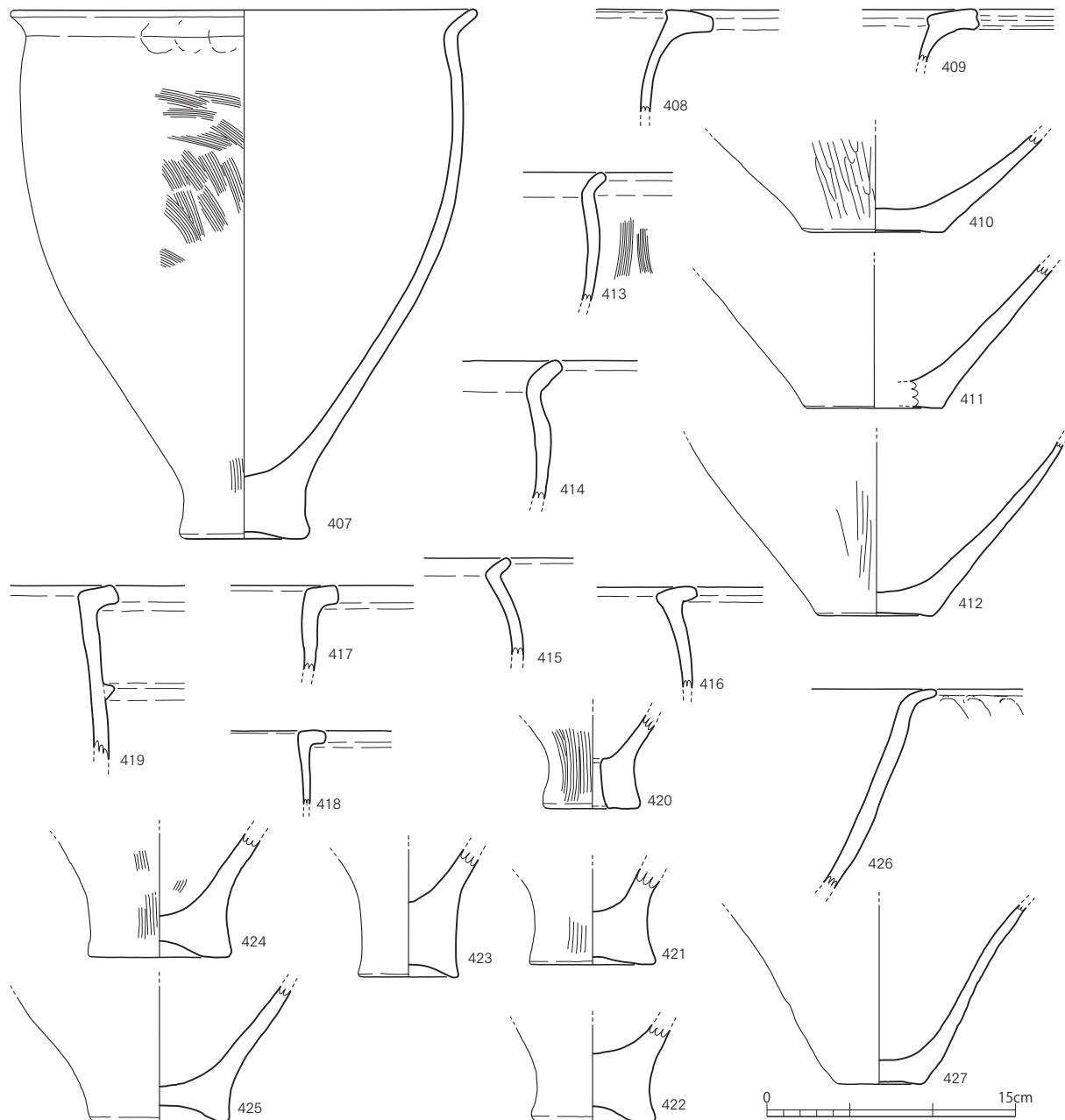


土坑76(第118図)

主軸方位N-61°-W、南北1.7m、東西1.88m、深さ0.35mを測る、不整形な土坑。



第118図 土坑76実測図 (1/40)



第119図 土坑75、76出土遺物実測図 弥生土器(1/4)

出土遺物

弥生土器 (第 119 図 408 ~ 427、図版 51)

408、409 は壺の口縁、外反する頸部に肥厚する口縁が接続し、口縁は鋤先状口縁となる。408 の内面はナデ調整、口縁はヨコナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭であり、復元口径 20cm、残存高 6.1cm を測る。胎土には 1mm 前後の砂粒を含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。409 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、口縁外面はヨコナデ調整を施し、復元口径 20cm、残存高 3.2cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

410 ~ 412 は壺の底部、410 の内面はナデ調整を施し、外面はミガキ調整、底部はナデ調整を施し、復元底径 8.5cm、残存高 5.6cm を測り。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。411 の内外面ともにナデ調整を施し、底径 8.5cm、残存高 8.3cm を測り。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。412 の内面はナデ調整を施し、外面はミガキ調整、底部はナデ調整を施し、底径 7cm、残存高 10.3cm を測り。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい黄褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

414 ~ 419 は甕の体部から口縁、414 は如意形の口縁、415、416 はやや内傾する体部に口縁が接続する。417 ~ 419 は口縁は肥厚し断面四角形となる。414 の内面はナデ調整、外面はハケ目調整を施し、残存高 7.7cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。415 は内外面ともにナデ調整を施し、復元口径 8.3cm、残存高 5.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内外面ともに明褐色を呈し、焼成は良好である。416 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 6cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。417 は内外面ナデ調整、口縁外面はヨコナデ調整を施し、残存高 5.2cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面浅黄橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。418 は内外面風化により調整は不明瞭であり、残存高 4.4cm を測り。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内面灰褐色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。419 は内外面風化により調整は不明瞭であり、残存高 10.5cm を測り。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。

420 ~ 425 は甕の底部。420 は内面はナデ調整、外面はハケ目調整を施し、底径 5.9cm、残存高 5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。421 は内面はナデ調整、外面はハケ目調整を施し、底径 7.6cm、残存高 5cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内面灰赤色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。422 は内外面ともにナデ調整を施し、底径 7.5cm、残存高 5.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面灰赤色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。423 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 6cm、残存高 6.7cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面橙色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。424 は内面はナデ調整、外面はハケ目調整を施し、底部外面はナデ調整を施し、底径 8.6cm、残存高 7cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面灰褐色、外面明灰褐色を呈し、焼成は良好である。425 は内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径 8cm、残存高 7.8cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

426 は鉢の体部から口縁、内面はナデ調整、外面は風化のため不明瞭であるものの口縁付近に指頭圧痕が残り、残存高 12cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい赤褐色、外面明赤褐色を呈し、焼成はやや不良である。

427 は鉢の底部、内面はナデ調整、外面は風化のため不明瞭であり、底径 5cm、残存高 10.7cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面褐灰色、外面明褐灰白色からにぶい橙色を呈し、焼成はやや不良である。

土坑 77(第 120 図、図版 35)

主軸方位 N-25°-E、南北 2.6 m、東西 1.6 m、深さ 62.4cm を測る。埋土はほぼ暗茶褐色土、下部に黒灰色色土が帶状に入り上下に分かれる。

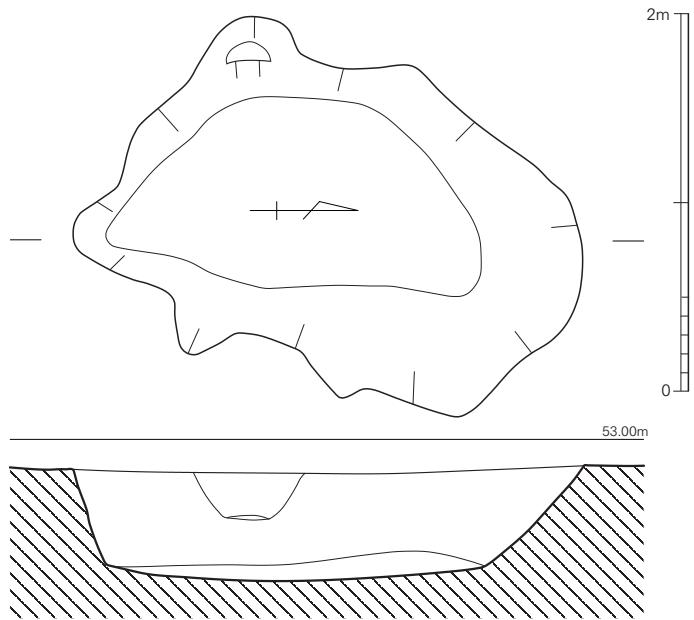
出土遺物

弥生土器(第 121 図 428 ~ 446、458、図版 51)

428 ~ 431 は壺の頸部から口縁、428 のみ頸部から直線的に伸びる口縁を持ち、430、431 は鋤先状口縁となる。429 の口縁は断面四角形となり 429、430 では口縁端部中央は窪み沈線状となる。428 の内外面ともにナデ調整を施し、復元口径 25cm、残存高 7.8cm を測る。胎土には 1mm 以下の砂粒を含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。429 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高 3.4cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。430 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、復元口径 24cm、残存高 3.4cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内外面とも明褐灰色を呈し、焼成は良好である。431 の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、復元口径 24cm、残存高 3.4cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面明黄橙色、外面灰白色を呈し、焼成は良好である。

432 は壺の底部、内外面ともにナデ調整を施し、復元底径 6.7cm、残存高 7cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を含み、内面にぶい黄橙色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

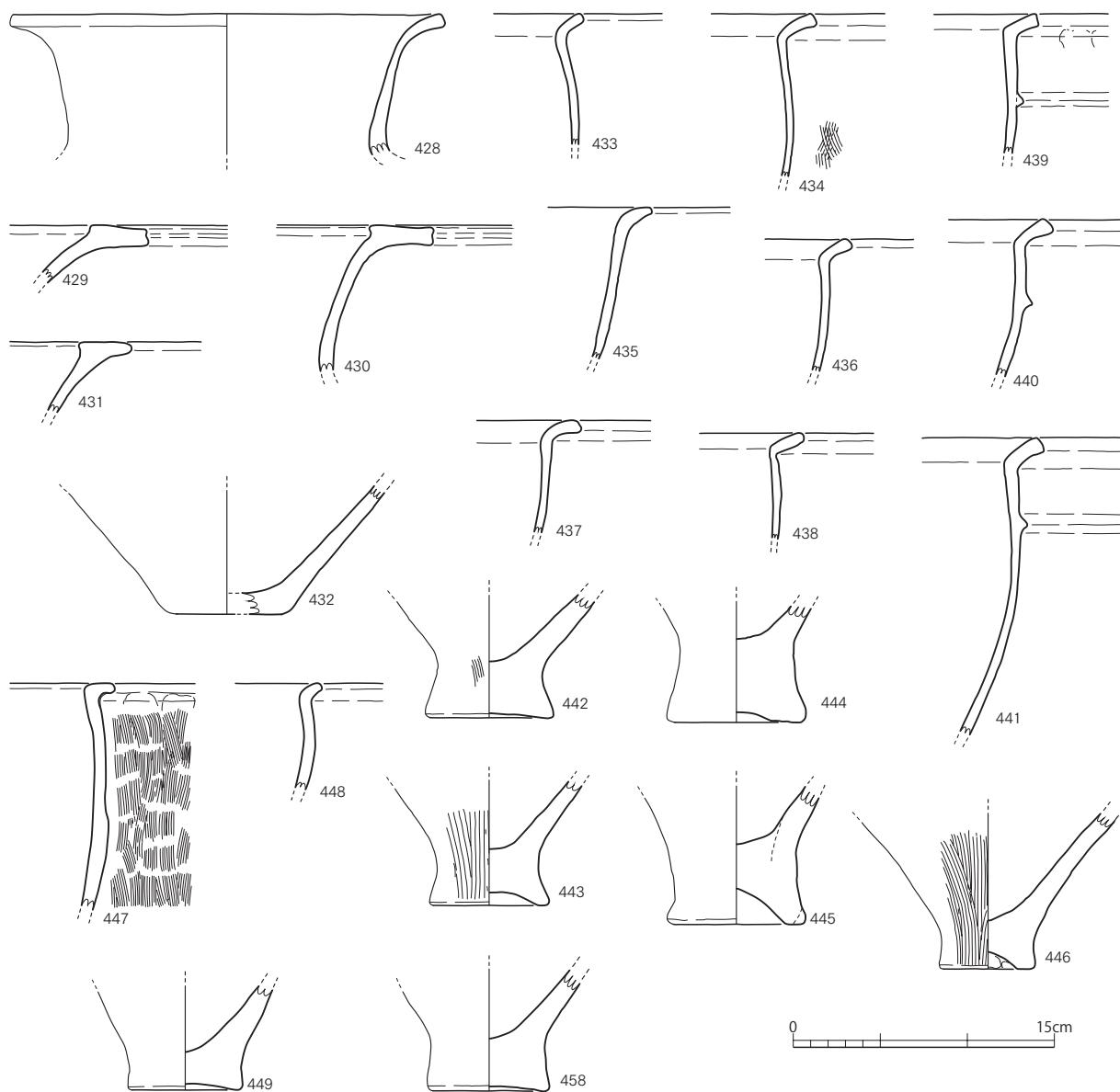
433 ~ 441 は甕の頸部から口縁、いずれも口縁は体部から屈曲して接続し、断面くの字状となり、439 ~ 441 では口縁下部に断面三角形の突帯が 1 条巡らす。435 のみ体部は外へ開く。433 は内外面ともにナデ調整を施し、残存高 7.5cm を測る。2mm 以下の砂粒を含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。434 の内面はナデ調整、外面は風化するもののハケ目調整が残り、口縁はヨコナデ調整を施し、残存高 9.3cm を測る。2mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。435 は内外面風化により調整は不明瞭であり、残存高 8.7cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面浅黄橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成はやや不良である。436 は内外面ともにナデ調整を施し、残存高 7.5cm を測る。胎土には 1mm 以下の砂粒を含み、内外面と



第 120 図 土坑 77 実測図 (1/40)

もに明赤褐色を呈し、焼成は良好である。437 は内外面ともにナデ調整を施し、残存高 6.4cm を測る。胎土には 1mm 以下の砂粒を含み、内外面ともに明赤褐色を呈し、焼成は良好である。438 は内面は風化により調整不明瞭、外面はナデ調整を施し、口縁外面の屈曲部に工具押さえの跡が残り、残存高 6cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面赤橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。439 は内外面ナデ調整、口縁外面はヨコナデ調整を施し、指頭圧痕が残り、煤が付着し、残存高 8cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。440 の内面はナデ調整を施し、外面は風化により不明瞭であり、残存高 8.9cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面黒褐色、外面褐色を呈し焼成は良好である。441 の内外面ともにナデ調整を施し残存高 17cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに橙色を呈し焼成は良好である。

442～446、458 は甕の底部、442 は内面ナデ調整を施し、外面はハケ目調整を施し、底径 7.4cm、残存高 6.6cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多含み、内面黒色、外面にぶい橙色を呈し、焼成



第 121 図 土坑 77、82 出土遺物実測図 弥生土器 (1/4)

は良好である。443 の内面は風化により調整は不明瞭であり、外面はハケ調整、底部はナデ調整を施し、底径 6.9cm、残存高 6.8cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内外面ともに灰褐色を呈し、焼成は良好である。444 の内外面はともに風化により調整は不明瞭であり、底部外面はナデ調整を施し、底径 8cm、残存 6.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面灰褐色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。445 の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径 8cm、残存 7.2cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面灰褐色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。446 の内面は風化により調整は不明瞭であり、外面はハケ調整、底部はナデ調整を施し、底径 5.5cm、残存高 8.5cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内面黒色、外面にぶい赤褐色を呈し、焼成は良好である。458 は内外面ともにナデ調整を施し、底径 7cm、残存高 6cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内外面とも橙色を呈し、焼成は良好である。

石器

泥岩質石材製の 12cm × 5.5cm × 0.5cm の大きさの剥片で石包丁未製品の可能性もあるが図示していない。

土坑 79～82(第 122 図)

全体の主軸方位は N-42°-W、土坑 81 が初期に掘削され、土坑 79、80、82 がそれを切るように掘削される。

土坑 79(第 122 図)

主軸方位は N-42°-W、南北 0.55m、東西 0.83m を測る、橢円形の土坑。

土坑 80(第 122 図)

主軸方位 N-45°-E、南北 0.58m、東西 0.35m、深さ 0.12m を測る。橢円形の土坑。

土坑 81(第 122 図、図版 35)

主軸方位 N-45°-W、南北 1.26m、東西 1.9m、深さ 0.12m を測る。長方形の土坑。

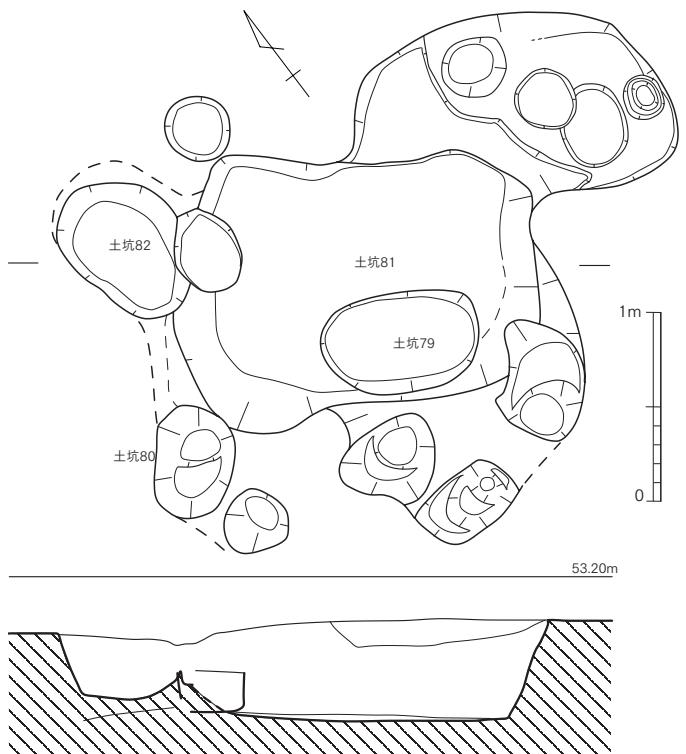
土坑 82(第 122 図)

主軸方位は磁北、南北 0.79m、東西 0.55m、深さ 0.12m を測る。橢円形の土坑。

土坑 80～82 出土遺物

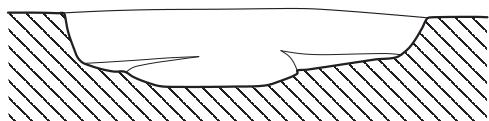
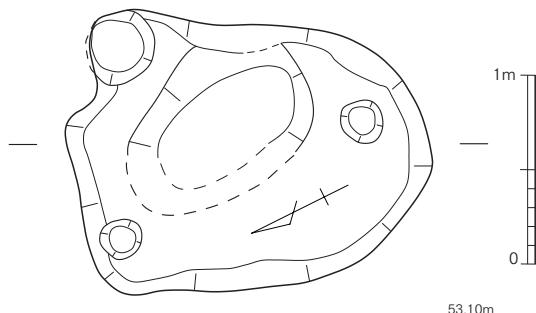
弥生土器(第 121 図 447～449、図版 51)

447、448 は甕の体部から口縁、447 は体部から口縁にかけて強く屈曲し、断面逆 L 字状となり、448 は屈曲は緩く如意形となる。447 の内面はナデ調整、外面はハケ



第 122 図 土坑 79～82 実測図 (1/40)

目調整を施し、口縁外面には指頭圧痕が残り、復元口径 27cm、残存高 13cm を測る。胎土には 4mm 以下の粗い砂粒を含み、内面灰褐色、外面褐灰色を呈し、焼成は良好である。448 の内面はナデ調整、



第 123 図 土坑 85 実測図 (1/40)

外面は風化により調整は不明瞭であるが、口縁にはナデ調整を施し、残存高 6cm を測る。2mm 以下の砂粒を含み、内外面灰褐色を呈し、焼成は良好である。

449 は甕の底部、内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 6.6cm、残存高 5.7cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい黄色橙色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

石器 (第 134 図 76、図版 53)

土坑 82 出土、姫島産黒曜石製の凹基式打製石鎌で全面に調整剥離が及ぶが片方の脚部を失う。長さ 2.9 cm、残存幅 1.8cm、厚さ 0.4cm を測る。

土坑 85 (第 123 図、図版 36)

主軸方位 N-23.5°-E、南北 1.9 m、東西 1.4 m、深さ約 0.37 m を測る。南北壁で土層観察を行い、ほぼ単一層で暗茶褐色土の埋土中央付近に黒褐色土が縦方向に入り別遺構が切り込んでいると考えられる。

土坑 86 (第 124 図、図版 36)

主軸方位 N-27.5°-E、南北 1.3 m、東西 0.9 m、深さ 0.37 m を測る。土坑内に礎石状に石材が据えられたような状態で出土するが、対になる土坑や Pit は

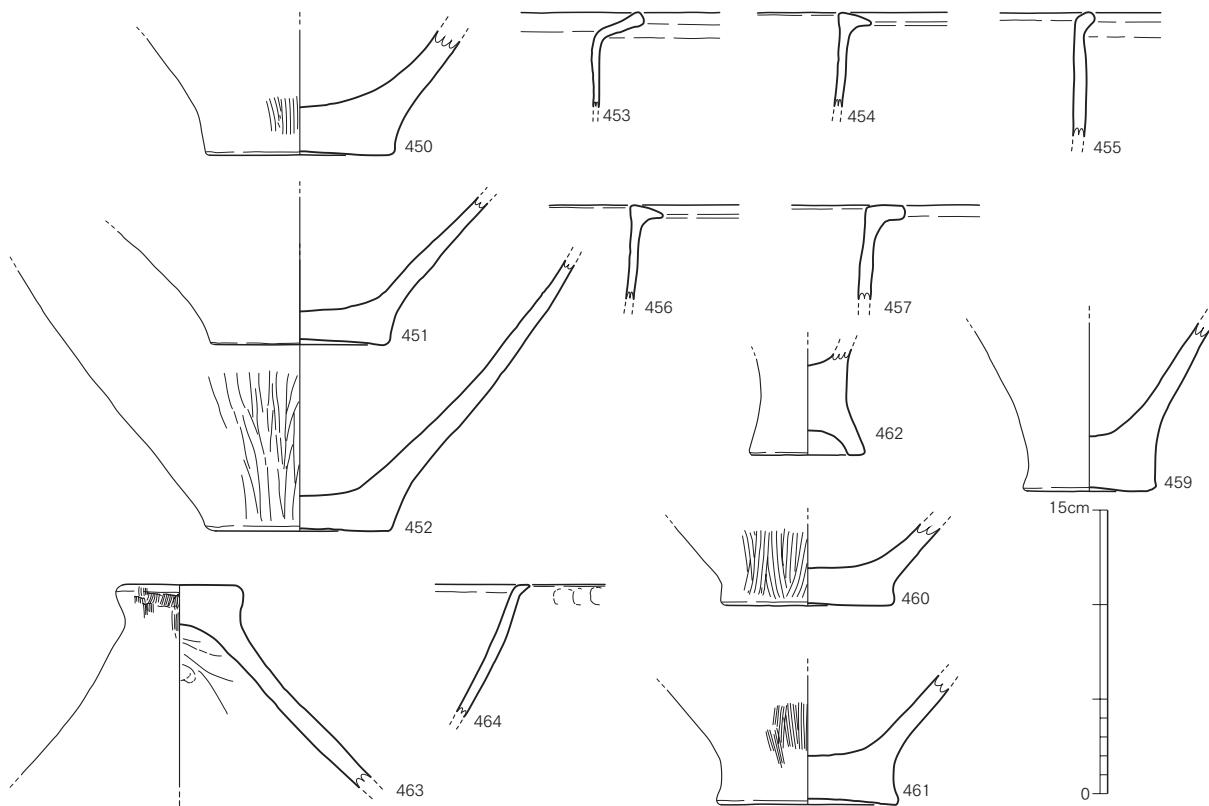
周辺に存在しない。

出土遺物

弥生土器 (第 125 図 450 ~ 457、459 ~ 464、図版 51)

450 ~ 452 は壺の底部、450 の内面は風化により調整は不明瞭であり、外面は風化するがハケ目調整を施し、底径 10cm、残存高 6cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面褐灰色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。451 の内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 9.5cm、残存高 7.5cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内外面ともに灰白色を呈し、焼成は良好である。452 の内面はナデ調整、外面はミガキ調整を施し、黒斑が見られ、底径 9.8cm、残存高 14cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい黄色橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

453 ~ 457 は甕の体部から口縁、口縁の形態は様々であり、断面形態から 453 はくの字状、454 は如意形、455 は口縁は緩やかに屈曲し短く、456 では断面三角形、457 は逆 L 字状となる。453 は内外面風化により調整は不明瞭であり、残存高 5cm を測る。胎土には 1mm 以下の砂粒を含み、内外面ともにぶい橙色を呈し、焼成はやや不良である。454 は内外面風化により調整は不明瞭であ

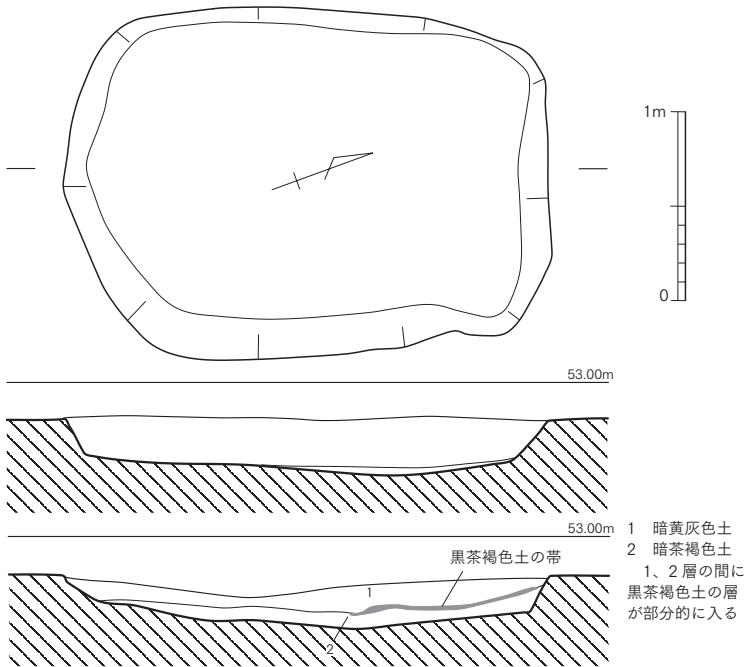


第125図 土坑86出土遺物実測図 弥生土器(1/4)

り、残存高5cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を含み、内面橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。455は内外面ともにナデ調整を施し、残存高6.6cmを測る。胎土には2mm以下の細砂粒を多く含み、内面にぶい褐色、外面にぶい赤褐色を呈し、焼成は良好である。456は内外面風化により調整は不明瞭であり、残存高5cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内外面ともににぶい赤褐色を呈し、焼成は良好である。457は内外面風化により調整は不明瞭であり、残存高5cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内外面ともににぶい赤褐色を呈し、焼成は良好である。

459～462は甕の底部、462は上底状で形態から台付の甕等の可能性もある。459の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径7.3cm、残存高7.5cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内面赤橙色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。460の内面はナデ調整を施し、底部には指頭圧痕が残り、外面はハケ目調整を施し、底径9.2cm、残存高4cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒少量を含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。461の内面はナデ調整を施し、外面はハケ目調整、底部はナデ調整を施し、底径9.2cm、残存高6.8cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒と細砂粒を多く含み、内面暗橙色、外面暗灰褐色を呈し、焼成は良好である。462の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、底面はナデ調整を施し、底径6.1cm、残存高5.5cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を含み、内面黒褐色、外面明赤褐色を呈し、底部には黒斑が見られ、焼成は良好である。

463は蓋、内面はナデ調整、天井部付近には指頭圧痕が残り、外面はハケ目調整、天井部はナデ調整を施し、つまみ部径6.7cm、残存高10.2cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を含み、内面にぶい赤褐色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である、



第 126 図 土坑 87 実測図 (1/40)

出土遺物

弥生土器 (第 127 図 465 ~ 481、図版 51)

465 ~ 469 は壺の頸部から口縁、465 は内部に粘土の接合痕が残り、外面は口縁外面端部に 2 段の刻み目を巡らし、口縁はヨコナデ調整、体部はヨコ方向のミガキ調整を施す 466 ~ 469 は外反する頸部に肥厚する口縁部が接続する、口縁部はいわゆる鋤先状口縁となる。468 の口縁はやや垂下し、466、468、469 では口縁端部外面は中央部が凹み沈線状となる。469 の頸部には 2 条の沈線が巡る。466 は内外面ともにナデ調整を施し、残存高 6cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を多く含み、内面にぶい褐色、外面灰褐色を呈し、焼成は良好である。467 は内外面ともにナデ調整を施し、残存高 7cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を多く含み、内面にぶい褐色、外面灰褐色を呈し、焼成は良好である。468 は内外面ともにナデ調整を施し、残存高 4cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を含み、内外面ともにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。469 は内面はヨコ方向のミガキ調整、外面はナデ調整、口縁端部はヨコナデ調整を施し、復元口径 35cm、残存高 12.8cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

470、471 は壺の肩部、470 は体部と頸部の境目には 1 条の沈線を巡らし、内面はナデ調整、外面はミガキ調整、頸部はナデ調整を施し、残存高 5.7cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を含み、内面灰白色、外面明黄橙色を呈し、焼成は良好である。471 は 470 と同様に体部と頸部の境目には 1 条の沈線を巡らし、内面はナデ調整、外面はミガキ調整、頸部はナデ調整を施し、残存高 5.7cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を多く含み、内面にぶい褐色、外面灰褐色を呈し、焼成は良好である。

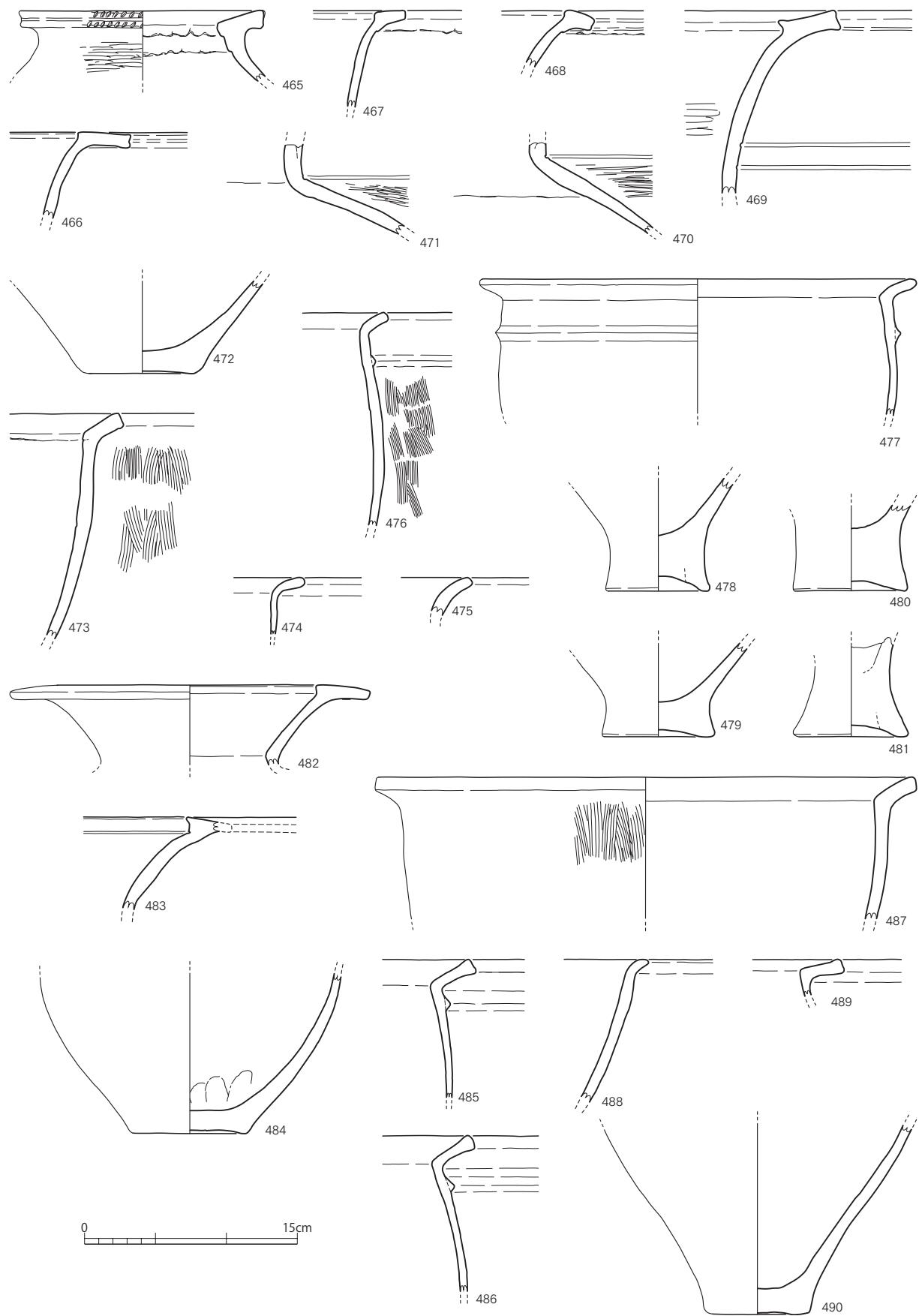
472 は壺の底部、内外面ともに風化し調整は不明瞭であり、底径 8cm、残存高 6.3cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内外面ともに赤橙色を呈し、焼成はやや不良である。

473 ~ 477 は甕の体部から口縁、473 はやや外に開く体部、476、477 ではやや内傾する体部に屈

464 は鉢の体部から口縁、口縁は緩やかに広がる体部から短く屈曲し、先端は細くなる。内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、口縁部外面に指頭圧痕が残り、残存高 7cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面明赤褐色を呈し、焼成はやや不良である。

土坑 87(第 126 図、図版 37)

主軸方位 N-16°-E、南北 2.5m、東西 2m、深さ 30cm を測る。堆積状態の観察では北半で黒茶褐色の炭層が確認できる。被熱による硬化面は確認できない。



第127図 土坑87、88出土遺物実測図 弥生土器(1/4)

曲する口縁が接続する。474は口縁のみ残存するが、473、474、476、477の体部から口縁への屈曲はやや強く、くの字状となる。476、477は口縁下部に断面三角形の突帯を1条巡らす。473の内面はナデ調整、外面はハケ目調整、口縁端部はヨコナデ調整を施し、残存高16cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内面にぶい褐色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。474は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高4cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。475の内外面ともにナデ調整を施し、残存高2.6cmを測る。胎土には1mm以下の砂粒を含み、内外面ともにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。476の内面はナデ調整、外面はハケ目調整、口縁端部はヨコナデ調整を施し、残存高15cmを測る。胎土には2mm以下の細砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面褐白色を呈し、焼成は良好である。477の内面はナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭であり、復元口径30.8cm、残存高9.7cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面明褐灰色を呈し、焼成は良好である。

478～481は甕の底部、いずれも上底状となる。478は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径7.3cm、残存高7.5cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を多く含み、内面明褐灰色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。479は内面ナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径8cm、残存高6.2cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を含み、5mm程度のものも含む。内面にぶい褐色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。480は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径8cm、残存高2.6cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を多く含み、内外面ともに明赤褐灰色を呈し、焼成は良好である。481は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径8.1cm、残存高6.5cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内外面ともに明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

石器(第134図77、図版53)

頁岩製の石包丁と思われる破片で、穿孔は確認できず、折損か所の背側に反る面がみられるため、異なる種類の石器を転用した可能性も排除できない。残存長6.7cm、幅4.5cm、厚さ0.9cm、重量27gを測る。

土坑88(第128図)

主軸方位N-72.5°-W、東西1.74m、南北0.96m、深さ0.48mを測る。南の土坑88-2に切られ、土坑は西側の調査区外へと続く。

土坑88-2(第128図)

主軸方位N-71°-W、東西2.7m、南北1.2m、深さ0.31mを測る。東西に細長い土坑。

出土遺物

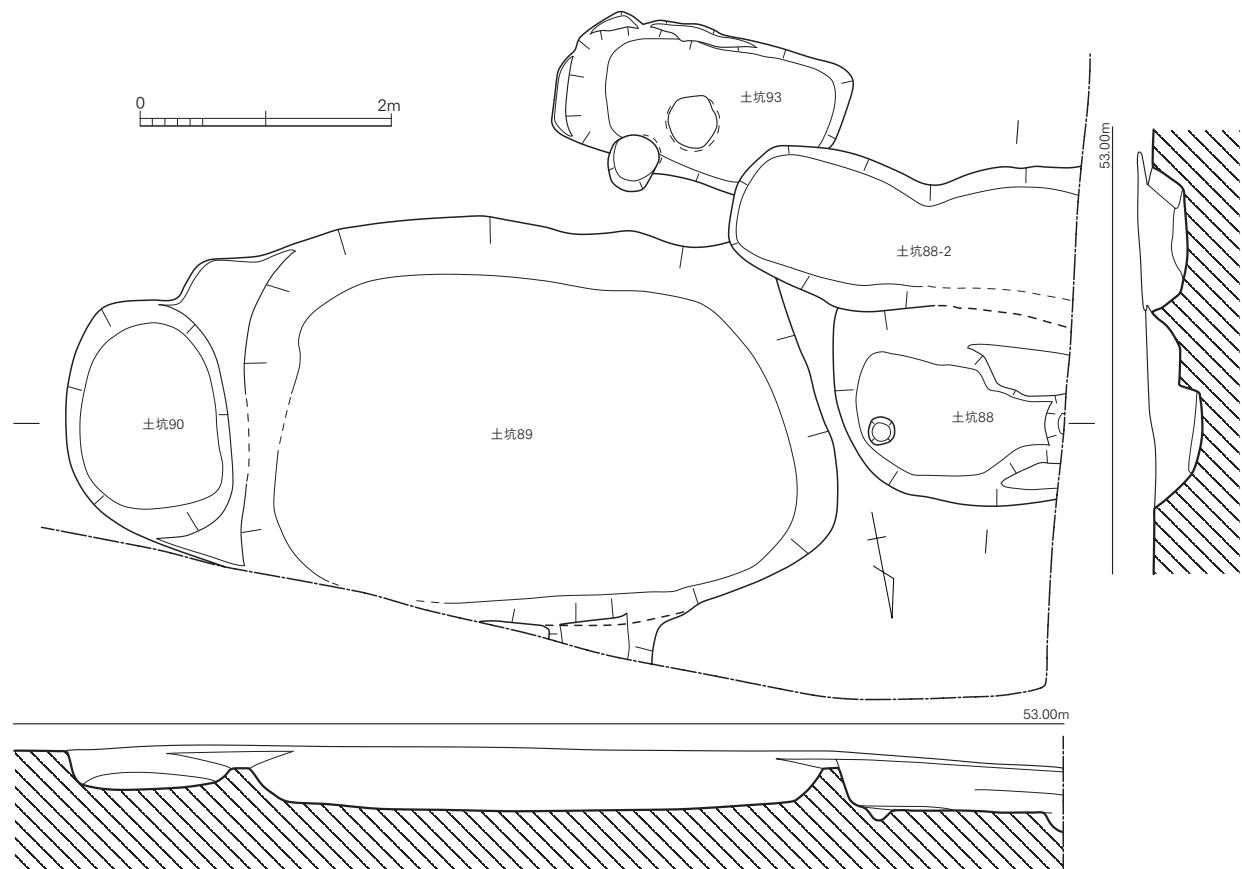
弥生土器(第127図482～490、図版51、52)

482、483は壺の頸部から口縁、いずれも外に開く頸部に肥厚する鋤先状口縁が接続し、口縁はやや垂下する。482は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、復元口径25.5cm、残存高5.5cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を含み、内外面ともに灰白色を呈し、焼成は良好である。483は内面はナデ調整、外面は丁寧なナデ調整を施し、復元口径25.8cm、残存高5.5cmを測る。胎土には1mm以下の砂粒を含み、内外面ともにぶい褐色を呈し、焼成は良好である。484は内面はナデ調整を施し、指頭圧痕が残り、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径8.2cm、残存高11cmを

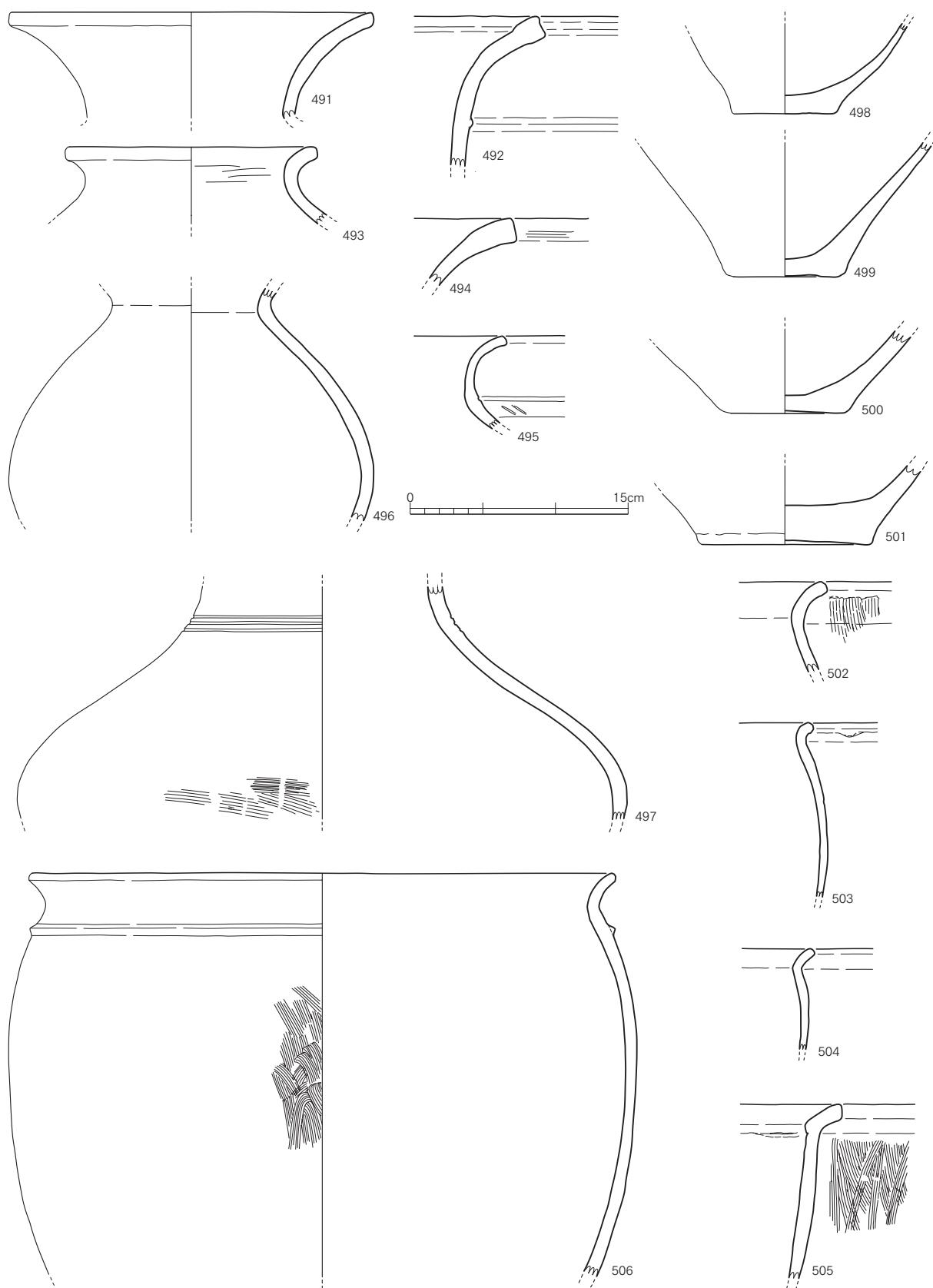
測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、6mm前後の礫を若干含み、内面灰褐色、外面褐灰色を呈し、焼成は良好である。

485～489は甕の体部から口縁、485、486はやや内傾する体部にやや強く屈曲し口縁が接続する。体部から口縁にかけてくの字状となり、口縁下部に断面三角形の突帯を1条巡らす。487、489も同様の形態であるが、487では突帯は見られず、489は口縁のみ残存する。488は外へ開く体部にやや屈曲する短い口縁部が接続し、端部は細くなる。485の内面はナデ調整、外面は風化により不明瞭であり、残存高9cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内面灰白色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。486の内外面ともに風化により不明瞭であり、口縁部外面にヨコナデ調整を施し、残存高11cmを測る。胎土には2mm以下の細砂粒を多く含み、内面灰白色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。487の内面はナデ調整、外面はハケ目調整、口縁部外面にヨコナデ調整を施し、残存高9cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。488の内面はナデ調整、外面は風化により不明瞭であり、残存高10cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、5mm程度の砂粒を若干含み、内外面ともにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。489の内外面ともに風化により不明瞭であり、残存高2.5cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を含み、内面褐灰色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

490は甕の底部、内面はナデ調整、外面は風化により不明瞭であるがナデ調整と考えられ、底径7cm、残存高13cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を多く含み、内面橙色、外面明褐色を呈し、焼成は良好である。



第128図 土坑88、88-2、89、90、93実測図 (1/60)



第 129 図 土坑 89 出土遺物実測図 1 弥生土器 (1/4)

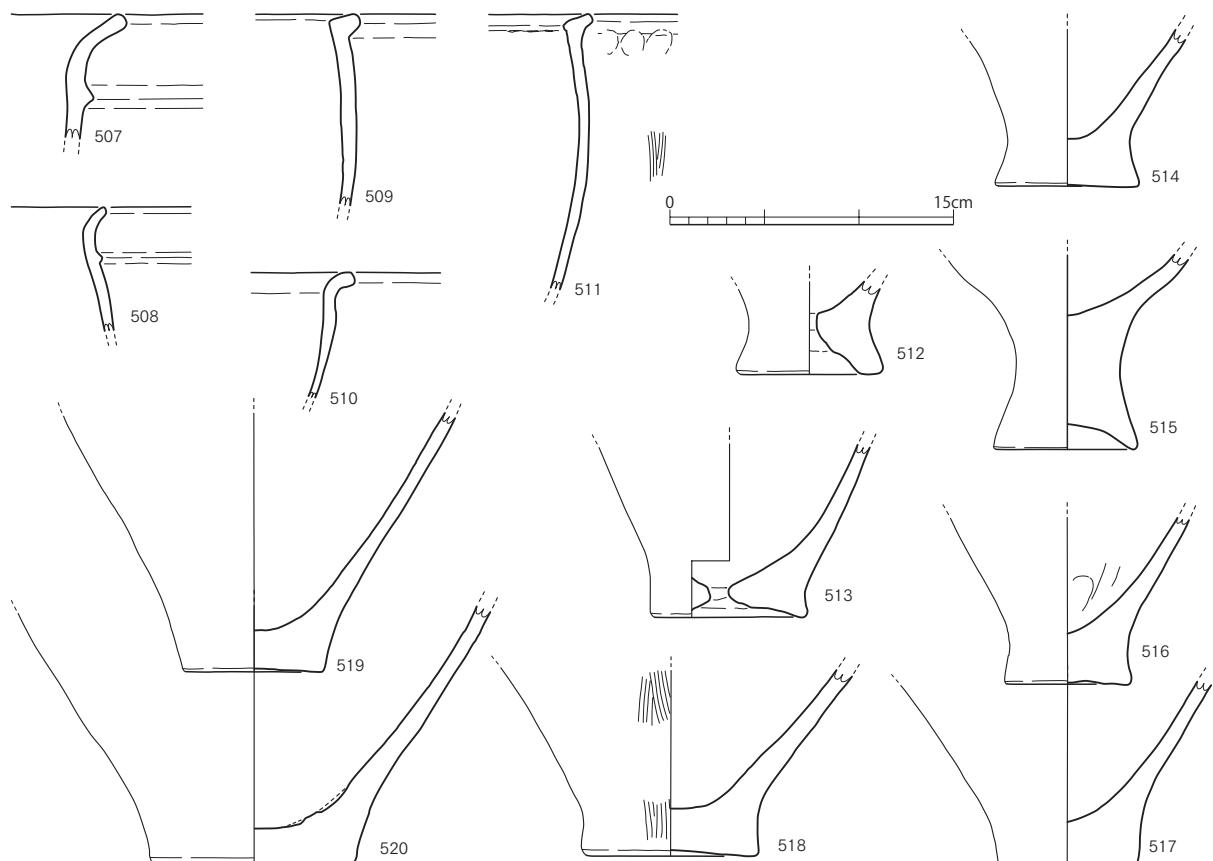
土坑 89(第 128 図)

主軸方位 N-76.5°-W、東西 4.7 m、南北 3.2 m、深さ 54cm を測る。大量の土器片が出土する。
出土遺物

弥生土器 (第 129 図 491 ~ 506、第 130 図 507 ~ 520、図版 52)

491 ~ 495 は壺の頸部から口縁、491 は外へ開きながら外反し、492 は同じように外反し、口縁端部は肥厚し口縁下部に断面三角形の突帯を 1 条巡らす。493、495 は短い頸部に短く外反する口縁が接続し、495 では口縁端部にかけてやや細くなり口縁下部に 1 条の沈線を巡らし、頸部下部には刻み目のような文様がある。491 の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、復元口径 25cm、残存高 7cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面褐灰色を呈し、焼成は良好である。492 の内面は風化により調整は不明瞭であり、外面はナデ調整、口縁はヨコナデ調整を施し、残存高 10.3cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい黄橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成はやや不良である。493 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、復元口径 17.4cm、残存高 4.7cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒含み、内外面とも橙色を呈し、焼成は良好である。494 は内外面ナデ調整を施し、残存高 4.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面浅黄橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。495 は内外面ナデ調整を施し、復元口径 13cm、残存高 6cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面褐灰色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。

496、497 は壺の体部、496 は球形に近い体部、497 は大型で、肩部に近くやや肩の張る形態になり、体部中程に穿孔がある。496 は内外面ともにナデ調整を施し、頸部径 11cm、胴部最大径 25cm、残存高 15.7cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内面褐灰色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。497 の内面はハケ目調整、外面はミガキ調整が残り、体部最大径 42cm、残存高 16



第 130 図 土坑 89 出土遺物実測図 2 弥生土器 (1/4)

cmを測る。胎土には2mm以下の細砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。

498～501は壺の底部、498は内外面ともに風化により不明瞭であり、底径7.3cm、残存高6cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面褐色、外面灰褐色を呈し、焼成は良好である。499の内外面ともに風化により不明瞭であり、底径8.3cm、残存高9cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、5mm程度の砂粒を若干含む。内外面ともに浅黄橙色を呈し、焼成は不良である。500の内外面ともに風化により不明瞭であり、底径8.3cm、残存高5.7cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面灰白色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。501の内外面ともに風化により不明瞭であり、底径11.6cm、残存高5.2cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面褐色、外面灰褐色を呈し、焼成は良好である。

502～506は甕の体部から口縁、506は大形で口縁下部に断面三角形の突帯が1条巡る。502の内面はナデ調整、外面はハケ目調整を施し、残存高5.7cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内面にぶい橙色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。503の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、黒斑が見られ、残存高12cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内面灰白色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。504は内外面ともにナデ調整を施し、残存高7cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内面灰白色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。505の内面はナデ調整、外面はハケ目調整を施し、残存高12cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面灰黄褐色、外面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。506の内面はナデ調整を施し、外面はハケ目調整を施し、復元口径40.4cm、残存高27.8cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を含み、内外面ともに浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。

507～511は甕の口縁、507、508は緩く外反する口縁、口縁下部に断面三角形の突帯を1条巡らし、508は体部から口縁にかけてやや内傾する。509、511の口縁は逆L字状に屈曲し、口縁は肥厚する。507は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高6.5cmを測る。胎土には4mm前後の砂粒を含み、内面にぶい褐色、外面明赤褐色を呈し、焼成はやや不良である。528は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、残存高6.5cmを測る。胎土には3mm以下の砂粒を含み、内外面橙色を呈し、焼成はやや不良である。509の内面は風化により調整は不明瞭であり、外面はナデ調整、口縁はヨコナデ調整を施し、残存高10cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内外面ともに浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。510は内外面ともにナデ調整、口縁外面はヨコナデ調整を施し、残存高6.6cmを測る。胎土には1mm前後の砂粒を含み、内面浅黄橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。511は内外面ともに風化により調整は不明瞭であるが、外面に一部ハケ目調整が見られ、残存高14.5cmを測る。胎土には2mm以下の細砂粒を含み、内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

512～520は甕の底部、512、513、515は上底状、512、513では底部中央付近に焼成前と考えられる穿孔がある。515は底部の形態から台付甕の可能性もある。512の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、復元底径7.8cm、残存高4.5cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を多く含み、内面灰褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。513の内面はナデ調整、外面は風化により調整は不明瞭であり、低部付近に指頭圧痕が残る。底径8.2cm、残存高9.7cmを測る。胎土には5mm前後の礫を含み、内面灰褐色、外面黄橙色を呈し、焼成は良好である。514の内面は

ナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、黒斑がみられ、底径 7.6cm、残存高 7.8cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面明黄褐色、外面灰白色を呈し、焼成はやや不良である。515 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 7.6cm、残存高 10cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、6mm 程度の礫を若干含む。内外面ともににぶい橙色を呈し、焼成は良好である。516 の内面はナデ調整、外面は風化により調整不明瞭であり、底径 6.7cm、残存高 8.7 cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内面灰褐色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。517 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 7.4cm、残存高 9.7cm を測る。胎土には 2 mm 以下の砂粒を多く含み、内面明褐灰、外面橙色を呈し、焼成は良好である。518 の内面はナデ調整を施し、外面はハケ目調整、底部はナデ調整を施す。底径 9.3cm、残存高 9.4cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面黒褐色、外面橙色を呈し、焼成は良好である。519 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 7.5cm、残存高 13.5cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面にぶい橙色、外面明赤褐色を呈し、焼成は良好である。520 の内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であり、底径 11cm、残存高 13.5cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を含み、内面灰白色、外面にぶい黄橙色を呈し、焼成はやや不良である。

石器 (第 134 図 78 ~ 81、第 135 図 82 ~ 84、図版 53)

土坑 88 から 78 の石包丁片、79 の磨製石剣と図示しないが腰岳産黒曜石小剥片 1 点が、土坑 89 から 82 の磨製石剣片、83、84 の石戈基部片と図示しないが台石の可能性を排除できない 25cm × 14cm、厚さ 4cm の緑色片岩扁平石 1 点が出土し、土坑 88 と 89 を区別できない部分から 80 の打製石鏃と 81 の砥石と図示しないが頁岩質石材の砥石らしい小片 1 点が出土した。

78 は層灰岩質の石包丁片で、残存長 11.8cm、幅 3.1cm、厚さ 0.7cm、重量 33 g を測り、刃部は両刃だが図の左側端部分は片刃で残る。79 は層灰岩質石材を用いた有茎式の磨製石剣で先端部の一部を失うが長さ 9.0cm、幅 3.0cm、厚さ 0.9cm、重量 30 g を測る。基部の片側側縁に細い 2 条の切目がみられる。80 は腰岳産黒曜石製で全面に調整剥離が及ぶ凹基式打製石鏃片、81 は泥岩質頁岩製の上下両面と長い側面が砥面に使用され、残る斜方向の側面は節理面がそのまま残る、長さ 19.8 cm、幅 7.9cm、厚さ 3.4cm、重量 704 g を測る。

82 は粘板岩製の磨製石剣身部片で残存長 10.9cm、幅 3.9cm、厚さ 1.0cm、重量 46 g を測る。身部は丁寧に研磨されるが右側縁の基部寄りの刃部は鈍い。83 は凝灰岩質泥岩製の有茎式磨製石剣の茎部片で側縁に 2 段の抉りがある。84 は頁岩製の基部端で裏面が剥落するため不確実だが身部側に向かう両側縁に抉りの可能性がある研磨痕がみられるもので、形状を把握し難いものの茎部としては幅が広いことから有柄式磨製石剣基部端の可能性がある。

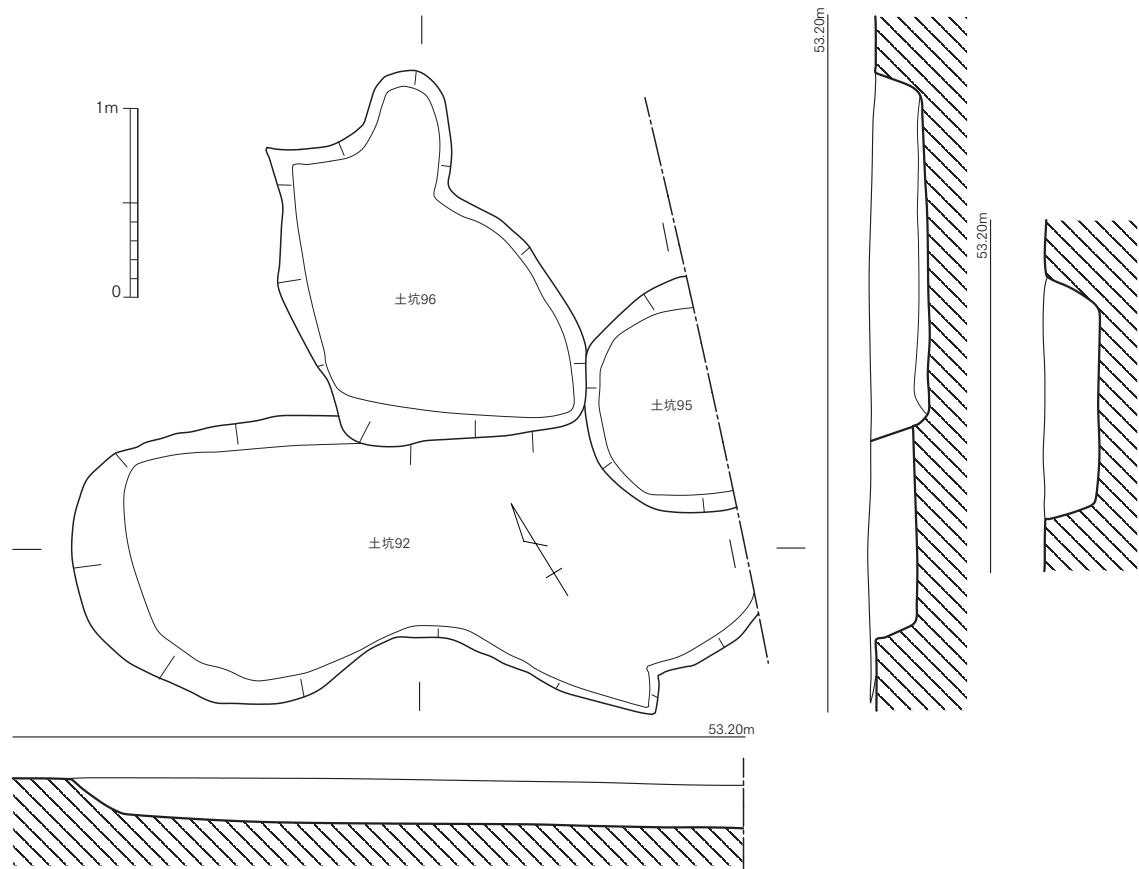
土坑 92 (第 131 図)

主軸方位 N-59°-W、残存部で東西 3.54 m、南北 0.96 m、深さ 0.24 m を測る。後に掘りこまれる、土坑 95、96 に切られ、調査区外へ続く。

出土遺物

弥生土器 (第 132 図 521 ~ 524)

521、522 は壺の底部、521 は内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 8.5cm、残存高 7cm を測る。胎土には 3mm 以下の砂粒を少量含み、内外面ともに灰白色を呈し、焼成はやや不良で



第 131 図 土坑 92、95、96 実測図 (1/40)

ある。522 は内面は風化により調整は不明瞭であり、外面はナデ調整を施し、底径 9cm、残存高 15 cm を測る。2mm 以下の砂粒を多く含み、内面浅黄橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成はやや不良である。

523 は甕の体部から口縁、内面はナデ調整を施し、外面は風化により調整は不明瞭であるが口縁外面に指頭圧痕が残り、残存高 8.5cm を測る。

524 は土製円盤、復元径 19cm、厚み 1.5cm を測る円形の土製品、用途は不明である。胎土には 3 mm 以下の砂粒を含み、裏面にぶい橙色、表面褐灰色を呈し、焼成は良好である。

土製紡錘車 (第 135 図 85、図版 53)

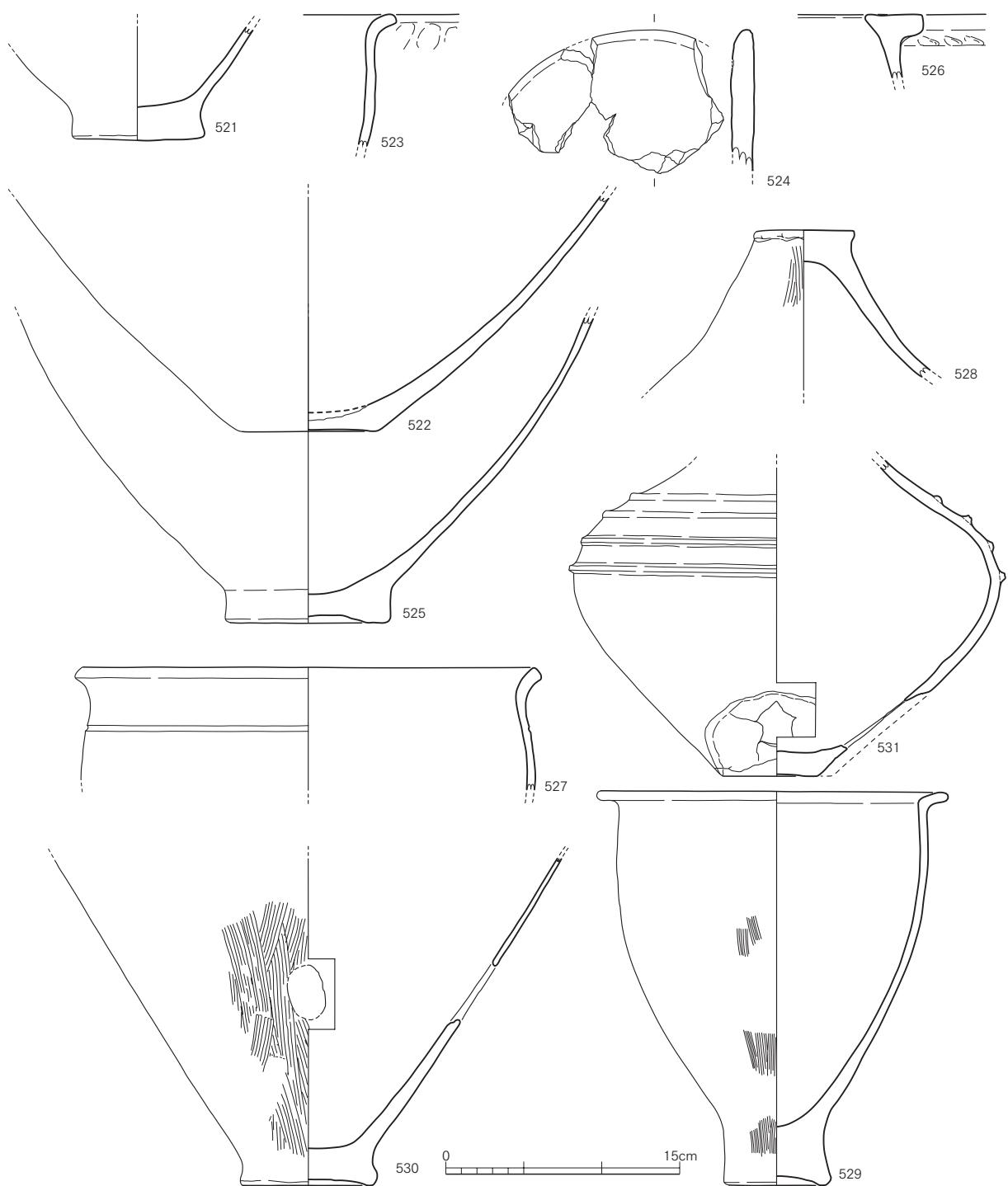
直径 4.9cm、厚さ 1.1cm、重量 27 g を測る。裏面側は中央部が僅かに膨らみ指頭圧痕が残る。石英、長石、角閃石粒など砂粒を含む粗い胎土で暗黄褐色ないし灰黄褐色に焼成される。

石器 (第 135 図 86、図版 53)

玢岩製の半円形円礫を用いたすり石で上下両面ともに擦れ痕が、側縁の突出する部分に敲打痕がみられ、敲き潰す機能と磨り潰す機能を兼ねたとみられる。長さ 10.9cm、幅 7.0cm、厚さ 4.4cm、重量 520 g を測る

玉類 (第 133 図 88、図版 52)

薄緑色と白緑色を帯びる翡翠製の小形獸形勾玉で、片方の側辺に 2 か所の抉り、幅が狭い端部寄りの中央部に片面から穿孔を加えている。長さ 15.7mm、幅 9.6mm、厚さ 5.25mm、孔径 1.9mm、重量 1.3 g を測る。



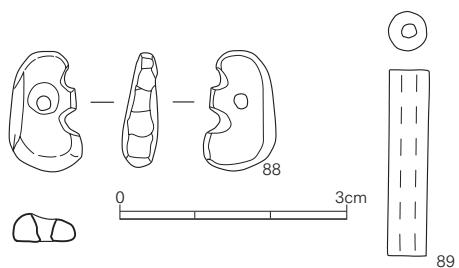
第132図 土坑92、94、96、98、Pit355出土遺物実測図 弥生土器(1/4)

土坑94

出土遺物

弥生土器(第132図525)

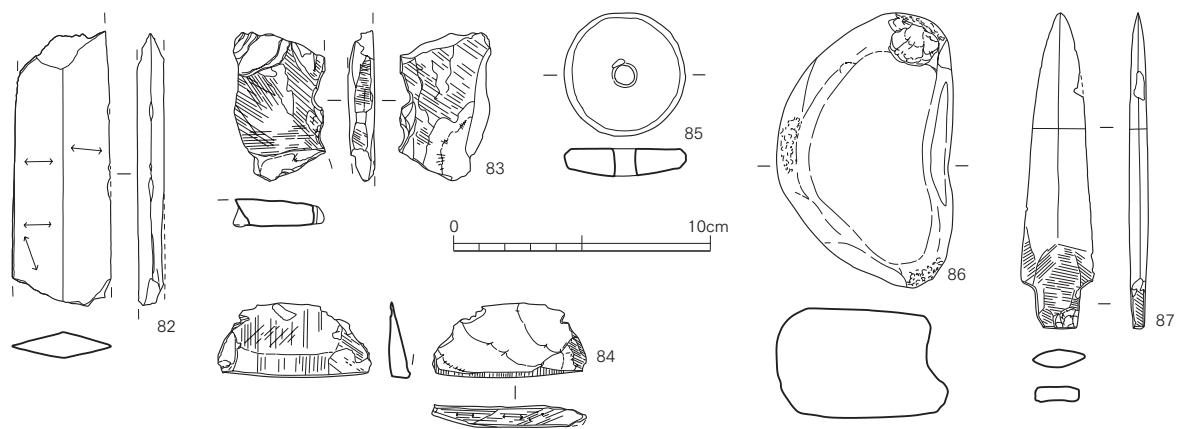
525は壺の底部、上底状となり、内外面ともにナデ調整を施し、底径10.6cm、残存高19.5cmを測る。胎土には2mm以下の砂粒を含み、内外面ともににぶい黄橙色を呈し、焼成は良



第133図 土坑92、Pit489出土遺物実測図 玉類(実大)



第134図 土坑64～89、90出土遺物実測図 石器 (1/3、67・68・76・80は1/2)



第 135 図 土坑 89 ~ 94 出土遺物実測図 石器・土製品 (1/3)

好である。

石器 (第 134 図 70・第 135 図 87、図版 53)

70 は緑色片岩製の扁平片刃石斧。長さ 8.3cm、幅 5.0cm、厚さ 1.5cm、重量 115 g を測る。

87 は頁岩製の有茎式磨製石剣で、長さ 12.5cm、闊部幅 2.9cm、鎌部厚さ 0.6cm、基部長 1.9cm、幅 1.8cm、厚さ 0.5cm、重量 26 g を測る。身部は両面とも丁寧に研磨されて刃部は鋭い。

土坑 96

出土遺物

弥生土器 (第 132 図 526、527)

いずれも弥生土器、526 は壺の口縁、肥厚し形状から鋤先条口縁と考えられ、内外面ともにナデ調整を施し、外面に指頭圧痕が残る。残存高 4cm を測る。胎土には 2mm 以下の細砂粒を多く含み、内外面ともにぶい褐色を呈し、焼成は良好である。

527 は甕の体部から口縁、体部から口縁にかけてやや内傾し、口縁は緩やかに外反し如意形に近く、口縁下部に沈線を 1 条巡らす。内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、復元口径 30cm、残存高 7.7cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面黒褐色、内面にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。

土坑 98

出土遺物 (第 132 図 528)

弥生土器蓋、内面はナデ調整、外面はハケ目調整、天井部はナデ調整を施し、黒斑が見られる。つまみ部径 6.5cm、残存高 9cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を含み、内外面ともに橙色を呈し、焼成は良好である。

土坑 100(第 136 図、図版 37)

主軸方位磁北、上端南北 0.65 m、東西 0.52 m、下端南北 0.81 m、東西 0.75 m、深さ 0.51 m で断面フラスコ状を呈する土坑。

③ Pit

Pit393(第 137 図、図版 37)

弥生土器が据えられた状態で出土、削平により上部は残っていない。掘方は大きくなく据えられた甕とほぼ同じ大きさで南北 46cm、東西 41cm のほぼ円形。甕を除去後掘方内部を確認、甕底部に接する部分には砂を充填し安定させていた。

出土遺物 (第 132 図 530、図版 52)

弥生土器甕の底部から体部、底部はやや上底状となり、体部下方に穿孔がある。内面は風化により調整は不明瞭であり、外面はハケ目調整を施し、底径 8.8cm、残存高 20.8cm を測る。胎土には 2 mm 以下の砂粒を多く含み、6 mm 程度の礫を少量含む。内面褐灰色、外面灰白色を呈し、焼成は良好である。

④ その他の出土遺物

Pit

Pit318 出土遺物

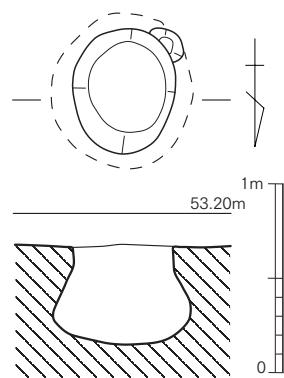
石器 (第 138 図 90、図版 53)

泥岩質砂岩製の砥石片で、平坦面の上面と短い片側面が砥面に利用される。残存長 5.4cm、残存幅 4.5cm、残存厚さ 1.3cm、重量 43 g を測る。

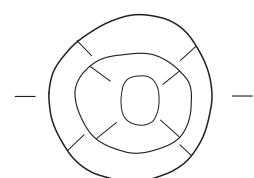
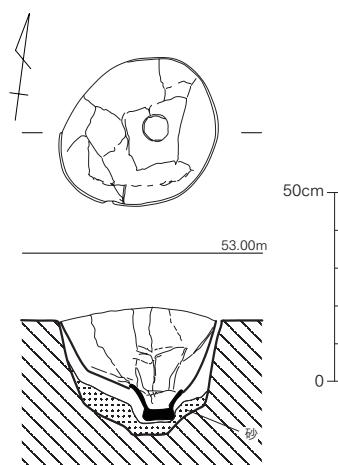
Pit343 出土遺物

石器 (第 138 図 91、図版 53)

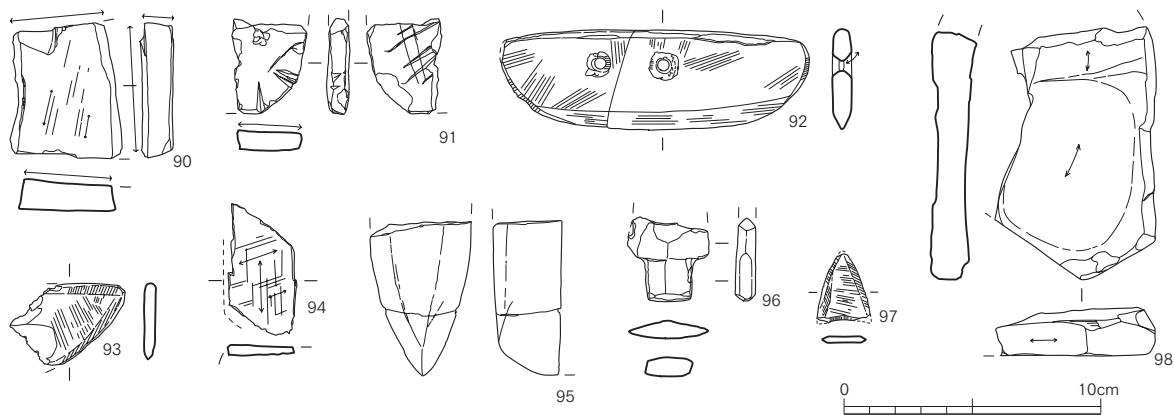
泥岩質石材を用いた厚さ 0.8cm の扁平石に線刻のある砥石片で、残存長 3.7cm、幅 3.0cm、重量 10 g を測る。線刻は両面にみられるが砥面側は縁部に長さ 1cm ほどの切目が 3 本、裏面中央部に長めの線刻が 5 条並ぶ。



第 136 図 土坑 100 実測図 (1/40)



第 137 図 Pit393 実測図 (1/20)



第138図 Pit、遺構面出土遺物実測図 石器(1/3)

Pit355 出土遺物 (第132図 529、図版52)

ほぼ完形に復元できる弥生土器甕、底部は上底状で、内面はナデ調整、外面は風化し不明瞭であるがハケ目調整が見られる。口径 22.5cm、底径 6.9cm、器高 25.3cm を測る。胎土には 2mm 以下の砂粒を多く含み、内面橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

Pit378 出土遺物

石器 (第138図 92、図版53)

硬質砂岩製の僅かに端部が欠けるがほぼ完形の石包丁で、長さ 12.2cm、幅 3.9cm、厚さ 0.7cm、重量 55 g を測る。穿孔の背側縁に紐ズレ痕がみられる。

Pit440 出土遺物

石器 (第138図 93、94、図版53)

93 は頁岩製の石包丁端部片、94 は硬質砂岩らしい石材の節理面で剥がれた砥石片。残存長 5.2cm、残存幅 2.6cm、残存厚さ 0.3cm の大きさ。

Pit443 出土遺物

石器

層灰岩質石材の石包丁らしい研磨痕のある平坦面をもち折損部の一部に押圧剥離を加えた破片 1 点が出土しているが、図示に堪えない。

Pit461 出土遺物 (第132図 531、図版52)

弥生土器壺の底部から体部、肩部まで残存し、肩部から体部にかけて 4 条の断面台形の突帯が巡り、体部下方に焼成後と思われる穿孔がある。内外面ともに風化により調整は不明瞭であり、底径 7cm、残存高 22cm を測る。胎土には 4mm 以下の砂粒を多く含み、内面橙色、外面にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

Pit463 出土遺物

石器

頁岩製の石包丁らしい両面に研磨痕が残る小破片 1 点が出土したが、図示していない。

Pit465 出土遺物

石器

頁岩製の穿孔部を含む石包丁小破片が 1 点出土したが、図示に堪えない。

Pit489 出土遺物

玉類 (第 133 図 89、図版 52)

明緑灰色を呈するグリーンタフ製の管玉で、長さ 25.5mm、直径 5.0mm、孔径 2.1mm、重量 1.0 g を測る。
古墳時代のものだろう。

Pit502 出土遺物

石器 (第 138 図 95、図版 53)

砂岩製の両刃をもつ蛤刃磨製石斧の刃部破片である。

Pit516 出土遺物

石器

頁岩製の欠けた研磨された平坦面と穿孔部らしい痕跡を有する小剥片が 1 点出土しているが、
図示に堪えない。

Pit534 出土遺物

石器 (第 138 図 96、図版 53)

頁岩製の先端側を欠く有茎式の磨製石剣基部片で、残存長 3.4cm、関部幅 3.1cm、厚さ 0.7cm、
茎部幅 2.0cm、重量 10 g を測る。

Pit541 出土遺物

石器

輝緑凝灰岩の研磨された平坦面に石包丁らしい穿孔部が残る剥片 1 点が出土しているが、図示
に堪えない。

Pit547

出土遺物

石器 (第 138 図 97、図版 53)

頁岩質石材を用いた磨製石鎌で、先端と基部両端を僅かに欠損するが残存長 2.7cm、残存幅 2.1cm、

厚さ 0.2cm強を測るが、基部の抉りが浅く側縁に膨らみをもつもので、石包丁端部剥片を転用した可能性がある。

遺構検出面出土遺物

石器（第 138 図 98、図版 53）

泥岩質石材利用の砥石片で図示した面は砥面で中凹みに擦れるが裏面は節理剥離面である。残存長 10.0cm、残存幅 6.5cm 残存厚さ 1.9cm、重量 142 g を測る。この他に雲母片岩製の研磨面を残す砥石とみられる小破片 1 点と輝緑凝灰岩製の石包丁らしい小破片 1 点、縁部に打ち欠き剥離痕が残る玢岩材 1 点も出土したが図示していない。

IV おわりに

伊方萩ヶ原遺跡は近世の集落を中心とした遺跡で、竪穴住居跡、土坑、近世と考えられる屋敷地の区画溝や古代の掘立柱建物等を確認した。また、鍛治炉を確認、鉄滓も多量に出土している。近世集落内での鍛冶生産が行われたことが想定できる。現在は田として使用される調査地は近世までは赤坂神社を中心とする集落が営まれていたと考えられる。

伊方中原遺跡は弥生時代中期を中心とする集落遺跡、主に円形の竪穴住居跡、土坑、溝、掘立柱建物等を確認した。ほとんどの遺構は弥生時代の中期を中心とするが、掘立柱建物からは須恵器が出土し古代の建物の可能性がある。

中でも調査区⑩の西半部分は大型の土坑が複数存在し、当初は使用用途が不明であったが、土層観察の結果、焼土層と考えられる層が見られる土坑も存在した。類例も乏しく想像の域を出ないが、調査区⑩の西半部分は住居跡が見られず、出土する弥生土器も二次的な比熱の痕跡もあることなどから弥生土器の焼成遺構の可能性も考えられた。ただ、土坑壁や底面には被熱による硬化面などは確認できておらず焼成遺構であるならば継続的な使用は想定できない。また、住居 3 では屋内排水溝が貼床の下に存在しトンネル状となっていた事が確認できた。これらの事例については、類例等の検討を行い再度総括を行いたい。

図 版

図版 1



1. 遺跡全景（東から）



2. 北側調査区
(南から)



3. 南側調査区
(南から)

1. 調査区 A 全景
(北から)



2. 調査区 A
通路状遺構 (南から)



3. 調査区 D 全景
(西から)



図版 3



1. 調査区 N
東壁土層堆積状況
(西から)



2 住居 1(東から)



3. 住居 2(南から)

1. 住居 3(北から)



2. 住居 4(東から)



3. 土坑 1

石材検出状況
(東から)



図版 5



1. 土坑 2

石材検出状況 2
(南から)



2. 土坑 7 (西から)



3. 土坑 8 堆積状況

(南から)



図版 7



1. 土坑 8
(南から)



2. 土坑 10
(西から)



3. 土坑 11
(西から)

1. 土坑 12
遺物出土状況
(西から)



2. 土坑 12 完掘
(西から)



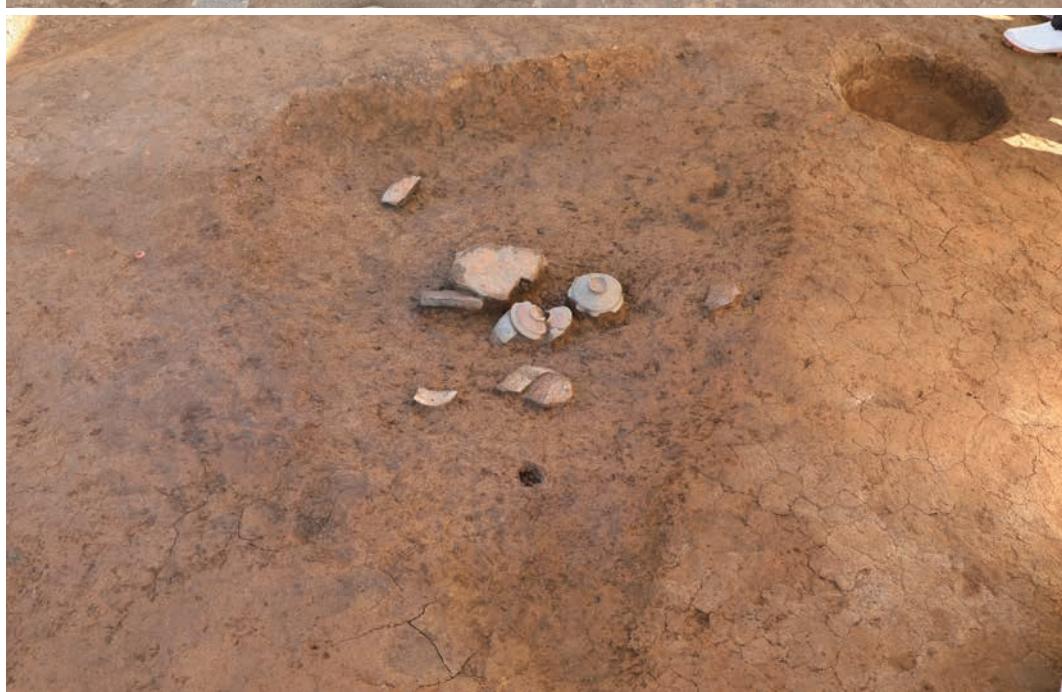
3. 土坑 13 検出状況
(西から)



図版 9



1. 土坑 13 掘削状況
(南から)



2. 土坑 13
遺物出土状況
(南から)



3. 土坑 13 完掘
(南から)

1. 土坑 14
(東から)



2. 土坑 16
遺物出土状況
(西から)



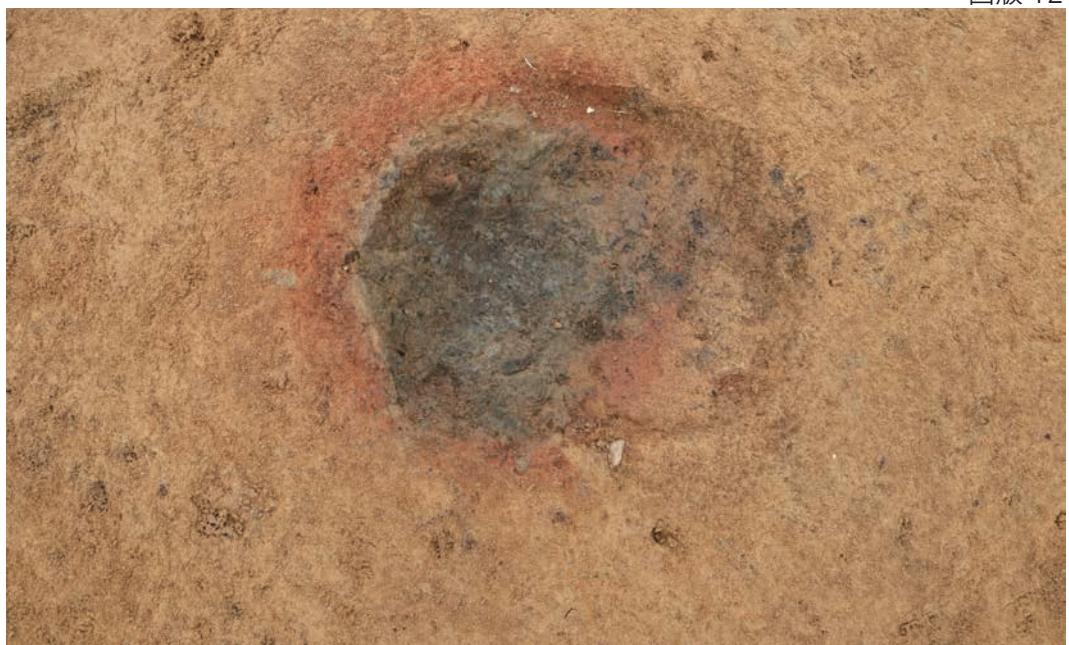
3. 土坑 16 完掘
(西から)



図版 11



1. 炉 1
(東から)



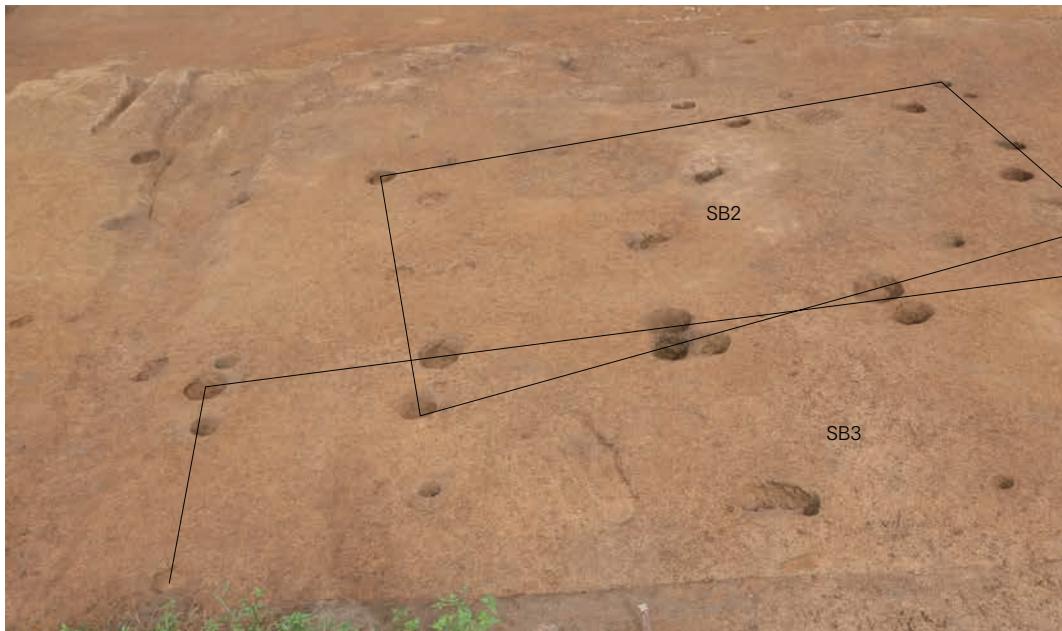
2. 炉 1 周辺 Pit
(西から)



3. 炉 2
(西から)



図版 13



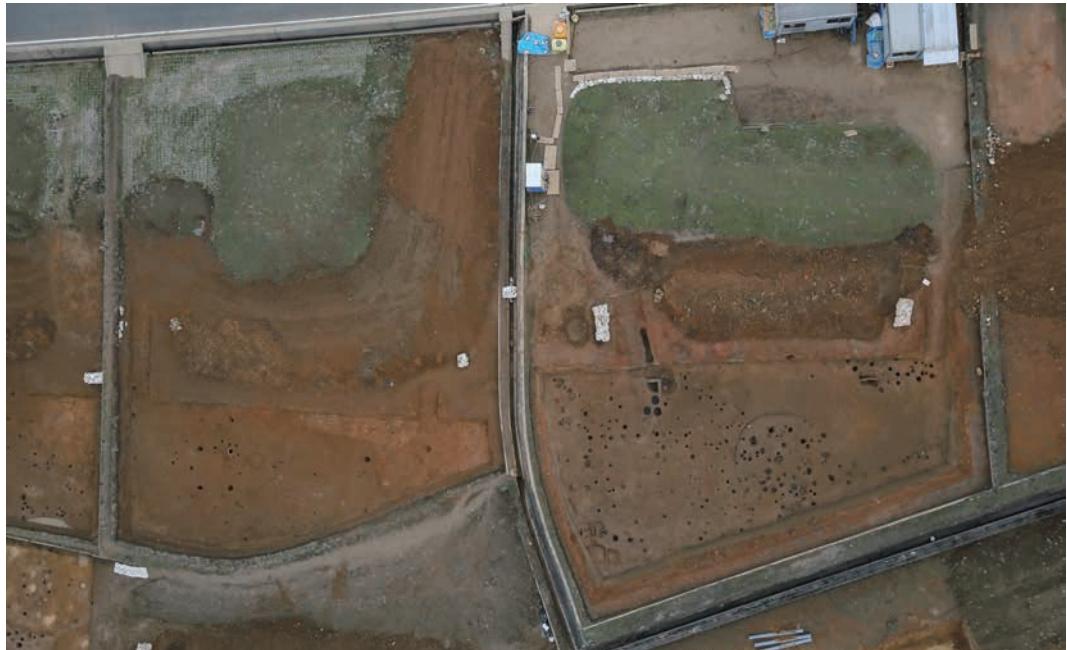
1. 伊方中原遺跡全景



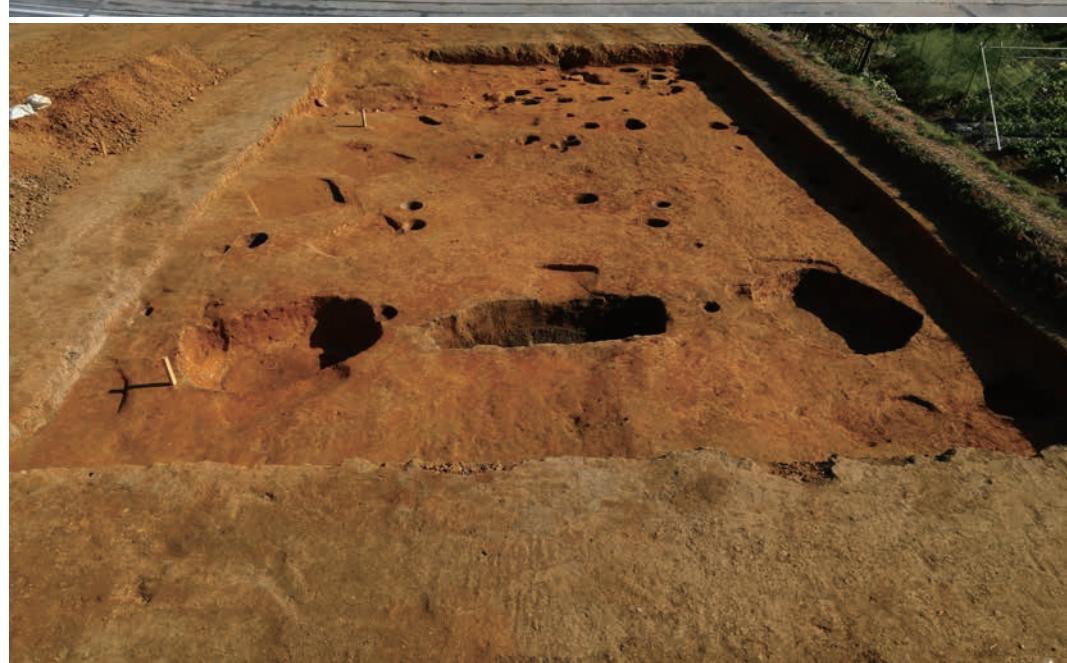
2. 調査区①
(北から)



3. 調査区④・⑤
(東から)



図版 15



1. 調査区①

南壁堆積状況
(北から)



2. 土坑 1 堆積状況

(南から)



3. 土坑 1 堆積状況

(北から)



図版 17



2. 土坑2石材検出状況
(北から)



2. 土坑2完掘
(北から)



3. 土坑3掘削状況
(北から)



図版 19



1. 調査区④西壁堆積
状況 (東から)



2. 住居 1
(東から)



3. 住居 1 屋内土坑
堆積状況
(北から)



図版 21



1. 住居 1 屋内土坑
(東から)



2. 土坑 7 堆積状況
(北から)



3. 住居 3 検出状況
(東から)



2. 溝 1 堆積状況
(西から E-E')



2. 住居 3 屋内土坑
堆積状況 1(東から)



3. 住居 3 屋内土坑
堆積状況 2(西から)

図版 23



1. 住居 3 屋内排水溝
堆積状況 1
(東から A-A')



2. 住居 3 屋内排水溝
堆積状況 2
(東から A-A')



3. 住居 3 屋内排水溝
堆積状況 3
(西から B-B')



1. 住居 3 床面
(東から)



2. 住居 3 完堀
(東から)



3. 土坑 16
(西から)

図版 25



1. 住居 2 床面
(西から)



2. 住居 2 完掘
(西から)



3. 住居 2 東壁
(西から)



図版 27



1. 土坑 20
(西から)



2. 土坑 29
堆積状況 1
(北から)



3. 土坑 29
堆積状況 2
(北から)



図版 29





1. 土坑 46

(東から)



2. 土坑 46 堆積状況

(北から)



3. 土坑 49

(西から)

図版 31



1. 右, 土坑 49
左上, 土坑 61
左, 土坑 53
(南から)



2. 土坑 56 堆積状況
(東から)



3. 土坑 58 堆積状況
(東から)

1. 土坑 55 堆積状況
(東から)



2. 土坑 63
(西から)



3. 土坑 64 堆積状況 1
(西から)



図版 33



1. 土坑 64 堆積状況 2
(東から)



2. 土坑 67 堆積状況
(東から)



3. 土坑 70 堆積状況
(西から)

1. 土坑 73 堆積状況
(東から)



2. 下から , 土坑 73・
74・75(西から)



図版 35



1. 土坑 77 堆積状況
(東から)



2. 土坑 77
(南から)



3. 土坑 81 堆積状況
(東から)

1. 土坑 85 堆積状況
(北から)



2. 土坑 86(北から)



3. 土坑 87 堆積状況
(東から)



図版 37



1. 上右 ,Pit451(東から)
上左 ,Pit441(南から)
下 , 土坑 100(北から)



2.Pit393(北から)
上右 , 砂質土充填状況
上左 , 遺物検出状況
下 , 完掘



3. 作業風景



図版 39



伊方萩ヶ原遺跡出土遺物 2



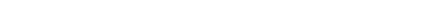


図版 41





図版 43



31-4



32-1

32-2

32-3



図版 45



伊方中原遺跡出土遺物 2



伊方中原遺跡出土遺物 3



図版 46



図版 47



伊方中原遺跡出土遺物 4



図版 49



伊方中原遺跡出土遺物 6



111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319

111-319



図版 51



119-407



119-412



119-414



119-419



119-420



119-426



119-427



121-430



121-441



121-442



121-443



121-444



122-447



125-452



125-461



125-462



125-463



127-465



127-471



127-477



127-481



127-484

伊方中原遺跡出土遺 8

伊方中原遺跡出土遺物 9

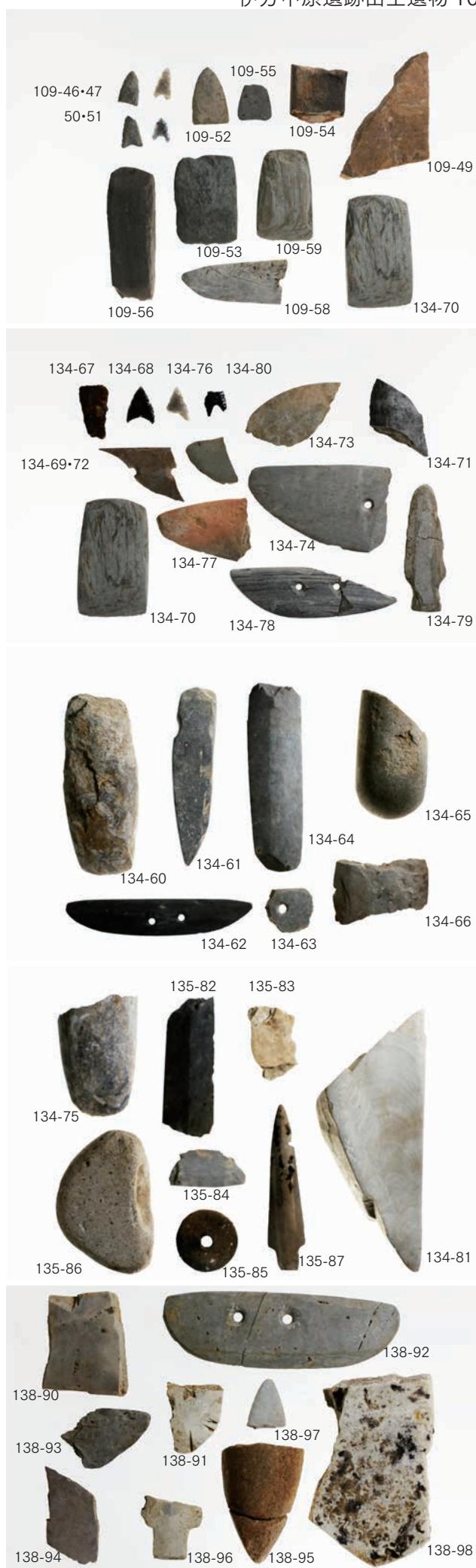


図版 52

図版 53



伊方中原遺跡出土遺物 10



報告書抄録

ふりがな	いかたはぎがわらいせき いかたなかばるいせき						
書名	伊方萩ヶ原遺跡 伊方中原遺跡						
副書名	経営体育成基盤整備事業 伊方地区に伴う文化財調査報告書1 伊方地区所在遺跡の調査						
シリーズ名	福智町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第7集						
編著者名	井上 勇也、小池 史哲						
編集機関	福智町教育委員会						
所在地	福岡県田川郡福智町弁城 2237-1 TEL 0947-28-1521 FAX 0947-28-1510						
発行年月日	2024年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘要因
伊方萩ヶ原遺跡	ふくおかん 福岡県 たがわぐんふくちまち 田川郡福智町 いかた 伊方 872 他	40610	33° 00' 01"	130° 48' 09"	20220705~ 20221018	約 6,000m ²	開発に伴う 緊急調査
伊方中原遺跡	ふくおかん 福岡県 たがわぐんふくちまち 田川郡福智町 いかた 伊方 2116 他	40610	33° 41' 10"	130° 48' 09"	20221104~ 20230310	約 10,000m ²	開発に伴う 緊急調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
伊方萩ヶ原遺跡	集落 生産	近世 古代	竪穴住居、土坑 掘立柱建物、溝、 鍛冶炉	近世陶磁器、鉄滓、須恵器	近世集落における鍛冶炉		
伊方中原遺跡	集落 生産	弥生時代 古代	竪穴住居、土坑 掘立柱建物、溝	弥生土器、石器、須恵器 土師器	弥生土器焼成遺構の可能性 竪穴住居に伴うトンネル状 の屋内排水溝		
要約	<p>令和4年度から始まった経営体育成基盤整備事業 伊方地区に伴い実施した開発に伴う緊急調査として 行った調査である。</p> <p>調査の結果、伊方萩ヶ原遺跡では近世の集落と鍛冶炉、古代の掘立柱建物、伊方中原遺跡では弥生時代中期を中心とした集落と弥生土器の焼成に伴うと考えられる土坑等を確認した。</p> <p>本報告では、遺跡の現状と調査成果をまとめた。</p>						

経営体育成基盤整備事業
伊方地区に伴う文化財調査報告書1
伊方萩ヶ原遺跡 伊方中原遺跡
福智町文化財調査報告書 第7集
令和6年3月31日
発行 福智町教育委員会
印刷 日光印刷